

東京大学構内遺跡調査研究年報 4

2000・2001・2002 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 4

2000・2001・2002 年度

目 次

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

1. 医学部附属病院第2中央診療棟地点調査略報	21
2. 医学部附属病院病棟外構施設新営に伴う発掘調査概報	33
3. 法学系総合研究棟地点調査略報	39
4. インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報	47
5. 教養学部図書館新営に伴う埋蔵文化財調査略報	57
6. 医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点発掘調査略報	59
7. 総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報	67
8. 農学部生命科学研究科樹木実験圃場根圏観察室地点発掘調査略報	70
9. 工学部武田先端地ビル地点発掘調査略報	73
10. 農学部総合研究棟地点発掘調査略報	80
11. 薬学部総合研究棟地点発掘調査略報	85

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

1. 農学部図書館地点発掘調査報告	95
2. 地震研究所テレメタリング観測施設地点発掘調査報告	113
3. 山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告	135
4. 農学部校舎(7号館)地点発掘調査報告	203

第3部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

1. 調査室設立10周年記念企画展開催について	239
2. 2000・2001・2002年度室員活動内容	243
3. 資料の活用	248
4. 埋蔵文化財調査室組織と規約	251

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要4

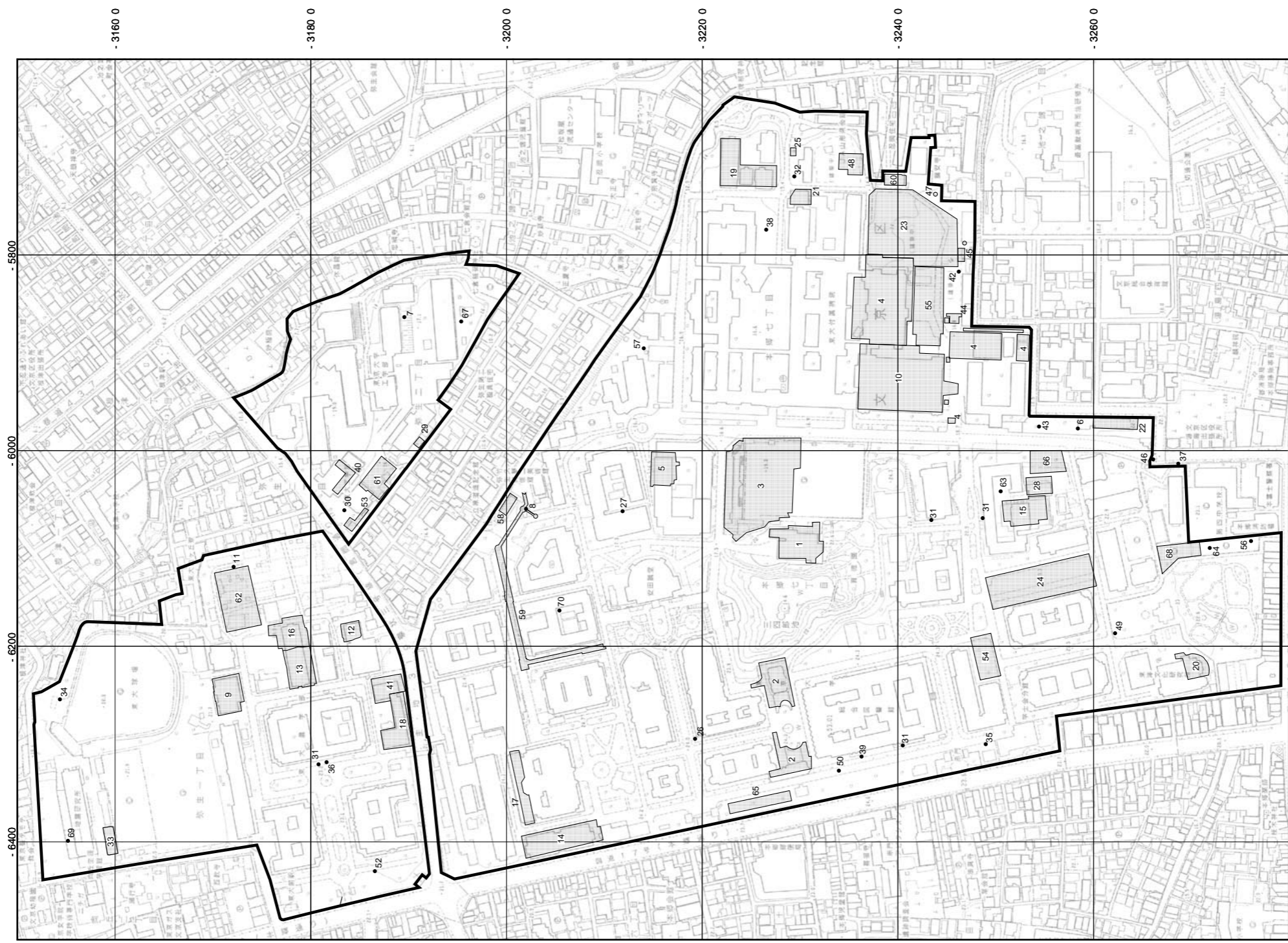
江戸のゴミをめぐる二三の問題について(寺島孝一)	257
肥前国大村藩白金下屋敷について(渋谷葉子)	271

例 言

1. 本年報は2000年4月1日から2003年3月31日までに、東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告、および本調査室における研究成果をまとめたものである。
2. 該期に実施した発掘調査の略報は第1部に掲載した。ただし医学部教育研究棟地点第4期調査に関しては、過去の調査と整合した上で併せて報告する予定である。従って本年報には掲載していない。
3. 遺構の略号は独立行政法人奈良文化財研究所の方式を基に、各調査地点ごとに通し番号を1から付した。
4. 本文の執筆者名は文末に明記した。ただし第4部に関しては、各章の冒頭に執筆者名を明記している。
5. 写真は附属CD-ROMに収録した。本文中特に断りのない限り、写真*という記述はCD-ROMに納められている写真の番号を表している。写真は調査地点毎のフォルダに納められている。
6. 各キャンパスにおける調査一覧および遺跡地図は香取裕一が作成した。
7. 本年報の作成は室員がこれにあたり、追川吉生が編集を担当した。
8. 本年報の作成にあたり、次の機関よりご協力を賜った。記して厚く感謝の意を表す。
石川県立歴史博物館 江戸東京博物館 金沢市立玉川図書館 国文学研究資料館
(財)前田育徳会

第 1 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

1. 医学部附属病院第 2 中央診療棟地点
2. 医学部附属病院基幹整備共同溝等に伴う第 6 次発掘調査
3. 法学系総合研究棟地点調査略報
4. インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
5. 教養学部図書館新営に伴う埋蔵文化財調査略報
6. 医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点発掘調査略報
7. 総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報
8. 農学部生命科学研究科樹木実験圃場根圏観察室地点発掘調査略報
9. 工学部武田先端地ビル地点発掘調査略報
10. 農学部総合研究棟地点発掘調査略報
11. 薬学部総合研究棟地点発掘調査略報



- 13400

- 13200

- 13000

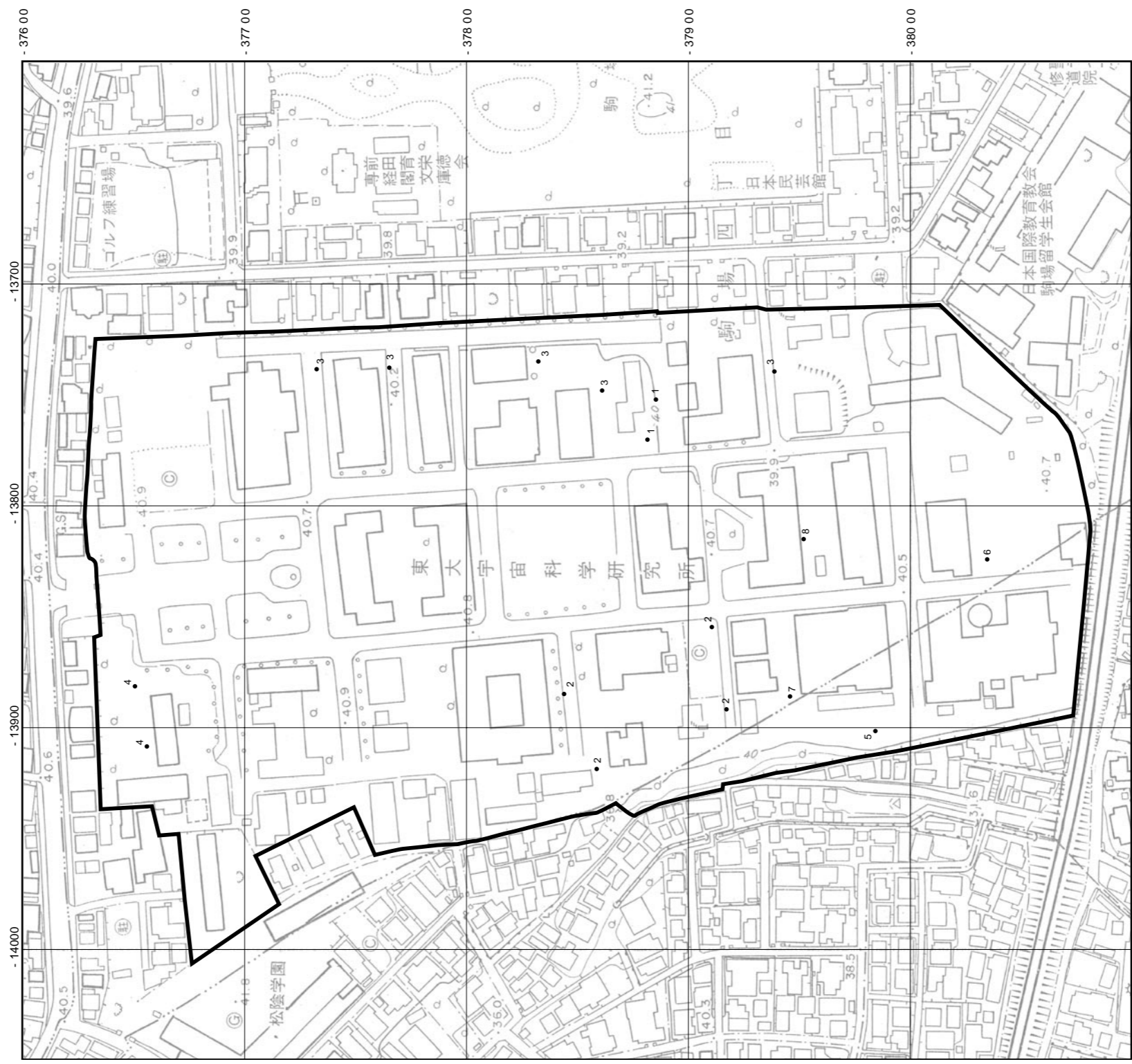
- 12800



- 3780 0

- 3800 0

- 3820 0



東京大学構内遺跡調査一覧

表1 本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積 (㎡)	担当者	遺構・遺物の年代
本郷	1	1984	山上会館(U)	事前	1984.4.1 ~ 85.6.30	1500	西田泰民・ 谷豊信・ 小川静夫	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	法学部4号館・文学部3号館(文)(法)	事前	1984.4.1 ~ 85.3.31	2500	大塚達郎	『東京大学本郷構内の遺跡2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	4	1984	医学部附属病院(病中)(エネセン)(給水)(共同溝)	事前	1984.10.1 ~ 87.3.31	7700	藤本強 小川望	『東京大学本郷構内の遺跡3 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	理学部7号館(理D)	事前	1985.2.1 ~ 10.8	750	羽生淳子	『東京大学本郷構内の遺跡1 理学部7号館』
本郷	3	1985	御殿下記念館(G)	事前	1985.7.29 ~ 87.6.30	6000	寺島・ 小川静夫・ 倉林真砂斗	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	9	1985	農学部家畜病院(VMC)	試掘	1985.8.1 ~ 26	87	西田泰民	年報1
本郷	6	1986	バス通り上水(上水)	立会	1986.5.12 ~ 7.20		寺島	江戸
本郷	8	1987	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15 ~ 16		武藤	江戸
本郷	7	1987	タンデム(タンデム)	試掘	1988.2.15 ~ 17	28	成瀬・武藤	古墳、江戸
本郷	15	1988	薬学部新館(YS)	試掘	1988.8.3 ~ 5		寺島	江戸
本郷	9	1989	農学部家畜病院(VMC)	事前	1990.1.31 ~ 3.14	1040	武藤	年報1
本郷	10	1990	医学部附属病院外来診療棟(HG)	事前	1990.6.27 ~ 91.2.21	5500	成瀬・堀内・ 武藤	旧石器、江戸
本郷	11	1991	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12・8.13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	13	1991	農学部校舎(7号館)I期(FA792)	試掘	1991.1.6 ~ 7	8.25	武藤	江戸
本郷	13	1992	農学部校舎(7号館)I期(FA792)	事前	1992.10.6 ~ 11.16	1170	武藤	江戸
本郷	12	1992	農学部図書館	試掘	1992.10.21	4	武藤	江戸
本郷	15	1992	薬学部新館(YS)	事前	1992.10.21 ~ 12.18	1300	堀内・寺島	江戸
本郷	14	1992	工学部校舎(14号館)(工14)	事前	1992.11.26 ~ 93.2.23	1785	成瀬・堀内	江戸
本郷	12	1992	農学部図書館(FAL)	事前	1993.3.9 ~ 3.25	408	武藤	江戸
本郷	16	1993	農学部校舎(7号館)II期	試掘	1993.4.27	15	武藤	江戸
本郷	18	1993	総合研究棟	試掘	1993.4.28	15	武藤	江戸
本郷	17	1993	工学部校舎(1号館)	試掘	1993.5.25	16	武藤	江戸

東京大学構内遺跡調査研究年報 4

本郷	19	1993	医学部附属病院看護婦宿舎 (HN)	事前	1993.8.4 ~ 94.1.17	746	成瀬	縄文、古墳、江戸
本郷	16	1993	農学部校舎 (7号館) II期 (FA793)	事前	1993.11.3 ~ 26	1000	武藤	江戸
本郷	18	1993	総合研究棟 (SK)	事前	1993.11.18 ~ 12.28	1007	堀内	江戸
本郷	17	1993	工学部校舎 (1号館) (FE1)	事前	1993.12.6 ~ 94.2.10	616	武藤	江戸
本郷	21	1993	医学部附属病院 MRI-CT棟 (MRI)	事前	1994.1.18 ~ 3.12	400	成瀬	古墳、江戸
本郷	20	1993	総合研究資料館 (TUM)	事前	1994.2.14 ~ 4.8	600	堀内	江戸
本郷	22	1994	山上会館龍岡門別館	試掘	1994.4.15	3	武藤	江戸
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟 I期 (HW I)	事前	1994.4.21 ~ 11.16	2716	成瀬・原	旧石器、縄文、古墳、中世、江戸
本郷	24	1994	医学部教育研究棟 1次 (医研 1)	試掘	1994.5.18 ~ 19	16.6	武藤・鮫島	江戸
本郷	22	1994	山上会館龍岡門別館 (HF)	事前	1994.8.17 ~ 10.17	593	武藤	江戸
本郷	26	1994	法文十字路外灯	立会	1994.9.5		成瀬・鮫島	江戸
本郷	27	1994	理学部 1号館	立会	1994.10.3 ~ 18		寺島	
本郷	24	1994	医学部教育研究棟	事前	1994.11.17 ~ 1995.4.28	1188	堀内・鮫島	江戸
本郷	25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎 ゴミ置き場 (HND)	事前	1995.1.30 ~ 3.3	45	原	縄文、古墳、江戸
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟 II期 (HW II)	事前	1995.1.31 ~ 96.5.31	3380	成瀬・原・大成	縄文、古墳、中世、江戸
本郷	32	1994	医学部附属病院看護婦宿舎 電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2		原	遺構・遺物なし
本郷	29	1995	大型計算機センター電気電 機室設備 (ACC)	事前	1995.7.18 ~ 31	78	鮫島	江戸、近代
本郷	28	1995	薬学部資料館 (FPS)	事前	1995.7.24 ~ 9.2	540	武藤	旧石器、縄文、江戸
本郷	30	1995	工学部全径間風洞実験室 支障ケーブル移設その他 (AFC)	事前	1995.8.28 ~ 9.22	63	鮫島	縄文、弥生、江戸
本郷	33	1995	地震研究所テレメタリング 観測施設	試掘	1995.10.18	6	武藤	遺構・遺物なし
本郷	31	1995	ATM ネットワーク施設整備	立会	1995.11.20 ~ 24		武藤・堀内・鮫島・原	江戸
本郷	34		グラウンド	立会			寺島	
本郷	35	1993	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28		成瀬	江戸
本郷	36	1993	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15		成瀬	江戸
本郷	35	1994	経済学部前路面陥没	立会	1994.5.14		成瀬	

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名（略称）	調査種別	日付	面積 (㎡)	担当者	遺構・遺物の年代
本郷	46	1994	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24		成瀬	
本郷	37	1994	屋外環境整備等工事龍岡門 ～附属病院	立会	1994.10.13		成瀬・原	江戸
本郷	38	1994	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18		成瀬	
本郷	39	1994	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10		成瀬	江戸
本郷	40	1996	工学部全径間風洞実験室 (AFL)	事前	1996.1.22～3.7	252	鮫島	縄文、弥生、明治
本郷	33	1996	地震研テレメタリング地震 観測施設（EQL）	事前	1996.4.15～5.2	360	武藤	江戸
本郷	41	1996	ベンチャー・ビジネス・ラ ボラトリー（ベンチャー）	事前	1996.4.15～ 6.20	626	堀内	旧石器、江戸
本郷	42	1996	医学部附属病院基幹整備に 伴う樹木移植	立会	1996.4		成瀬	江戸
本郷	43	1996	医学部附属病院基幹整備共 同溝等（HWK1）	事前	1996.5.12～ 5.18	20	成瀬	江戸
本郷	44	1996	医学部附属病院基幹整備共 同溝等（HWK2）	事前	1996.5.20～ 6.28	102	成瀬	江戸
本郷	45	1996	医学部附属病院基幹整備共 同溝等（HWK3）	事前	1996.5.20～ 6.28	179	大成	江戸
本郷	47	1996	医学部附属病院基幹整備共 同溝等（HWK4）	事前	1996.5.20～ 6.28	3	原	江戸
本郷	48	1996	医学部附属病院看護婦宿舎 Ⅱ期（HNⅡ）	事前	1996.11.5～ 1997.1.31	525	原・大成	縄文、古墳、江戸
本郷	24	1996	医学部教育研究棟2次（医 研2）	事前	1997.3.10～ 4.25	416	堀内・大成	縄文、江戸
本郷	49	1997	外灯整備工事1	立会	1997.4.13～30		原	江戸
本郷	50	1997	外灯整備工事2	立会	1997.4.13～30		原	江戸
本郷	51	1997	外灯整備工事3	立会	1997.4.13～30		原	
本郷	52	1997	農学部（21世紀館）木質 ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	江戸
本郷	24	1998	医学部教育研究棟3次（医 研3）	事前	1998.11.～ 12.25	180	堀内・大成	江戸
本郷	53	1998	工学部強風シミュレーショ ン風洞実験室	試掘	1998.12.22～ 23	30	原	江戸
本郷	54	1998	総合研究棟（文・経・教・ 社研）	試掘	1999.1.6～8	28	堀内・追川	江戸
本郷	53	1998	工学部強風シミュレーショ ン風洞実験室（AFⅣ）	事前	1999.1.7～25	300	原	江戸、近代
本郷	54	1998	総合研究棟（文・経・教・ 社研）	事前	1999.5.24～ 11.2	1000	堀内・追川	江戸

東京大学構内遺跡調査研究年報 4

本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	試掘	1999.7.14	3	成瀬	江戸
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	事前	1999.10.12～ 2000.2.25	1270	成瀬・原・ 追川	江戸
本郷	56	1999	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～ 17	16	成瀬	江戸
本郷	57	1999	環境安全センター	立会	2000.1.17		成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	医学部附属病院受変電設備棟(Ⅱ期)(YM)	試掘	2000.2.3～4	30	原	江戸
本郷	58	1999	医学部附属病院受変電設備棟(Ⅱ期)(YM)	事前	2000.2.5～3.31	300	原	近代、江戸
本郷	59	2000	共同溝(KK)	事前	2000. 7.3～7.12 10.11～10.14 2001. 2.21～2.28	960	原	江戸
本郷	60	2000	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK6)	事前	2000.9.21～ 11.14	200	成瀬・追川	江戸
本郷	55	2000	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	試掘	2000.10.2～16	6	成瀬	江戸、古代
本郷	61	2001	武田先端知ビル(TS)	事前	2001.6.4～8.7	740	原	明治、江戸、弥生
本郷	55	2001	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	事前	2001.7.23～ 2002.12.19	2747	成瀬・追川	江戸、中世、古代、縄文
本郷	62	2001	農学部総合研究棟	試掘	2001.3.27		原	江戸
本郷	62	2001	農学部総合研究棟	事前	2001.9.21～ 10.19	1800	原	江戸
本郷	63	2002	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5～6		成瀬	遺構、遺物なし
本郷	64	2002	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7		成瀬	江戸
本郷	65	2002	法学部総合研究棟	試掘	2002.3.18～20	136	大成	江戸
本郷	66	2002	薬学部総合研究棟	試掘	2002.3.17～20	63	原	江戸
本郷	67	2002	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9～17	32	堀内	縄文、古墳、弥生、江戸、近代
本郷	68	2002	インキュベーション施設	試掘	2002.6.17～19	38	堀内	江戸
本郷	66	2002	薬学部総合研究棟(YGS)	事前	2002.8.1～ 2003.2.28	1260	原	江戸
本郷	24	2002	医学部教育研究棟4次(医研4)	事前	2002.9.3～ 12.25	631	堀内・大成	江戸
本郷	69	2002	地震研仮設建物	立会			堀内	遺構・遺物なし
本郷	65	2002	法学部総合研究棟(法03)	事前	2003.2.17～ 4.18	946	成瀬・大成	江戸
本郷	68	2002	インキュベーション施設(INC)	事前	2003.3.6～6.7	1051	堀内・追川	江戸、縄文
本郷	70	2003	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28		堀内	なし

表2 駒場I地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積 (㎡)	担当者	遺構・遺物の年代
駒場I	1	1992	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	3	1993	数理科学研究棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒場I	2	1993	教養学部情報教育棟 (FGE)	事前	1993.8.10～ 10.20	940	武藤	縄文
駒場I	4	1994	数理科学研究棟擁壁工事	立会	1995.1.20～ 27		武藤	近代
駒場I	5	1994	数理科学研究棟関連東電マ ンホール増設・管路新設工 事	立会	1995.1.24～ 4.12		武藤	縄文、平安
駒場I	8	1995	数理科学研究棟ガス埋設工 事	立会	1995.5.17～ 18		武藤	遺構・遺物なし
駒場I	8	1995	数理科学研究所水道埋設工 事	立会	1995.6.27～ 28		武藤	遺構・遺物なし
駒場I	6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	7	1995	教養学部学生用浴室・シャ ワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	9	1996	数理学研究科II期棟(数理)	事前	1996.12.12～ 97.2.6	1160	堀内	年報2
駒場I	10	1997	教養学部キャンパス・プラ ザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	11	1999	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～ 8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒場I	12	1999	教養学部図書館	試掘	1999.7.26～ 8.3	200	原	埋没谷
駒場I	12	2000	教養学部図書館	事前	2000.7.27～ 8.30	1778	大成、追川	旧石器、近代
駒場I	13	2001	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～ 25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒場I	14	2002	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～ 26	53.4	大成	遺物・遺構なし
駒場I	15	2002	教養学部コミュニケーション プラザ	試掘	2002.11.5～ 15	563	成瀬	縄文遺構・遺物
駒場I	16	2002	国際交流会館(ファカル ティハウス)	試掘	2003.2.10～ 2.14	144	追川	縄文 遺構・遺物
駒場I	16	2003	国際交流会館(KGK)	事前	2003.5.16～ 7.9	620	原	旧石器・縄文・近代

表 3 駒場Ⅱ地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積 (㎡)	担当者	遺構・遺物の年代
駒場Ⅱ	1	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	2	1996	先端科学技術研究センター 校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	3	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～ 25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	4	1998	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	5	1998	国際・産学共同研究セン ター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒場Ⅱ	6	1998	生産技術研究所事務図書棟 暫定施設	試掘	1998.12.13～ 15	50	大成	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	7	2002	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒場Ⅱ	8	2003	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし

表4 その他の地区調査一覧

地区	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積 (㎡)	担当者	遺構・遺物の年代
三浦市	1988	理学部附属臨海実験所新研究棟 [新井城]	試掘	1988.7.4 ~ 8.2	80	寺島	年報1
文京区	1991	理学部附属植物園研究温室 I 期 [原町遺跡] (BG)	試掘	1991.7.24 ~ 25	5	武藤	縄文
文京区	1991	追分学寮	試掘	1991.8.23 ~ 24		成瀬	江戸
豊島区	1991	豊島学寮	試掘	1991.8.26 ~ 30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市	1991	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡]	試掘	1991.9.15 ~ 30	350	堀内	旧石器
三鷹市	1991	井の頭学寮	試掘	1991.9.30 ~ 10.15	20	堀内	遺構・遺物なし
港区	1991	白金学寮	試掘	1991.11.25 ~ 26	10	武藤	江戸
文京区	1992	理学部附属植物園研究温室 II 期 [原町遺跡] (KO)	事前	1992.5.25 ~ 6.6	200	成瀬	縄文、江戸、近代
三鷹市	1992	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] I 期 (三广1)	事前	1992.6.29 ~ 9.19	2100	堀内・成瀬	縄文、江戸
港区	1992	医科学研究所看護婦宿舍	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市	1992	理学部附属陸臨海実験所新研究棟 [新井城] (MMBS)	事前	1992.7.20 ~ 9.25	1700	武藤・寺島	中世
三浦市	1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20 ~ 23		武藤	中世
三浦市	1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7 ~ 8		武藤	中世
三鷹市	1993	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] II 期 (三广2)	事前	1993.5.28 ~ 11.8	3280	堀内	旧石器、縄文
三鷹市	1994	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] III 期 (三广3)	事前	1994.5.13 ~ 8.17	1950	堀内・鮫島	旧石器、縄文、江戸
千葉市	1994	検見川運動場体育セミナーハウス [玄藩所遺跡] (GMB)	確認	1994.7.11 ~ 18	930	堀内・鮫島	縄文、平安
千葉市	1994	検見川運動場体育セミナーハウス [玄藩所遺跡] (GMB)	事前	1994.7.19 ~ 8.21	496	武藤	旧石器、縄文、平安
港区	1994	医科学研究所 MRI - CT 棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
港区	1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏市	1996	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28 ~ 29	125	武藤	遺構・遺物なし
港区	2000	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27 ~ 2001.3.9	4280	堀内・大成	旧石器・縄文、江戸

東京大学構内遺跡調査研究年報 4

文京区	2000	理学部附属植物園・旧医学部本館便所増築	事前	2000.11.27 ~ 12.4	70	成瀬・追川	江戸
文京区	2002	農学部生命科学研究科樹木実験圃場・根圏観察室	試掘	2002.9.2	21	成瀬	江戸
文京区	2002	農学部生命科学研究科樹木実験圃場・根圏観察室	事前	2002.9.24 ~ 10.7	91	成瀬	江戸・縄文

1. 医学部附属病院第2中央診療棟地点調査略報

調査期間 1期：1999年10月12日～2000年2月25日

2期：2001年7月23日～2002年12月19日

調査面積 3693㎡

調査担当者 追川吉生・成瀬晃司・原 祐一

はじめに

医学部附属病院での調査は、1984年の中央診療棟地点を皮切りに、設備管理棟地点、給水設備棟地点、外来診療棟地点、看護婦宿舎地点（1，2期）、病棟地点と続き、今回おそらく病院内では最後の大規模調査になるであろう第2中央診療棟地点の調査を行った。小稿では、はじめに病院地区における土地利用変遷の概要を述べ、続いて今回の調査成果について報告する。

1. 病院地区に見る本郷邸の土地利用

現在までの調査は、病院地区の南半分を中心に行ってきた。病院地区の江戸時代は、おおむね北に富山藩邸、南に大聖寺藩邸が存在しており、その結果、大聖寺藩邸域の調査が中核を成した。

そもそも、この地域は、巨大な舌状台地を呈した本郷台地の先端部で、その東側のへりにあたる。基本的にはほぼ台地の中心を縦断する本郷通りから、緩やかに東に下る緩斜面が続き、大学東端部付近で急激に下がり、湯島、根津の低地に繋がっている。現在でも、傾斜変換線は複雑に蛇行しており、谷筋を利用して道が設けられている場合も多く、旧地形の面影を残している。しかし、一連の調査によって、現在では（江戸時代からの造成によって）完全に埋没している谷の存在を確認することができた。以下に、緩斜面と谷筋が織りなす3次元的地形を改革していった彼らの軌跡を各地点での調査成果をもとに概略したい。

(1) 17世紀前葉

明治16年に作成された陸軍参謀本部の1/5000地形図をみると、現在の本郷3丁目交差点付近を頂点とする極めて緩やかな谷が東北東方向に開いている。この谷は一連の調査の結果、S字状に蛇行して開く谷で、近世初頭にはかなり埋没していたことが判明した。

前田家が本郷の地を拝領したのは大坂の陣後の元和2～3年とされる。病院地区の調査では、確実にそれ以前に帰属する遺構はなく、検出された江戸時代の遺構・遺物は全て加賀藩邸に関連するものである。加賀藩邸が本郷台地に与えた最古段階のインパクトに、邸内の区画を目的としたと推定される溝状遺構がある。溝状遺構の配置には共通点があり、旧地形に対して、ほぼ直行もしくは平行に築かれている。中には溝で区画された小規模な壇切りも認められるが、その区画もやはり旧地形に規制されている。こうした様相は、病院地区以外でも認められており、初現期の本郷邸では、

旧地形に左右された小規模な開発が随所で行われていたと考えられる。裏を返せば、その程度 of 開発で十分な利用状況にあったといえよう。

(2) 17 世紀中葉

17 世紀第 2 四半期になり、いよいよ大規模開発が認められるようになる。病院地区は基本的には東側の低地に向かう緩斜面上に位置するが、それに加え S 字状の谷による緩斜面が複雑に絡んでいる地形である。邸内の造成は、沖積層の堆積が薄くなる傾斜変換点付近を基準に壇切りを行い平坦面を作出していくことから始まった。壇切り面下壇はもちろん、上壇においても切り土によって土地を平準化している。また、さらに東側の低い部分に関しては、切り土によって発生した土砂等を中心に盛り土造成を行い、平坦面を広くとるように努めている。また、この段階で S 字状の谷による緩斜面もほぼ平準化されている。

さらに、17 世紀第 3 四半期にはいると、前段階で邸内に段差が生じていた大聖寺藩邸は、その段差を解消し、邸内を一面化するために、壇切り下壇部を全て盛り土造成した。その結果、藩邸東縁の地境部分に石垣を造築し、藩邸とその東側にある道路との間に新たな段差が生じることとなった。

(3) 17 世紀後葉以降

1682 (天和 2) 年の「八百屋お七の火事」による藩邸全焼を契機に、本郷邸内の加賀藩、大聖寺藩、富山藩各藩邸の屋敷割りが大きく変更されることになる。大聖寺藩邸に関しては、藩邸東側に隣接していた黒多門邸 (加賀藩邸の飛び地) を吸収し、それまで南北に長い長方形であった藩邸域が東西に長い長方形に変更になる。それを受けて、大聖寺藩邸と黒多門邸との間を南北に延び富山藩邸に続いた道も大きく東に動き、大聖寺藩邸と講安寺の間に移設された。この一連の地割りの変更によって、大聖寺藩邸では、火災以前の藩邸とその東側 (道と黒多門邸) の段差を解消するため、新藩邸域の東側で大規模な盛り土造成を施すことになった。その造成土はローム層を主体とし、中には火災による焼土層も多量に含まれていた。その土量は 10000 立米を遙かに超えるもので、火災後の瓦礫整理とともに、大聖寺藩邸外でかなりの切り土造成が行われていたことが容易に推測される。

大聖寺藩邸はその後も小規模な盛り土造成を繰り返すが、基本的な様相は、この大規模造成を最後に、維新を迎えることになる。

2. 検出された主な遺構

第二中央診療棟地点は、前述したように緩斜面の造成によって藩邸を築いている。そのため、最大 9 面の生活面を確認することができた。以下に、古い段階から順を追って、各々の面の特徴と、主たる遺構の紹介をしたい。

(1) 9 面

江戸時代の文化面の中で最も古い面にあたる 9 面には、一部、中世に帰属すると思われる道路状

遺構も検出されている。本郷邸造成の開始期であり、壇切りや溝といった構築物がみられる。

SD1768 3ライン東寄りに位置する、南北に伸びる溝。北端はSD1660によって壊されている。溝は幅75cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色土からなる。ローム層を掘りこんでおり、その西には著しく硬化した面を持つ道路状遺構がある(SR1643)。この道路状遺構はその後6面まで継続して存在したようである。本郷邸造成初期の道とそれに伴う溝であると考えられる。

SB1984・1985 南北方向に延びる礎石列。礎石には破碎礫が用いられている。奥行き2間の長屋建物と考えられる。掘り方は浅いピットと深いピットの両者が認められ、これに応じて検出される礎石の標高も異なっている。SB1985の断面には柱穴痕が認められた。

(2) 8面

建築遺構に伴う炉状遺構がいくつか検出されているが、遺構の大部分は大形植栽痕をはじめとした植栽痕が中心である。表裏に金箔が施されている手づくねカワラケ(以下、金箔カワラケと呼称)が数点出土している面である。

SF1805(写真1) SF1902と同様の炉状遺構である。本遺構からはムシロ状の繊維製品が出土している。タタミであった可能性も考えられる。

(3) 7面(図4)

礎石列と炉状遺構が検出された。当時の生活空間を明らかにするうえで興味深い文化面である。

SB1658 礎石列。礎石の間隔は1.5～1.8mで、ほぼ1間間隔である。しかし礎石列の中程の礎石8と9、12と13の間隔は近接して検出された。このことからSB1658とした礎石建物はここで別棟の建物となる可能性がある。

SF1847・SF1848 前述した礎石建物SB1658とセットと考えられる炉状遺構である。SF1847は南西コーナーで枠と思われるプランと、作業部と思われる灰白色灰層を確認した。周囲の灰層の半裁により、確認面からおよそ5cm下で遺構の東寄りに炉枠を確認した。SF1848の遺構底部の焼土は円形ではなく、広範囲に拡がるのが観察された。SF1847とは異なり、明確な炉枠は確認されなかった。

SX1826(写真2) 道路状遺構SR1643の北側を切って存在する性格不明の遺構である。確認面ではSR1643の埋土である砂利が本遺構が位置する辺りから無くなって、代わりに暗褐色土がみられたが、そのすぐ北側は調査区外であるため、当初この暗褐色土がSR1643とは別の遺構の覆土であることは予測できなかった。そのためSR1643の北端の堆積を観察・記録することを目的に遺構の東側から掘削を進めた。その過程で播鉢が出土し、SR1643とは別遺構であると判明し、SX1826と命名した。

本遺構は埋設ケーブルが北から西方向へ斜めに通っている。このため遺構の西側は大きく破壊されており、東西の規模は把握しえなかった。南北の規模は1.4m、深さは40cmを測る。ただし掘り方はあまり明瞭ではない。



図 4 7面の遺構

播鉢は遺構の北から1mの地点に伏せられた状態で出土している。周囲の埋土は10層に分けられ、暗褐色土を主体とし、しまり弱く粘性はない。7層のみ暗灰褐色で粘性のある土である。一方播鉢内の埋土はそれと大きく異なり、ローム粒子やロームブロック、赤褐色土粒子を含む暗黄褐色土で、播鉢との間には貝殻が多く認められる。

(4) 5面

前段階まで機能していた1m近い壇切り部分は盛り土によって平準化される。そして調査区の東側に富山藩邸との境の道がこの段階から設けられる。しかしながらこの道は4面でみられる道よりも幅の狭いものであったことが明らかとなった。

SG1608 (写真3) 南北方向に並ぶ石垣。前段階まで存在した西側の段差が盛り土造成によって平準化され、新たに道路との境で段差が生じたために造られた石垣である。またこの石垣には東西方向に派生する石垣が付随し、その形状より、その部分に門が存在したことが想定できる。

SD1604・SD1605 (写真4) 南北に平行に延びる2本の溝。SD1604が西、SE1605が東に位置する。SD1604は底にほぼ1間隔でピットが並んでいることから、塀跡と考えられる。一方SD1605ではその東側から砂利面が認められることから、この砂利面が富山藩邸へと通じる道で、SD1605が側溝、更にはSD1604が屋敷境の塀であると考えられる。なおこの屋敷境の道は後述のように、1683(天和3)年の屋敷の改変まで継続して存在するが、幅は後代よりも狭いことが明らかになった。

SA1572 (写真5) 18ラインに南北に並ぶピット列。ピットの間隔は1.5～2.0mで、これも塀跡と考えられる。しかしSD1604・SD1605との関係については不明である。

(5) 4面 (図5)

5面で検出した石垣SG1608を面とする門を検出した。表面は焼土で覆われており、火災による焼失であったことがうかがえる。1682(天和2)年の大火で消失したものである。

SB1402 (写真6) 門跡と推定される建築遺構。ホゾ穴が切られた礎石の周囲には煤が付着しており、煤の内側は30cm角の大きさである。門柱の規模を反映している。またここには門番所と考えられる施設が付随していた。

SK1405 (写真7) ホゾ穴を切った礎石の南東に隣接する方形土坑。壁、坑底ともに切石で補強されている。坑底直上より鋤が出土している。刃先の下には1/2の大きさの瓦が置かれている。

SF1447 (写真7) 備前播鉢が埋設されている炉。播鉢は上からの圧力で破損し、やや開き気味の状態で出土した。播鉢内の埋土は灰白色の灰層で、表面中央部がやや赤化している。また播鉢に接する下方は暗い色調である。特定の掘り方はなく、地面に炭化物混じりの灰層を盛り上げ、その芯に瓦片、切石を利用している。

SD1332 (写真6) 一部に側壁とみられる炭化した板材が認められる溝跡。SB1335の西側に、南北方向に延びている。埋土には焼土が含まれている。門に伴う排水施設であると考えられる。

SB1335 (写真6, 7) 被熱が認められる礎石。掘り方は隅丸三角形を呈する。坑底には掘り込み

があり、その掘り込みの中に長方形の切石による礎石が検出された。この切石の上にある完形の平瓦にはひびが割れていた。平瓦上に柱か礎石が置かれていたと考えられる。

SB1402、SB1335 はともに門であるが、同時期に2つの門が存在したとは考えにくい。またSB1335の形態から、それが礎石を用いた掘建柱による冠木門と考えられる。埋土に焼土が認められ、礎石も焼けていることから、この冠木門は火災後に臨時に造られた門の可能性がある。翌年3月には黒多門邸が大寺藩邸に加えられていることから、この史実が正しいとするならば、約3ヶ月間のみ機能した臨時の門であると考えられる。

SA1408（写真8） いずれのピットも直径約12cmの柱痕が認められる。またこれらのピットの埋土はいずれも上層に焼土が多量に含まれている点が共通する。

SR1548（写真8） 調査区を南北に延びる道。砂利層は3層からなるが、水平堆積をなさず、上下の層が結合する部分も認められる。屋敷境の道である。

SU1331（写真9） 確認面での形状は方形で、途中から円形を呈する地下室。多量の焼土とともに瓦が含まれている。

SB1389（写真10） E 16・F 16区に位置する礎石列。礎石の間隔はほぼ一間である。礎石列の北と南は攪乱を受けており、Cグリッド、Gグリッドにはこれに連なる礎石は検出していない。礎石はいずれも1辺25～40、厚さ15cm程度の方形で、掘り方にこれらの礎石が単独で据えられている。根石は見られない。2、3の埋土には焼土ブロックが含まれる。礎石列の西側はSD1215を挟んでSR1276がある。また東側では硬化面が認められる。SR1276の項目で述べたように、これらは溝を挟んで路地と長屋という関係かもしれない。ただしSB1389の東側に、これと対応する礎石はみられない。またSB1392が同一面で検出されたが、それとの関係は不明である。なおSB1386の2間東側は攪乱を大きく受けている範囲である。

SE1316（写真11） 確認面での直径は75cmを計る井戸である。周囲に大きく攪乱があったため、掘り方の有無は調査当初は不詳だった。また4面の遺構として扱ってはいるが、この攪乱によって、4面よりも上位の面まで続いていたかについては不明である。確認面から1.2mほど掘り下げると、井戸の四隅に井桁の痕跡を検出した（SK1517）。類似の施設を伴う井戸は、病棟地点D面からも検出されている。SK1517から出土した天目茶碗の底部が、5面の遺構であるSK1586出土の口縁部と接合する。海拔7.2mの地点から湧水はじまり、同5.8mまで井戸枠が認められた。

SU2134（写真12） 南北3.4m、東西1.6mの細長い遺構で、南側と東側を攪乱によって破壊されている。北側に5段の階段が設けられている。確認面から階段下の平坦部分までの深さは1.16mを測る。階段の2段目には石が一部残っていることから、この階段が本来は石段であったことがうかがえる。東西にはそれぞれ幅20cm程度の溝が設けられており、ほぼ1間間隔で石柱が認められる。石柱の掘り方の深さは20cm程度である。平坦部南よりには120cm四方、深さ30cmの掘り込みがあり、更にこの掘り込みの中央部には平面が直径60cmの円形を呈した、深さ60cmの掘り込みがある。この掘り込みの性格については不明である。遺構南側が欠損しているため、本遺構がSB1606のように南北に2つの階段を有する構造であるか、北側にのみ階段を有する地下室であったかは不明で



図5 4面の遺構

ある。

SU2276 (写真 13) 南北 1.2m、東西 1.5 m、深さ 1.6m の、平面形がほぼ正方形の地下室である。調査区の南端に位置している。C 区では本遺構の東西に、同規模の地下室を他に 6 基検出した。発掘作業の安全上、完掘し得たのは本遺構のみであるが、いずれも陶磁器を中心に遺物を多く出土している。こうした遺構の分布から、これらの地下室が、東西に延びる建物に伴う一連の地下室であったことが考えられる。4 面段階の当該地域の土地利用を考える上で注目したい遺構の分布状況である。

SU321 (写真 14) 開口部が 1.2m の正方形を呈した、深さ 3.2m の地下室である。確認面から 1.6 m の深さから南北東西に拡がり、1 辺 2.4m の正方形となる。壁面は四方ともに垂直で、北壁に出入りのための足掛かりと思われる掘り込みがいくつか認められる。覆土は全ての層でほぼ水平に堆積している。遺物は陶磁器を中心に多量に出土している。

SU2247 (写真 15) 南北・東西ともに 2.5m、確認面からの深さが 3.1m の平面が正方形を呈する地下室である。本地下室は、南北 5m、東西 1.2-1.3m の平面形が長楕円形を呈する、深さ 1.5 m の遺構によって切られている。調査時にはこれらを同一の遺構として発掘し、出土遺物を上層・下層として分けた。どちらの遺構も遺物は極めて大量に出土している。特に地下室から出土した遺物の中には、地下室の壁として用いられたと思われる板材や炭化した木材なども含まれている。

(6) 3 面

5、4 面までに存在した壇切りの平準化によって、調査区の東側を盛った段階である。前述したように大聖寺藩では天和の火災後、史実が正しければ天和 3 年 3 月には黒多門邸が大聖寺藩邸に加えられ、大聖寺藩邸の屋敷境はより東側へと移動する。その際、大聖寺藩邸と黒多門邸との間を平準化するために盛り土がなされている。3 層はこの盛り土作業に対応すると考えられる。この面からは道とそれに面した長屋の他、性格不明のやや規模の大きな遺構が検出された。

(7) 2 面

注目すべき遺構が比較的多い面。土地の造成などは前段階と同じである。中央診療棟 6 号組石南北部分の続きと考えられる石組みの抜き取り穴である SD1173 がある。

SK740 (写真 16) 能舞台。埋土には多量の焼土と瓦が含まれている。火災による焼失に伴う上部構造の崩落によるものであると考えられる。遺構の底には崩落した焼土や瓦に押し潰されるように破片となった 5 個体の常滑大甕がある (a、b)。能舞台の下に設置された音響効果のための甕であろう。甕の下にはそれぞれ 3 つのピットがあり、その断面は 1 つは垂直、残りはやや傾いていることが観察された。これによって甕がやや傾けて設置されていたことがうかがえる (c)。

SD720 (写真 17) 調査区の北東隅で東西方向から 100 度ほど方向を変える溝。石で組まれた排水溝である。

SD828 (写真 17) G19 区に位置する東西方向の石組の溝である。遺構の大部分は調査区外 (病

棟地点調査区)に存在していると考えられ、本調査区からは遺構の西端2.2mの範囲が検出されたにすぎない。遺構の上部はSX787によって破壊を受けているが、現状では幅30～70cm、高さ20～30cm、幅30～40cmの直方体をした切石が2段積みられていた。石組みに利用されていた石は前述の切石を主体とするものの、同程度の大きさの未加工の礫や間知石もある。溝の幅は70cm程度である。また遺構西端から東側へ40cmの範囲で2段の石段が設けられており、この石段の最も低い部分で深さ80cmを測る。溝の底部はこの石段部分を除いて、黒色を呈する宝永火山灰が敷かれている。宝永火山灰の厚さは10cmである。遺構の掘り方は南北2mである(東西に関しては不明)。掘り方と切石との間は一辺20cm大の礫や破碎礫によって充填されている。

溝の底部に宝永火山灰を敷いているという本遺構の特徴から、調査区東側の病棟地点SD236と同一遺構であると考えられる。SD236は病棟地点B面に存在した庭園部分に盛土造成されている。この盛土は1703(元禄16)年の火災によってなされたものであり、本遺構は1707(宝永4)年11月の宝永の噴火前後までに比定することができる。またSD236は東側に丘状の盛土遺構に続いていますが、今回の調査で溝の西端に石段が設けられているという状況が把握できた。

SX2169(写真18) 不定形の範囲で黒色の灰が集中する。東側と西側が攪乱によって壊され、南側はSD150によって切られており、本来の遺構の形状や灰の分布範囲は不明である。灰の分布は現状で南北2.2m、東西1.8mの範囲にわたる。また遺構の深さは25cm程度で、遺構の上面と中央部に黒色灰層が認められ、これらにパックされるように、その上下に青灰色粘土層と黄褐色土層もしくは暗褐色土層が堆積していることが観察された。本遺構に認められる黒色の灰はSD828と類似しており、また検出面も対応することから、この黒色の灰はSD828同様に宝永火山灰であると考えられる。本遺構に伴うピットなどは認められなかった。本遺構の性格は不明である。

SB1606(写真19) 東側に張出部を有する長方形の遺構である。南北は階段状を呈する。中央に切石がおかれ、張出部のコーナーにも切石が存在する。中央部の切石上面レベルまで砂利層と灰褐色土層による貼り床が認められ、張出部の切石周囲にはロームによる貼り床が認められる。埋土には最上層に漆喰を多量に含む灰褐色土がある。ただし中央部付近の埋土はロームブロックと破碎礫を多量に含む褐色土である。中央部では、階段部には砂利敷き粘土層による貼床が認められる。その両外側では、礎石周囲はロームブロックを多量に含む褐色土が貼られているが、しまりは強くない。礎石に使われる切石の表面には工具痕が認められるが、敷石に用いられている切石の表面は平滑に仕上げられている。敷石両側は角材が認められるが、北側の敷石はほぼ礎石間に位置し、粘土層にパックされ、トンネル状に検出された。それに対し南側の敷石は礎石南側のステップ際に位置しており、粘土層は認められず、埋土が堆積していた。

SB01(写真20) 南北6.4m、東西6.3mの正方形の建物の基礎。溝の幅は70～80cm、深さ50cmで、1.5～1.8mの間隔で礎石が並ぶ。礎石は径50～90cmである。写真のようにこの溝は中央部で交差することなく、ズレている。

SD279・280 直径10-14cm程度の半裁した竹を管とした東西に延びる溝である。掘り方の南北幅は30-35cm、深さ10cm程度を測る。

(8) 1 面 (図 6)

江戸時代の調査では最も新しい面。建物の礎石と庭園と思われる遺構、水琴窟を検出した。

SB142・SB148 (写真 21・22) 1 間間隔で 3 列に並ぶ礎石列。SB142 の中央部には角柱状の石が敷かれており、門の部分を作っていたかもしれない。SB148 は SB142 の西側から検出された礎石列である。いずれも礎石の下に 2～3 段の石が積まれており、最下段には直径 80～90 cm の根石が据えられている。

SB2149～SB2152 (写真 23) SB142・SB148 同様、1 間間隔で 3 列に並ぶ礎石列である。SB2150 の中央部には角柱状の石が認められる。これの 2 間南に位置する SB2149 にも四角い石が認められている。SB2150 では南方向に、SB2149 には北方向にも石の掘り方が認められた。SB2150 の北側には長さ 50-85 cm、幅 30 cm 程度の石で組まれた溝が東西に延び、J6 杭付近で北方向に 90 度曲がる。この溝と礎石列の間には同一面でかつ時期の若干異なる溝が 3 基存在する。この付近の地面は硬化がみられるので、3 列に並ぶ礎石列の北に路地が存在したことがうかがえる。南側については調査区外であるために明らかにし得なかった。各礎石の構造は SB142・SB148 と同じである。

SX664 (写真 24) 南北 20 m、東西 15 m の範囲に玉砂利が敷き詰められていて、その間に扁平の石が配列されている。攪乱の影響の多い面で、詳細な範囲は不明である。現段階では一連の遺構であると捉えている。性格は不明であるが、扁平の石は礎石建物に伴うものとは考えにくく、また明確な掘り方も認められなかったことから、庭園の一部であると考えられる。

SX96 (写真 25) およそ 1 m 四方の範囲に広がる玉砂利の集中である。これを取り除くと極めて強固な漆喰が現れ (a)、その中央部には、直径 2 cm 程度の穴が穿かれている (c)。漆喰の下には逆に据えられた瓶があった。水琴窟である。

SK2132 (写真 26) 攪乱によって本来の規模・形状は不明だが、現状で南北 2.6m、東西 2m の範囲に蠣殻が集中して検出された。その厚さは 10 cm 程度である。遺物は数点の磁器片と瓦片が出土する以外、ほとんどが蠣殻である (ごく僅かながら 2 枚貝がみられる)。1 面の本遺構周辺は大聖寺藩の御殿空間に当たり、こうした廃棄状況が食物残渣によるものか、あるいは他の要因によるものであるかについては今後の検討課題である。そのほかに釘が数点含まれていた。

3. まとめ

以上のように本地点では多くの遺物・遺構の検出によって、江戸時代を通しての当該地点における土地利用の変遷を明らかにすることができた(一部中世以前に帰属する遺構も確認している)。この土地利用の変遷は、本地点を含む付属病院周辺が不忍池へと傾斜する本郷台地縁辺部に位置するという立地上、大規模な盛り土による土地の平準化—即ち、江戸時代における大土木工事の痕跡として一捉えることができる。こうした土地改変は、様々な歴史的事象に起因して行われたものであるが、中でも天和の火災を契機に加賀藩邸の敷地の一部から大聖寺藩邸へと移り変わる 4 面段階に

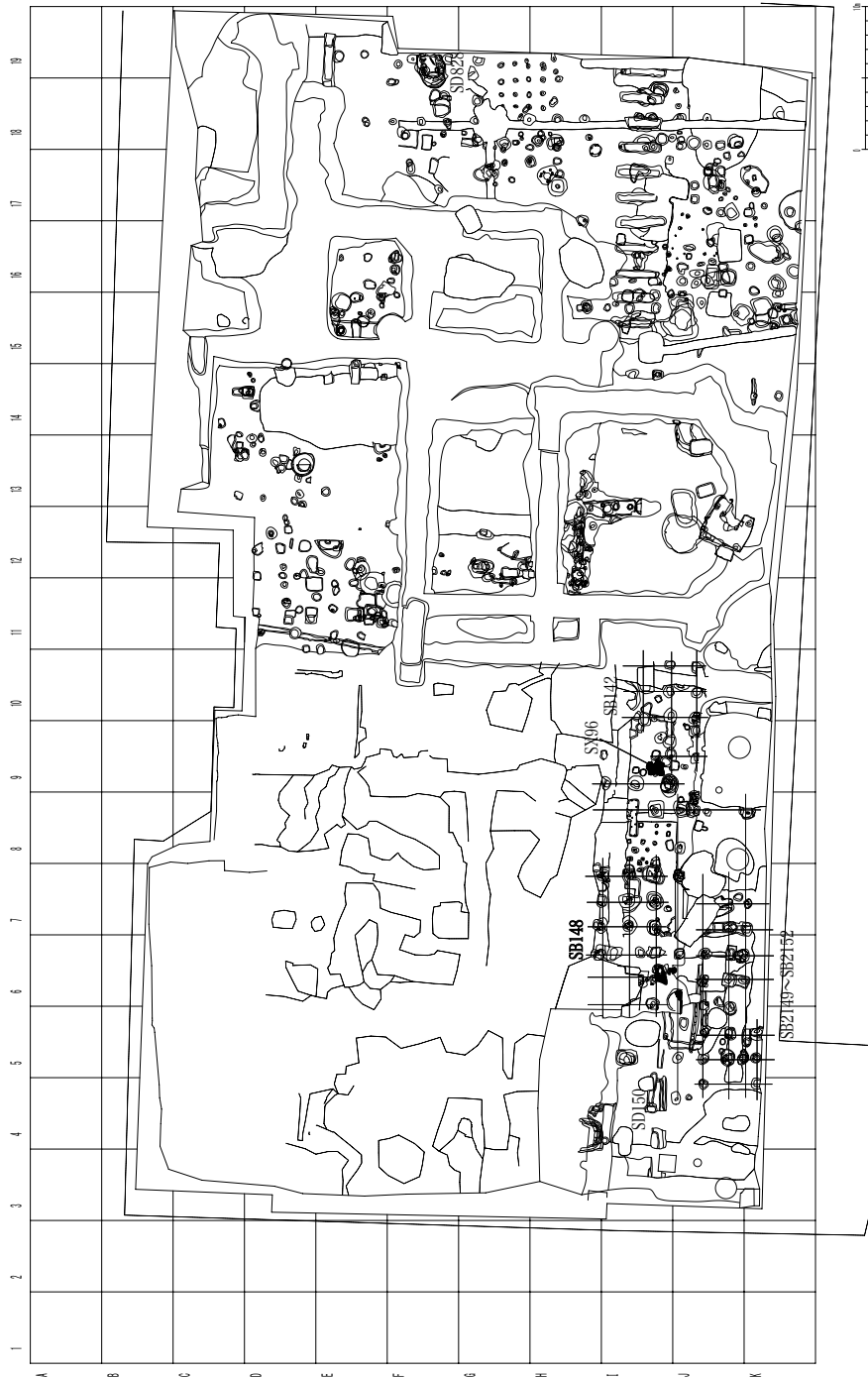


図6 1面の遺構

において、焼失した門や番所、あるいは仮設の門や塀を検出し得たことは特筆される成果であろう。

8面から数点出土した金箔かわらは、中央診療棟地点の池状遺構から出土した御成に伴う一連の遺物との関連が予想される。また1面の礎石建物は、調査区西の外來診療棟地点内に、大聖寺藩邸の御殿空間と詰人空間との境が設けられていたことから、同じ面で検出した庭園跡や水禽窟と共に、御殿空間の具体像を明らかにすることが期待される。

このように本地点の調査で得られた知見は、単に地点内での考察で解決しうるものではなく、1984年以降埋蔵文化財調査室が実施してきた附属病院における新施設建設に伴う発掘調査での成果と相互につながり合わせる必要があるとあり、本地点の調査によってそれが可能となったともいえる。今後の整理作業の課題としたい。

(追川吉生)

2. 医学部附属病院病棟外構施設新営に伴う発掘調査概報

調査期間 : 2000年9月21日～11月14日

調査面積 : 200 m²

調査担当者: 成瀬晃司・追川吉生

1. 調査の経緯

医学部附属病院では、基幹整備の一環として敷地内に貯水槽・オイルタンクの建設を予定した。建設予定地は江戸時代には講安寺境内にあたり、建設予定地に隣接する附属病院病棟地点の発掘調査においても、墓を含む講安寺関連の遺構と遺物が出土している。そこで建設予定地においても発掘調査が必要と判断され、上記期間で事前調査を実施した。

2. 調査の経過

調査地点は本郷台の東縁から不忍池にかけての傾斜地上に位置している。東京大学の東隣りに現存する講安寺の寺域の一部が、本学用地に組み込まれたのは1905(明治38)年及び1912(大正元年)である。本学用地となった土地は盛り土がなされ、既存のキャンパスとの標高差が解消された。江戸時代の生活面はこの盛り土の下に遺存している。面としてはロームブロック混じりの黒褐色土層が平坦に整地されている面とローム面の2面であるが、遺構の切り合い関係によって4つの段階があると捉えられる。以下ではそれらを上から1期～4期と仮称して、そこで得られた調査成果について記す。

3. 検出された主な遺構

(1) 1期

調査区全面が講安寺の墓域であった段階。検出された墓には、甕棺墓、方形木棺墓、円形木棺墓、火葬墓というように、各種の埋葬形態が認められる。

ST174 (写真 27)

火葬された人骨を納めた蔵骨器である。東西を別遺構によって壊されているので、墓壙形態については



写真 27 ST174

蔵骨器は口径7cm(胴部径15cm)、高さ20cmの瀬戸・美濃産の三耳壺である。蔵骨器内には焼骨の上に、口径5cm、高さ3cmの合子が置かれていた。写真は蓋を開けた状態である。合子内には歯が納められていた。

ST121 (写真 28)

木棺墓であることが予想されるが、木棺に用いられた板材は全て遺存していない。また周囲の攪乱も著しく、現状では東西・南北ともに 60 cm、深さ 30 cm の掘り込みと埋葬された人骨が遺っていたのみである。木棺の被葬者は頭部が東側の向きで納められていた。墓壙形態は南北 75 cm、東西 80 cm、深さ 40 cm を測る。



写真 28 ST121

ST115 (写真 29)

現状では東西・南北 20 cm、深さ 20 cm の木棺墓である。木棺は遺存していない。人骨の大きさから、被葬者は幼児の可能性はある。

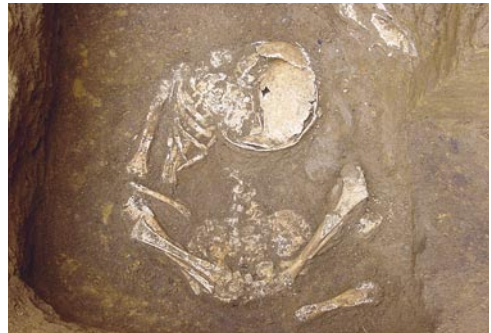


写真 29 ST115

ST24 (写真 30)

直径 60 cm、深さ 70 cm の常滑産大甕を埋葬容器に用いた甕棺墓である。遺構確認面から 160 cm の深さの所に甕棺が東西 2 基並んで納められており、さらにその下に甕棺が 3 基納められていた。その結果 2 段目の甕棺は遺構確認面から 260 cm の深さとなる。2 段目の甕棺の上部からは長さ 90 cm、幅 50 cm、厚さ 10 cm の方形に整形された石が 4 点出土した。

限られた墓域に対して利用可能な範囲を垂直方向に求めた、墓地の大深度地下利用（成瀬 2001）を示す例である。



写真 30 ST24

ST187 (写真 31)

南北 70 cm、東西 72 cm の方形木棺墓である。木棺自体は遺存していない。木棺は掘り方確認面から 100 cm のところに埋葬されていた。この下には写真にあるように甕棺墓が更に 1 基埋葬されている。ST24 とともに墓地の大深度利用例の一つであるが、本遺構は木棺墓と甕棺墓という異なる埋葬容器を有する例である。

(2) 2 期

SK222 (写真 32)

南北 240 cm、東西 (現状) 380 cm の平面形状が不整長方形を呈する土坑で、深さ 150 cm を測る。遺構の東側は調査区外へ続いている。覆土は暗褐色土層と暗灰褐色土層との互層で、いずれも粘性が強い。瓦片や漆喰が比較的多く含まれている。出土遺物には 18 世紀第 3 四半期に比定される陶磁器が含まれている。



写真 31 ST187



写真 32 SK222

(3) 3 期

SU266 (写真 33)

ST264 に上部を切られている地下室である。南北 150 cm、東西 140 cm、深さ 100 cm を測る。

(4) 4 期

調査区やや南よりに、東西方向に 1.8 ~ 2.0 m の間隔でピットが並ぶ。南北 2 条認められ、北にある列をピット列 1、南にある列をピット列 2 とした (写真 34)。

ピット列 1 (SP162)

ピットの平面形状は 1 辺 50 cm の正方形を呈しており、深さは 80 cm を測る。

ピット列 2 (SP164)

ピットの平面形状は 1 辺 30 cm の正方形を呈しており、深さは 40 cm を測る。



写真 33 SU266

SK236

確認面の形状は 1 辺 60 cm の正方形を呈した、深さ 50 cm の土坑である。暗褐色を呈した覆土は粘

性がある。また壁際には板の痕跡が認められる。以上の所見から本遺構は便槽と思われるが、こうした土坑が1.8m間隔で東西に並んでいる。ピット列1・ピット列2との対応が窺える。SK236を含む土坑列の南側は攪乱によって破壊を受けていて、それに対応するピット列などは検出できなかった。これら一連の遺構は厩跡と考えられる(図8)。

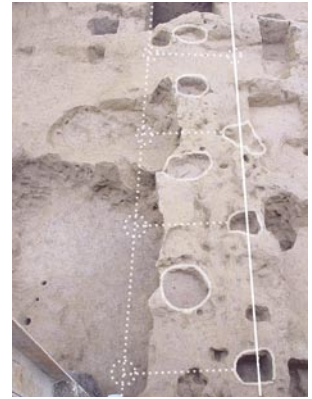


写真34 ピット列

4. 調査の課題

講安寺は加賀藩が本郷邸を拝領するのとはほぼ同時期の1616(元和2)年に本郷邸の東隣り、無縁坂に接する現在の地に2100坪の寺域を拝領した。前述したようにこの付近の土地は西から東へと傾斜しており、加賀藩邸(天和の火災以後は大聖寺藩邸)との地境は道を挟んで講安寺が1段下がった段に位置していた。講安寺境内に関しては、無縁坂に接する南側に本堂があり、墓域は北側に広がっていたようである。江戸時代の絵図をみると北は富山藩邸と接しているが、大学構外にあたり、これについては今後本学と隣接する台東区内での発掘調査に期待したい。

さて本調査区での遺構の分布状況は図7・8のようになる。初めに墓域であった1面(図7)をみると、墓は調査区全面に分布しているとは必ずしも言い難く、その分布には疎密があるようである(図中のアミ線部分が分布が密の部分)。調査区には南北方向に2方向の攪乱が入っていたため、分布に関しては即断を避けるが、こうした墓のまとまりが、墓域のありかたを明らかにする手がかりとなるかも知れない。具体的には墓域エリアの中にある墓と、それらをつなぐ道(参道)という組み合わせとして捉えることができるか否かを考えていく必要がある。ただし図7に表れているように、墓が密な部分では極めて錯綜した状況にある。分析の出発点としては、これら隣接し錯綜する墓の新旧関係を正しく押さえることから始めなくてはならない。と同時に、火葬墓・木棺墓・甕棺墓といった埋葬容器の多様さが、調査区内の分布にどう表れているかもみていく必要があろう。講安寺ではST24に示したように墓地の大深度地下利用がみられるが、ST187のように上下で埋葬施設を異にする墓の事例は、埋葬施設の多様性と墓域の利用という両面から注目しうる事例である。また2期の遺構であるSK222の遺物年代から、講安寺内で本調査区付近が墓域として利用され始めたのが18世紀後葉以降であることが予想される。こうした点も、講安寺の歴史の変遷を考える上では参考となるだろう。出土した人骨の形質人類学的見知からの分析も併行して実施中であり、そちらの分析結果や研究成果にも期待が持たれる。

出土した人骨の分析も含めて、本調査の分析はこれからスタートする。しかし講安寺に関しては冒頭にも記したとおり、隣接する附属病院病棟地点の調査でも実施されている。4期に属する厩遺構(図8)は、その際に調査された厩遺構と繋がる(当該地点の厩遺構は南北に並んでいるので、どこかで90度屈曲するはずであるが)ことが现阶段では予想される。このように本調査で得られた成果ばかりでなく、以前の調査での知見と合わせて、講安寺の歴史の変遷と江戸時代の葬制の一樣相を明らかにしていきたい。(追川吉生)

参考文献

原 祐一 1997 「湯島講安寺における墓域の空間利用」『東京考古』15：145-156

成瀬晃司 2001 「市中墓にみられる大深度地下利用」『考古学ジャーナル』477：4-8

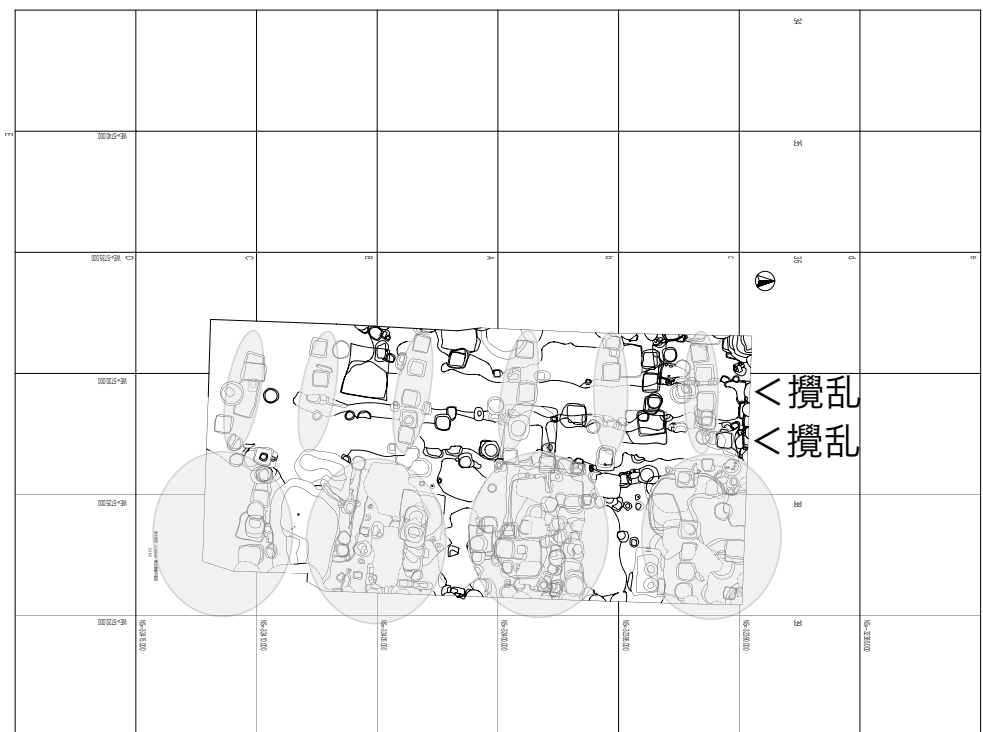


図7 遺構分布図 (1期)

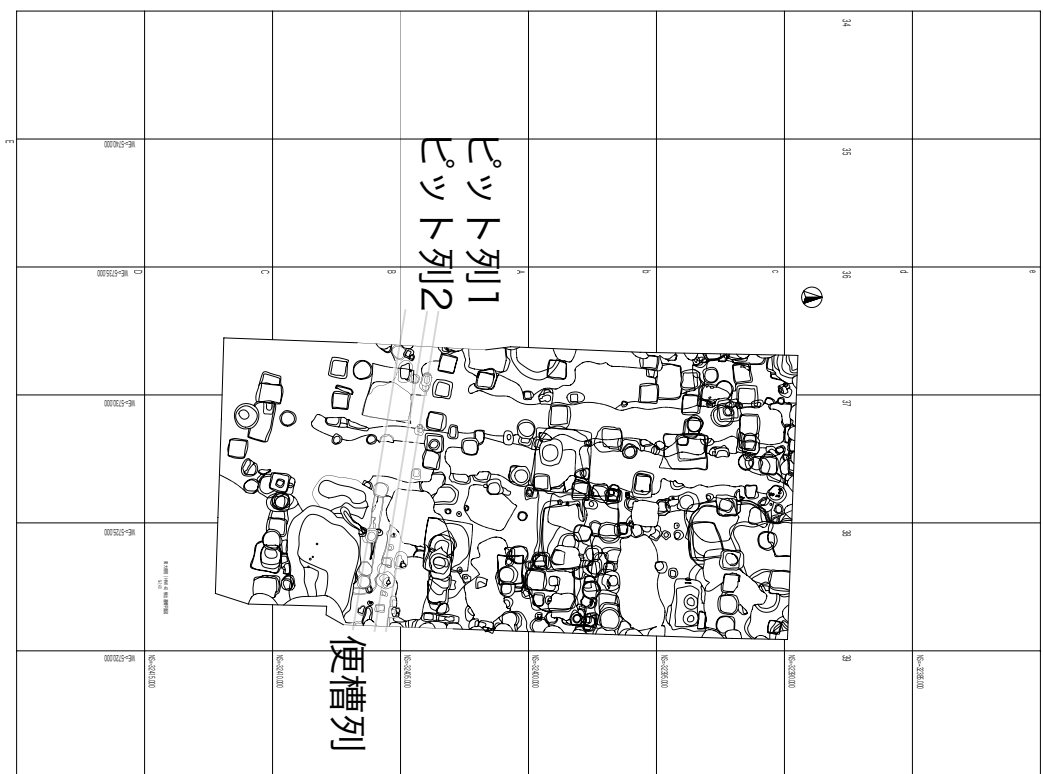


図 8 遺構分布図 (4期)

3. 法学系総合研究棟地点調査略報

所在地 東京都文京区本郷7-3-1（東京大学構内）

調査期間 2003年2月17日～2003年4月18日

調査面積 946㎡

調査担当 成瀬晃司 大成可乃

1. 調査の経緯と経過

当調査地点は東京大学正門南側の雑木林内に位置し、隣接する法学部4号館地点では1984年にすでに発掘調査が行われ、その成果が報告されている^(註1)。

当調査地点も現存する絵図面など対比すると、加賀藩10代藩主重教の隠居宅である「西之御殿」、厩、御露地役所といった建物の存在が予想され、法学部より依頼をされた東京大学埋蔵文化財調査室では、これを受けて2002年3月18日～20日に試掘調査を実施した。その結果、明瞭な江戸時代の生活面は確認されなかったものの、現地表面下-0.8m前後で江戸時代の包含層を確認すると同時に、深さ3mを超える巨大な遺構が確認された。この調査結果を受けて東京大学施設部と東京大学埋蔵文化財調査室が協議した後、2003年2月17日～同年4月18日の約2ヶ月間で946㎡の本調査を実施した。

2. 調査の結果

調査区内に国土座表系第IX系を基準とした杭を5m毎に設定し、西から東へA～Gのアルファベット、北から南へ1～15の数字を合わせたものを各杭の名称とし、北西隅の杭を基準として各グリットを設定した。重機により表土掘削を実施したところ、現地表面下-1m前後でローム面に達し、江戸時代の生活面は確認されなかった。また試掘調査で確認された江戸時代の包含層も局所的に遺存しているのみであったので、遺構調査は主としてローム面で実施した（図10・写真35）。検出遺構総数は500基弱で、主な遺構として江戸時代の溝、井戸、地下室、土坑（採土坑や植栽痕と考えられるものを含む）などが確認されたが、現場所見では廃絶年代は18世紀後半以降のものが多い。

検出された遺構は6ラインから南側、その中でも調査区東半分集中するという傾向がみられ、更にその主軸方向から3つに大別されることが明らかになった。すなわち、1) 春日通りと平行する軸（ほぼ真北方向）をもつ遺構、2) 調査区と平行して南北にのびる本郷通りと平行する軸をもつ遺構、3) 1・2のどちらとも異なる主軸をもつ遺構に分類できる。1のタイプの遺構は12ラインより北側に多く、2のタイプの遺構は12ラインより南側に多くなる傾向もみられた。

なお江戸時代以前の遺構、遺物は検出されなかった。

溝 (SD) : 溝は3基検出されているが、中でもSD31 (写真36) は調査区3ラインからほぼ真南へ向かってのびる溝であり、前述した春日通りと同様の真北方向の主軸をもつ。12ライン以南は調査区域外へのびているので全長は不明であるが、幅約1.4m × 長さ45.5m以上 × 深さ約0.7mの規模を呈し、緩やかに南へ傾斜している。本遺跡で検出された溝の中で最長であり、その規模や形状などから屋敷内の土地利用に関わる溝であった可能性も考えられるが、現存する藩邸の絵図面には、本遺構に該当するような溝の記載は今のところ確認されていない。

井戸 (SE) : 井戸は6基検出されている。C3グリットに位置するSE33 (写真37・38) は東西1.26m × 南北1.14m、平面形状が楕円形を呈する。覆土には貝殻が多量に含まれており、断面観察から上層に蛸殻、下層に赤貝が集中していることが判明した。E10グリットに位置するSE46 (写真39・40) は東西0.98m以上 × 南北1.28m、平面形状がほぼ円形を呈する。覆土には出土遺物の年代観から元禄16 (1703) 年の火事と考えられる焼土が多量に含まれていたことから、この火事の際に廃絶した井戸と思われる。

地下室 (SU) : 地下室は7基検出されているが、その形態は大きく2タイプに分けられる。すなわち確認面からの深さが4m近くあり、床面形態がやや不整形な大規模地下室と、確認面からの深さは2m強、床面がほぼ方形を呈する地下室に分類される。なおこの2タイプの地下室の主軸方向は異なり、前者は本郷通りと平行する軸を、後者は春日通りと平行する軸を有しており、このような形態差が生ずる背景には年代差だけでなく、藩邸内における当調査地点の空間利用の変化なども反映していることが推測される。前者にはA2グリットに位置するSU25と、D12グリットに位置するSU77、後者にはC1グリットに位置するSU16とD7グリットに位置するSU202、366、381、400がある。SU77 (写真41・42) は東西1.44m × 南北1.76mの長方形の開口部を有し、室部は東と南側へ広がる。室部床面は最大で東西3.59m × 南北4.31mあり、南壁がやや湾曲した長方形を呈する。開口部から床面までの深さは3.9mと非常に深い。西および北壁は垂直に造られている。東と南側に広がる室部の天井は大きく崩落していたが、遺存していた壁面観察からアーチ形を呈し、緩やかに東側へ傾斜していたことが明らかとなった。SU77の廃絶時期は出土遺物から18世紀中頃と考えられる。SU202 (写真43・44) は開口部が東西1.18m × 南北1.57mの長方形を呈し、室部は西および北側に広がる。室部床面は東西1.48m × 南北1.18mの長方形を呈する。開口部から床面までの深さは2.11mあり、床面の東西壁際には開口部の補強施設と推定されるピットが5基検出されるとともに、壁自体にも柱が立てられていた痕跡が確認された。

土坑 (SK) : 土坑は全部で106基検出され、その規模や形状などは様々であるが、類型化できるものとして1～4のものが確認された。

1, 平面形状は不整形で、遺構壁面の凹凸が著しく、いわゆる採土坑と分類されるもの。

D10グリットに位置するSK42、B2グリットに位置するSK382、C4グリットに位置するSK81、

B5グリットに位置するSK221、D7グリットに位置するSK315、E12グリットに位置するSK121などがあるが、これらの遺構の主軸方向をみるとSK42以外は全て本郷通りと平行する軸であることがわかる（SK221は大部分が調査区域外にあるため未確認）。SK42（写真45～47）は春日通りと平行する主軸を有する遺構で、南北6.48m×東西7.08m×深さ2.20mあり、南側坑底は西から東へ緩やかに傾斜した渦巻き状に掘削されていた。覆土の堆積状況を観察したところ、遺構の北側と南側で状況がやや異なることが確認された。すなわち北、南側とも坑底から0.5mほどはロームブロックを主体とする層がレンズ状に堆積し、その上0.5mほどは遺物を比較的多く含む層がやはりレンズ状に堆積している。しかしこの層から上層については、北側では締まりのある層が数枚確認され、数回にわたって整地し、一気に埋め戻された様子がみられたが、南側では北側のような締まりのある層は顕著に確認できず、一度埋まった遺構を再度その整地した面まで掘削したような堆積状況が観察された。

2. 平面形状は方形で、床面に数基の杭穴を伴うもの。

C1グリットに位置するSK86、B5グリットに位置するSK87、C5グリットに位置するSK92、E9グリットに位置するSK142があるが、これらの遺構には共通点がある。すなわち、イ）方形の掘り方の内側や坑底にロームや板枠などを貼っている（SK87は遺構の大半が調査区域外であるため未確認）。ロ）どの遺構も確認面から坑底までの深さが0.3～0.4mであるが、出土遺物が比較的多い上に、完形あるいは半完形品のものが多い。とくにSK92（写真48～50）などは覆土上層に完形品、下層に半完形品が集中するような傾向がうかがえた。ハ）いずれも遺構の主軸方向は春日通りと平行した軸である。イ）、ロ）の共通点は、この遺構の機能や性格を反映しているものと推測されるが、今後は出土した遺物の年代も含めて更に検討する必要があるだろう。なお隣接する法学部4号館地点でも、掘り方が方形で坑底にピットをとまなう遺構（C6-2号土坑）が検出されており、やはりイ）とハ）を共通点として挙げることができる。

3. 平面形状は方形で、覆土中に多量の瓦が廃棄されていたもの。

D8グリットに位置するSK171、E12グリットに位置するSK158があり、ともに主として棧瓦が多量に廃棄されている。ただしSK171の瓦は大半が被熱しているが、SK158の瓦は全く被熱していないという点、またSK171の主軸方向は春日通りと平行であるのに対し、SK158の主軸方向は本郷通りと平行であるという点などの違いも認められる。SK171（写真51・52）は東西4.56m×南北3.00m×深さ1.19mで、平面形状は長方形を呈し、坑底や壁面は未調整である。覆土の大半は被熱した瓦であり、共伴する他の出土遺物の年代観などから、安永元（1772）年に消失した「西之御殿」の後始末に伴う焼け瓦を廃棄するために構築されたものであろう。SK158（写真53～56）は東西2.4m×南北3.6m×深さ2.14mで、平面形状が長方形を呈する。ある程度調整された坑底には、柱痕が遺存したピットが計12基の認められた。四隅のピットは深さが0.4mほどあり、掘り方もしっかりしたものであったが、それ以外は掘り方も部分的に布掘りであったり、深さも0.1～0.2mと浅いものであった。覆土の堆積状況をみると、深さ約1.5mの瓦層下にロームブロックを主体とする層がほぼ水平に堆積し、ピットはその面では確認されなかった。以上のことからこの

遺構は、本来別の目的で造られたものが転用され、多量の瓦の廃棄場所になったものと推測される。また被熱していない瓦を多量に廃棄する理由として、漆喰の塊なども一緒に廃棄されていることも考慮すると、建物の解体あるいは立て替えなどに伴うものか、あるいは地震などで倒壊した建物の処理に伴う廃棄などが考えられる。なお SK158 から出土した棧瓦には刻印が認められるものが比較的多く、「○に庄」「山に庄」「太」などの刻印がみられるが、これらの刻印は法学部 4 号館地点で出土した棧瓦からも確認されている刻印である。

4. 平面形状は円形を呈し、壁面が鉄分などの沈着により変色しているもの。

A4 グリットに位置する SK108、B7 グリットに位置する SK380 がある。SK108（写真 57・58）は直径約 0.8m × 深さ 0.36m、SK380（写真 59・60）は直径 0.8m × 深さ 0.76m で、ともに断面形が袋状を呈し、壁面がオーバーハングするという特徴がみられた。また壁面と坑底が共に茶褐色に変色（部分的に硬化）していることから、意図的か偶然なのか検討する必要はあるが、これらの遺構には水が溜まるような期間があったことが推測される。なお遺構中の覆土には水が溜まっていた痕跡がみられないことから、水が無くなった後に埋まったものと思われる。

3. 調査成果と今後の課題

冒頭でも少し触れたが、当調査地点は絵図面では次のような土地利用がなされている（図 9）。

年代	絵図にある建物名称	建物の主軸方向※
17 世紀末	長屋？	春日通り
18 世紀前～	長屋	春日通り
	西之穴	本郷通り
	ヤブ	本郷通り
1771 年	西之御殿	不 明
1772 年	西之御殿焼失	不 明
1772 年～	空き地	
18 世紀末～	御土蔵	本郷通り
	御ハタ	本郷通り
	ヤブ	本郷通り
19 世紀初頭	御土蔵	本郷通り
	御厩	春日通り
	長屋	春日通り
19 世紀中～	長屋	春日通り
	御露地役所	本郷通り

※主軸方向としたのは、絵日に建物が春日あるいは本郷通りと平行に描かれている事を示す。

図 9

ただし現段階では絵図との照合が厳密に出来ていないので、大まかに現況図と絵図面を合わせたものであり、実際に当調査地点が建物（あるいは空間）のどの部分に相当するのか今後検討する必要がある。図9に示したように、絵図面からは当調査地点があまり建物が密集した空間ではないことが予想されたが、発掘調査によっても建物址が多数検出されるという状況はみられず、絵図面を裏付けるものであった。また調査区内には植栽痕と考えられる遺構が遍在し、隣接する法学部4号館地点で検出された植栽痕のような規則性がみられないという事も、この地点が絵図面にあるようなヤブや露地などに利用されていた可能性を示すものであろう。

現存する絵図面をみると、旧中山道（現・本郷通り）沿いの部分には門や塀が描かれているのみで、僅かに描かれていても馬場、土蔵、ヤブといったものであり、大抵は空白である。また本郷構内の発掘調査自体も本郷通りに面した場所の調査は実施されておらず^(註2)、藩邸内でどのような空間利用のされ方をしていたのかは不明であった。しかし今回の調査で多種多様な遺構が検出されたということは、空き地があれば駐車場などにして土地を遊ばせない現代事情と同じく、江戸時代も建物などが建つまでは様々に有効活用していたことを示す資料であり、今回の調査成果として挙げる事ができる。

現場所見では、検出された遺構の多くは18世紀後半以降に位置づけられるものであるが、その時期は絵図面で建物が散見される時期とほぼ一致しており、絵図面が示すように当調査地点の利用が頻繁になるのがこの頃からであったことを示唆するものであろう。今後は検出された遺構が絵図面にある建物と関係があるものなのか、あるいは全く別の目的で造られたものなのかを検討していく必要がある。

検出された遺構の主軸方向には、本郷通りに平行する軸と春日通りに平行する軸と、それら以外のものがあることを指摘したが、絵図面からは18世紀代には両通りに平行する建物が共存し、幕末までそのような状況がみられた事が推測される。そして隣接する法学部4号館地点の調査でも、このような異なる主軸方向をもつ遺構が確認されており、違いが生ずる要因に時間的要因と空間的要因があることが指摘され、その上で遺構についての検討がなされている（成瀬1990）。当調査地点でも同様の視点から遺構の主軸方向や年代を検討し、旧中山道沿いという当時のメインストリートに面した部分の藩邸空間の復元を行っていく必要がある。（大成可乃）

註1 東京大学遺跡調査室 1990 『遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』

註2 1992年～93年にかけて工学部14号館地点という本郷通りに面した場所の調査を行っているが、この地点は絵図面から加賀藩邸ではなく御先手組屋敷があった場所であることが確認されており、加賀藩邸内の本郷通り沿いの調査は今回が初めてである。東京大学埋蔵文化財調査室 1997 「工学部14号館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

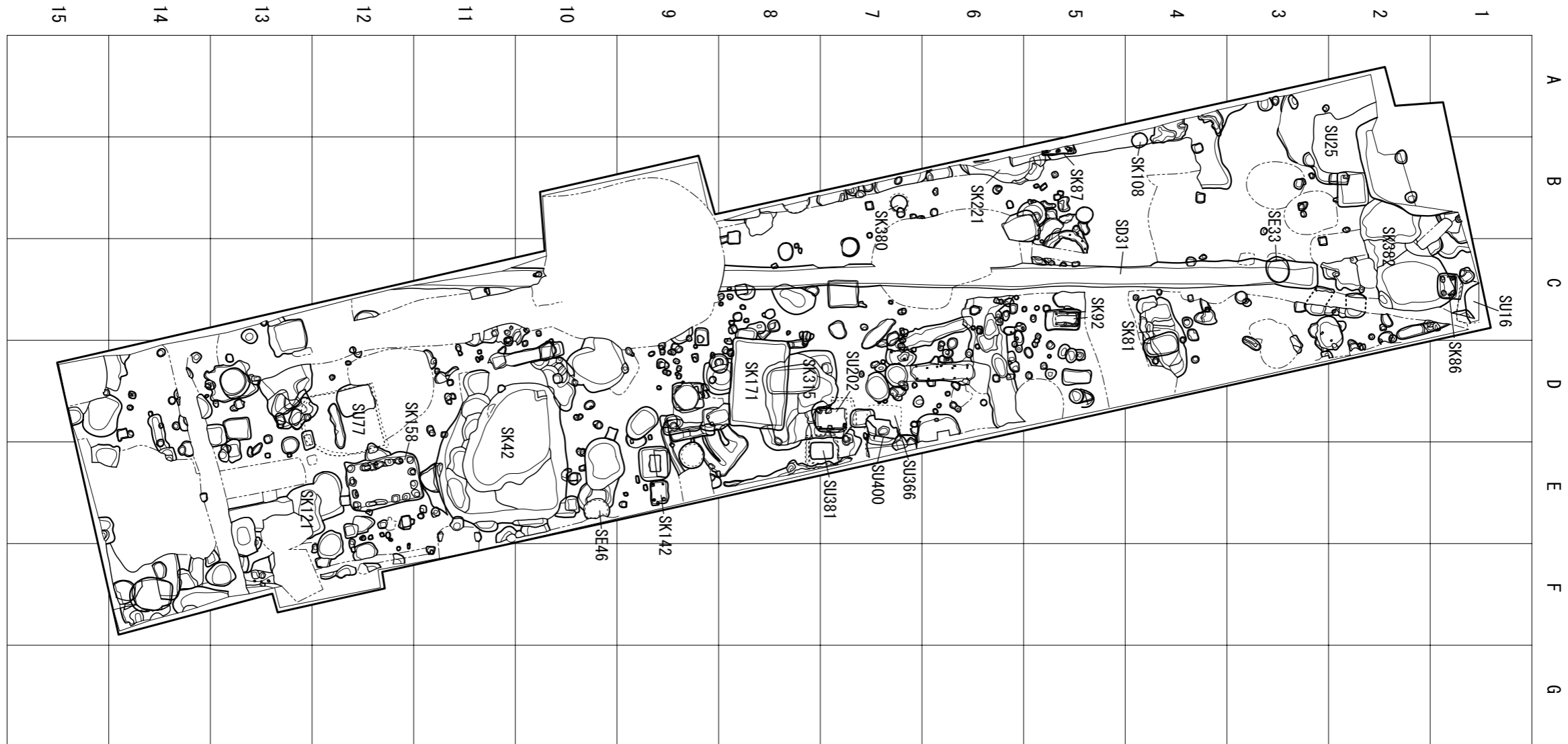


図10 遺構全体図 (S = 1/250)

4. インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1. 調査の概要

東京大学本郷構内は、江戸時代には加賀藩をはじめとした大名屋敷や旗本屋敷、御先手組屋敷、講安寺などが存在した。また付近一帯は本郷台遺跡群として、上部旧石器時代以降の複合遺跡として知られている。本学では1984年以降、構内施設の建設に際して発掘調査を実施してきており、その件数は既に60地点を越えている。今回建設されることとなったインキュベーション施設はキャンパスの南端に近い場所に位置しており、明暦の大火以降は加賀藩邸内にあたる。遺存している加賀藩邸の絵図面を確認してみると、元禄期以降、調査地点周辺は一貫して家臣の居住空間である詰人空間として利用されている。

埋蔵文化財調査室では建設予定地での試掘調査を経て、2003年3月6日から6月7日にかけて事前調査を実施した。調査面積は1051㎡である。

2. 確認された生活面

調査では1640年代から幕末まで、時期による多寡はあるものの江戸時代の遺物が広く出土した。また少数ながら縄文時代に帰属する遺構も検出された。生活面は江戸時代の最も新しい面を1面として、以後2面、3面と続き、最終的に6面まで認定した。

3. 検出された主な遺構

(1) 1面

江戸時代の最も新しい面である。

SB201 (写真61)

幅70-80cmの溝状の掘り込み内に、一辺30cm前後の礫が充填されて礎石となる礎石建物である。その規模は南北720-750cm、東西680cmのほぼ正方形である。北側の一部が攪乱によって破壊されていた。また東側は礎石が失われていた。この内側に1間間隔で礎石が据えられている。極めて堅固な建物であることがうかがえることから、4間四方の土蔵状の建物であったと考えられる。出土遺物から幕末に位置づけられる。この建物の南辺に接するように、南北400cmと500cmの別の基礎が検出した。しかしこれらの基礎の南側は削平されており、全体の形状は詳らかではない。



写真61 SB201

(2) 2 面

1 面に比べて遺構数もやや増えてくる。これは土地利用の反映というよりは、むしろ近代以降の攪乱の影響が 1 面よりも小さかったことによると思われる。

SK191・194・257・259・260・268・307・309 (写真 62)

A グリッド中程に、南北に並ぶ方形の土坑である。土坑は何れも南北 80 cm、東西 120 cm 程度で、深さは 20 cm 前後である。覆土は青灰色の粘土であり、床面は赤褐色を呈して極めて硬化している。こられの遺構の東側では、植栽痕が集中して検出されている。

SK179・182・279・280・281・298 (写真 63)

南北 100 cm、東西 100 ～ 150 cm の長方形を呈する土坑で、深さは 10 ～ 20 cm と比較的浅い。覆土はいずれも粒径 5 ～ 10 cm 程度の礫を多量に含む褐色土層からなる。検出場所は A グリッド内と A・B グリッドの境界で、南北に直線状に並ぶ。遺構の間隔はおよそ 180 cm (1 間) である。



写真 62 SP257



写真 63 SK182

SK001 (写真 64)

南北 840 cm、東西 815 cm の、東西にやや長い楕円形を呈する土坑である。深さは約 132 cm で、この下にある SK062 を切っている。多量の瓦や漆喰と共に、陶磁器・土器・食物残滓が出土した。陶磁器は所謂上手のものが多く、食物残滓についてはアワビやサザエ等大形の貝殻が目立つ。おそらくは御殿空間で生じたゴミを廃棄したものであると考えられる。

SK062 (写真 64)

B3、B4 グリッドにかけて位置する長方形の大形遺構である。規模は南北 1097 cm、東西 730 cm を測り、深さは上部を SK001 に破壊されているが、現状で 231 cm である。多量の陶磁器・土器のほか食物残滓や薄片状の漆器碗の一部が出土している。この他印鑑や一分金なども出土している。



本遺構のこうした出土のあり方は、御殿空間で使われたものを本調査地点（詰人空間）に廃棄したこと、即ち藩邸内の廃棄過程の一端をうかがわせるものである。

(3) 3面・4面

長屋建物（写真65）

長径70-80cm、短径30-40cm、深さ20cm程度の柱穴が検出された。C2,D2グリッドに半間間隔で一直線上に並び、大部分の礎石の間隔は1間である。

写真64 SK001・SK062

また柱穴の上に礎石を伴うものが3事例あったが、それ以外は掘り方のみの検出であった。礎石の構造は長径80cm、短径40cm程度の丸みを帯びた礫を礎石とし、掘り方は深さ20cmの播鉢状を呈する。その覆土内には10cm程度に砕かれた瓦片が多く混入する。礎石が1段のみという構造から、瓦葺き建物の礎石であるとは考えにくい。本調査地が詰人空間であったことを併せて、現段階では長屋建物の礎石であると捉えている。



写真65 長屋建物・SD120・SK137（下藩の地下室はSU106-109・SU176）

SD120

長屋建物の礎石列の北側に隣接している、幅 20-40 cm、深さ 10 cm 程度の東西方向に延びる溝である。前述の長屋に付随する雨落ち溝であったかも知れない。

SK137

南北 120 cm、東西 200 cm、深さ 50 cm の方形を呈する土坑である。覆土の大部分は攪乱による影響を受けていた。床面付近にのみ本来の覆土である粘性の強い灰褐色もしくは青灰色粘土が認められた。床面には 6 基のピットを有する。便所である。遺物は出土していない。

SF164・SF165

B1 グリッドに位置する炉址である。SF164 は直径 50 cm、深さ 15 cm で、内側に焼土・炭化物が集中する。外側に粘土郭など炉本体に関連するような構造・施設はみられない。炉の底部と考えられる。SF165 は直径 30 cm、深さ 3 cm の範囲に焼土・炭化物が集中する。これらの遺構が検出された周辺は、大学の既存建物によって大きく削平されている。おそらく本来の生活面はもっと高く、SF164・SF165 は炉の底部のみがかるうじて残ったものであろう。

SE073 (写真 66)・SE601

SE073 は C2・C3 グリッドにまたがって検出された井戸である。南北 146 cm、東西 133 cm の円形を呈しており、深さ 125 cm のところで調査を中断した。また SE601 は A3 グリッドから検出された井戸で、南北 142 cm、東西 162 cm の円形である。深さ 241 cm で調査を中断した。遺物は陶磁器や瓦が出土しているが、それほど多くはない。また有機質の遺物は出土しなかった。どちらも長屋に隣接しており、居住空間を考える上でも、また本調査地点を絵図上に比定する上でも注目される遺構である。



写真 66 SE073

SK077 (写真 67)

B2・3グリッドからC2・3グリッドにかけて位置する長方形の大形遺構である。規模は南北1200cm、東西532cm、深さ136cmである。南側はSK062によって切られている。覆土には焼土を極めて多く含む。陶磁器、瓦が多量に出土している。藩邸内の火災の後処理のために設けられたゴミ穴と考えられる。



写真 67 SK077

(4)ローム面

ローム面は江戸時代でも最も古い時期の生活面である。SK391・SK396からは所謂「初期伊万里」が出土している。この時期の本地点周辺は、未だ加賀藩邸に取り込まれておらず同心屋敷であった。

SU106-109、SU176 (写真 65)

調査区北端にみられる地下室列である。形状は南北に長い長方形・東西に長い長方形、あるいは円形で袋状にハンクしているものと様々である。調査区の北壁には、電気ケーブルや大学校舎の基礎など多くの攪乱が入っており、これらの地下室がどの面から掘りこまれているかについては明確にしえなかった。また遺物はほとんど出土せず、出土しても時期を確定するに至らない資料ばかりであった。地下室の形状は17世紀代に該当すると思われるが、こうした理由から、当該遺構の時期については不明である。地下室列はN-70.5°-Eというように、やや軸が東西方向からずれている。SU107・SU108には、4面の長屋建物でみられた礎石と同規模の礎石が多量に含まれていた。長屋建物の礎石のほとんどは掘り方と礎石の痕跡のみということから、長屋建物廃絶時に、その礎石を地下室に一括して廃棄したとも考えられる。とはいえ長屋建物の軸がほぼ東西方向であるのに対して、地下室列は北にややずれているということ、また時期的な関係が明瞭でないことから、現段階では不明である。

SD377

調査区東端を南北に貫く溝である。幅は50cm、深さ40-50cmである。遺物は陶磁器片が少量出土するのみである。溝を切っている遺構であるSU334・336・SK367・SP765・SP782・SP726はいずれも南北50cm、東西100cm、深さ80cm程度とこれと同規模である。SD277が屋敷境、これらの遺構が屋敷境の塀を支える基礎であったと考えられる。

4. まとめと課題

以上に概観したように、本地点では17世紀前半から幕末まで、土地利用が連綿と続いている。

調査ではローム層を含めて計6つの生活面を認定したが、調査区内を縦横に走る配管による影響で生活面の地層的な前後関係の把握が十分得られなかった。これは特に調査区内の南北に関して顕著

		V	V	V	V		
		明治時代					
		SB201					
		SK001・SK062				第1段階	
18C末		SK191・194・257 (厩)				第2段階	
明和	}	長屋建物				第3段階	
天和/元禄		SK077				第4段階	
明暦		SD277・SD377				第5段階	

図 11 段階設定概念図

である。そのため基本層序の確定に関しては、これから行う遺物の分析作業の経過を待ちたねばならない面がある。ここでは現段階までの仮説として図 11 のような段階設定を試みた。以下各段階の特徴をあげておきたい。

第 1 段階

第 1 段階は SB201 から幕末に比定される遺物が出土していることから、江戸時代の最後の段階であると位置づけられる。一方 SK001・SK062 から出土する遺物は、おおよそ 19 世紀前半のものである。以上のことから今後、本段階は SB201 と SK001・SK062 とに細分される可能性を指摘しておきたい。

第 2 段階

SK191・194・257・259・260・268・307・309 といった青灰色粘土層が覆土にみられる遺構や、SK179・182・279・280・281・298 のような礫を多量に含む遺構が南北に並ぶ面である。SK191・194・257・259・260・268・307・309 の各遺構の堆積状況は既に特徴的に認められるものである。これらの遺構もおそらくは厩の跡と考えられる。SK191・194・257・259・260・268・307・309 の性格については詳らかではないが、A グリッドでは両者がほぼ対になっている部分もみられるので、厩と何らかの関係を有していたものかも知れない。

ところで当該地点を絵図面でみると、「前田家本郷邸屋敷図」に厩があったことを伺わせる描写がある。本図の年代については、本郷通沿いに「西ノ穴」と書かれている一帯（本書第 1 部 3 に該当する）があることから、ここに西御殿が建設される 1771（明和 8）年以前と考えられる。第



図12 遺構分布図（第3段階）

2段階の年代を考える上での1つの指標となり得ようか。

第3段階 (図12)

第3段階は調査区全体から礎石が検出される段階である。本調査地点一帯に長屋建物が建てられていた時期であろう。前述のように、礎石の構造は瓦片を含む硬化面があるものの、概ね簡易であった。詰人空間の長屋の基礎であろう。礎石列の方向から、この長屋は東西方向に棟をもったものであることが想定される。そこで今一度本郷邸の絵図面を参照してみると、「上屋敷殿閣図(1687-1702)」では、南北方向に細長い屋敷が描かれている。建物全体に彩色が施されているので、果たしてこれが1つの建物であるのか、長屋であったのかは不明である。「加賀藩江戸本郷邸総絵図」(「梅御殿」が描かれているので、1802-1825年頃に比定)では、藩邸南側に大きく樹木が密集しており、そこを曲がりくねった路地が通る様子が描かれている。長屋はその東側と西側に、南北方向の棟で描かれている。「江戸御上屋敷絵図(1840-1845年頃に比定)」では、藩邸の南側一帯に長屋が描かれている。南側中央付近(従って本調査区付近に該当する)に描かれている長屋は東西を棟にしたもので、その東側と西側には東西方向の棟を持つ長屋が描かれている。しかしながら第1段階で触れているように、厩の記述が認められる絵図面が1771年以前のものであるので、この段階の長屋を御住居と同時期であるとは即断できない。年代的な問題については、今後の遺物の分析を待つこととしたい。

このように年代的な位置づけに関してはまま問題はあつたものの、本段階では便所・井戸・地下室など長屋に付随する遺構も検出された。詰人空間の生活の場をセットとして調査できたことは、詰人空間の構造を考えていく上で貴重な事例といえるだろう。

第4段階

第4段階にはSK77が該当する。遺構の覆土に大量の焼土が含まれていたこと、陶磁器も焼けていたことなどから、火災の後処理を行うために設けられた土坑と考えられる。藩邸が被災した火災は江戸時代を通して幾度かあるが、その中で前後の遺構の年代も考慮すると、1657(明暦3)年の火災であった可能性が高い。

第5段階 (図13)

礎石の検出はないが、地下室や溝など少なからぬ遺構を検出した。特に注目される遺構としてSD277、SD377があげられる。SD277はBグリッドにある溝であるが、道路であったかもしれない、遺構の上にはいくつかのピット列が検出されており、塀が設けられていたことが予想される。このピット列の違いは、時期によって塀が東西に多少ずれていたことを示しているのだろう。また今後注意して検討していかなければならないが、門柱と思われるピットも検出されている。一方、SD377は調査区東端に南北方向に走る溝で、北・南とも調査区外へと続いている。ここには前節でも指摘しているように、塀を支えたと考えられる施設が伴っている。江戸時代の早い段階での本



図13 遺構分布図（第5段階）

郷キャンパスの様子をうかがえる遺構は、現状では極めて限られている。本段階の成果は、屋敷地の変遷を考えていく上で注目される事例である。

以上のように、各段階でそれぞれ取り組むべき課題が多い。それ以外にも、SK001 や SK062 から出土した食物残渣を含む多量の遺物は、御殿空間で消費され、御殿空間から廃棄された品であることが予想される。本調査地点は藩邸存続期間を通じて詰人空間として利用されていたが、こうした遺物の出土のあり方は、藩邸内の廃棄の様相や、御殿空間の暮らしについても多くの知見を得ることができると思われる。

(追川吉生)

5. 教養学部図書館新営に伴う埋蔵文化財調査略報

所在地 東京都目黒区駒場 3-8-1 (東京大学駒場 I 構内)

調査期間 平成 12 年 7 月 27 日～8 月 30 日

調査面積 1778 m²

調査担当 大成可乃 追川吉生

1. 調査にいたる経過

駒場 I キャンパスは東京都遺跡地区に東大遺跡として縄文時代中期、晩期の周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている。また平成 8 年度に発掘調査が実施された駒場 I キャンパス内大学院数理学研究科 II 期棟地点 (以下、数理地点) においては、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が確認されている。特に縄文時代については草創期から活動の痕跡が認められ、早期後半になると炉址が 13 基、住居が 1 基検出されるなどの成果が得られている。

本調査区は駒場構内の東側、数理地点の北側に位置する。地形的には調査区東側に隣接して池があり、その池より南に開析される谷と東西に流れる目黒川支流に挟まれた数理地点と同じ台地上に立地していると考えられる。

以上のようなことから本調査区についても遺跡の存否を確認する必要があると判断され、平成 11 年 7 月 26 日～8 月 3 日に試掘調査を実施した。その結果、黒色土上面において縄文土器片 1 点とローム面上で黒色土を覆土とする遺構を確認した。そこで目黒区教委委員会および東京大学と同埋蔵文化財調査室で協議し、本調査を実施することとなった。

2. 調査結果

試掘調査結果によると調査区中央部は近代に大きく攪乱されていることが明らかとなっていたことから、その攪乱から南側を調査区南区、北側を調査区北区と 2 カ所に分けて調査を実施した。以下、調査区毎にその概要を述べる。なお南・北調査区はともにローム面まで近現代に削平され遺物包含層や生活面は確認されなかったため、どちらの調査区もローム面で遺構確認を行った。

(1) 南区

南区では試掘調査で予想されたように南東方向に開く形で埋没谷が確認された (写真 68)。谷の断面観察などから徐々に谷が埋没した様子が確認されたが、埋没時期については遺物が出土しなかったことから特定できなかった。南区の東端と西端ではローム面上での比高差が約 3 m あり、中央付近では表土から - 3.5 m 程のところまで湧水点を確認した。以上のような地形的な理由により南区中央から東側はすべてロームに水がついており、ローム面上で遺構・遺物は確認されなかった。

南西隅では一部 III 層が遺存していたので、その箇所でも旧石器の調査を実施した (写真 69)。しか

しIV層途中からロームに水がついた状態が認められたのでIV層以下の掘削を断念した。遺物は認められなかった。

(2)北区

北区では溝やピット、土坑などが数基確認された。遺物が出土しなかったため時期の特定は困難であるが、覆土や遺構の主軸方位などから近代の遺構である可能性もある。L字状に延びるSD01(写真70)の覆土中には、墓石を砕いたものが大量に含まれていた。この墓石の中に「享保」の銘の刻まれたものもあることなどから、江戸時代の墓石も含まれていることが確認された。しかし覆土中からは明治時代のものと考えられる染付磁器片が出土していることから、SD01は明治時代に埋没した溝と考えられる。この溝の性格などは不明であるが、直上にコンクリートを貼った床面状のものを確認しており、溝状の建物基礎であった可能性がある。覆土中に大量の墓石が入れられていたことも柱が沈まないように強度を高めるためのものだったとも考えられる。SB02は東西3間以上×南北1間以上の根石を伴う柱穴で構築された建物址であるが、遺物は出土しなかったため時期の特定はできていない。

北区東側で確認された南区に続くと思われる谷筋や、近現代の攪乱でローム層が削平されている部分を避けて、北西部分のみに旧石器調査のための試掘坑(2×2m)を8mグリット毎に1箇所設定し、調査を行った(写真71)。その結果、調整剥片が2点、フレイクが1点、チップが4点出土した。

3. 成果と課題

試掘の成果から本調査区内に埋没谷が含まれていることは予想されていたことであるが、本調査においてその谷筋の延びる方向が確認されたことは成果の一つであり、今後駒場Iキャンパス付近の旧地形などを復元する上で資料となろう。

SD01の覆土中に含まれていた大量の墓石については、現段階ではどこから運ばれてきたものであるかは特定できていない。しかし駒場Iキャンパスの南側、井の頭線沿いのテニスコート隣の私有地は現在も墓所となっており、その中の墓石の一つに「明和」の銘のある墓石があることを確認していることから、今後の課題としてこの墓所とのつながりも調査する必要があるだろう。(大成可乃)

6. 医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点発掘調査略報

所在地 東京都港区白金台4-6-1（東京大学構内）

調査期間 平成12年10月27日～平成13年3月9日

調査面積 4280 m²

調査担当 堀内秀樹 大成可乃

1. 調査の概要

本地点は東京大学白金構内の医科学研究所1号館建物の北側に位置する（図11）。地形的には東から北方に向かって延びる舌状の台地上に立地し、調査地の東側には南北方向に延びる谷筋がはいり、台地から谷へと地形が変わる場所でもある。また歴史的には、江戸時代に大村藩下屋敷に該当する場所であることが文献史料などから明らかとなった。

発掘調査は医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟の建設に伴って、平成12年7月5日～7日に試掘調査を実施したところ調査区西側で表土から-60cmほどで19世紀中頃の遺物包含層が確認されたほか、ローム面上では18世紀後半の遺物を含む遺構が2基確認された。その調査結果に基づき港区教育委員会と東京大学医科学研究所と東京大学埋蔵文化財調査室で協議した後、2000年10月27日～2001年3月9日の約4ヶ月間にわたって4280 m²の本調査を実施した。その結果、調査区西半分は攪乱が著しかったこともあり遺構、遺物ともに散漫であったが、東側半分では攪乱は受けていたものの比較的良好な形で江戸時代の建物址、溝、ごみ穴などが確認された（写真72～74）。また試掘調査時から予想されていた江戸時代以前の調査も行ったところ、覆土の状態などから縄文時代の遺構と考えられる陥穴や性格不明の土坑などが確認されたほか、旧石器時代のフレイクが2点、ポイントが1点出土した。

2. 調査の結果（図12）

調査区内に国土座表系第IX系を基準とした杭を10m毎に設定し、東から西へA～Jのアルファベット、北から南へ1～8の数字を合わせたものを各杭の名称とし、北東隅の杭を基準として各グリットを設定した。旧石器調査のための試掘坑は、このグリット内に各2カ所ずつ2×2mで設定し調査を実施した。

調査区内Eラインより西側では表土を30～50cmほど掘削したところでローム面が確認され、江戸時代の生活面および包含層は確認されなかった。遺構の大半はピットが占めるが、その大部分は覆土などから近代と考えられるものである。しかしその中でも出土遺物から廃棄年代が明らかな遺構として18世紀末と推定される井戸、地下室各1基、18世紀初頭と推定される土坑1基、そして17世紀後半と推定される土坑1基なども検出されたほか、覆土や遺構の主軸の方位などから推測して18世紀後半から19世紀と推測される溝や柵列なども検出された。また近代の基礎により上

部をかなり削閉されていたが、縄文時代の陥穴も G4 グリット内で3基検出された。また E3 グリット内では性格不明の落ち込みも確認された。H3 および F6 グリット内に設定した旧石器の試掘坑のⅢ層中からはフレイクが各1点ずつ出土した。

西側とは対照的に南北に延びる谷筋がはいる東側（Eライン以東）では、人為的な生活の痕跡は余り認められないのではないかと予測されたが、表土から -4 m で江戸時代の遺物包含層が確認されたほか、多くの江戸時代の遺構・遺物を確認した。以下に主要な遺構についてその概略を述べる。なお、江戸時代以前の遺物として C5 グリット内に設定した旧石器の試掘坑のⅢ層中からポイントが1点出土した。

段切り

調査区中央から東側では先述の通り南北に延びる谷筋が確認されたが、その谷の立ち上がり部分を段切りし3段の平場を作り出していることが明らかとなった。最も立ち上がりに近い最上段の平場は東西幅10 mあり、その上に掘立柱建物址（掘立柱建物址の詳細は後述）を構築し生活していた状況が確認された。中段の平場は東西幅約2.5 mあるが、他の平場とやや様子が異なり、西から東へ緩やかに傾斜し、検出された遺構も植栽痕がその大半をしめる。最下段の平場（調査区Cライン付近）は東西幅約5 m以上あり、段切りと同一方位の主軸をもつ溝が平行して2本検出された。この溝はともに東西幅60 cm強、深さが30 cm強で形状がV字状を呈すが、溝1の方が溝2より早く埋没した様子が断面調査から確認されている。なお最下段の平場にはこの2本の溝以外にはほとんど遺構は確認されなかった。

掘立柱建物址

段切り最上段で東西2間×南北21間以上を確認した。柱の直径は50～60 cm、深さはグリット3ラインから北側では70～80 cm、南側では30～40 cmで、形状はいずれもやや楕円形を呈す。礎石、根石などの痕跡が認められないことから掘立柱建物であったことがわかる。なお、東側の柱筋と西側の柱筋の間隔は2間幅あるが、その間の柱が確認された場所は2カ所しかない。また前述のように柱穴の深さが3ラインより北と南では大きく異なることなどから、柱筋を揃えて複数の建物が建っていた可能性もあり、この掘立柱建物址に附帯すると考えられる雨落ちの溝や、便所、土留めと考えられる柱列などの施設との位置関係なども考慮してさらに検討する必要がある。

掘立柱建物址の構築あるいは廃絶時期については、柱穴などから18世紀後半と考えられる遺物が数点しか出土しておらず、単独では時期の特定はできない。よって周囲の状況なども合わせて類推するしかないが、その材料の一つに段切りの上に構築されていた版築が挙げられる。この版築は谷のはいる屋敷地の東側の一部分をかさ上げして、はいらない西側と同じ高さの平場を確保しようとしたものようであるが、この版築層中からは「寛政年製」銘のある磁器皿底部片をはじめ、18世末頃のものと考えられる陶磁器類が多く出土している。従ってこの掘立柱建物址は18世紀後半のある段階に構築され、版築によって埋め立てられる18世紀末頃まで存続していた可能性が高い

と考えられる。

SU360 (写真 75)

段切り最上段の掘立柱建物址の南側で確認されたアーチ状の天井を有する地下室である。入口は東西約 1.7 m×南北約 1.5 m×深さ約 1.7 m、床面は東西約 2 m×南北約 1.9 mあり、床面中央よりやや東よりにスロープが一段設けられていた。断面の観察から、天井が崩落した後一気に埋まった様子が確認されたが、床面直上で一本の長さが約 20 cm、幅約 2 cm、厚さ約 1 cm、断面形状が蒲鉾形を呈する棒状の鉛 100 本余りが束ねられた様な状態で出土した (写真 76)。棒状の鉛がこのようにまとまって出土した例は希有であり、藩邸内でのその用途を検討していく必要がある。また、地下室の床面直上で遺物が出土することもさほど多い事例でないことから、地下室の用途を考える上でも非常に興味深い資料である。

なお、この地下室は共伴する陶磁器類の様相から 18 世紀中頃の遺構と考えられる。

SX207 (写真 77)

東西約 18 m×南北約 23 m×深さ約 1.8 mのやや歪な長方形を呈する。覆土には焼土が極めて多く含まれ、その焼土中からは多くの被熱した瓦や陶磁器が出土したほか、貝殻や犬の下顎骨などの自然遺物なども出土した。出土陶磁器の様相から 19 世紀中頃に廃棄された遺構であると思われる。瓦は棧瓦が大半を占め、様々な刻印が押されているものが数多く確認されている。また大村藩の家紋の入った軒丸瓦も 1 点ではあるが出土した。

遺構の覆土、器壁や坑底の観察などから本遺構は採土坑として掘削されたものが、その後ごみ穴に転用され、最終的には火災後の後始末の際に一気に埋められたものと考えられる。なお、この火災の年代を文献史料と照合したところ、現時点では安政元 (1854) 年の火災に比定される可能性が高い。

3. 調査成果と今後の課題

台地から谷へと地形が大きく変化するような場所を藩邸として拝領した際に、どのように生活空間を求め、利用したのかを示す資料が得られたことは本地点の調査成果の一つである。今後、文献史料なども照合して土地利用の改変がいつ、どのような目的で行われたのか検討することが課題となる。また今回検出された掘立柱建物址が、本郷構内で今までに調査されている掘立柱建物址にみられた井戸や地下室のような附帯施設を伴ったものではない上に、間取りも異なるものである。このような附帯施設の有無や間取りの様相差は掘立柱建物址の性格や居住者を考える上で重要な事柄であり、今後ほかの掘立柱建物址の調査事例や大村藩に関わる文献史料なども合わせて本地点で検出された掘立柱建物址の性格や居住者などを考える必要がある。

遺物としては、SX207 から出土した大量の陶磁器類が今まで余り出土例の多くない 19 世紀中頃の良好な一括資料であり、この時代の陶磁器類の様相を把握する上で基準資料となるものである。

また同遺構から出土した大量の刻印瓦についても、この時代の瓦の生産や流通などを知る上で重要な資料となるであろう。

なお、本地点の文献史料の収集および判読は当調査室員の渋谷葉子氏（現学習院大学）に行っている。末筆ながら御礼申し上げます。 (大成可乃)

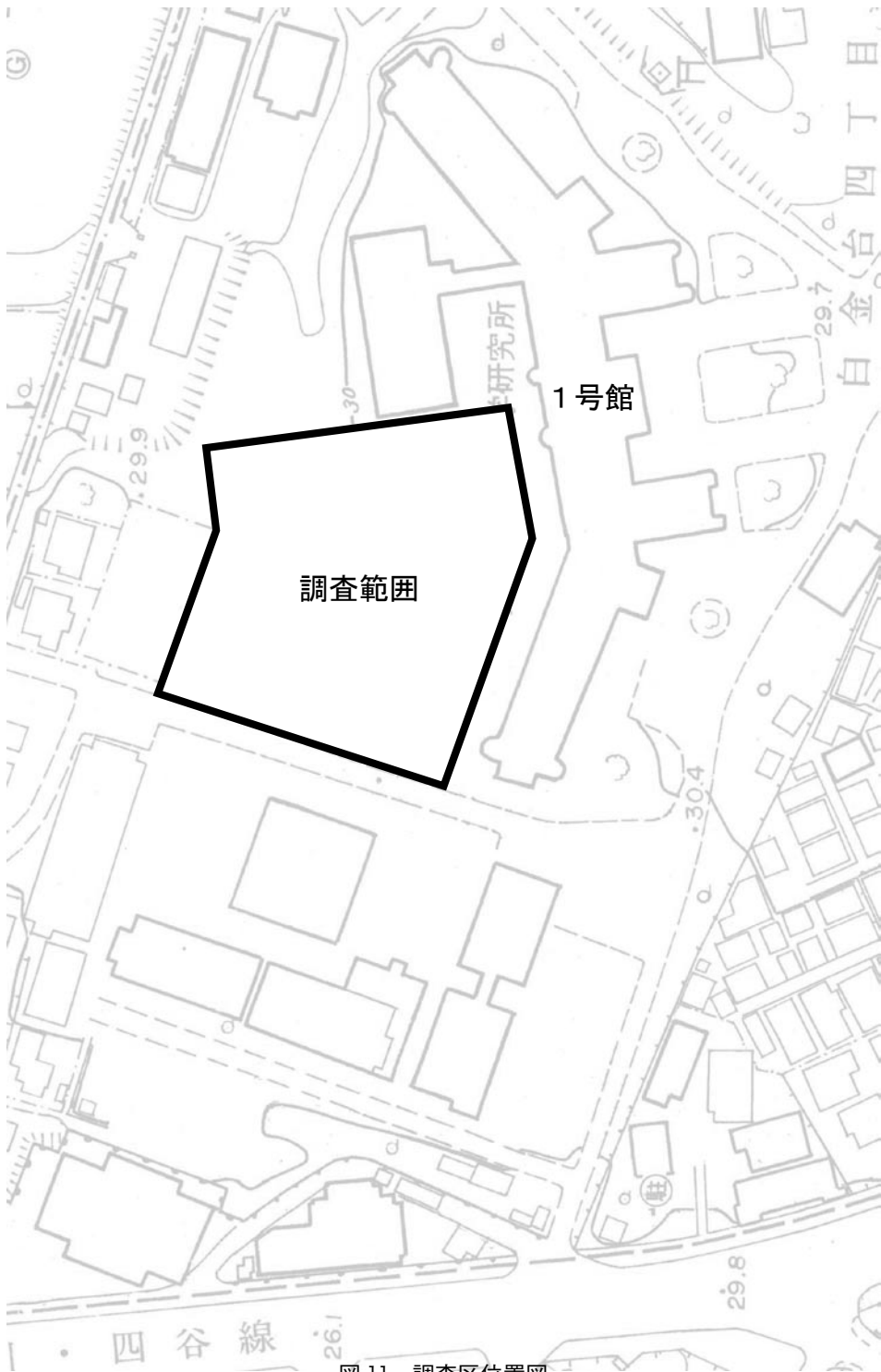


図11 調査区位置図



図 12 調査区全体図

S=1/350

7. 総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報

1. 調査の経緯

総合研究博物館では、理学部附属植物園（小石川植物園）内に移築保存されていた旧医学校本館（重要文化財指定）を博物館施設（小石川別館）として有効活用していくことを決め、建物裏手に便所の増築（45 m²）を計画した。植物園内は、縄文時代の小石川植物園内貝塚、江戸時代の「白山御殿」（館林藩江戸屋敷）、小石川御薬園などの遺跡の存在が知られており、文京区によって「原町遺跡」と命名され、周知の遺跡として登録されている（図13）。施設部から照会を受けた調査室は、平成12年11月27日に試掘調査を行った。調査地点は、旧医学校本館の裏手にあたり、周囲は樹木が茂る斜面地である。そのため、小型重機によって、二本のトレンチを設定して行った（図14）。その結果、調査地点全体を包含する大形溝状遺構が確認されたため、急遽、事前調査に切り替え、安全確保を行いながら、12月4日まで調査を実施した。

2. 検出された遺構

SD1は、本調査地点ほぼ全域に及ぶ大形溝状遺構で、調査区内では、溝の西側立ち上がりのみが確認された（幅9 m以上）。主軸はN-23°-Eで、調査区西側植物園地境、即ち「網干坂」とほぼ並行である（図14）。また、可能な限りの覆土掘削を行ったが、確認面下260 cm付近で、壁面が粘土層から砂礫層に変化し、地下水が湧出してきたため、溝底を確認することはできなかった。壁面の仰角は約37°を測る。覆土はロームブロック、粘土ブロック主体層によって東側から埋め戻されている。また、溝が完全に埋まった後に、ほぼ水平の整地作業が行われている。溝の覆土からは、遺物の出土がほとんど無く、19世紀代の遺物を包含する溝上部の整地層が、下限を示す手がかりである（写真78・79）。

3. 成果と課題

同様の大形溝は、植物園北東部に隣接する白山御殿跡遺跡（文京区遺跡調査会2003）でも検出されている。本調査地点では溝の幅、断面形態を知ることはできなかったが、壁面の仰角や、260 cm以上を測る深度などの共通点から、同一遺構と考えられる。

本遺構について、白山御殿跡報告書では、御殿の周囲に巡らされた堀に比定しているが、報告書で引用された文献中に堀の内側には土手が巡らされていたと記載されている。本遺構の覆土は本調査地点、文京区調査地点ともにロームを主体にした土によって堀の内側から埋め戻されている。その方向性と土質から、堀掘削土で土手を築き、堀埋設時に再びその土を利用したことが考えられる。

（成瀬晃司）

【参考文献】

文京区遺跡調査会 2003 『白山御殿跡ほか発掘調査報告書』

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報



図13 調査地点の位置 (★調査地点) 1:10,000

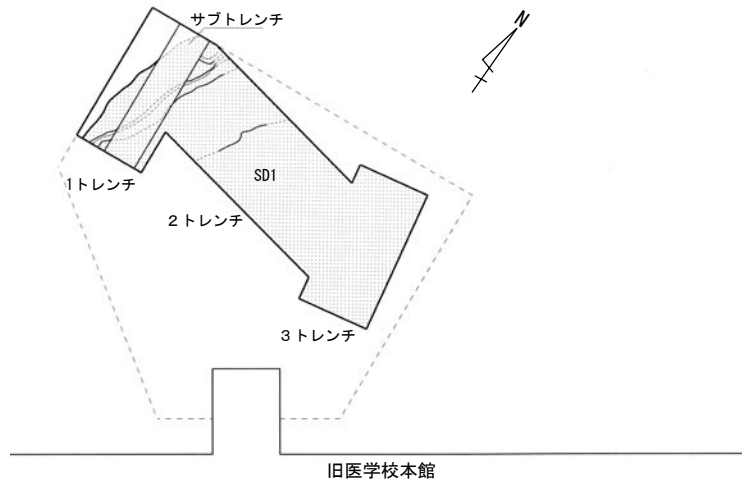


図14 調査地点全体図 1:200

8. 農学部生命科学研究科樹木実験圃場根圏観察室地点発掘調査略報

1. 調査の経緯

農学部生命科学研究科では、理学部附属植物園に隣接する樹木実験圃場内(文京区白山3-7-1)に、根圏観察室の新営を計画した。該地には、縄文時代の小石川植物園内貝塚、江戸時代の「白山御殿」(館林藩江戸屋敷)、小石川御薬園の存在が知られており、文京区によって「原町遺跡」と命名され、周知の遺跡として登録されている(図15)。そのため、農学部から照会を受けた埋蔵文化財調査室は、試掘調査を実施したところ、予想通り、江戸時代の遺構、遺物、縄文時代遺物の存在を確認した。その結果を受け、平成14年9月24日から10月4日の日程で事前調査を行った。対象面積は91㎡である。

2. 検出された遺構と遺物

試掘調査の結果、江戸時代の盛り土層および整地面は確認されなかったため、現表下約1mの淡色黒ボク土上面まで重機によって掘り下げ、遺構確認を行った。その結果、江戸時代の遺構13基、年代不明の遺構1基が検出された(図16・写真80)。以下に、検出された主要遺構を概説する。

調査地点南東部コーナーから地下室の階段部分が検出された(SU1)。遺構の全容を知ることはできないが、階段部分は室部に下るに従いややハの字状に拡がりをみせている(写真81)。階段は、7段確認された。最上段のステップは幅125cmを測る。また各ステップの奥行きは平均約25cm、ステップ高は30~38cm測り、階段の平均斜度は約50°とかなり急傾斜である。また、各段とも杭穴などの壁面、底面補強施設の痕跡は確認されなかったが、ステップ先端部の中央付近をスプーンで削り取ったような加工が施されている。側壁はステップ際には丁寧に整形されているが、上部では根の影響も受け凹凸が著しく、確認面に向かい緩やかに拡がりをみせている。一方、室部のごく一部も確認されたが、上部の側壁が抉れていることと、その直下に多量のロームブロックが存在していたことより、天井部が崩落した痕跡と推測される。また、側壁の崩落部分の範囲から、天井部は、階段部まで及んでいたことが窺われる。

覆土は、その堆積状況から階段先端部北寄りから埋め戻されたことが読み取れ、4層に大別される。最下層からロームブロック主体層、炭化物・ローム粒を含む暗褐色土層、ロームブロック主体層、ローム粒を含む暗褐色土層で形成されている。最下層は、天井の崩落に起因して形成された層序である。続く暗褐色土層からは、多量の遺物が検出された。陶磁器、人形など日常雑器が主体を占め、その年代観は東大編年Ⅷc期に該当する。特質されるのは瓦質植木鉢が多量に出土したことで、全出土資料の半数近くを占めるものと思われる。陶磁器の年代観も合わせ、幕末から明治にかけての居住者の移動に関連する廃棄行為の結果と考えられる。

SX3とSX7は、ともに平面形は隅丸長方形を呈し、長辺約100cm、短辺約80cmを測る。長辺を有する両壁面には足掛けと考えられる掘り込みが穿たれており、確認面下約200cmまで調査したが、

坑底を検出することはできなかった。その様相から白山台地に分布する「地下坑」と判断される。

3. 成果と課題

本調査地点は、現在では理学部附属植物園に続く一角に含まれているが、江戸時代には小石川御薬園に隣接する旗本屋敷に該当することが絵図と現存する路地との対比から判断できる。また、水川神社東側を北北東に延び、樹木園正門に面する「網干坂」は、江戸時代には本調査地点の約20m南で東南東方向へ、L字状に折れていたことから、調査地点は旗本屋敷の中程に位置していたと推定される。

では、前節で紹介した遺構を中心に本調査の成果と課題を概略したい。

SU1は、屋敷中程に構築された地下室である（写真82）。階段部に廃棄された遺物の年代観より、幕末期の一括廃棄として位置付けられる。残念ながら室部の調査には至らなかったが、遺物包含層が室部へ伸びていること、坑底から遺物包含層までがローム主体の土で埋め戻されていることから、遺構廃絶と遺物廃棄の間には大きな時間差は生じていないと推定される。それに加え完形、半完形の日常生活品が主体的であった出土状況を合わせると、SU1と多量の生活用品の片付け行為が短期間によって行われた様相を呈しており、遺物の年代観を加味すると屋敷引き払い時の居住者移動による廃絶、廃棄の可能性が最も高い。また、包含層に日常生活品とともに廃棄されていた瓦質植木鉢は、完形に近い遺存状況と、その出土量の圧倒的多さから、個人的な園芸趣味とは考えがたく、屋敷内において、商業苗栽培が行われていた可能性を指摘したい。

一方、SX3（写真83）、SX7（写真84）は、白山台地を中心に検出されている遺構で、白山四丁目遺跡（白山四丁目遺跡調査会1981）、原町遺跡（文京区遺跡調査会1994）をはじめ、小石川植物園内でも構内北端部付近で報告例（東京大学埋蔵文化財調査室1997）、伝聞などがある。これら一連の遺構は、遺構の平面形態、足掛け用昇降穴が穿たれているなどの、共通する特性に合わせ、絵図面との対比で、検出箇所が全て旗本屋敷内に集中する点でも共通し、ほぼ完掘困難という遺構特性を分布面から検証し、その性格に迫っていく必要がある。（成瀬晃司）

【参考文献】

白山四丁目遺跡調査会1981『文京区 白山四丁目遺跡』

文京区遺跡調査会1994『原町遺跡－徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査－』

東京大学埋蔵文化財調査室1997「理学部附属植物園内の遺跡（原町遺跡）研究温室地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

文京区遺跡調査会1996『原町遺跡第Ⅱ地点』

文京区遺跡調査会2000『指ヶ谷町遺跡』



図 15 調査地点の位置 (★調査地点) 1:10,000

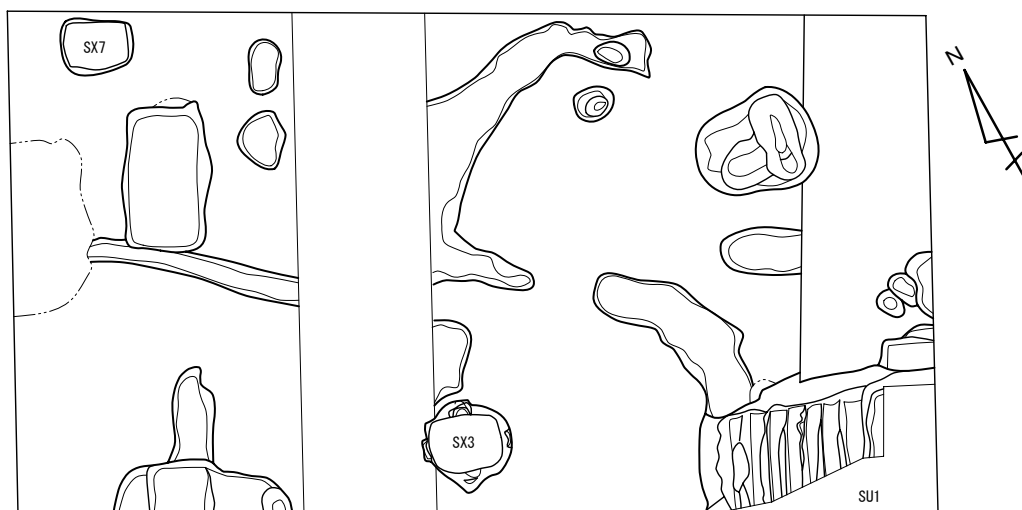


図 16 遺構配置図 1:100

9. 工学部武田先端知ビル地点発掘調査略報

はじめに

工学部武田先端知ビル地点は、東京都文京区弥生2丁目11番地16号、東京大学浅野地区に所在する。当地点は、弥生町遺跡の一角に位置する。これまで行われた浅野地区の遺跡調査では、弥生時代の遺跡が確認されており、遺跡の存在が予想された。

1次調査を2001年6月4日から8月7日、2次調査を同年11月28日から12月28日まで行った。調査面積は740㎡である。調査は東京大学史、郷土史の観点から近代以降も対象とした。調査の結果、弥生時代の方形周溝墓を検出した。この遺構は、歴史的に貴重な遺構で、保存の必要がある判断し、剥ぎ取りによる保存、土器の修復を行った（剥ぎ取り保存、土器の修復は武蔵野文化財修復研究所による）^(注1)。本文は、東京大学埋蔵文化財調査室2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点1次調査速報』『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）シンポジウム発表要旨、学内広報原稿等から作成した。正式報告は後日刊行予定である。調査と整理作業、中間報告作成は原祐一を中心に、土器の写真撮影を青山正昭（調査室）、土器の整理、実測を森本幹彦（東京大学大学院）が担当した（写真85～97）。

なお、出土ガラス小玉の材質分析は、東京大学原子力総合研究センター MALT 平成13年度下半期共同利用採択課題14E02「東京大学浅野地区武田先端知ビル出土の弥生時代ガラスビーズの材質分析」研究代表者 原祐一、共同研究者 小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之の成果による。

1. 文書調査

明治期以降の浅野家に関連する文書は、文京区弥生町在住の青木誠氏が所蔵されている。青木氏のご好意により、本文書を実見できた。明治39年以前の「本郷区向ヶ丘弥生町二三番地図」には「言問い通り切通し」以前の状況が描かれていた。明治45年「分裂届出当時之図」には言問い通り、原子力総合研究センターの位置に浅野家の「御本邸」が記載されていた。大正14年「弥生町號譯概略図」によれば、北東部に該当する部分に言問い通りに平行する住宅、南西部に該当する部分が空き地となっていた。文書と検出遺構の分布状況から、建物跡、上下水道跡、植栽痕は浅野家関連の遺構である可能性が高い。なお、今回の発掘調査を契機に、青木氏収蔵文書が文京区によって調査される事となったことを記しておく。この他、警視庁、東京都公文書館で射的場関連文書の調査を行った。

2. 自然科学分野との共同研究

本調査では、自然科学の分野の研究者との共同研究を行った。研究内容、担当は以下である。土壌分析 橋本真紀夫（㈱パリノ・サーヴェイ）、方形周溝墓のAMS-14C年代測定 吉田邦夫（東

京大学総合研究博物館年代測定室)、土器の紋様・玉類の孔の分析 丑野毅(東京大学総合文化研究科)、PIXY法によるガラス小玉、管玉、土器表面顔料の材質分析 小泉好延(武蔵野文化財修復研究所)、小林紘一(現パレオ・ラボ株式会社)、原祐一(埋蔵文化財調査室)、中野忠一郎(東京大学原子力研究総合センター MALT)、松崎浩之(同)。これらの成果については、『第3回考古科学シンポジウム』(考古科学シンポジウム世話人会他)で発表、要旨集に掲載した^(注2)。これらの成果は年報と正式報告等に掲載予定である。

3. 発掘調査の一般公開

本遺跡は弥生町遺跡の一角に位置しており、近隣住民の関心が高いこと、文化財保護法の理念から一般、学内に対して常時遺跡を公開した^(注3)。発掘調査速報を42号まで発行、掲示した。遺跡見学会を3回開催し、第1回を2001年7月12日、第2回を8月3日、第3回を12月19日に開催した。第2回一般公開では、小泉好延氏を講師に御招きして「古代ガラスの製造技術」をテーマに講演会を開催した。3回の遺跡見学会で延べ400名以上の参加があった。

4. 遺構・遺物

遺構総数は188基である(図17)。弥生時代の方形周溝墓2基(1号、2号方形周溝墓)、射的場出入り口(明治時代 SD02号遺構)、明治時代の浅野家敷地関連遺構(住宅跡、植栽痕等)、大学関連遺構を検出した。江戸時代の遺構は確認できなかった。遺物は収納箱60箱で、陶磁器類、金属製品、ガラス製品などである。

a. 方形周溝墓

1号方形周溝墓は谷跡の傾斜地に位置する。東西南北の周溝と、溝に囲まれた方台部の楕円形の土壌からなる。2号方形周溝墓の形態、規模は不明である。一般に方形周溝墓は複数が連結して検出されることが多く、北東側の道路下に別の方形周溝墓が存在する可能性がある。また、1995年調査の方形周溝墓^(注5)は当地点の北西部に位置しており本遺構との関連が予想される。

1号方形周溝墓の東溝とその周辺から弥生式土器が出土した。明治期の削平により土器が破損し、破片が溝の周辺に散乱していた。土器の側面には弁柄が塗布されていた^(注6)。この土器は「供献品」として納められたものと考えられる。土壌内の北側でガラス小玉と石製管玉が出土した。ガラスの色調は、紺色(22点)、水色(2点)で、管玉色調は、赤色(4点)である。これらの材質分析を原子力研究総合センタータンデム加速器研究部門で加速器PIXE分析法(荷電粒子励起X線分析 Particle Induced X-ray Emission)によって行った。ガラス玉の主成分は、SiO₂ 77.4～84.0wt%(重量%)、K₂O 6.2～11.0wt%で、Na、Ca濃度が極めて低い典型的なカリ石灰ガラスである。紺、青の色調ともに同様の濃度を示した。ガラス玉の着色成分は、紺色ガラスではMnO 1.6～3.1wt%、青色ガラスではCuO 1.0および1.9wt%となった。青色ガラスではMnOが検出限界に近く極めて低く、紺色ガラスではCuOがほぼ検出限界値以下であった。本試料は、これまでの研究成果の結

果から主成分、着色成分ともに典型的な弥生時代のガラス材質であった。管玉の分析結果は SiO₂ 93.4～97.5wt%、Fe₂O₃ 1.5～5.0wt%、Al₂O₃ 0.7～1.5wt%を示し、極めて SiO₂ 濃度の高い鉱物がそのまま用いられていたと考えられる^(注7)。

b. 射的場の出入り口 (SD02) など

SD02 遺構は、参謀本部陸軍部測量局が測量した明治16年測量図（以下、「明治16年測量図」）から、射的場の出入口と考えられる。この遺構は、地下に伸びるスロープ状の遺構で、底部には1尺おきに角材が配され、路面には滑り止めの砂がまかされていた。弾丸11点が出土した。弾丸表面にライフルマークが確認でき、ミニエー銃等の弾丸が含まれていた(峯田元治氏^(注8)、磯村照明氏^(注9)の分析による) 弾丸の材質はPIXE分析の結果、高純度の鉛であった^(注10)。この他の遺構から浅野家の家紋である、「丸に違い鷹の羽紋」の鬼瓦、「弥生舎 無菌全乳」の印がある牛乳瓶が出土した。この牛乳瓶は牛乳製造業社「弥生舎」のもので、「明治16年測量図」に「弥生舎」の記載がある。

まとめ 工学部武田先端知ビル地点の成果と課題

a. 明治時代の射的場と土地利用状況

発掘調査で確認された明治時代の生活面の標高、関東ローム層の堆積状況^(注11)、「明治16年測量図」に記載された標高を比較すると、遺構検出面の標高は明治16年より約1m低い。このことから当該地点周辺が、明治16年以降に削平されたことは明らかである。射的場は東京図によれば「警視局御用地射的場」（明治12年切絵図）、「東京共同射的会社」（「明治16年測量図」）の記載が見られる。射的場は「明治16年測量図」によれば、全長 約150m、幅50mで、現在の浅野地区西に隣接する住宅地に該当する。地面を掘削した地下構造で、中央に水抜きのためのものと考えられる池、射的場を取り囲む高さ約10mの土手が防護壁として築かれていた。掘削された深さと土手の土量を検討すると、射的場造営時、掘削土が土手に使用され、一部の掘削土が搬出されたと考えられる。射的場の宅地化に伴ない土手を崩して埋め、搬出土分の不足を補うために周辺が広範囲に削平され、宅地化していったと考えられる。

射的場の造営について、警察参考室の資料に

「明治九年四月二十七日、向ヶ丘弥生町射的場急造明治十年一月十日」^(注12)

川路利良大警視から東京市知事に出された文書に

「警視局射的場向ヶ丘弥生町ニ落成ス。明治十年一月十八日受」^(注13)

とある、現在のところ「警視局射的場」の構造、造成目的、存続期間は文書から明確にできなかったが、「警視局射的場」は明治9年着工し明治10年1月18日に完成している。当時、農民一揆、士族の反乱が各地で勃発し、政府にとって鎮圧は急務であった。西南戦争（同10年2月～9月）では、東京警視本署の警察官総勢9,500人が九州などに派遣され、近代兵器が投入されたことが知られる。射的場造営は当時の社会情勢と無縁ではなく、弥生町で士族反乱等の鎮圧を目的として造

営され、近代装備の演習が行なわれたと考えられる^(注14)。「警視局射的場」がどのような経緯で、明治16年測量図の「東京共同射的会社」となったかについては調査中であるが、射的場は士族反乱の沈静化とともに民間に払い下げられ、その役割を終え宅地化したと考えられる。

b. 江戸時代の土地利用状況

浅野地区は江戸時代、水戸藩邸の一角に位置する。隣接する工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う発掘調査では^(注15)、江戸時代の井戸を確認したが、当地点では江戸時代の遺構を確認できなかった。江戸時代の遺構は明治期の削平によって破壊された可能性があるが、地下室などの深く掘削された遺構が確認できないことが、当地点の周辺の土地利用状況を何らかの形で反映していることが予想される。

c. 弥生町遺跡と明治期の開発

明治17年(1884)、坪井正五郎らによって発見された土器の名称が、「弥生町」の町名にちなんで「弥生式土器」と呼ばれるようになったことから、「弥生町」は日本歴史の時代区分の一つである「弥生時代」の名称発祥地として全国に知られるようになった。1974年、文学部考古学研究室と理学部人類学教室が行なった「弥生二丁目遺跡」^(注16)の調査では、弥生時代の環濠集落が確認され国史跡に、農学部構内が「弥生式土器名称由来地」として東京都の旧跡に指定されている。1995年、埋蔵文化財調査室が行なった発掘調査では方形周溝墓が確認されている。当地点でも弥生時代の方形周溝墓、弥生式土器が出土し、調査区外に遺跡の存在が予想された。以上から、浅野地区が弥生時代の遺跡が存在する貴重な区域であることが再確認できた。現在、「弥生二丁目遺跡」の環濠集落の一部は保存されており、周辺には、遺跡が残されている可能性がある。通常、埋蔵文化財の調査は記録保存で終了するが、今後、建築が計画された際は、学術調査、保存を検討する必要があるだろう。

隣接する農学部の農学部7号館地点、農学部総合研究棟地点でも明治期の開発が確認されている^(注17)。今回確認されたこれらの開発と宅地化によって、土器発見当時の弥生町の景観が変化したことは明確である。弥生土器の発見地については諸説あるが、景観の変化が、弥生土器発見地をわからなくしてしまった要因の一つとしたい。(原 祐一)

謝辞

浅野家関連資料閲覧でお世話になった青木誠氏、射的場の資料調査でお世話になった警視庁、警視庁本富士警察署、弾丸の分析でお世話になった峯田元治氏、磯村照明氏に謝辞申し上げます。また、(株)イサワコーポレーション、(株)加藤建設、産業考古学会、武蔵野文化財修復研究所、和光金属技術研所、(株)パリノ・サーヴェイ、谷根千工房、文京区、東京大学アイソトープ総合センター、同原子力研究総合センター MALT、同総合研究博物館年代測定室、同風工学実験室、同文学部考古学研究室、同工学部、同施設部、同広報室、同学生部にお世話になりました謝辞申し上げます。

参考文献

- 原祐一 2001「武田先端知ビル地点遺跡発掘調査の成果と課題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点1次調査速報』（東京大学施設部提出文書）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）
- 原祐一 2002「工学部武田先端知ビル地点の発掘調査 - 明治時代の射的場跡と弥生時代の方形周溝墓 -」東京大学広報委員会『学内広報 NO.1231』PP.7-8
- 原祐一 2002「農学部総合研究棟（仮称）建設予定地の発掘調査」東京大学広報委員会 2002.4.24『学内広報 NO.1237』PP.23-24
- 原祐一 2001「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓」考古科学シンポジウム世話人会他『第3回考古科学シンポジウム』PP.61-66
- 原祐一、森本幹彦 2002「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点で検出した方形周溝墓」『東京考古 20』東京考古談話会 PP.59-70
- 鯨島和大「弥生の壺と環濠集落」1996『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第14号 PP.131-154
- 東京百年史編集委員会編 1972『東京百年史』第2巻 PP.423-430
- 谷根千工房 1998「特集 向ヶ丘弥生町読本」『谷中・根津・千駄木』53 PP.2-23
- 文京区役所 1981『文京区史』巻3 PP.156-157
- 鈴木博之 1999『日本の近代 10 都市へ』中央公論新社

注

1. 石原道知、原祐一 2002「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓の保存と土器の修復」『文化財保存修復学会 第24回大会発表要旨集』。東京大学埋蔵文化財調査室、武蔵野文化財修復研究所、加藤建設株式会社 2002「弥生町遺跡群から検出された方形周溝墓の保存 - 東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の調査 -」東京大学駒場リサーチキャンパス オープンキャンパス配布資料。向井雅信、堀江武史、石原道知「東京大学本郷構内武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の保存」調査室年報掲載予定。
2. 東京大学原子力研究総合センター、東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室 2001『第3回考古科学シンポジウム』平成13年12月15日（土）、農学部弥生講堂「一条ホール」で開催。「考古科学・ケーススタディー 東京大学弥生構内の方形周溝墓の総合的な研究」篠原和大「弥生町遺跡について」、橋本真紀夫「土壌分析」、吉田邦夫「年代測定」、丑野毅「土器の紋様・玉類の孔」、小泉好延、原祐一他「ガラス小玉の分析」。
3. 鈴木健之 2002「窓 弥生町の歴史」東京大学広報委員会『学内広報 NO.1231』P.10。
4. パリノ・サーヴェイ株式会社 2001「武田先端知ビル地点の自然化学分析」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』。
5. 鯨島和大 1997「3工学部全経間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報 2』PP.41-43。

6. 総合研究博物館の蛍光X線分析による。
7. 小泉好延、小林紘一、原祐一他 2001「東京大学弥生構内武田先端知ビル出土のガラス玉材質分析—典型的な弥生ガラス—」東京大学原子力研究総合センター、東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室『第3回考古科学シンポジウム』発表要旨 PP.93-97。
8. 原祐一 2001「考察2 武田先端知ビル地点の射的場と出土弾丸」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）。
原祐一 2001「東京大学武田先端知ビル地点の射的場跡と出土弾丸」他『第3回考古科学シンポジウム』PP.131-141。
9. 磯村照明 2003「会員配布資料 NO.12 東京都内で出土した鉛弾丸についての考察」ジャパン・カートリッジ・コレクターズ・アソシエーション附属弾薬研究センター。
10. 原祐一、小泉好延、伊藤博之、中野忠一郎、松崎浩之 2002「中世から明治時代の遺跡から出土した鉛製品の材質分析」P.5-2。
11. パリノ・サーヴェイ株式会社 2001「武田先端知ビル地点の自然化学分析」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』。
12. 谷根千工房 1998「特集 向ヶ丘弥生町読本」『谷中・根津・千駄木』53 P.9 本資料は警視庁蔵とされるが、実見できなかった。
13. 東京都 1967『東京市史稿』市街編第59 P.39。
14. 磯村氏は「西南戦争開戦当初から警視隊が参戦するには時間的に無理があり、万が一開戦時から警視隊が参戦していたとしても、最初の隊員たちはこの射的場における射的練習を行わずに九州に赴いたと考えられ、実際に訓練をしたのは警視隊の増援部隊だったと考えます」と指摘している。前出注7。
15. 原祐一 2002「1. 工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う埋蔵文化財調査略報」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報 3 1998・1999年度』P.13。
16. 東京大学文学部考古学研究室編 1979『向ヶ丘貝塚』。
17. 原祐一 2001「(仮称) 農学部総合研究棟地点の成果と仮題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 (仮称) 農学部総合研究棟地点調査速報』（東京大学施設部提出文書）。

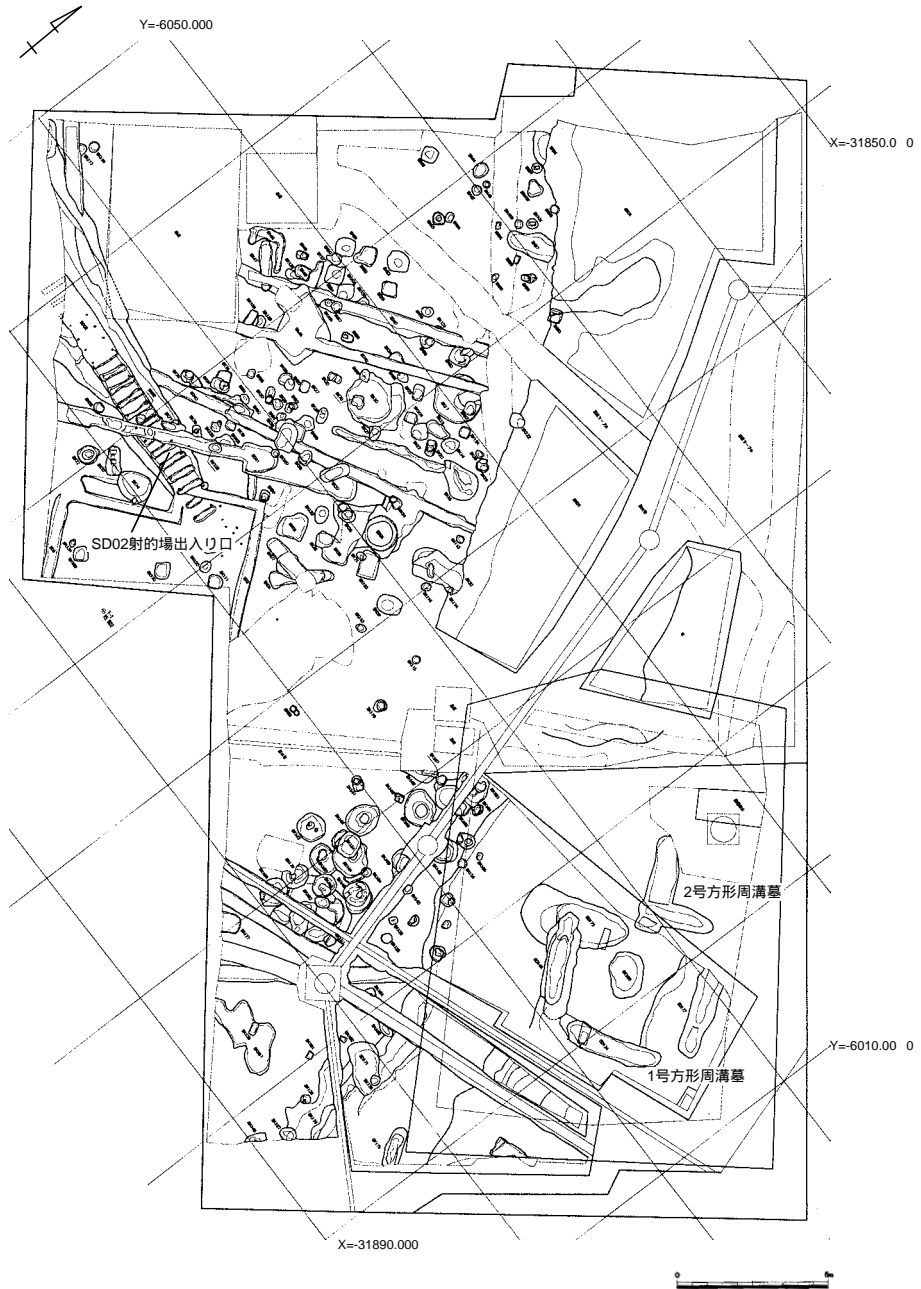


図17 工学部武田先端知ビル地点遺構分布図

10. 農学部総合研究棟地点発掘調査略報

はじめに

農学部総合研究棟地点は、東京都文京区弥生1目11番地1号に所在する。当地点は、弥生町遺跡の一角に位置し、浅野地区では弥生時代の遺跡が確認されている。農学部と本郷キャンパスの一部は、江戸時代には、水戸藩邸等に該当する。明治6年「沽券図」には、「陸軍用地」「警視局用地」、参謀本部陸軍部測量局の明治16年測量図には(以下、「明治16年測量図」)、「東京府癲狂院」「避病院」などの記載がある。明治27年、第一高等学校敷地となり、昭和10年、第一高等学校との敷地交換により帝大の敷地となり現在に至る。隣接する工学部武田先端知ビル地点では、方形周溝墓を検出しており^(注2)、当地点でも弥生時代の遺構の検出が予想された。同地点周辺では、明治時代の大規模開発が確認されており、開発の範囲を明確にすることも調査の目的とした。以上から、調査は近代史、郷土史、東京大学史の観点から近代以降も対象とした。

試掘調査は、平成13年3月27日、4箇所のトレンチを設定し14m²を対象に行い、江戸時代の陶磁器を含む埋土を確認したことから、発掘調査を平成13年9月21日から10月19日まで行った。調査面積は1800m²である。調査地点名は東側をA工区、西側をB工区とした。遺構略号は東京大学遺跡調査年報2(1997年度)に準じた。遺構縮尺は図版に記した。発掘調査、中間報告作成^(注1)は、原祐一を中心に行った。整理参加者は青山正昭、今井雅子、香取祐一、川原良子、坂野貞子、野村遊(調査室)である。本文は、中間報告の内容をもとに作成した。

1. 発掘調査の一般公開

当地点は、弥生町遺跡の一角に位置し、近隣住民の関心が高いこと、文化財保護法の理念から一般、学内に対して常時遺跡を公開した(写真98～100)。発掘調査速報を20号まで発行、掲示し、調査成果の公開を行なった。発掘調査の一般公開を10月16日に行った。遺跡の一般公開と合わせて、「日本における真鍮製造」をテーマに講演会を行った。近隣住民、学内関係者など80名以上の参加があった^(注3)。

2. 調査結果

調査の結果、江戸時代の遺構4基、明治時代以降の遺構28基を検出した(図18)。関東ローム層の観察と江戸時代遺構の検出状況、明治以降の生活面に構築された遺構から、明治期に調査区全域が削平されていることが明らかになった。遺物は江戸時代、明治時代以降合わせて、遺物収納箱で50箱が出土した(写真101)。

a. 江戸時代

・SD01(写真102)

切通しと考えられる遺構である。断面形は逆台形で、幅11m、深さ4mを測る。遺構は調査区外に延びているため、全体の規模は不明である。底面は硬くつき固められ、盛土を除去すると、造営時にできたと考えられる轍を確認した。

・SD02 遺構

調査区外に広がるため規模は未確認だが、壁面の傾斜、深さ、覆土の堆積状況、SD01 遺構と平行すること等から、同規模の遺構と考えられる。

・SU04 (写真 103・104)

平面形が正方形を呈する地下室である。上部は削平されているため本来の遺構の高さ、天井の有無は不明である。遺物は碗、皿、徳利、播鉢、土人形(天神・大黒・西行)、キセルなどで完形遺物が多い。この他、貝類が出土している。

・SK07 (写真 105・106)

平面形が不定形を呈する土坑である。遺物は、徳利、碗、皿、灯明具、「享保」銘墨書の土器が出土した。

b. 明治時代以降

明治時代以降の遺構は、調査区全域で行われた掘削後の生活面に伴う遺構である。柱穴列、溝状遺構、土坑などを検出した。

・SK17

平面形が長方形を呈する土坑である。碗、土瓶、植木鉢、ガラス製瓶、「福原衛生歯磨石鹸 本舗東京資生堂謹製」銘の歯磨き粉容器、「永楽」銘色絵磁器碗が出土した。

・SD20

溝状遺構である。土管を埋めるための溝と考えられる。遺物は陶磁器の他、葉莢が出土した。葉莢の内径は約14mmである。錆を除去した金属色は黄色である。

c. 谷跡

調査区北側で黒ボク土の自然堆積層を確認した。「明治16年測量図」から、南から北へ傾斜する谷跡と考えられる。

3. まとめ 東京大学(本郷)農学部総合研究棟地点の成果と課題

今回の調査で、江戸時代の遺構、明治期以降の生活面を確認した。調査で確認された明治時代の生活面の標高は約16mで、平坦な面が全域に広がっていた。「明治16年測量図」の等高線を現在の地図に重ね、調査室が行った調査地点を重ねると、明治16年の調査地点の標高は約18mで、この標高は、検出した明治期の生活面より2m高く、明治16年以降に削平が行われたとはあきらかである。関東ローム層を深掘した結果、M2砂礫層の最上部を示す白色砂層を確認した^(注4)。砂礫層の標高から推定される武蔵野ローム層、立川ローム層、黒ボク土の堆積していた標高を推定すると、

黒ボク土の堆積していた標高は、明治16年の標高より高いことは明らかである。農学部に隣接する、浅野地区 工学部武田先端知ビル地点では、関東ローム層の土壌分析^(注4)と遺跡の検出状況を検討した結果^(注5)、明治10年落成した警視局射的場（明治16年には東京共同射的会社の射的場）を埋める際、周辺部が削平され宅地化したことが明らかになった。この削平と当地点で確認された削平の要因は明確でないが、明治時代に現在の農学部、浅野地区と周辺地域が大規模開発されたことは明らかである。農学部、浅野地区で確認された明治時代の開発は、日本の近代化を具体的に示す考古学の成果として重要である。今後、遺構の年代、地籍図、文書を再検討した上で検討を行いたい。

旧加賀藩邸、旧富山藩邸、旧大聖寺藩邸では、建物、屋敷割などを踏襲する形で帝大敷地となることから^(注6)、発掘調査の結果と、「明治16年測量図」、藩邸関係の絵図の分析から、江戸時代の藩邸の状況を具体的に明らかにできる。水戸藩邸では、現在のところ絵図を実見できないため、発掘調査が水戸藩邸を具体的に検討できる唯一の手段である。江戸時代の土地利用状況については前述の削平を考慮し、他の地点を含めて検討を行いたい。（原 祐一）

謝辞

水戸藩邸、安志藩についてご教授いただいた宮崎勝美氏（東京大学史料編纂所）に謝辞申し上げます。発掘調査から速報作成に至るまで、次の方々、諸機関から御指導、御協力を賜った。記して感謝する次第である。

青木誠氏、峯田元治氏、大竹完治氏（東京大学風工学実験室）、鈴木健之氏、橋本真紀夫氏（株パリオ・サーヴェイ）、弥生町会、榊田村工務店、榊加藤建設、文京区、東京大学原子力研究総合センター MALT、同アイソトープ総合センター、同農学部、同施設部建築課、同施設部企画課、同広報室

参考文献

- 本郷区役所 1937『本郷区史』、文京区役所 1981『文京区史』巻1
坂口豊 1990「東京大学の土台 ―本郷キャンパスの地形と地質―」東京大学史料の保存に関する委員会編集、東京大学史料室発行 東京大学史紀要第8号 PP.1-34
東京大学文学部考古学研究室編 1979『向ヶ丘貝塚』
鈴木博之 1999『日本の近代10 都市へ』中央公論新社
香取祐一 2000「東京大学医学部附属病院病棟地点の土器廃棄場について」東京考古談話会 東京考古 18 PP.111-121

注

1. 東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点1次調査速報』（東京大学施設部提出文書）、東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）。
2. 原祐一 2001「(仮称) 農学部総合研究棟地点の成果と仮題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 (仮称)』

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

農学部総合研究棟地点調査速報』（東京大学施設部提出文書）。

3. 原祐一 2002「農学部総合研究棟（仮称）建設予定地の発掘調査」東京大学広報委員会『学内広報NO.1237』PP.23-24。
4. 橋本真紀夫 2001「東京大学弥生構内の方形周溝墓における土壌分析」第3回考古科学シンポジウム発表要旨 PP.71-79。
5. 原祐一 2001「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓」第3回考古科学シンポジウム発表要旨 PP.61-66、原祐一 2001「東京大学武田先端知ビル地点の射的場跡と出土弾丸」第3回考古科学シンポジウム発表要旨 PP.137-141。
6. 寺島孝一 1988「更新世から江戸時代まで」東京大学総合研究資料館『東京大学本郷キャンパスの百年』PP.48-50。

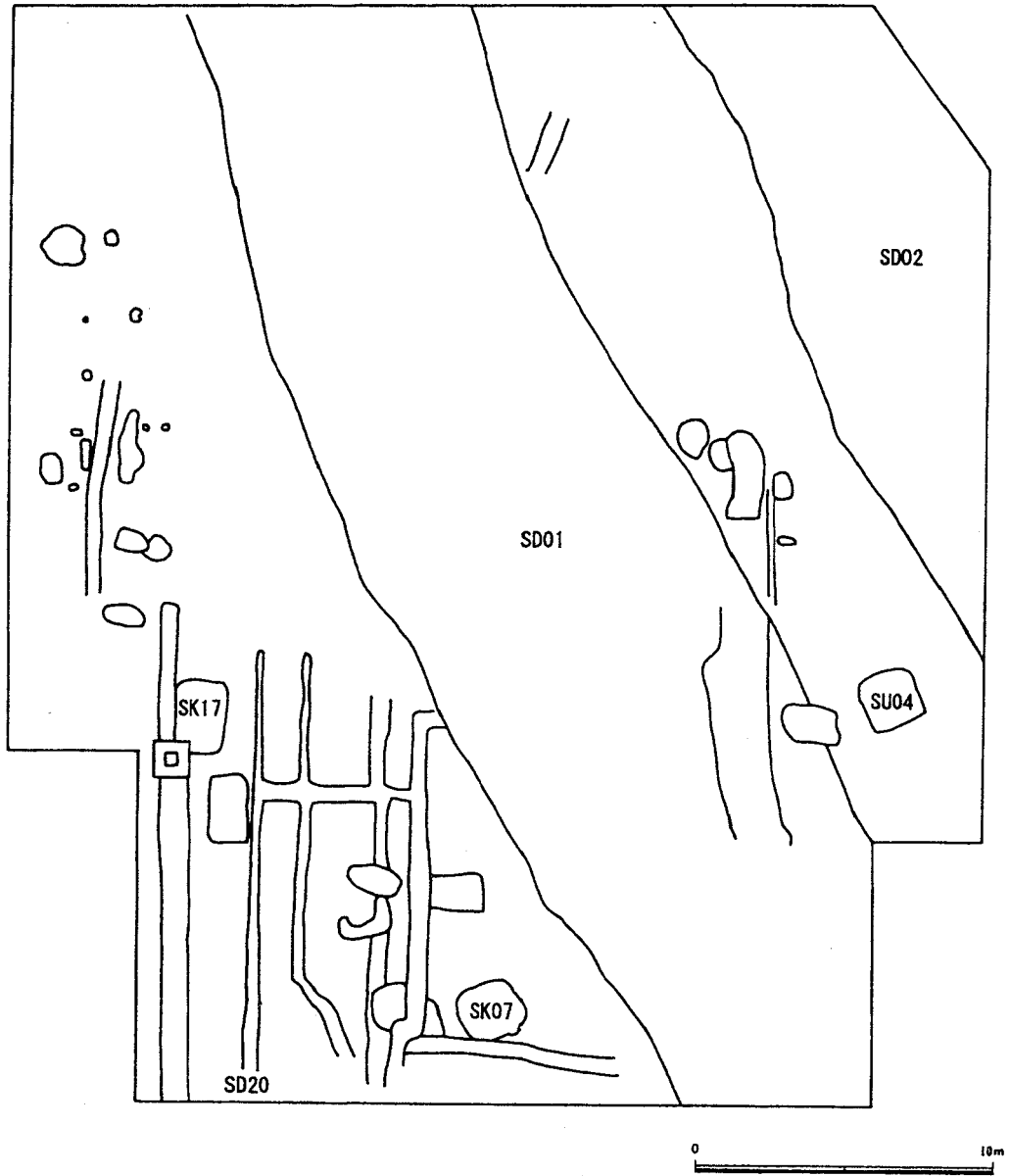


図 18 農学部総合研究棟地点A工区遺構分布模式図

11. 薬学部総合研究棟地点発掘調査略報

はじめに

東京大学薬学部総合研究棟地点（2002年度）は東京都文京区本郷7丁目2に所在する。試掘調査を2002年3月17～20日、発掘調査を2002年8月1日から2003年2月28日（2002年12月、2003年1月の7週間の中断期間を含む）まで行った。調査面積は1,260㎡である。調査は、東京大学史、産業考古学の観点から、近代以降も調査対象とした。

調査の結果、縄文時代と考えられる落とし穴、江戸時代の加賀藩邸に関する遺構、遺物、石器、明治時代の薬学部薬局建物基礎を検出した（図19～21・写真107～116）。この遺跡で注目されるのは、宝永火山灰が降灰当時の堆積状態で出土したことである。宝永火山灰は、藤井敏嗣氏他（東京大学地震研究所）、宮地直道氏（日本大学文理学部地球システム科学科）他に分析をお願いした。また、宝永火山灰下層の火災に伴う瓦礫層、上層盛土の年代について、AMS14C年代測定を行った。宝永火山灰は、平面剥ぎ取り資料、断面剥ぎ取り資料を作成し保存した（保存は武蔵野文化財修復研究所による）^{（注1）}。本文は、『東京大学薬学部系総合研究棟地点（2002年度）発掘調査中間報告書1～5』（東京大学施設部提出文書）を基に作成した。これら所収の小論については、年報等で発表予定である。

なお、AMS C-14年代測定の成果は、東京大学原子力総合研究センター MALT 平成15年度上半期共同利用採択課題17B58「東京大学構内出土資料の年代測定」研究代表者 原祐一、共同研究者 松崎浩之、中野忠一郎の成果による。ガラスのPIXE法による材質分析は、同平成15年度上半期共同利用採択課題17E07「遺跡出土のガラス製品の材質分析」研究代表者 原祐一、共同研究者 小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之の成果による。

1. 発掘調査の一般公開

本遺跡は江戸時代の加賀藩邸の一角に位置しており、近隣住民の関心が高いこと、文化財保護法の理念から一般、学内に対して常時遺跡を公開、発掘調査速報を25号まで発行、掲示した^{（注2）}。

2. 発掘調査の成果

a. 近代

明治時代の薬局建物基礎（SB10）を検出した。施設部建築課で保存されている、明治13年「東京大学医学平面図」によれば、薬局基礎は明治40～41年では点線で記載される。明治43～44年北側が塗りつぶされ、南側は点線で記載される。明治44～45年薬局建物は塗りつぶされており、明治45年までには完成したと考えられる。昭和8年3月31日建物が確認できるが、昭和10年6月20日の図面では、「排球コート」になっている。この基礎は、前田公爵邸のレンガが基礎と同年代であることから、このレンガ基礎の一部が総合研究博物館入口に保存・設置された。基礎に使用

されているレンガ基礎の計測、刻印の確認などを行った。レンガはすべて「手抜きレンガ」(型枠に粘土を入れ叩き込む)で、桜の刻印から小菅取治監製レンガが使用されていた^(注3)。

b. 江戸時代

年代の指標となる宝永火山灰層を検出した。遺構軸は、宝永火山降灰前の「春日通りの軸」から、降灰以降の「本郷通りの軸」へ移行することが確認された^(注4)。

・宝永火山灰の降灰以降

遺構の軸は、「本郷通り」の軸である。調査区南で建物跡、調査区中央で地下室、ごみ穴を検出した。これらの遺構から陶磁器の他、ガラス製の簪、瓶、小皿、金属製品、食物残渣が出土した。ガラス製品は、東京大学原子力研究総合センター MALT 加速器、PIXE コースで材質分析を行った。分析の結果、ガラスはすべて鉛カリウムガラスで着色剤として、銅、コバルト鉱物、鉄などが用いられていた^(注5)。

龍岡門東の石垣は、加賀藩邸の石垣であることが度々指摘されてきた。この石垣の位置を測量し、東御門跡と調査地点を重ね合わせ、「加賀藩本郷邸図」(1840-1845年頃)の建物と東御門、遺跡の位置関係を検討すると、調査地点は「長局」に位置する。遺構の年代が明確でないため絵図と遺構の年代比較は単純にできないが、ごみ穴から出土した紅猪口、鬘盤、櫛、ガラス製簪などは、「長局」の居住者を反映している可能性を指摘したい^(注6)。

・宝永火山灰の降灰

宝永7年(1707年)に噴火した富士山宝永火山灰と見られる黒い砂が出土した。黒い砂は、遺跡の画期を示す生活面上層に堆積しており、この砂が宝永火山灰であるか否かは、加賀藩邸の空間構造の変遷を考古学的に検討する上で重要であることから、藤井敏嗣氏他(東京大学地震研究所)、宮地直道氏(日本大学文理学部地球システム科学科)に土層の採集と分析を依頼した^(注7)。分析の結果、Ho- I ~ Ho- IVの堆積が確認された。砂は宝永火山灰に間違いなく、295年前の降灰の堆積が保存されていたことが明らかになった^(注8)。

・宝永火山灰の降灰以前 元禄16年(1703年)の火災で焼失した生活面

遺構の軸は「春日通り」の軸である。調査区は、堤状遺構によって南(上段)北(下壇)に区画されていた。北側で建物跡、地下室、井戸、南側で硬化面を検出した。ここで確認された段差は、元禄16年(1703年)の火災に伴う瓦礫とローム層を用いて埋められていた^(注9)。瓦礫層から出土した炭化材について AMS C-14年代測定を行った結果、宝永火山灰の降灰以前の年代が測定された^(注10)。

・江戸時代最下層の生活面

江戸時代最下層の生活面から、長屋跡と考えられる柱穴列が確認された。この他、井戸、ごみ穴

が確認されている。出土した磁器は中国系磁器が主で、肥前系磁器が若干出土している。この生活面は年代が明確でないため、出土炭化材の AMS 14C 年代測定を進めている。この他、井戸から出土した漆椀の製作技法については、武田昭子氏（昭和女子大学歴史文化学科）他と共同研究を進めている。

・道跡

各生活面の最上層の盛土を掘削する過程で、調査地点全域に広がる硬化面を確認した。ごみ穴などの遺構は確認されず、硬化面には物を引きずった筋が見られた。硬化面以前、以降の生活面の遺構軸と一致せず、すべて北東方向に傾斜している。現在のところ、建築材料等を運搬するための道と考えている。

まとめ 東京大学薬学部系総合研究棟地点（2002年度）の成果と課題

薬学部総合研究棟地点（2002年度）の調査では、自然科学系の研究者と共同研究を行った。近世のガラスの材質分析例は少ないが、今回主原料と着色材料についてのデータを提示できた。宝永火山灰の分析では、宝永火山灰の江戸での降灰状況を明らかにするためのデータを、火山研究者に提供することができた。近世考古学では、「宝永火山灰」出土は当たり前のこととして認識しているが、この事実は、火山研究者の中ではまったく知られていなかった。そのため、富士山噴火をシュミレーションしたハザードマップ作成は、近隣地域のデータから都内の降灰量が推定されていた。今回の宝永火山灰の出土で、都内の降灰状況の推定が問題ないことが証明された。今回の分析をきっかけとして、「宝永火山灰」のデータが火山研究者に提供されることを期待したい。「宝永火山灰」の降灰以前と以降の遺構の分布を検討すると、宝永火山降灰前の「春日通りの軸」から、降灰以降の「本郷通りの軸」へ移行することが確認できた。各生活面に見られる土地利用状況については、年代が明確な生活面を基準に、隣接する調査地点、文書の記述から明確にしていきたい。（原 祐一）

謝辞

レンガ基礎についてご教授いただいた、八木司郎氏・斉藤和美氏（産業考古学会）、清野利明氏（日野市教育委員会）、レンガ基礎保存に尽力いただいた藤井恵介氏（大学院工学系研究科）、江戸時代の最下層の生活面についてコメントいただいた宮崎勝美氏（史料編纂所）に謝辞申し上げます。

参考文献

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学薬学部系総合研究棟地点（2002年度）発掘調査中間報告書1』（東京大学施設部提出文書）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学薬学部系総合研究棟地点（2002年度）発掘調査中間報告書2』（東京大学施設部提出文書）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点（2002年度）発掘調査中間報

告書 3』(東京大学施設部提出文書)

東京大学埋蔵文化財調査室 2003『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報

告書 4』(東京大学施設部提出文書)

東京大学埋蔵文化財調査室 2003『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報

告書 5』(東京大学施設部提出文書)

注

1. 向井雅信、石原道知「宝永火山灰の保存」調査室年報掲載予定。
2. 原祐一 2003「ポスターセッション追加資料 東京大学本郷構内出土富士山宝永火山灰の展示－調査成果公開、他領域との研究、保存－」。
3. 原祐一 2002「東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)医学部薬局の基礎についての考察」『中間報告 1』。
4. 原祐一 2003「宝永 4 年(1707 年)以降の生活面」『中間報告 4』。
5. 原祐一、小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之 2003「3-3 東京大学本郷構内から出土した江戸時代のガラス分析」『第 20 回 PIXE シンポジウム発表要旨』。
6. 注 3
7. 原祐一 2002「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002年度)富士山宝永火山灰の出土状況」『中間報告 2』。
原祐一 2003「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部総合研究棟(2002年度)富士山宝永火山灰の出土状況」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第 4 回考古科学シンポジウム』PP.67-71。
8. 藤井敏嗣、吉本充宏、安田敦、金子隆之 2002「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘の火山灰の同定」『中間報告 2』。宮地直道 2002「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002年度)で発見された宝永スコリアの層序と粒度特性」『中間報告 2』。藤井敏嗣、宮地直道、吉本充宏、安田敦、金子隆之 2003「旧加賀藩屋敷における宝永火山灰の発見とその火山学的意義」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第 4 回考古科学シンポジウム』PP.77-82。
9. 原祐一 2003「元禄 16 年(1703 年の火災により焼失した生活面)」『中間報告 5』。
10. 松崎浩之、原祐一 2002「東大宝永火山灰層前後の C-14 年代測定」『中間報告 2』。松崎浩之、原祐一 2003「東大宝永火山灰層前後の C-14 年代測定」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第 4 回考古科学シンポジウム』PP.73-75。

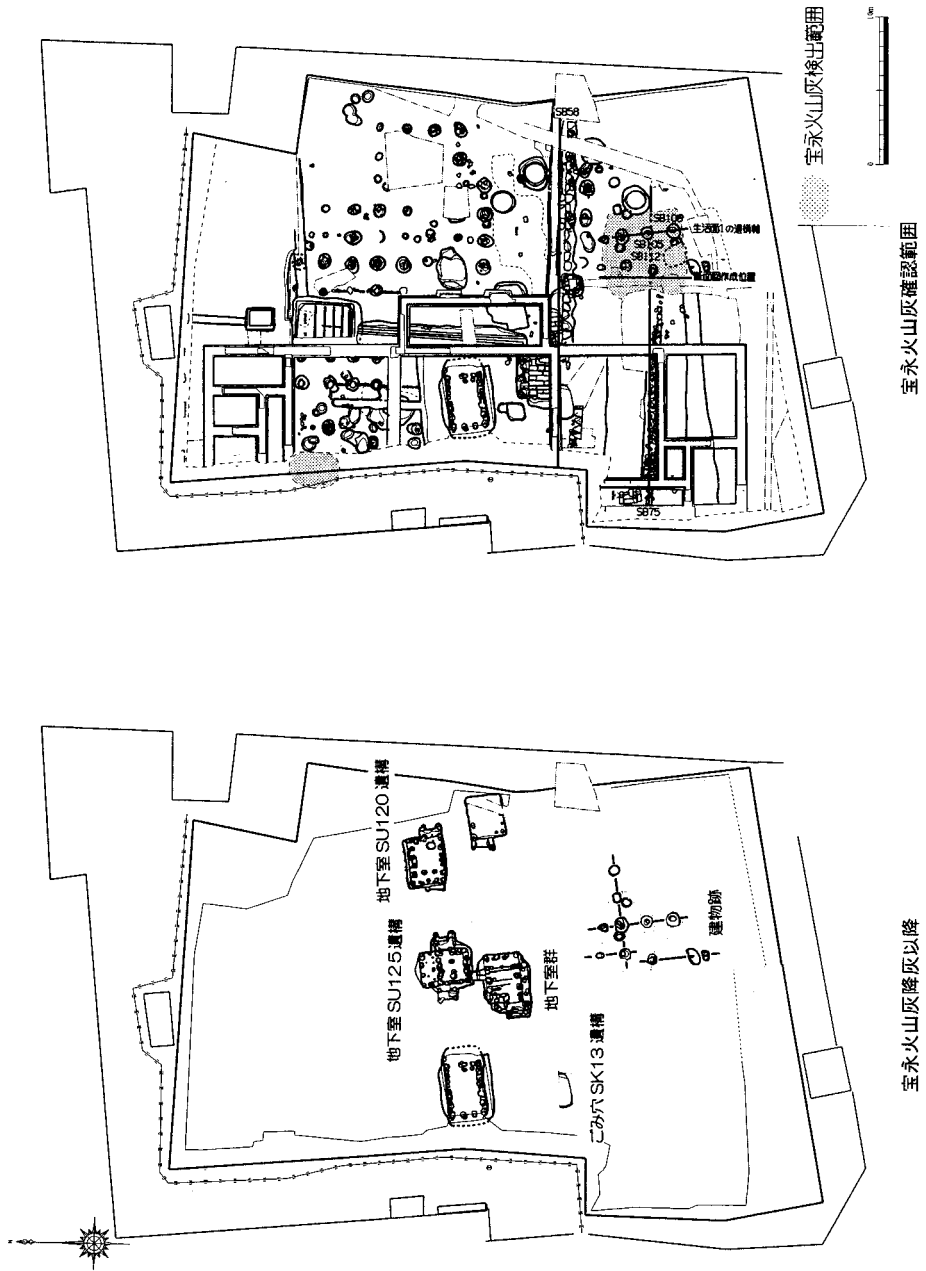


図19 遺構分布図(1)

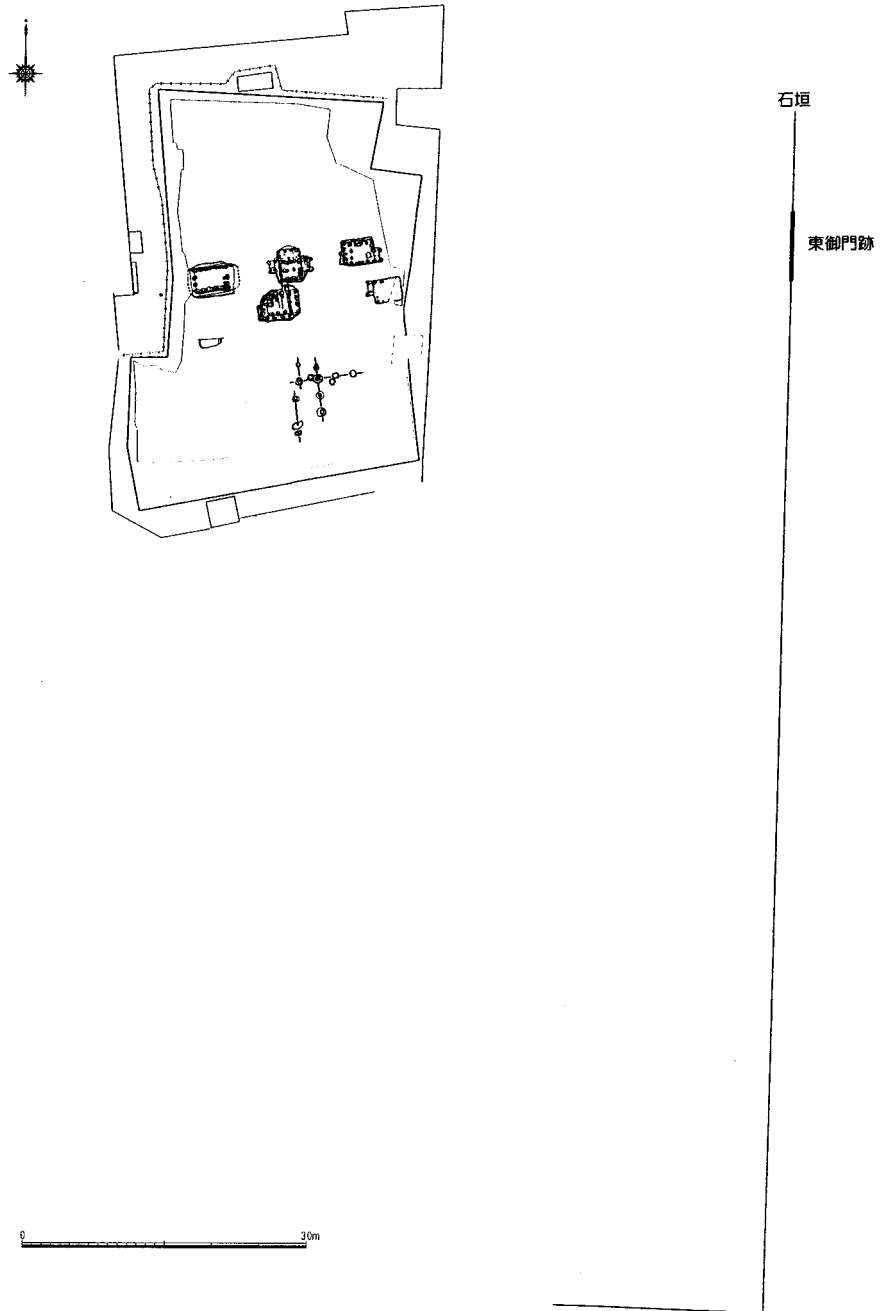


図 20 調査地点と石垣、東御門跡の位置関係



図21 遺構分布図(1)

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

1. 農学部図書館地点発掘調査報告
2. 地震研究所テレメタリング観測施設地点発掘調査報告
3. 山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告
4. 農学部校舎(7号館)地点発掘調査報告

東京大学本郷構内の遺跡

農学部図書館地点発掘調査報告

2004

東京大学埋蔵文化財調査室

例言

1. 本報告書は東京大学農学部図書館の増設に伴う発掘調査報告である。
2. 調査地は東京都文京区弥生1丁目1-1の東京大学農学部構内で、調査面積は408㎡である。調査は1993年3月9日から3月25日まで行った。
3. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行った。調査担当者は武藤康弘である。
4. 本報告書の執筆は追川吉生が中心に行い、図面を香取祐一、写真を青山正昭が担当した。
5. 発掘作業および報告書作成にあたり下記の方々からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表したい（敬称略）。
東京都教育委員会 文京区教育委員会 東京大学農学部 東京大学施設部
東京大学考古学研究室 (株)セビアス

凡例

1. 遺物の実測図は基本的に1/4で掲載する。
2. 遺構の実測図は基本的に1/50で掲載する。

東京大学本郷構内の遺跡 農学部図書館地点発掘調査報告

目次

例言	
凡例	
1. 調査に至る経過	99
2. 調査の経過	99
3. 遺跡の立地と環境	99
4. 江戸時代の遺構	99
5. 江戸時代の遺物	101
6. まとめ	101
図版	103
報告書抄録	111

1. 調査に至る経過

東京大学農学部では、既存図書館に増設する施設として別館の建設が計画されていた（図1）。しかしながら農学部周辺は、江戸時代には水戸藩中屋敷が存在しており、本地点に隣接する家畜病院地点や7号館地点において、江戸時代の遺構・遺物が出土している。また周辺の遺跡としては、向ヶ丘貝塚が隣接する。そのため当該地点では弥生時代の遺跡の存在も予想された。こうしたことから、建設工事に先立って遺跡の有無を確認する必要がある。そこで農学部からの調査の依頼を受けた埋蔵文化財調査室は、1992年10月21日に建設予定地内の4㎡を対象とした試掘調査を実施した。その結果、建設予定地は若干の削平を受けているものの、江戸時代の遺構が存在することを確認した。

以上の状況を踏まえ、図書館別館建設に先だって埋蔵文化財調査室が事前調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

事前調査は1993年3月9日から3月25日にかけて実施した。現地表面から約1.1mの深度までは明治時代以降の盛り土であることが判明したので、重機によって除去した。それ以下、立川ローム層上面までを人力によって掘削し、調査を実施した。また調査区内の3箇所において、2m四方のグリッドで立川ローム層を掘り下げたが、上部旧石器時代の遺物は出土しなかった。

3. 遺跡の立地と環境

調査地点は本郷台地の東縁に位置している。調査地点の地形は、現状では平坦なテラス状を呈しており、建設予定地内に設けられていた家畜舎周辺は1mほど低く、この間には階段が設けられていた。しかし調査の結果、調査地西側ではローム層までの深度が現地表面から1.3m、東側で同1.6mで、その間は緩やかに傾斜していることがわかった。こうしたことから、本地点が本郷台地から上野・千駄木方面へと向かう傾斜地上に位置していることがわかる。

農学部周辺には、江戸時代に水戸藩中屋敷・安志藩下屋敷・旗本森川金右衛門邸が存在していた。調査地点は水戸藩中屋敷にあたる。しかし藩邸内部の絵図は公開されておらず、藩邸内での位置づけに関しては詳らかではない。

4. 江戸時代の遺構（写真1）

SP1（図2） SP1はD6グリッドに位置する柱穴である。平面形は円形を呈し、規模は直径58cm、深さ50cmである。遺物は出土していない。

SK2（図2） SK2はD5グリッドに位置している土坑である。遺構の南側をSD3によって壊されているが、本来の平面形は方形を呈していたと考えられる。規模は現状で南北62～80cm、東西168cm、深さは18cmである。性格は不明である。遺物は出土していない。

SD3 (図2・写真2) SD3は調査区南端、D4・D5・D6グリッドに位置している溝である。遺構の東側と南側が調査区外となり、形状・規模は不詳である。現状で南北150cm、東西103cm、深さは12cmを測る。覆土は焼土粒子を含む褐色土である。遺物は出土していない。

SD4 (図3・写真3) SD4はB5グリッドに位置している、ほぼ東西方向に延びる溝である。東側は調査区外へ続くため、遺構本来の規模は不明である。現状で南北30cm、東西350cm、深さ40cmの規模である。遺物は出土していない。

SP5 (図2) SP5は南北40cm、東西36cmの隅丸方形を呈する柱穴である。遺構の深さ・覆土については不詳である。

SX6・SU7 (図4・写真4) D3・D4グリッドに位置する、上下に重なり合っている遺構である。SX6はSU7の上部を削平しており、平面形はほぼ直径300cmの円形を呈している。深さは110cmである。性格は不明である。SU7は地下室であり、前述したように上部をSX6によって壊されていて、遺構本来の形状・規模は不明である。現状で南北232cm(最大)、東西150cm、深さ40cmを測る。これら2つの遺構は、本来1つの遺構であった可能性もある。遺物は出土していない。

SK8 (図3) SK8はD2グリッドに位置する土坑である。平面形は不整円形を呈し、規模は南北240cm、東西240cm、深さ10～26cmである。覆土は暗褐色土である。遺構の縁は中央部よりも僅かに深い。こうした本遺構の形状から、植栽痕であると考えられる。遺物は出土していない。

SD9 (図5・6・写真5) SD9はA2～C2グリッドに位置する、南北方向に延びる溝である。遺構は南北それぞれに調査区外へと続いており、規模は不明である。またB2グリッドにある攪乱によって大きく壊されている。東西幅は60cm、深さ20cmである。SD9には5カ所に径20cm、深さ40～50cm程度のピットが認められる。遺物は陶磁器が数点出土している。

SK10 (図5・写真6) SK10はB1グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形を呈しており、規模は南北90cm、東西120cmである。遺構の西寄りに直径30cmの掘り込みが認められる。遺構の深さ・覆土については不詳である。遺物は陶磁器数点の他、金属器が僅かに出土している。

SK11 (図5) SK11はB2グリッドに位置している土坑である。平面形はほぼ円形を呈している。規模は南北200cm、東側は攪乱によって破壊されており、現状で東西160cmを測る。遺構の深さ・覆土については不詳である。平面の形状からすると、植栽痕であったかもしれない。

5. 江戸時代の遺物

SD9 (図7) 1は磁器、2、3、4は陶器である。1はJB-5に分類される(写真7～9)。筒形で体部が直線的に開く。口縁部が帯状に肥厚し、やや外反する。外面には山水文が描かれている。畳付は幅広で蛇ノ目状を呈している。高台内には「乾」の銘款が認められる。2はTC-1-rに分類される(写真10)。外面にトビカンナ状の押形文が施され、内面には漆黒釉が施されている。3はTC-10-bに分類される徳利の口縁部片である(写真11)。4はTZ-00-Sに分類される(写真12)。外面は乳白色の釉が施され、内面は無釉である。中央部に扁平球状のつまみが付けられており、体部に穿孔が1箇所施されている。本遺構から出土した遺物はこのように極めて少量だが、遺構の廃棄年代は19世紀代である。

SK10 (図7) 1は磁器、2、3は陶器、4は土製品、5は金属器である。1はJC-1-dに分類される(写真13)。小振りの碗の底部片である。外面には宝文が、見込みには一重圏線に花文が施されている。焼継が認められる。また畳付には内外からの敲打痕が認められる。銘款の有無は不明である。2はTC-10-dに分類される(写真14)。被熱を受けている。上部半分を欠損して、残存しているのは下部の1/2程度である。表面には釘書の痕跡が認められるが、詳細は不明である。折断面は丁寧に整形されており、ほぼ水平である。底部の中央には外側から内側へ向かって直径5mmの穿孔が認められる。この穿孔は被熱前になされている。以上のことから、植木鉢に転用されたものと考えられる。3はTC-10-dに分類される。徳利の底部である(写真15)。内面・外面ともに著しく焼成を受けている。折断面は丁寧に整形され、底部に穿孔が施されていることが観察される。2と同様こちらの穿孔も、被熱前になされたものである。外面には焼けた、砂粒子を含む付着物が認められる。4は土製品である(写真16・17)。内面には中央を囲むように巡る二条の沈線があるものの、全体的にガラガラしており、整形されたとは言い難い。外面も同様に極めて粗い状態である。図に示したものの以外にも、本遺構には4に類似した資料が数点出土している。5は円柱状の鉛である。3、4、5は、金属生産に関連したものである可能性が高い。SD9と同様、出土遺物量が少ないため廃棄年代を確定しづらいが、概ね19世紀代であろう。

6. まとめ

今回の調査では、400㎡という限られた調査範囲ということもあり、建物や井戸・便所・ゴミ穴といった藩邸内での住生活・食生活を彷彿とさせる遺構の検出はみられなかった。遺物も同様で、特に遺構に伴う資料は極く少量出土したに過ぎない。

そうした中で、SK10から出土した金属生産に関連する遺物は注目されるものである。もっともSK10自体が調査区の西端で、むしろこの遺構を完掘するために調査区の一部を拡張しているほどであるから、調査区内、あるいは調査地点周辺と本遺構との関係については、依然として不明のままである。また遺構断面に関する調査情報が残されていないため、果たしてSK10が金属生産に直接的な関係を有する遺構であるか否かについては詳らかでない^(註1)。火災とは異なる二次焼成を受

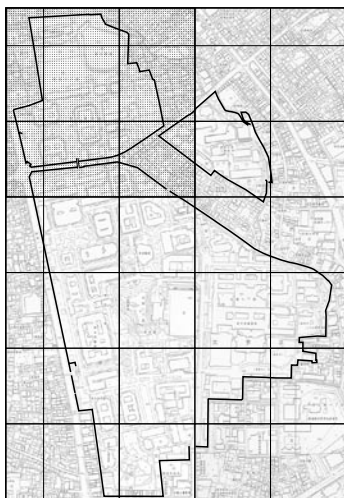
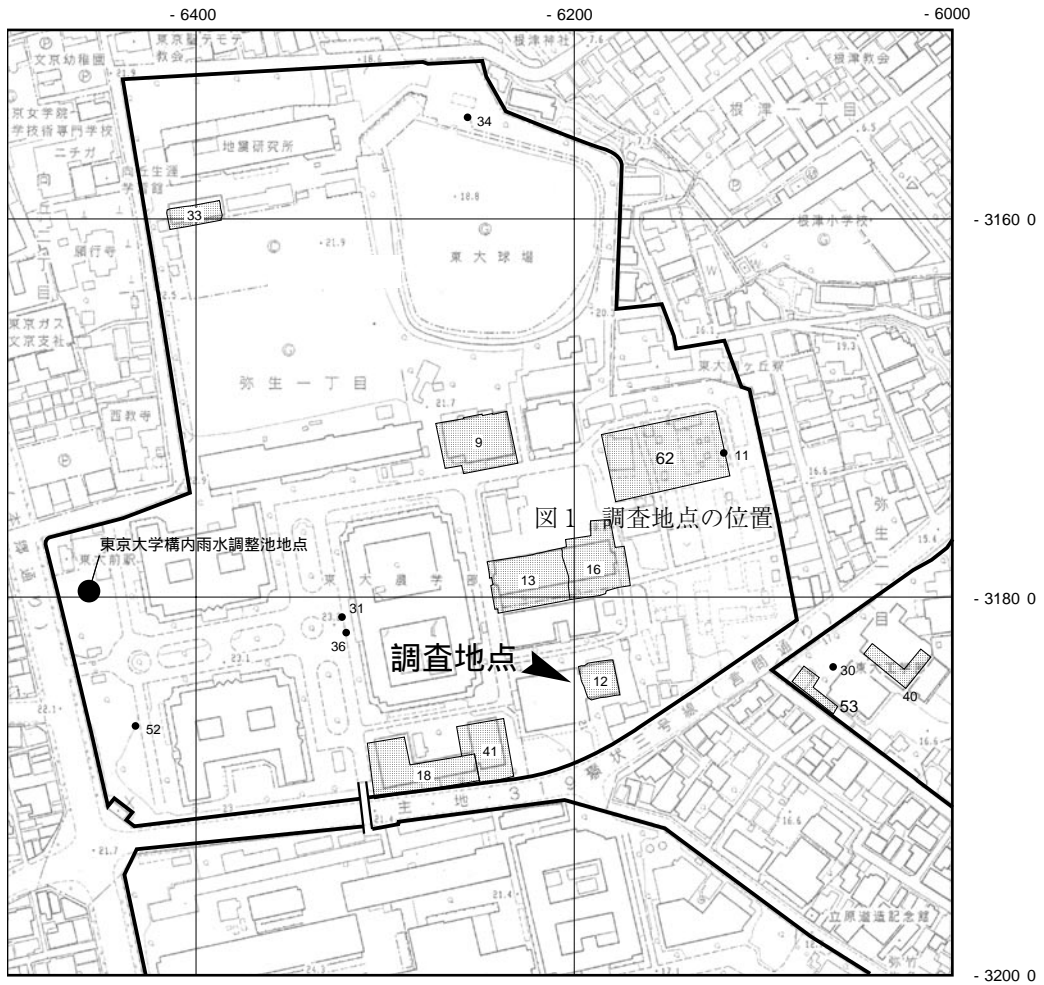
けた遺物や、おそらくはその二次焼成の結果生じたであろう土製品（土塊残滓か）が、円柱状の未加工の鉛と共に出土したことは、金属生産に関連する作業が、-その規模の大小はともかくとして-、藩邸内で行われていた可能性を考える上で大きな材料となろう。本郷構内においては工学部1号館地点においても、SK10出土の3と同様の、付着物のある甕が出土している^(註2)。加賀藩邸の絵図には大工小屋・御作事役所・米搗所など、藩邸内で行われていた多様な作業を反映した建物が記されている。現時点では金属生産のどの工程にあたるかといった、詳細については不明であるが、武家屋敷内での生活の一端としての、生産活動をうかがい知ることのできる事例であろう。今後の類例の増加にも期待したい。

前述のとおり水戸藩邸については絵図面等が公開されていない。したがって藩邸内の様相を明らかにするために果たす、江戸時代の考古学研究の役割は大である。従来農学部周辺の発掘調査は、加賀藩邸・大聖寺藩邸に該当する部分に比してそれほど実施されてはいなかった。そうした意味でも本調査は、調査事例の蓄積という点で貴重な情報を追加し得たものとなった。発掘調査で得られた情報を蓄積し、水戸藩邸内の様相を今後より一層明らかにしていくことが課題である。

註1：完掘写真を見る限り、遺構の壁面・床面に被熱の痕跡は認められない。

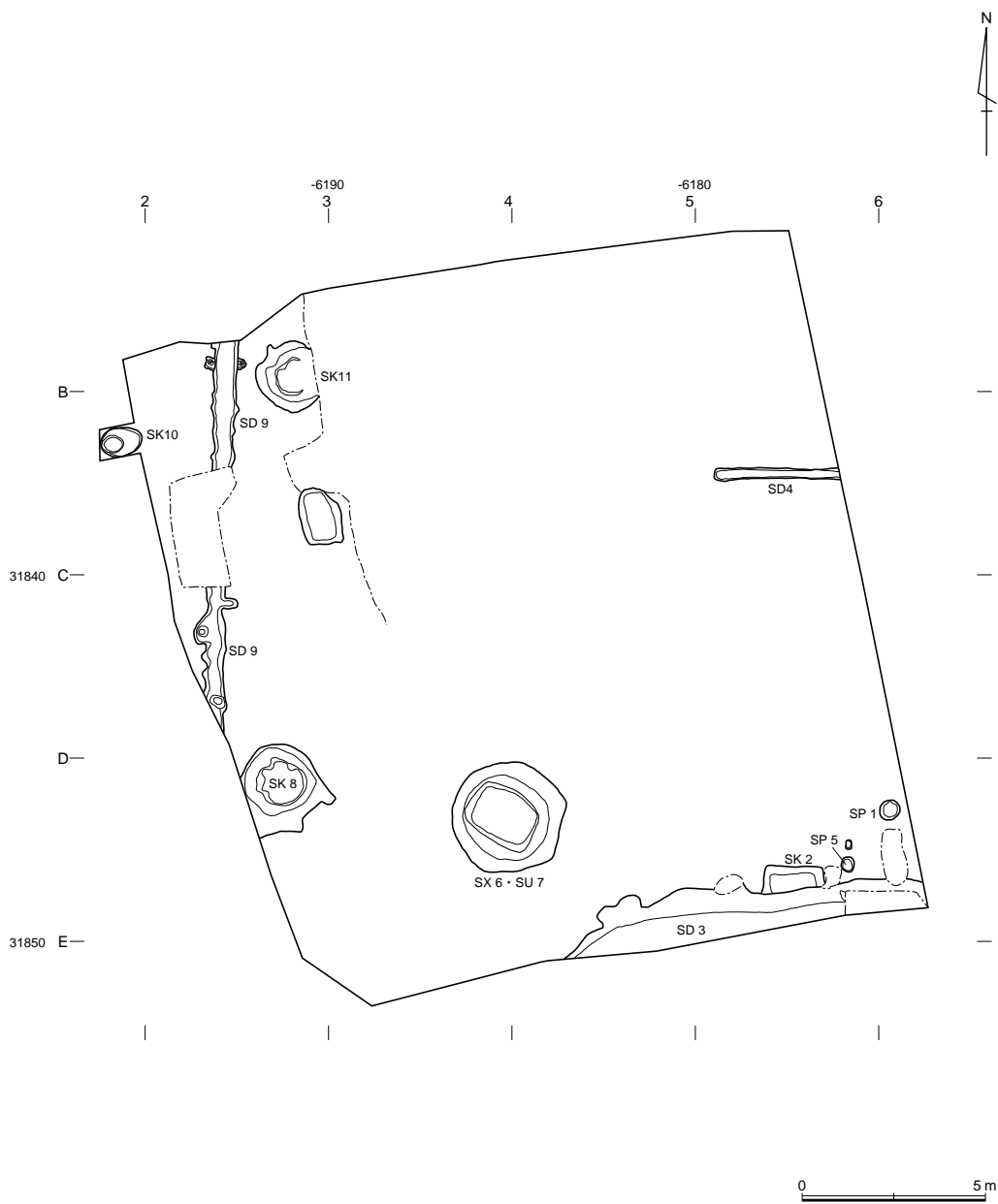
註2：SK01 遺構である。本地点は加賀藩邸内にあたる。

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

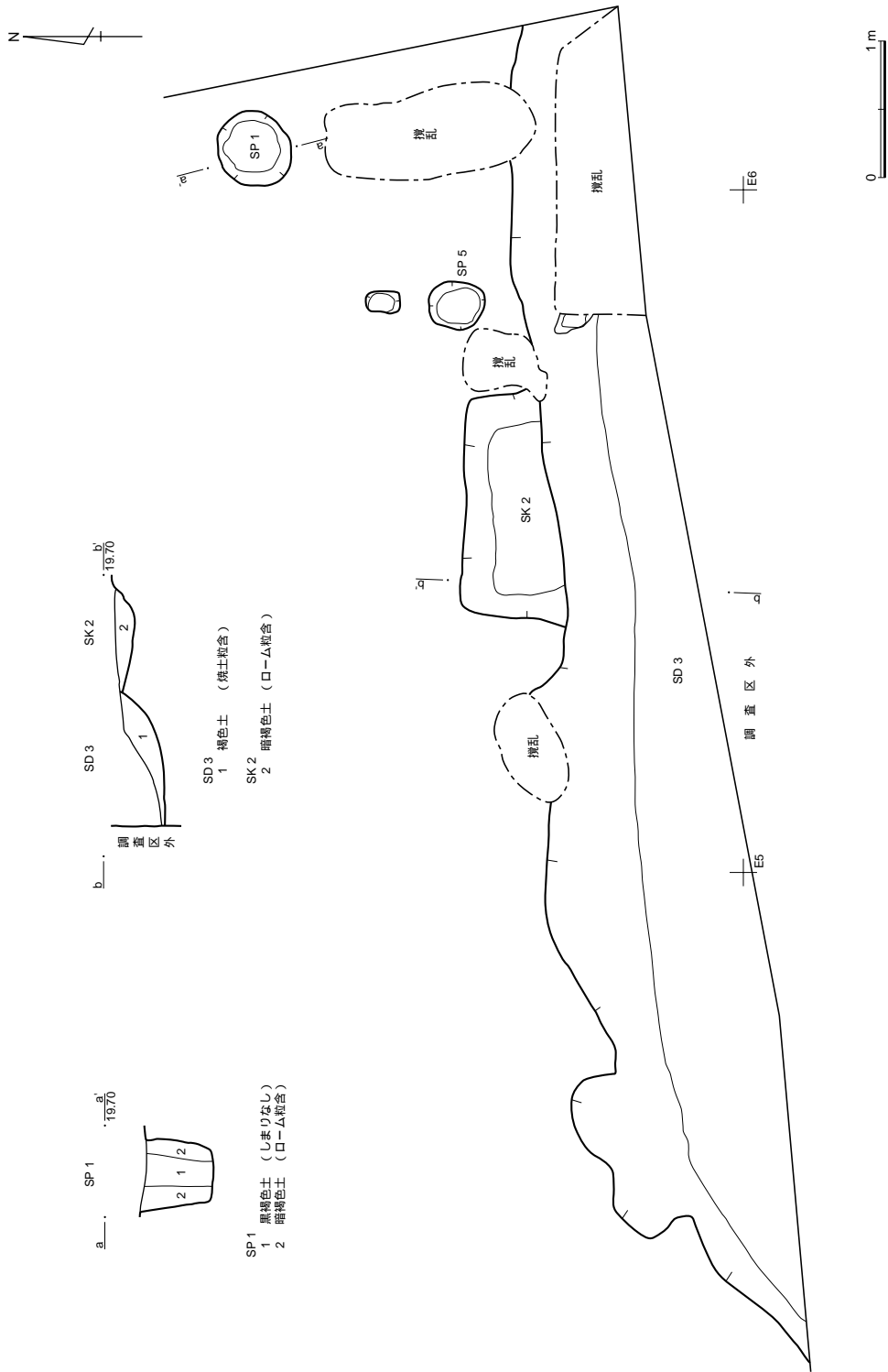


- 9 農学部家畜病院
- 11 農学部ガラス室
- 12 農学部図書館
- 13 農学部校舎(7号館)(1期)
- 16 農学部校舎(7号館)(2期)
- 18 農学部総合研究棟(SK)
- 30 工学部全径間風洞実験室新首支障ケーブル移設
- 31 ATMネットワーク施設整備
- 33 地震研究所テレメタリング観測施設
- 34 グランド
- 36 農学部ガス管理設
- 40 工学部全径間風洞実験室
- 41 ペンチャー・ビジネス・ラボラトリー
- 52 農学部(21世紀館)木質ホール
- 62 農学部総合研究棟(NS01)

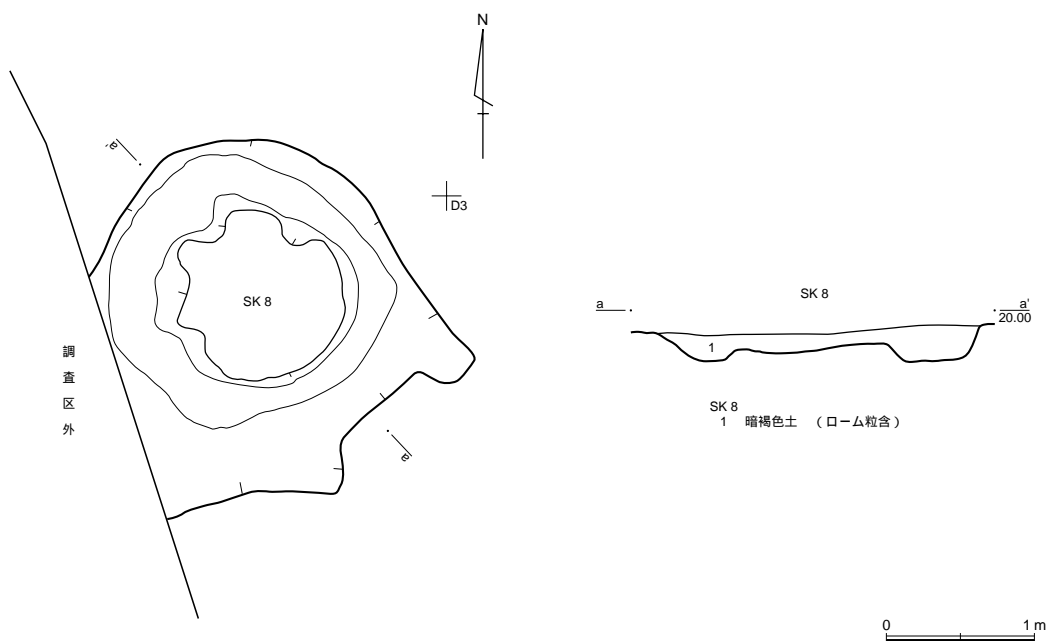
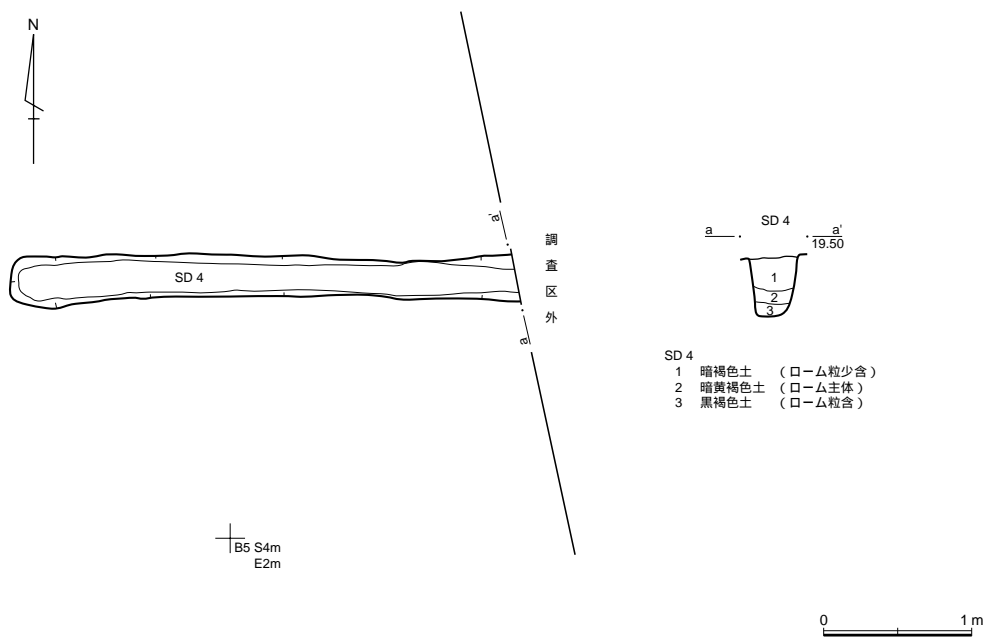
図1 調査地点の位置



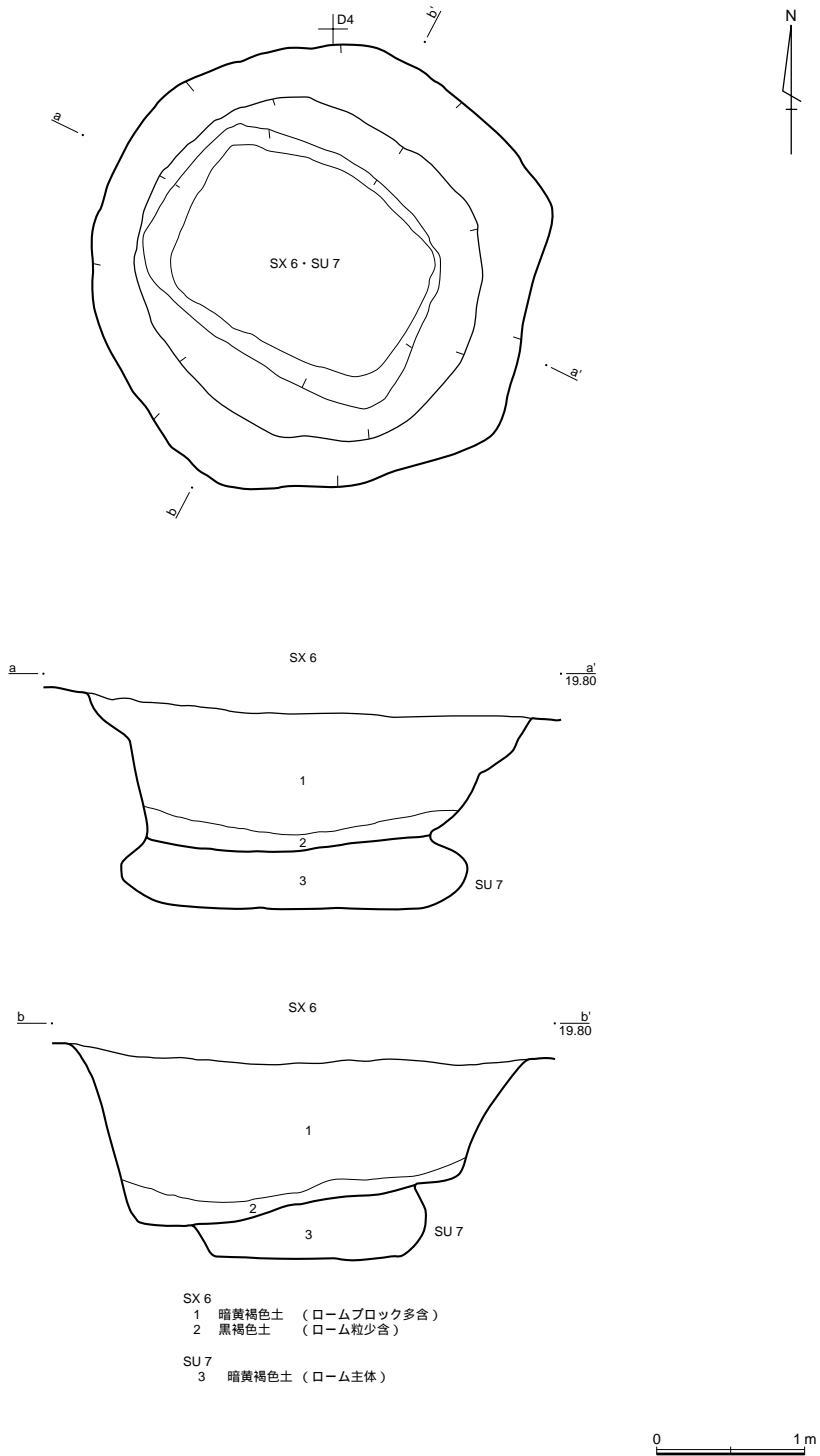
第 2 図 遺構配置図



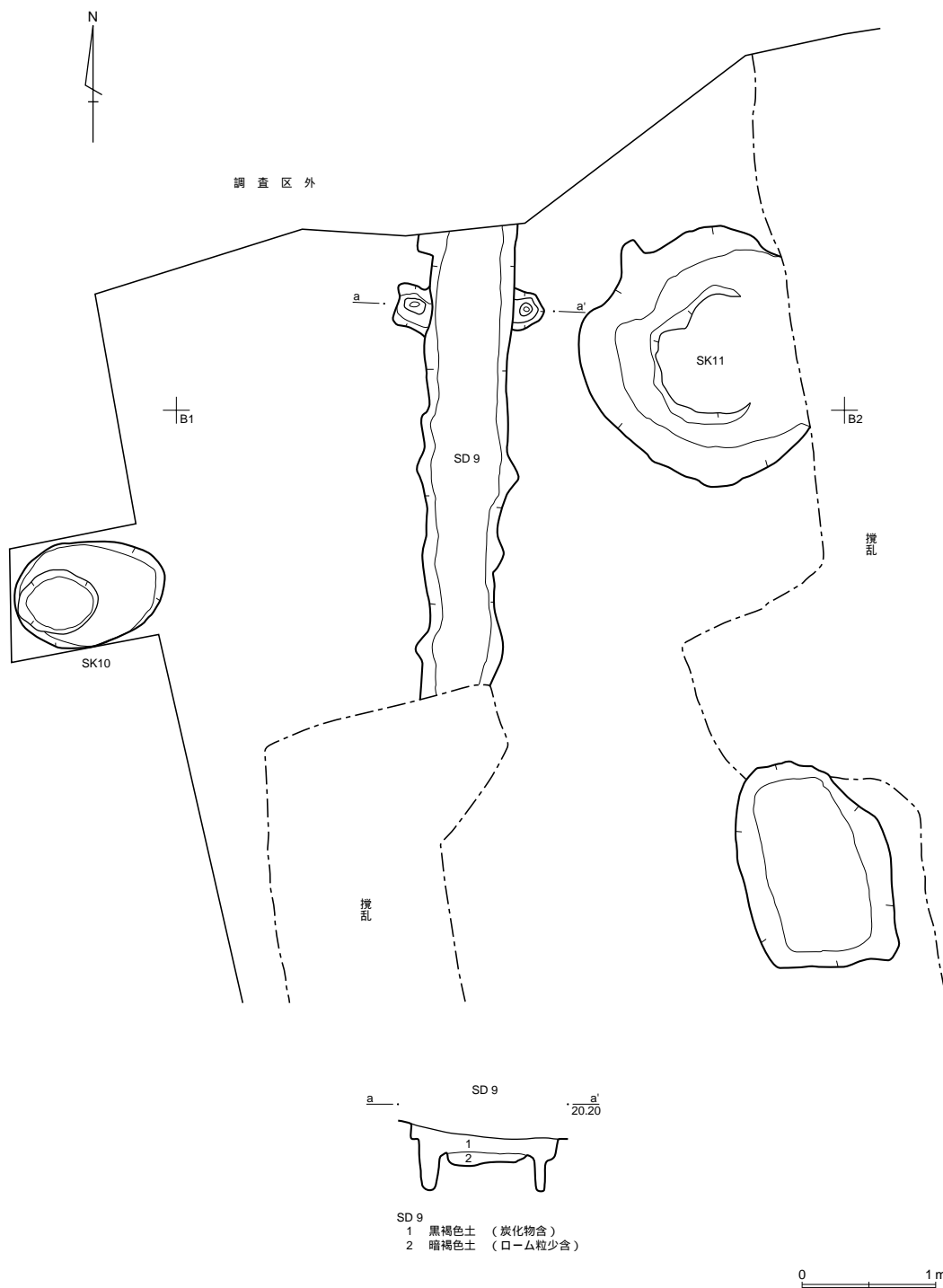
第3図 SP 1・SK 2・SD 3・SP 5



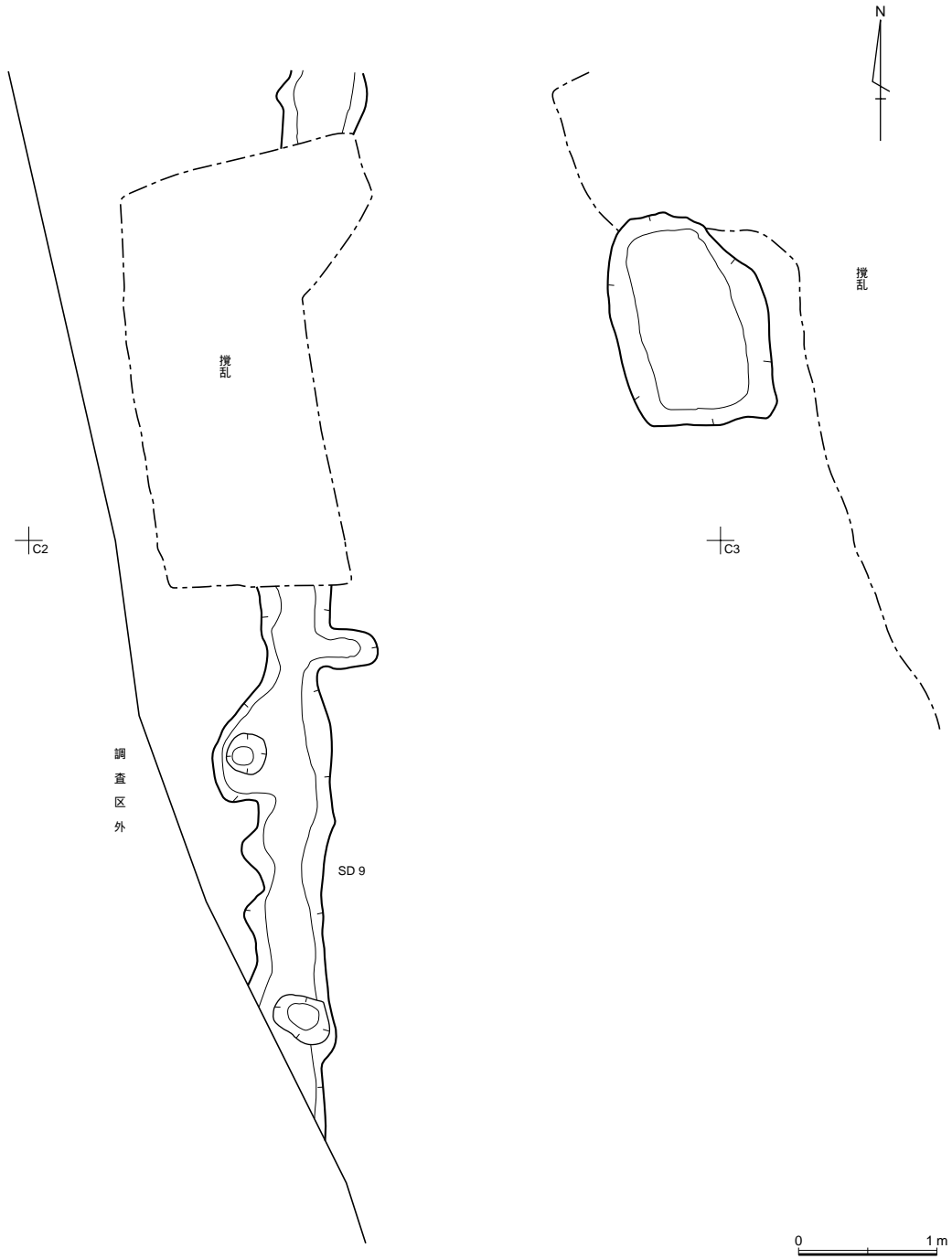
第 4 図 SD 4・SK 8



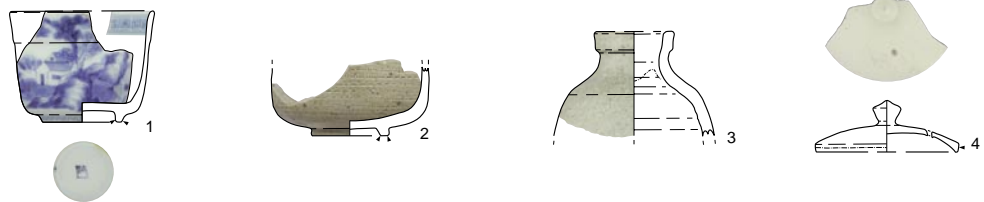
第5図 SX 6・SU 7



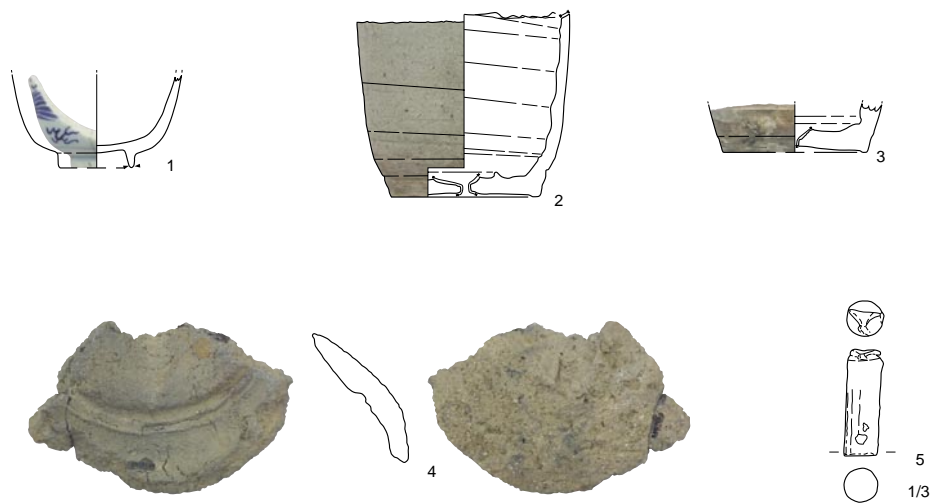
第 6 図 SD 9 (1)・SK10・SK11



第7図 SD10 (2)



SD 9



SK10

図 8 SD 9・SK10



第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

ふりがな	とうきょうだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつけんきゅうねんぽう						
書名	東京大学埋蔵文化財調査室研究年報						
副書名							
巻次	4						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	東京大学埋蔵文化財調査室						
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室						
所在地	153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 東京大学リサーチキャンパス内 Tel.03-5452-5103						
発行年月日	2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
とうきょうだいがくほんごう 東京大学本郷 こうない いせきほんごう 構内の遺跡(本郷 なまよい 弥生1-1 たいざいせきぐん 台遺跡群) のうがくぶとしよなんちてん 農学部図書館地点	とうきょうとぶんきょうく 東京都文京区 なまよい 弥生1-1	13105 47	35 42 58	139 45 42	1993年3月9日 ～ 3月25日	400	東京大学農学部 図書館増設に伴 なう事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
東京大学本郷構内 の遺跡 農学部図書館地点	生活関連	江戸時代	地下室 1	土坑 3	陶器		
			溝 3	柱穴 3	磁器 土器		

東京大学本郷構内の遺跡

地震研究所

テレメタリング地震観測施設地点
発掘調査報告

2004

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

- 1 本報告は東京大学地震研究所テレメタリング地震観測施設新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 2 調査地は東京都文京区弥生 1-1-1、東京大学本郷地区農学部構内に位置している。
- 3 調査面積は 308 m²である。
- 4 調査期間は以下の通りである。
試掘調査 1995 年 10 月 18 日
事前調査 1996 年 4 月 16 日～5 月 2 日
整理作業 2001 年 11 月～2003 年 2 月（複数遺跡の整理を平行して実施しているため、この期間に断続して作業を行った。）
報告書編集 2003 年 7 月～8 月
- 5 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は武藤康弘である。
- 6 調査区を 5 × 5 m グリッドで区画し、北西隅を基点として北から南に数字、東から西にアルファベットを附した。
- 7 本報告の編集は大成可乃が行った。
- 8 図版の作成は香取祐一が行った。
- 9 出土遺物は埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱキャンパス内で運用、保存、管理している。
- 10 報告書の作成にあたり、下記の方々からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表したい（敬称略）。
宮崎勝美 (株)セビラス

凡 例

- 1 遺構の略号は以下の通りである。
SB：建物址 SD：溝 SK：土坑 SP：ピット SU：地下室
- 2 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。
- 3 遺物番号は、本文、挿図で共通の番号を使用している。
- 4 遺物実測図に使用している記号は以下のことを示す。
 - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表している。
 - ・┌──┐は口唇の口錆を表している。
 - ・中心線上下の破線は推定口径を表す。
 - ・— — は断面を表す。
 - ・口唇部の┌──┐は敲打痕を表す。
- 5 本文中で記載した分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に準じた。

目 次

1 調査に至る経緯	117
2 遺跡の位置と歴史的環境	117
3 調査の成果	
1) 遺構	117
2) 遺物	119
4 まとめ	121

1 調査に至る経緯

東京大学地震研究所ではテレメタリング地震観測施設の新営が計画されていた。東京大学本郷構内は、東京都遺跡地図に本郷台遺跡群として登録（文京区 No.47）されており、当建設予定地点においても遺跡の存在が予想された。そこで、地震研究所から埋蔵文化財の確認の依頼を受けた埋蔵文化財調査室では1995年10月18日に試掘調査を行った。しかし、この試掘調査は既存建物が障害となり極限られた範囲の調査であったため、遺構、遺物は検出されなかった。後日、地震研究所と埋蔵文化財調査室との協議によって、急遽事前調査を実施することになった。発掘調査は、建設予定地 308 m²を対象として1996年4月16日～5月2日まで行った。

2 遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は東京都文京区弥生 1-1-1、東京大学本郷地区農学部構内に位置している。当調査地点は本郷台地上に位置し、周辺には旧石器時代から近世にまで及ぶ遺跡が確認されている（図1）。文献資料によれば、江戸時代には水戸藩徳川家中屋敷、播磨安志藩小笠原家下屋敷などの大名屋敷と旗本森川金右衛門の屋敷などが存在していた場所であり、本調査地点も正保年間江戸絵図では播磨安志藩小笠原家下屋敷に、そして天保6（1835）年には相対替により水戸藩徳川家中屋敷に該当する場所であることが明らかになっている。

3 調査の成果（第2図・写真1）

調査区内は全面にわたり、明治・大正時代の第一高等学校の煉瓦基礎により攪乱され、現地表面から約-1 mでローム面が検出される状態であったため、遺構検出はローム面上で実施した。ローム面上では、江戸時代の遺構と考えられる柱穴列や、溝、地下室、植栽痕、土坑、ピットなどが検出された。

1) 遺構

建物址（SB7、SB9、SB14、SB21）

SB7（第6図）はC4～C6グリットに位置する柱穴列である。各柱穴の規模は東西約40 cm×南北約50～80 cmの長方形を呈し、確認面からの深さは30～40 cmを測る。柱穴間は2 mで、東西に5基並ぶことが確認されたが、東側は調査区外に延びていた可能性がある。なお東端に位置する柱穴内にも、東西14 cm×南北22 cm×高さ10 cmで不整長方形を呈する礎石が1つ確認されており、掘立柱建物よりは幾分強固な造りの建物であったと推測される。

SB9（第5図）はB4～C4グリットに位置する柱穴列である。各柱穴の規模は直径約50 cmの円形を呈し、確認面からの深さは40～60 cmを測る。柱穴間が1.4～1.5 mで、南北に4基並ぶことが確認されたが、南側は調査区外に延びていた可能性がある。

SB14（第3図）はA5～A6グリットに位置する柱穴列である。各柱穴の規模は東西約40 cm×南北60～70 cmの長方形を呈し、確認面からの深さは70～90 cmを測る。柱穴間は330 cmで、東西

に3基並ぶことが確認されているが、東側は調査区外に延びていた可能性がある。なお他の柱穴よりも深さがやや浅く西端に位置する柱穴内のみ、東西14cm×南北22cmで隅丸長方形を呈する礎石と、直径14cmの円形の礎石が南北に2つ並んで検出されている。建物の構造上の問題か、あるいは他の柱穴にも本来は礎石があったのが、抜き取られただけなのかは判断できなかった。

SB21はC2グリットに位置する柱穴列である。3基の柱穴のうち、中央の柱穴のみが東西約40cm×南北約30cmの長方形を呈し、両端の柱穴は直径30cmの円形を呈する。確認面からの深さは20～40cmを測る。柱穴間は約190cmと約90cmで東西に3基並ぶことが確認されている。

いずれの建物址も周囲に対応する柱穴列が認められなかったことから、柵列あるいは塀のようなものであったと考えられる。なおSB7とSB9の遺構の主軸方位が直行しており、同時期に存在していた可能性もある。

溝 (SD1、SD23、SD24)

SD1 (第3・4図)はA4～A6グリットに位置する東西に延びる溝で、西から東へ僅かながら傾斜している。遺存する部分は東西13m以上×幅1.5m以上の規模であった。深さは確認面から約0.2mである。

SD23 (第9図)はA1グリットに位置する南北に延びる溝で、北から南へ緩やかに傾斜している。北側は調査区外へ、南側は攪乱によって切られているが、遺存する部分は東西約0.6m×幅3.1m以上の規模を呈し、確認面からの深さは0.2mを測る。

SD24 (第7図)はA3～B3グリットに位置する南北に延びる溝で、南から北へ緩やかに傾斜している。北側は調査区外へ、南側は攪乱によって切られているが、遺存する部分は南北6.3m×幅約0.7mの規模を呈し、確認面からの深さは約0.4mある。後述するSK8に切られていることが断面観察で確認されている。

なおSD23、24内でピット数基が1.4m間隔で確認されており、両遺構は布堀り柱穴列であった可能性もある。

地下室 (SU3)

SU3 (第4図・写真2・3)はA3、B3、A4、B4の複数のグリットに跨る大型の地下室で、東西約5.5m×南北約3.7m、確認面からの深さは約1.3mを測り、平面形は長方形を呈する。坑底や側壁などには工具痕が顕著で、調整した痕跡は認められなかった。北辺の中央部は北側へ張り出し、ここから坑底中央部にかけて長さ2.6m以上×幅1.4mの舌状の盛り上がり認められた。この舌状の盛り上がり部分が地下室の入口に伴うスロープなのか、あるいは坑底部のテラスなのかは、北側が近代の建物基礎で攪乱されていた為に確認出来なかった。埋土は上層が褐色土、下層が黒褐色土の大きく2層に分けられ、その堆積状況からは、短期間に南側から埋没した様子が確認された。

なお当調査で検出された遺構の主軸方向の大半が調査区内に設定したグリットと平行であるのに対し、SU3の主軸方向は真北であり、他の遺構とは構築時期を異にする遺構である可能性がある。

土坑 (SK2、SK4、SK5、SK6、SK8、SK11、SK13、SK16、SK17、SK20)

SK2 (第3図) は A6 グリットに位置する長方形の土坑である。東西約 1.3 m × 南北 0.6 m、確認面からの深さは約 0.4 m を測る。西側と比べて東側の遺構の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土を主体とし、焼土や炭化物を含む。

SK4 は A5 グリットに位置する長方形の土坑である。東西 2.1 m 以上 × 南北 1.2 m、確認面からの深さは約 0.4 m を測る。坑底や側壁などに凹凸が認められる。埋土は暗黄褐色土を主体とし、短期間に埋没した様子が確認された。

SK5 (第5図) は B3 と B4 グリットに位置する不整形の土坑である。東西 4.2 m × 南北 3.9 m、確認面からの深さは約 0.7 m を測る。埋土は前述した SU3 と同様の堆積状況である。側壁や坑底の凹凸が顕著であることなどから植栽痕であろうと考えられる。

SK6 (第3図) は A6 グリットに位置する楕円形の土坑である。東西 1.4 m 以上 × 南北 0.7 m 以上、確認面からの深さは約 0.4 m を測る。

SK8 (第7図) は A3 グリットに位置する土坑である。東西 1.9 m 以上 × 南北 1.0 m 以上、確認面からの深さは約 0.8 m を測るが、全体形状は不明である。坑底の一部が円形状にやや盛り上がっている。埋土はローム粒を多く含む暗黄褐色土を主体とし、レンズ状に堆積している様子が観察された。

SK11 (第8図) は B6 グリットに位置する不整形の土坑である。東西約 0.9 m × 南北約 0.7 m、確認面からの深さは約 0.1 m を測る。埋土は暗褐色土を主体とし、ごく浅いレンズ状に堆積しているのが観察された。

SK13 (第9図) は B1 グリットに位置する不整形の土坑である。東西 1.8 m 以上 × 南北約 2.4 m、確認面からの深さ約 0.5 m を測り、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土はロームブロックや焼土を含む暗褐色土が主体である。SU3 と同様に真北方向の遺構主軸をもつ。

SK16 (第9図) は B1 グリットに位置する土坑である。東西 1.5 m × 南北 0.5 m、確認面からの深さは約 0.4 m を測るが、全体形状は不明である。埋土はローム粒や焼土を含む暗褐色土を主体である。

SK17 (第5図) は C3 グリットに位置する土坑である。東西約 2.6 m × 南北約 1.0 m 以上、確認面からの深さは約 0.6 m を測るが、全体形状は不明である。坑底には更に浅い不整形の凹みが確認された。埋土は暗褐色土を主体とするが、坑底の浅い凹みにはローム粒が多量に含まれているのが観察された。

SK20 (第3図) は A6 グリットに位置する楕円形の土坑である。東西 0.5 m 以上 × 南北 0.7 m 以上、確認面からの深さは約 0.4 m を測る。

2) 遺物

SD01 (第10図)

1 は口唇部が外反する肥前系白磁鉢で JB-5-f に分類される。体部は高台から大きく湾曲し、や

や内傾して立ち上がる。畳付には砂粒が付着している。2～4は陶器である。2は灰釉が施された合子でTC-18に分類される。無釉の底部には判読できないが墨書が認められる。3は灰釉が施された瀬戸・美濃系の坏でTC-6に分類される。畳付中央が僅かながら溝状に窪んでいる。4は青緑釉が施された肥前系の皿でTB-2-aに分類される。見込みの蛇ノ目釉剥部分は丁寧に削り込まれ、その部分には砂目痕がみられる。5は直径27mm×厚み1.5mm、中心に1辺約7mmの四角い孔がある鉛製品である。型作りで、表面には「坂田金平」の文字と模様がみられる。絵銭か。6は潰れてゐる煙管の火皿であるが、雁首銭の可能性もある。7は火打石で、両側縁部に微細剥離が顕著に認められる。この使用痕の大部分が主要剥離面（図左）に遍在し、使用者が打撃面を意識していたことが窺われる。また、上端の剥離面は両側縁の使用痕よりも新しく、使用中の欠損もしくは再加工と考えられ、その縁部にも新たな使用痕がみられる。

SK2（第10図）

1は瀬戸・美濃系陶器の輪禿皿でTC-2-mに分類される。輪禿部分と高台部以外には、長石釉がやや厚めに施されている。釉剥ぎされた見込みの突帯部分は比較的顕著である。高台は、断面逆三角形の付高台である。2～6は土器皿である。3は底部に左回転の離し糸切り痕跡が残るものでDZ-2-b、あとは全て底部に右回転糸切り痕跡が残るものでDZ-2-aに分類される。いずれも器高がやや低く、体部が底部から外反気味に立ち上がり、口縁部付近では僅かに内湾している。そのため底体間には緩やかな括れがみられるが、2と4はその括れが顕著である。また口縁部脇にはどれも顕著な稜が認められる。3、4の見込みには反時計回りに撫でられた痕跡がある。4は口縁部にタール状の付着物が認められる。5の底部には二次的な穿孔が1カ所みられる。7、8は砥石である。7は淡赤褐色の粘板岩で、平面形状は長方形を呈し、縦6.9cm以上×横3.5cm×厚さ1.4cmを測る。残存する両隅は面取りが施されている。なお一面のみが摩耗している。8は砂岩で、全体的に摩耗が著しい。両端とも欠損しており、残存部では縦6.5cm以上×横2.5cm×厚さ1.2～1.9cmを測る。9、10は小柄と思われるが、柄の部分のみ残存している。9は縦9.7cm以上×横1.5cm×厚さ0.2～0.4cm、10は縦9.4cm以上×横1.3cm×厚さ0.3～0.2cmを測る。ともに表面には模様が施されており、9にはwの文字のような文様が、10には三つ玉の文様がみられる。

SK4（第10図）

1は肥前系の染付筒形磁器碗でJB-1-1に分類される。器形はかなり矮小化し、外面の菊花文も見込みの五弁花文もかなり崩れたものになっている。2は陶器で瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-cに分類される。灰釉が浸け掛けされ、体部には点刻で「高サキ」の釘書きが確認できる。

SK11（第10図）

1は瀬戸・美濃系の染付端反形磁器碗でJC-1-dに分類される。2は陶器で瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-bに分類される。灰釉が付け掛けされ、底部脇と底裏には墨書がみられる。

SK13 (第11図)

1は肥前系染付磁器皿でJB-2-eに分類される。見込みにはコンニャク印判による五弁花文が施される。高台内には銘が確認できるが、破片のため判読できない。2～4、7はいずれも瀬戸・美濃系陶器である。2、3は碗で、2がいわゆる御室碗でTC-1-d、3がいわゆる腰鏝碗でTC-1-uに分類される。2の無釉の畳付付近には煤けたような痕跡が認められる。3は畳付以外すべて施釉されている。4は澁瓶でTC-28に分類される。5、6は土器で、5は板作成形で2ピースからなる塩壺でDZ-51-1に分類される。外面には「泉川麻玉」の刻印がある。6は塩壺蓋でDZ-00-c。内面には細かい格子状の布目が残る。5の蓋である可能性もある。7は人形でTC-60に分類される。亀をモチーフとしたもので、型起こし成形され、腹部に当たる部分以外には灰釉が施されている。浮き人形か。

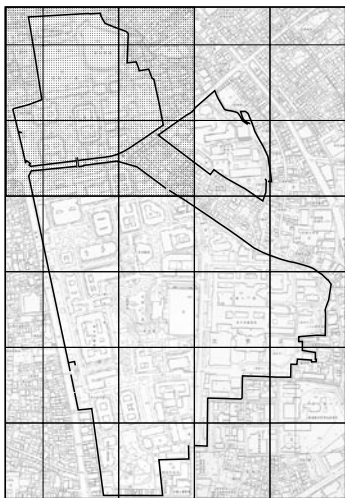
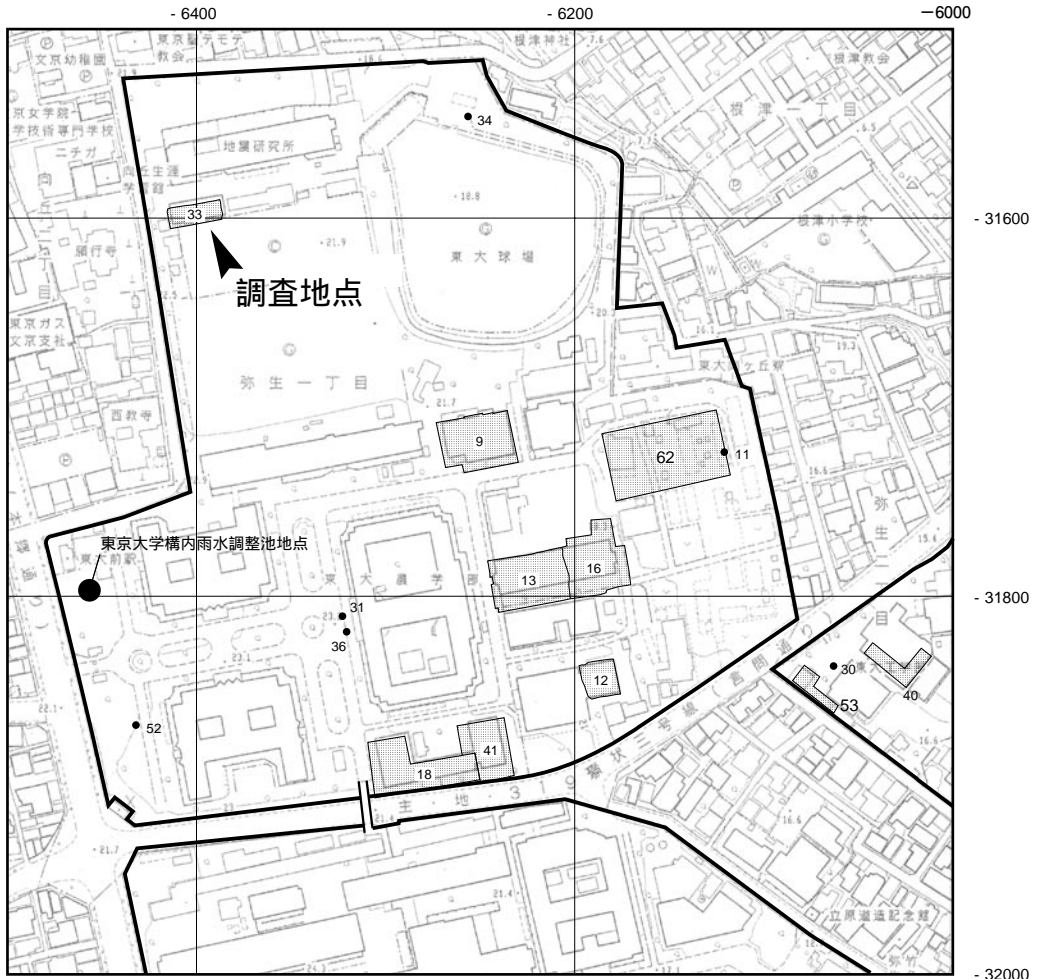
SB21 (第11図)

1は瀬戸・美濃系の染付端反形磁器碗でJC-1-d。やや大振りの端反形碗で、口縁部の外反はごく緩やかである。文様はダミ線によって3単位に区画された中に草花文が描かれている。

4 まとめ

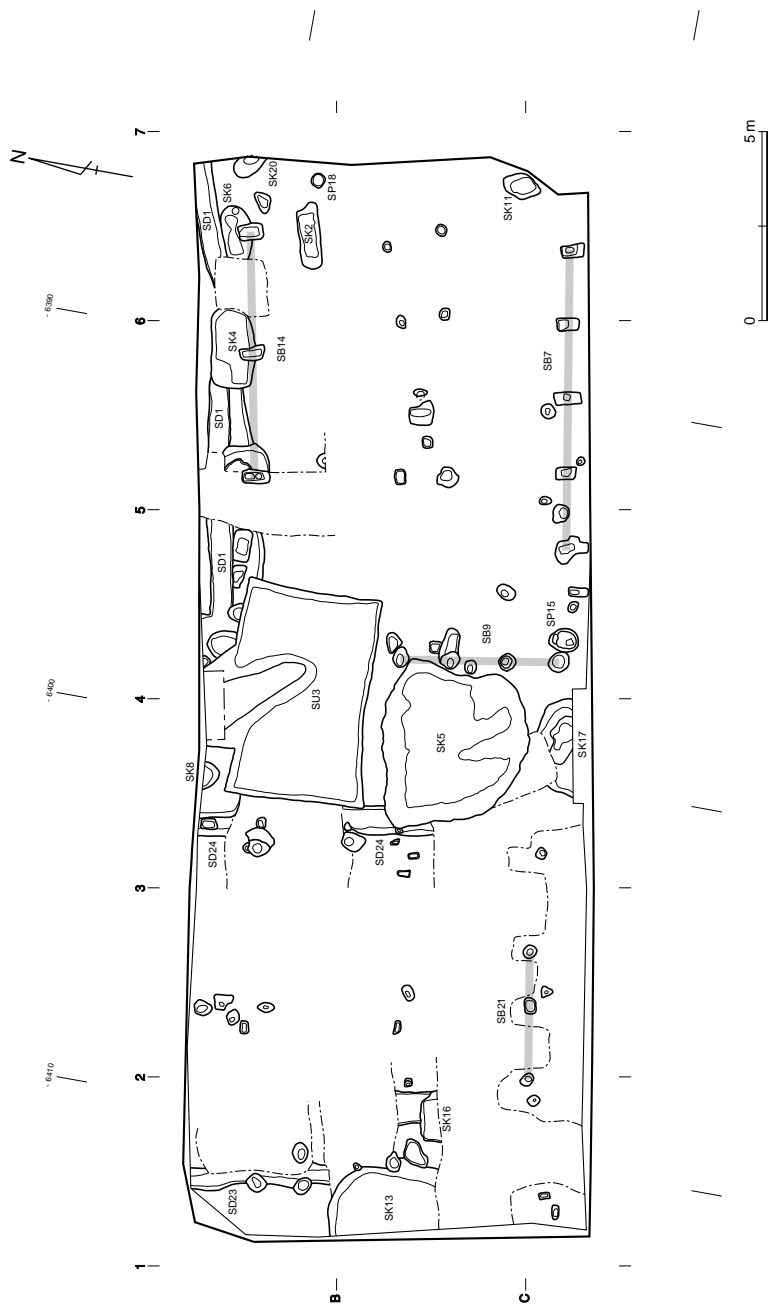
試掘調査から予想された以上に近現代の基礎などで攪乱されていたために、江戸時代の明確な生活面や包含層などを確認できなかったが、SU3のようなローム層を深く掘り込んだ遺構や、SB7、SB9のような柵列も検出され、江戸時代に人々が生活していた痕跡が確認された。しかし今回検出された遺構密度の低さを考えると、江戸時代を通じて、住空間としてさほど頻繁に利用されていた空間であったとは考えがたい。しかし出土量は少ないが遺物の年代観をみると、17世紀中頃に位置づけられる遺物もあれば、19世紀前半ぐらい位置づけられる遺物もあることから、この場所が比較的長期間利用されていた空間であったことは窺える。

なおⅡでも触れたように文献史料からは、17世紀中～19世紀初頭頃とそれ以降とで拝領者が異なることから、本調査地点の土地利用の仕方も異なっていたものと推測されるが、今回の調査ではそれを確認するには至らなかった。今後の周辺調査では検出された遺構の廃棄年代や出土遺物の様相などを検討し、そのような土地利用の変遷を考古学的に立証していくことが課題の一つであろう。

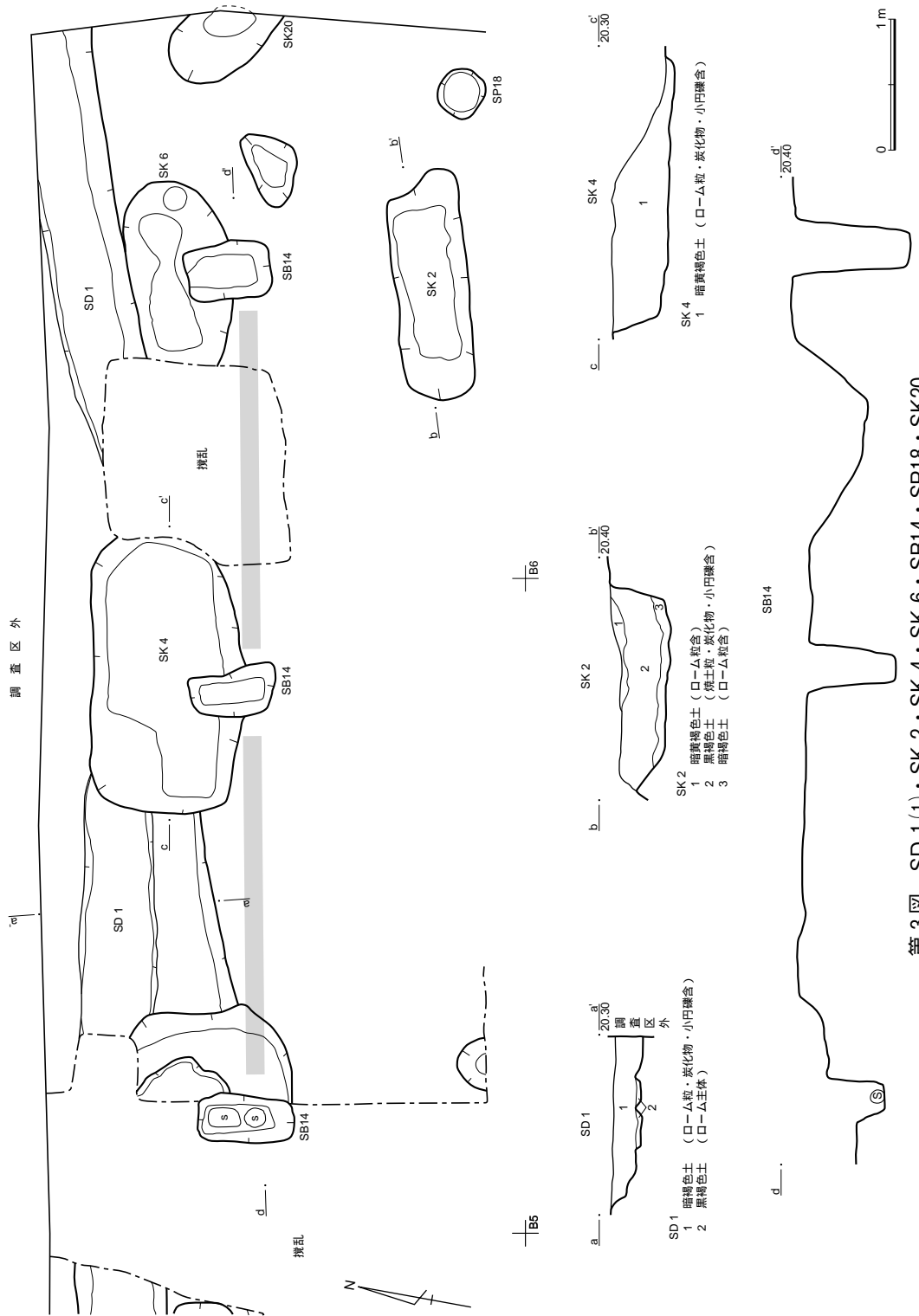


- 9 農学部家畜病院
- 11 農学部ガラス室
- 12 農学部図書館
- 13 農学部校舎（7号館）（1期）
- 16 農学部校舎（7号館）（2期）
- 18 農学部総合研究棟（SK）
- 30 工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設
- 31 ATMネットワーク施設整備
- 33 地震研究所テレメタリング観測施設
- 34 グランド
- 36 農学部ガス管埋設
- 40 工学部全径間風洞実験室
- 41 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
- 52 農学部（21世紀館）木質ホール
- 53 工学部強風シミュレーション風洞実験室（AF）
- 62 農学部総合研究棟（NS01）

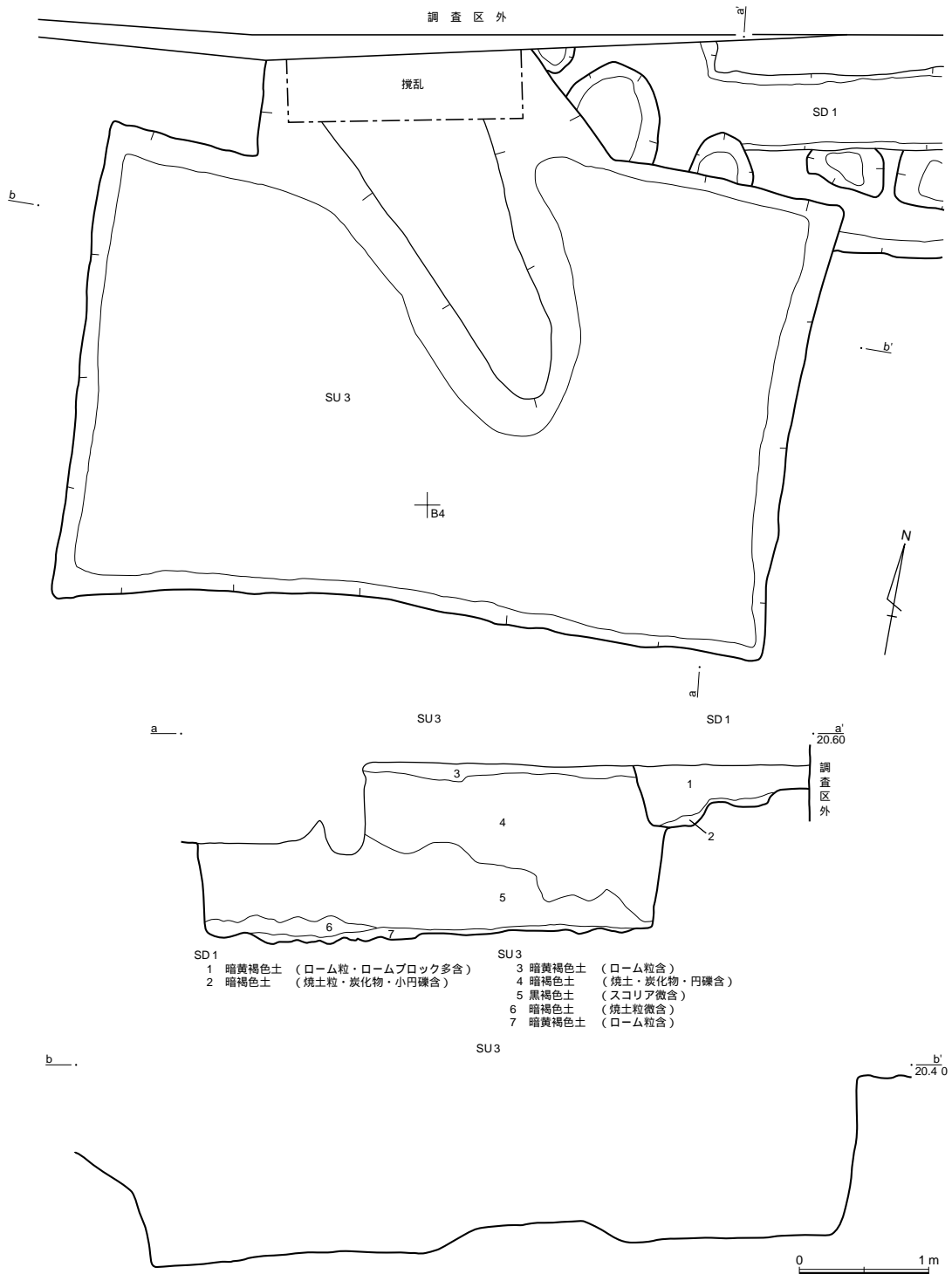
第1図 調査地点の位置



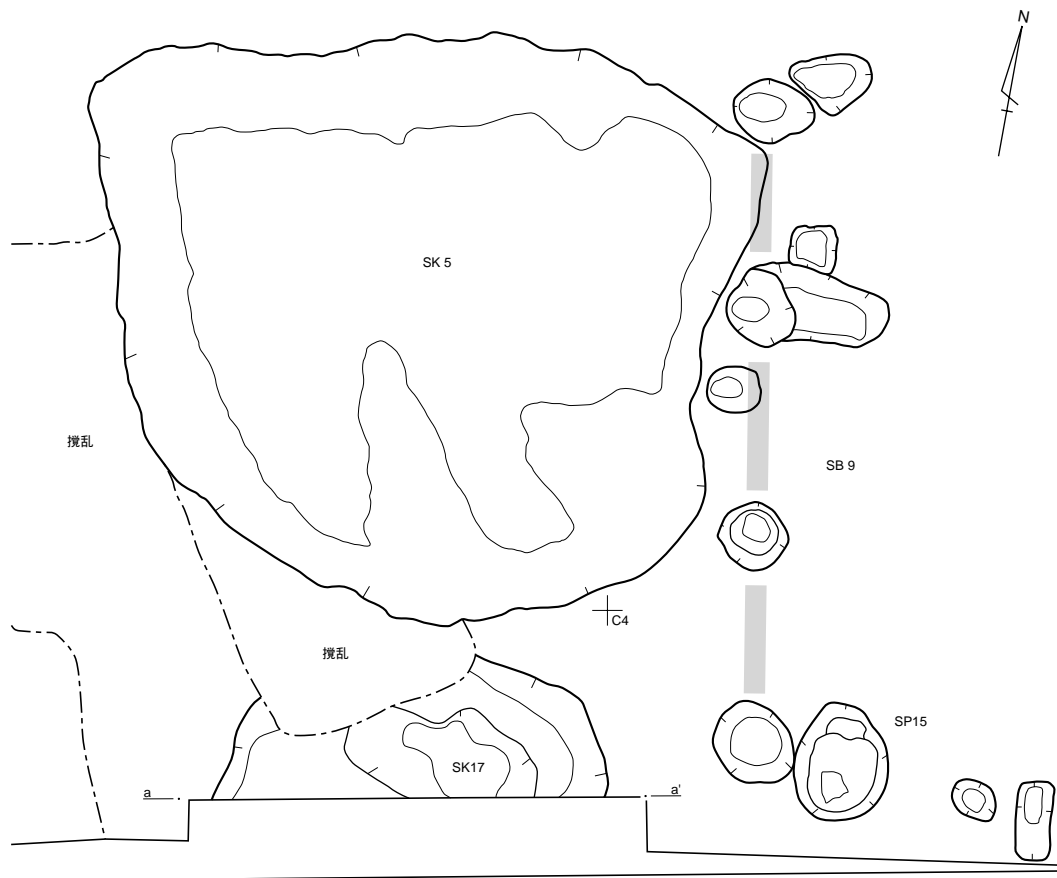
第2図 遺構配置図



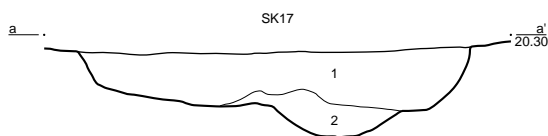
第3図 SD 1(1)・SK 2・SK 4・SK 6・SB14・SP18・SK20



第4図 SD 1(2)・SU 3



調査区外

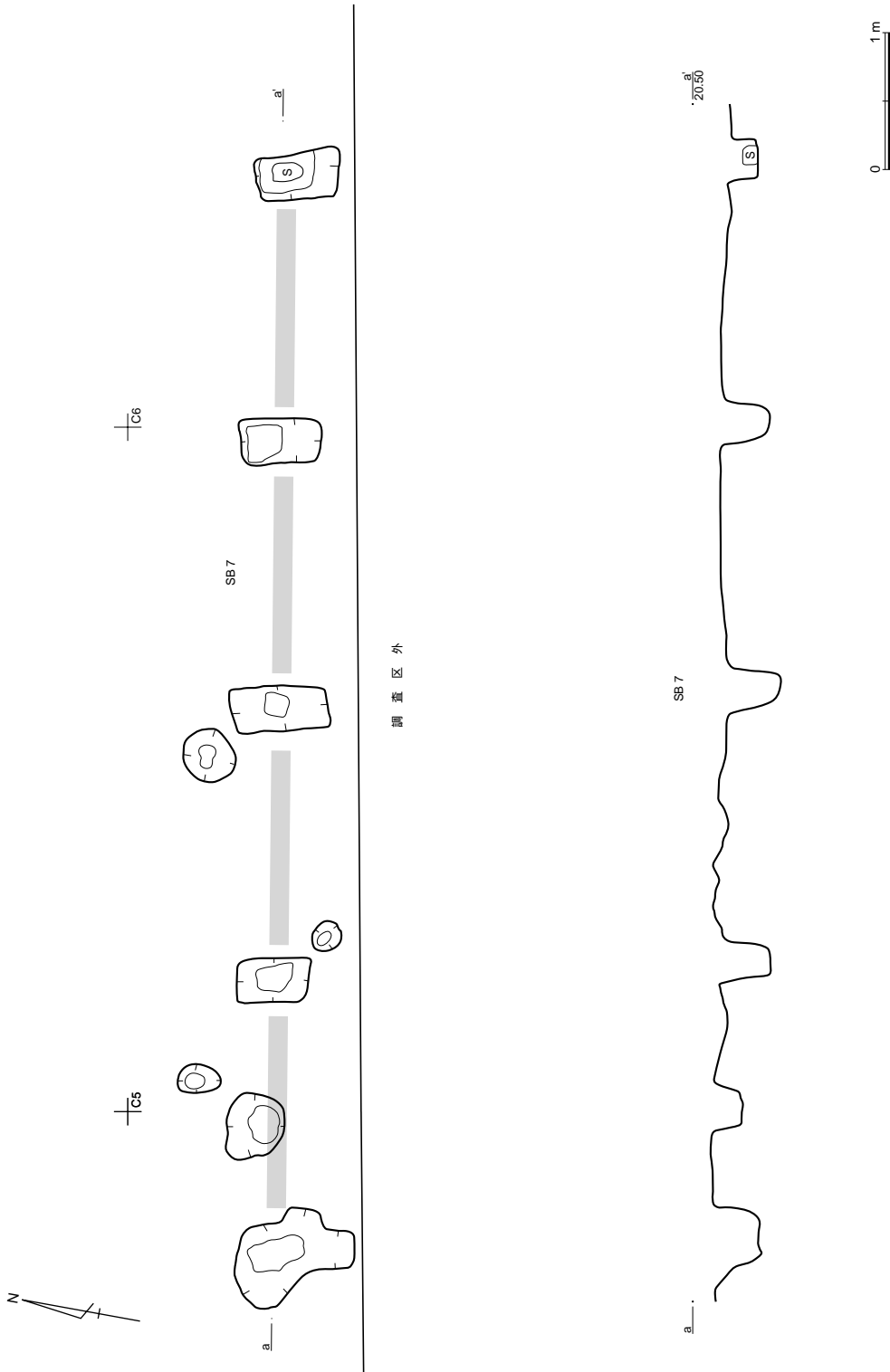


SK17

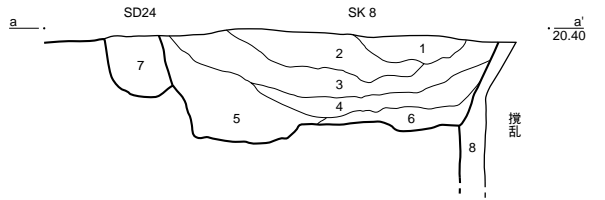
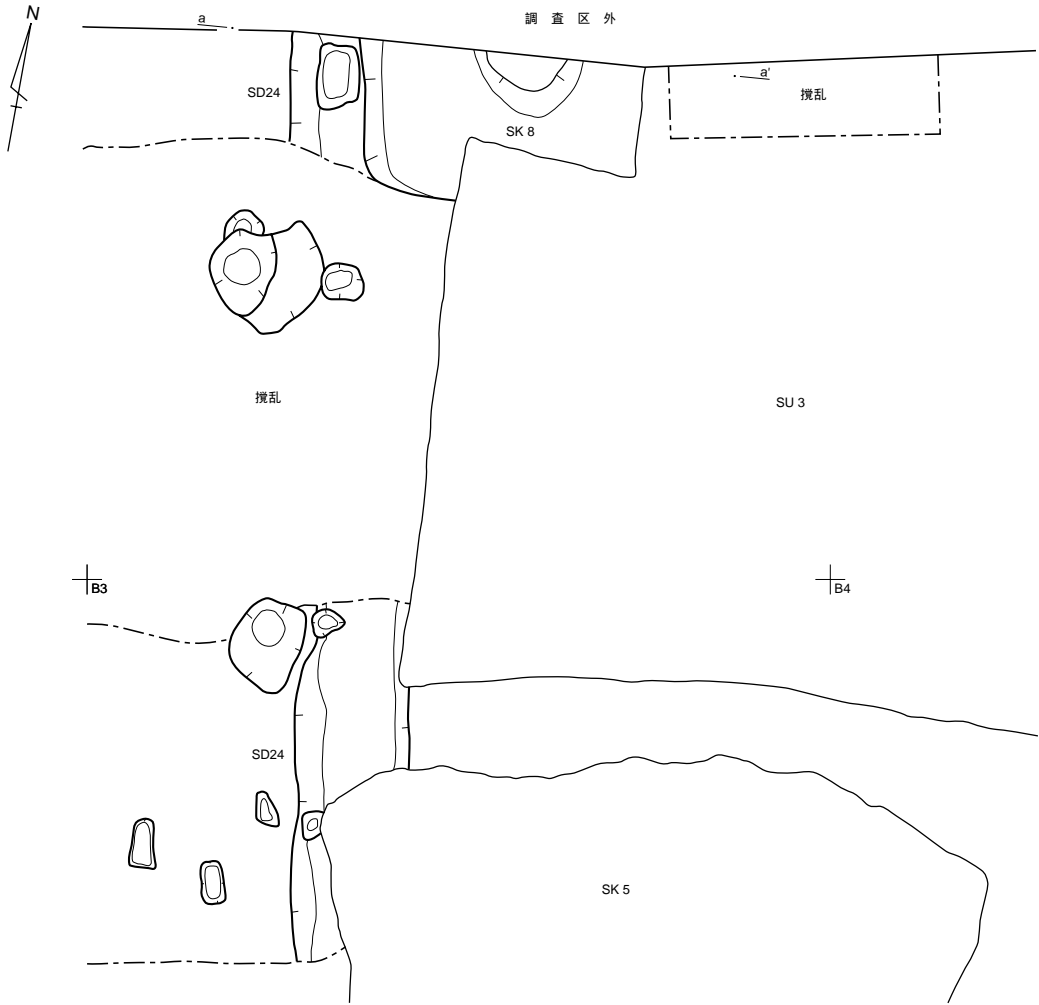
- 1 暗褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
- 2 暗黄褐色土 (ローム主体)



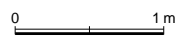
第5図 SK 5・SB 9・SP15・SK17



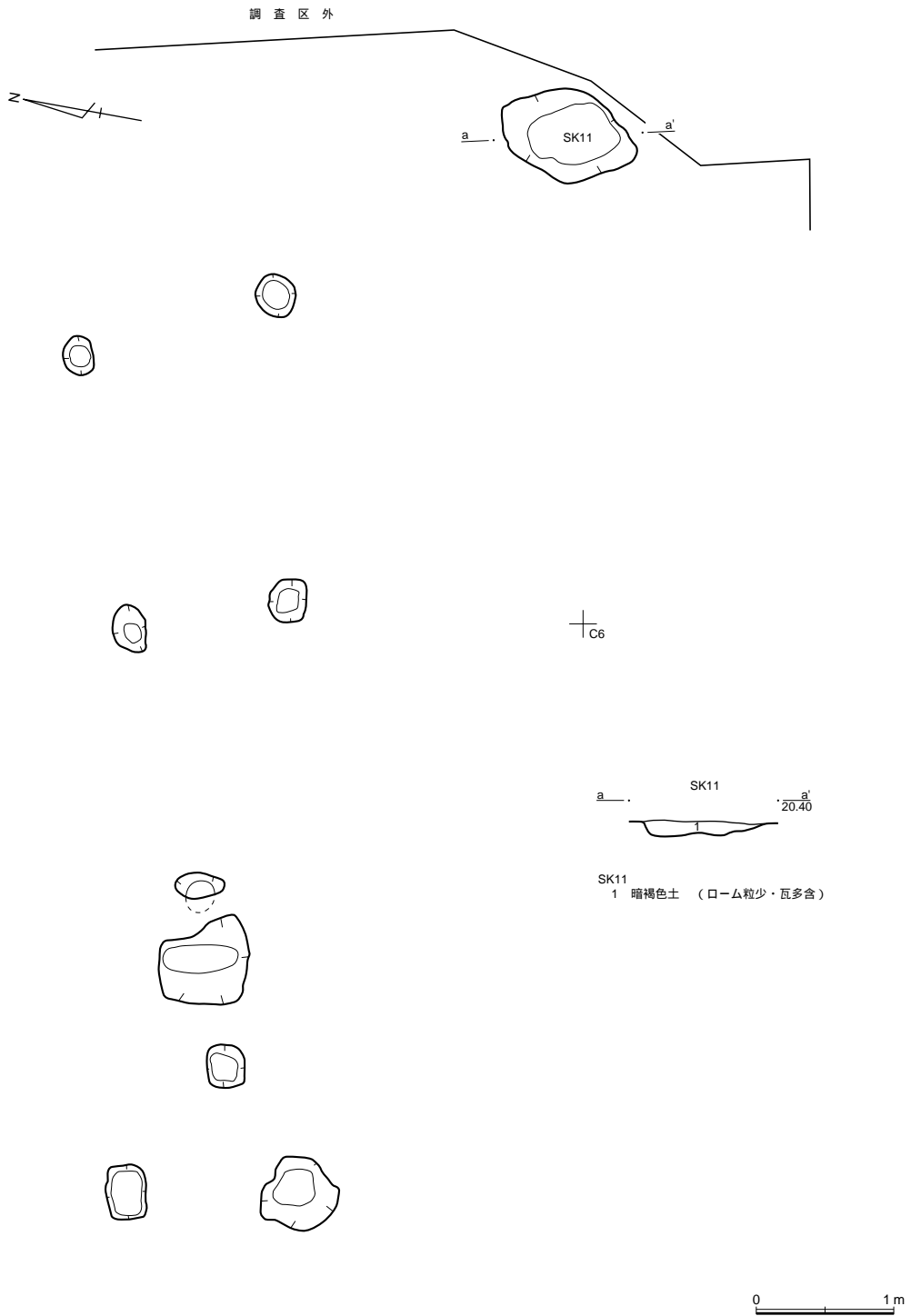
第6図 SB7



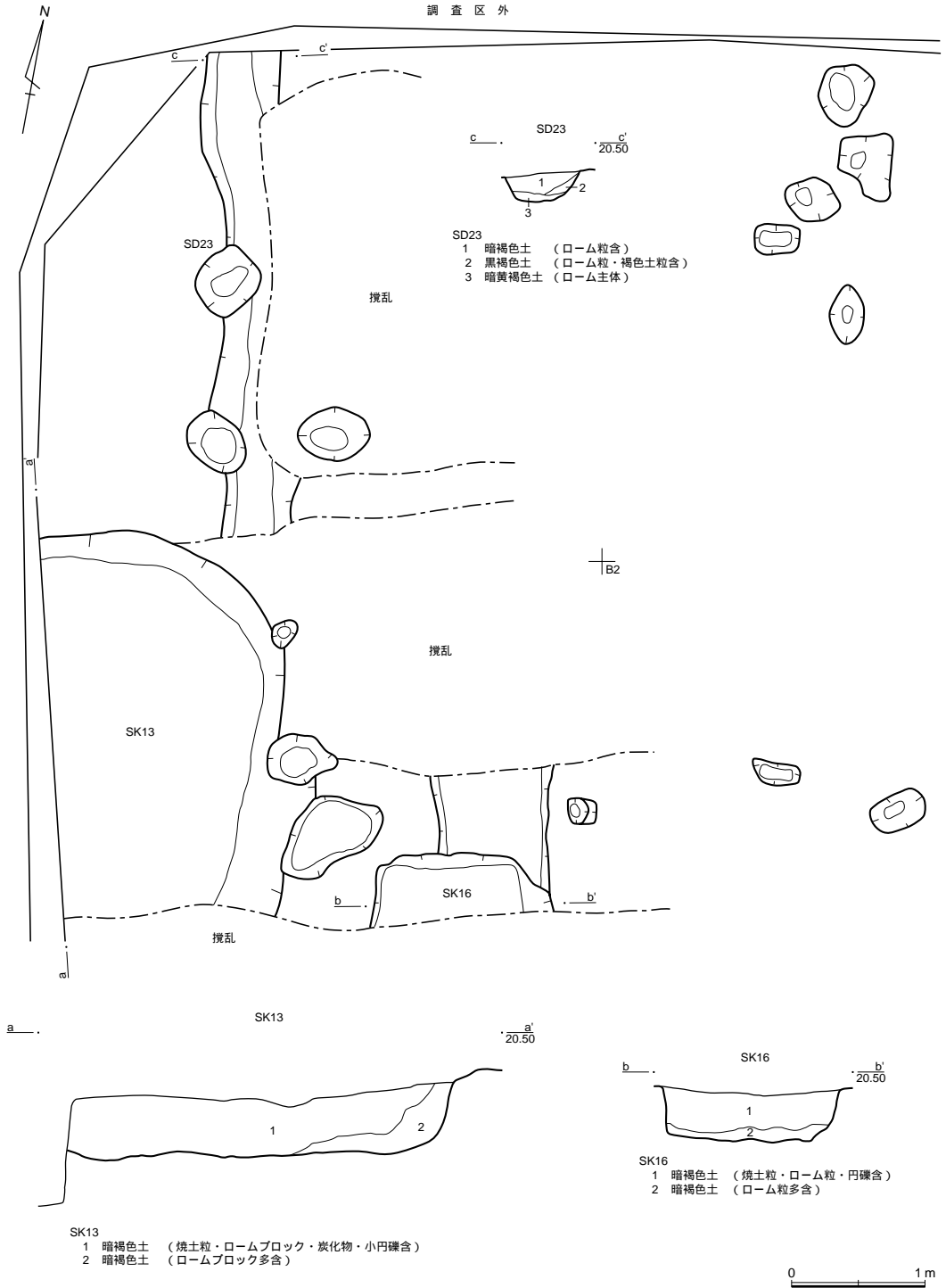
- | | |
|----------------------|-----------------------|
| SK 8 | SD24 |
| 1 灰褐色粘土 | 7 暗褐色土 (ロ-ム粒・黒色土粒少含) |
| 2 暗褐色土 (ロ-ム粒・小円礫・瓦含) | |
| 3 暗黄褐色土 (ロ-ム粒・小円礫少含) | SU 3 |
| 4 暗褐色土 (瓦多・小円礫少含) | 8 暗褐色土 (焼土粒・炭化物・小円礫含) |
| 5 暗黄褐色土 (ロ-ム粒含) | |
| 6 暗黄褐色土 (ロ-ム主体) | |



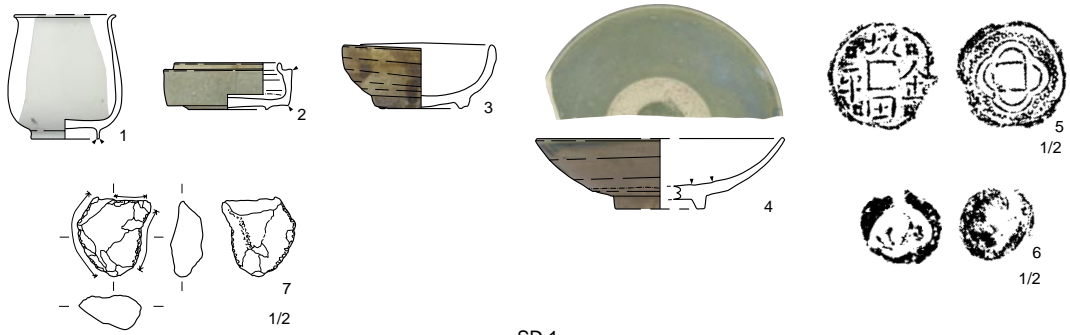
第7図 SK 8・SD24



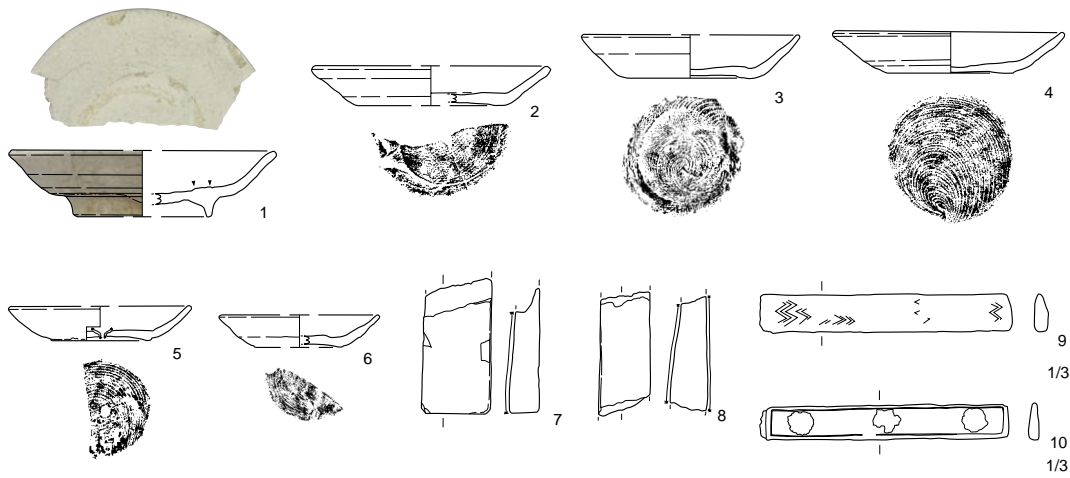
第8図 SK11



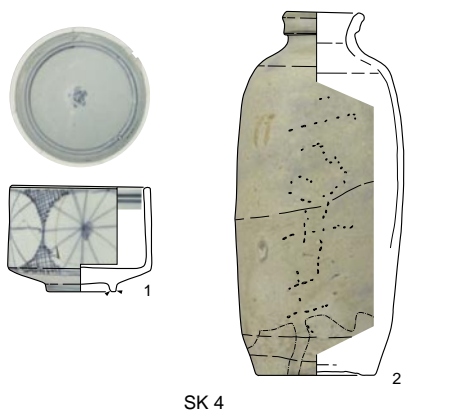
第9図 SK13・SK16・SD23



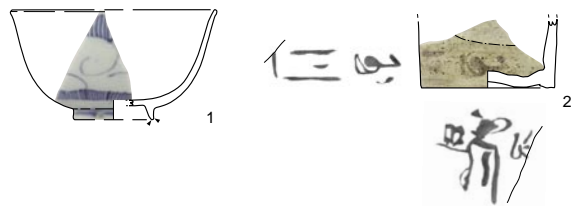
SD 1



SK 2



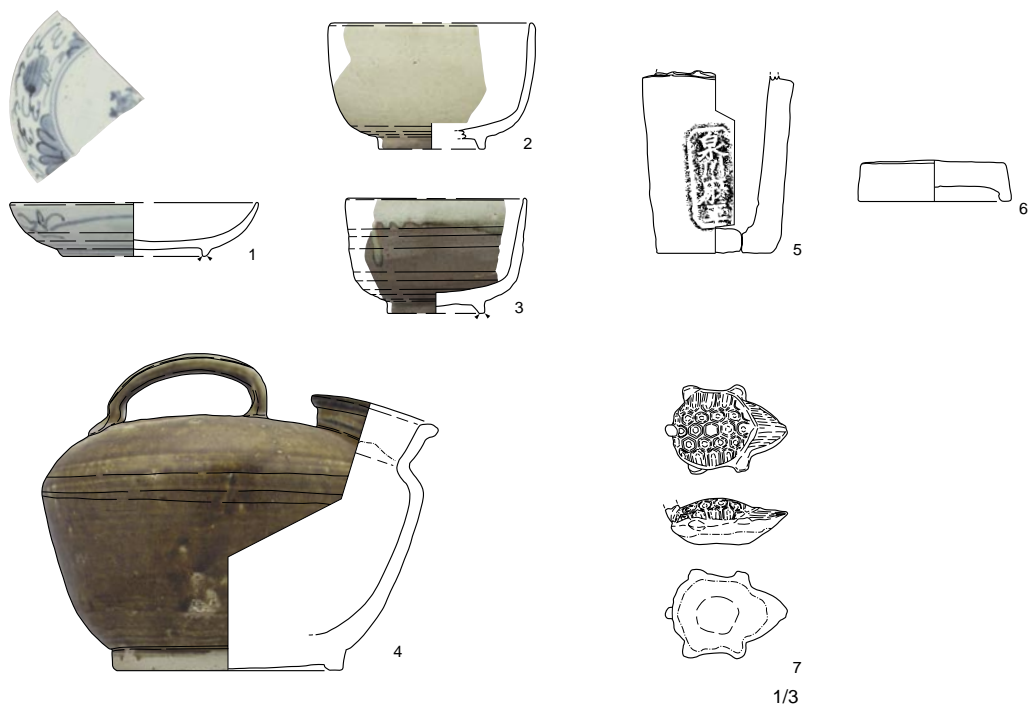
SK 4



SK 11



第10図 SD 1・SK 2・SK 4・SK 11



SK13



SB21



第 11 図 SK13・SB21

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきしょうさけんきゅうねんぼう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	4							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	東京大学埋蔵文化財調査室							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場Ⅱキャンパス内56号館							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とうきょうだいがくほんごうこう 東京大学本郷構 内の遺跡(本郷台 遺跡群)地震研 究所テレメタリ ング地震観測施設 地点	とうきょうとほんきょうく 東京都文京区 弥生1-1	13105	47	35° 42' 16" ~35° 42' 57"	139° 45' 47" ~139° 46' 15"	1996年4月16日 ~5月2日	308	東京大学地震 研究所テレメ タリング地震 観測施設地点 新営に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記 事項	
東京大学本郷構内 の遺跡 地震研究 所テレメタリング 地震観測施設地点	生活関連遺構	江戸時代	建物址 溝 地下室 土坑	4基 3基 1基 10基	陶磁器・土器 金属製品 石製品			

東京大学本郷構内の遺跡

山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告

2004

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本報告は東京大学山上会館龍岡門別館の建設に伴う発掘調査報告である。
2. 調査時から整理作業時での本地点の呼称は「本郷福利施設地点」（略称 HF）であり既出の年報、論文などでは「本郷福利施設地点」と記載されている。今回の報告作成時に「山上会館龍岡門別館地点」へ改称した。
3. 調査地点は東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷構内に所在している。
4. 本地点は本郷台遺跡群範囲内に位置している。
5. 調査面積は 593 m²である
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は武藤康弘である。
7. 本報告の編集は堀内秀樹の指導で香取祐一が行った。
8. 執筆者名は文末に記載した。
9. 発掘調査に伴う図面・写真・出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス内で運用・保存・管理している。
10. 発掘調査および報告作成にあたり下記の機関・方々から御協力・御教示を得た。明記して謝意を表したい。（敬称略）

藤井恵介 角田真弓 宮崎勝美 長谷川孝徳 大学院工学系研究科建築学研究室 広報室広報センター 施設部 大学院人文社会系研究科文学部考古学研究室 財前田育徳会・尊経閣文庫 石川県立歴史博物館 金沢市立玉川図書館 財江戸東京博物館 ㈱セビアス ㈱三浦工業

凡 例

1. 遺構の略号は以下の通りである。
SB：建物址 SD：溝 SK：土坑 SL：便所 SP：ピット SU：地下室 SX：性格不明
2. 本報告の遺構実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物の縮尺は基本的に1/4である。
例外は別途縮尺を記している。
3. 遺物番号は、本文、挿図で共通の番号を使用している。
4. 遺物実測図に使用している記号は以下のことを示す。
 - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表している。
 - ・┆—┆は口唇の口銹を表している。
 - ・中心線上下の破線は推定径を表す。
 - ・— —は断面を表す。
 - ・口唇部の┆—→┆は敲打痕を表す。
5. 本文中で記載した分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に準じた。

東京大学本郷構内の遺跡

山上会館龍岡門別館地点

発掘調査報告

目次

例言	137
凡例	138
I 調査の概要	
1 調査に至る経緯	140
2 調査の方法と経過	140
II 遺跡の位置と歴史的環境	141
III 検出された遺構	143
IV 出土遺物	166
V 研究編・加賀藩本郷邸表長屋の変遷	187
報告書抄録	201

I 調査の概要

1. 調査に至る経緯

東京大学ではかねてから本郷キャンパス内で福利施設の新営が計画されていた。本郷キャンパスは文京区 No.47「本郷台遺跡群」に指定されており、本地点においても遺構や遺物の存在が予想された。そこで施設部から確認調査の依頼を受けた埋蔵文化財調査室は、1994年4月15日に試掘調査を行った。その結果、建設予定地点には江戸時代から近代にかけての整地層、焼土層が認められ、比較的良好な状態で遺構・遺物が遺存していることが確認され、文京区教育委員会との協議の結果、事前調査が必要であると判断された。上記のような経緯をふまえ調査は1994年8月17日から10月19日まで行なわれ埋蔵文化財調査室の武藤康弘が担当した。(香取祐一)

2. 調査の方法と経過

調査の方法

建設予定地の全域 593 m²を調査対象とし、本地点の調査区範囲に設定した。調査区範囲の形状に沿い任意に 10 m × 10 m のグリッドを設定し、北西隅を基準とし、北から南へアルファベットを、西から東へアラビア数字を降順に附した。

調査経過

発掘調査は、試掘調査で確認された焼土層の上面まで重機による掘削を行い、第一次遺構確認面とし、順次遺構番号を設定し、検出・記録作業を行った。しかし、表土を取り除いた時点で調査区の南側および西側で地山であるローム層が検出されるなど、調査区全体で層位的に調査することはできなかった。そこで第一次確認面では調査区の広い範囲で検出された柱穴列の新旧関係に留意しながら調査を行った。第一次確認面の遺構の調査が終了後、ローム層上面まで掘削し、第二次遺構確認面とし調査を行った。(香取祐一)

II 遺跡の位置と歴史的環境

本地点は、本郷台地上に位置し、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が確認される本郷台遺跡群に含まれる。本郷台遺跡群全体の地理・歴史的環境は既出の「東京大学本郷構内の遺跡」^(註1)の報告書に詳しいので参照されたい。ここでは当地点付近の地理・歴史環境について述べたい。

本地点は東京大学本郷構内の南側に位置し、龍岡門付近に所在する。明暦の大火(1657)以後、江戸時代を通じて加賀藩邸内に属し、明治になり東京帝国大学の敷地となり、現在に至っている。参謀本部陸軍部測量局により明治16年に測量され、明治19年に発行された「東京北部」およびその原図である「五千分一東京図測量原図」から、本地点付近の地形を読みとると、南西から北東へ緩く下っていることが判明する。しかし本地点の北側20mの等高線は明らかに不自然な曲線を描いており、整地がなされ、平場が意識的に作られている状況が看取できる。さらに東側の道との比高差から、東京大学本郷構内が道に比べ高くなっている状況が推測できる。(香取祐一)

註1 東京大学本郷構内の遺跡『理学部7号館地点』1989、『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』1990、『医学部附属病院地点』1990、『山上会館・御殿下記念館地点』1990



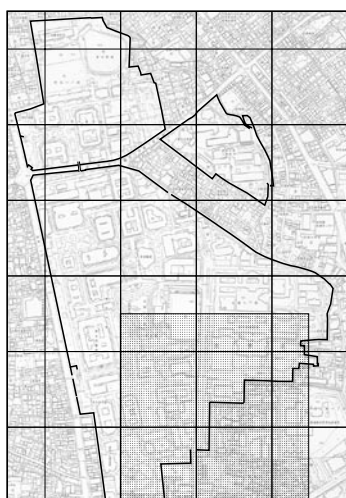
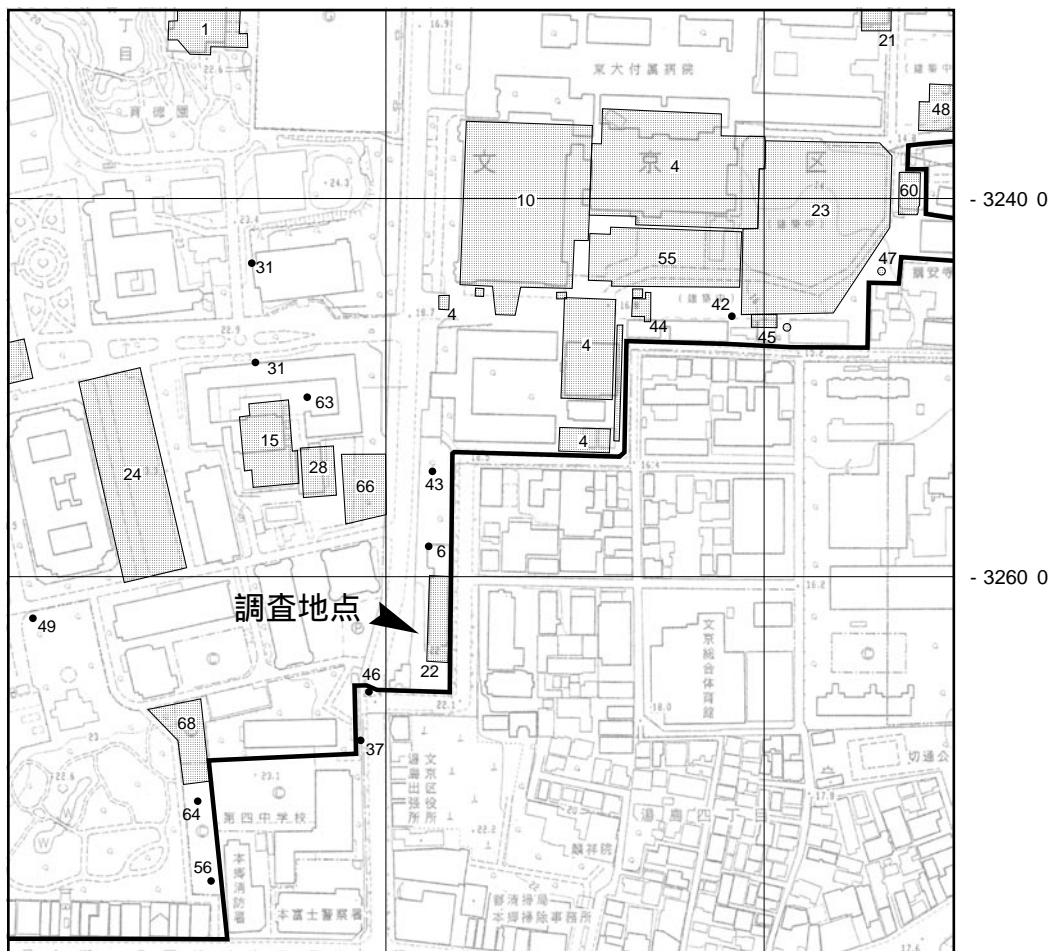
「東京北部」参謀本部陸軍部測量局作成東京五千分一 明治16年測量明治19年
版および同「五千分一東京図測量原図」より作成

第1図 調査地点の地形

- 6200

- 6000

- 5800



- 1 山上会館 (U)
- 4 医学部附属病院 (病中) (エネセン) (給水) (共同溝)
- 6 バス通り上水 (上水)
- 10 外来診療等 (HG)
- 15 薬学部新館 (YS)
- 21 医学部附属病院MRI-CT棟 (MRI)
- 24 医学部教育研究棟 (医研)
- 23 医学部附属病院病棟 (HW)
- 28 薬学部資料館 (FPS)
- 31 ATMネットワーク施設整備
- 46 龍岡門門衛所移築
- 37 屋外環境整備等工事龍岡門 - 附属病院
- 42 医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植
- 43 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK1)
- 44 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK2)
- 45 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK3)
- 47 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK4)
- 48 医学部附属病院看護婦宿舍II期 (HNII)
- 49 外灯整備工事1
- 55 医学部附属病院第2中央診療棟 (2中)
- 56 文系4研究所等暫定建物
- 60 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK6)
- 63 薬学部暫定建物
- 64 情報学環暫定建物
- 66 薬学部総合研究棟
- 68 インキュベーション施設

第2図 調査地点の位置

Ⅲ 検出された遺構

今回の調査では建物址5基、溝状遺構8基、地下室20基、土抗14基、便所1基、性格不明遺構1基が検出された。これらは調査区の広い範囲に分布していた焼土層を境に上下に大別でき、さらにはほぼ調査区全面に検出された、建物址の切り合い関係などにより4期に区分することができ、各期を下層より1～4期と命名した。以下各期の遺構について詳述する。

1期の遺構（附図1）

SU15（第4図 写真17） B-1グリッドに位置する。天井部を持つ地下室である。開口部の形状は崩落しているため不整形に検出されているが、本来は方形に近い形状を呈していたと思われる。開口部から垂直の縦坑が掘られ、その底面は室部底面より50cmほど高い段になっている。室部は東側に拡がり底面の形状はやや歪んだ長方形を呈し、北西角に南北60cm、東西40cmの底面より50cmほど高い段を有する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、工具痕が顕著に認められる。南西方向の壁には灯明具置きであろうか、壁龕状のくぼみをもつ。底面から残存している天井部までの高さは180～190cmである。17世紀後半の遺物が出土している。

SB25（附図1・第3図 写真25） A-1.B-1.C-1.D-1グリッドに位置する。南北方向に主軸を持つ。形状は円形から方形を呈し、確認面からの深さは50～60cm前後である。底面が比較的平坦なものが多いが、一部に柱穴跡と思われる深い掘りこみを有するものもある。合計8基検出されたが、攪乱されている部分もあるので全体で28mの間に11基存在したと思われる。北端および西側は調査区外に続いている可能性が考えられる。各遺構の間隔は中心部で2.5～2.8mである。17世紀後半の遺物が出土している。

SK30（附図1・第3図 写真25） A-2グリッドに位置する。直径180cmの円形を呈する。断面形状は逆凸形で二段になっている。SK32と形状に類似点が認められる。

SB31（附図1 写真25） 調査区東側全面に渡り検出された。遺構の南北軸はN-1°-Eである。平面形は概ね1～1.5mの円形で、確認面からの深さは20～50cmと比較的浅く、底面形状は平らなものが多い。遺構の間隔は中心位置で1m～2mで等間隔ではない。この遺構の性格としては西側に幅を持たないことから、建物址とは考えがたく、塀址などの遺構の可能性が考えられる。

SK32（附図1 写真25） A-2グリッドに位置する。北側が調査区外になり、全体は検出されていないが、南北300cm、東西210cmほどの楕円形を呈する。断面形状は逆凸形で二段形状を持つ。SB31より新しい。SK30と遺構の形状が類似点しており、何らかの関連性を有する可能性が考えられる。

SK33 (附図 1 写真 25) A-2.B-2 グリッドに位置する。上部が攪乱されている。東側が調査区外になり、全体の形状は判断できない。埋土は暗褐色土で、淡褐色粘土ブロックが含まれている。

SK35 (附図 1 写真 25) B-2.C-2 グリッドに位置する。東側が調査区外になり、全体の規模・形態は不明である。

SD38 (附図 1・第 3 図 写真 25) B-1.B-2.C-1.C-2 グリッドに位置する。幅 40～50 cm の溝状遺構で、断面の形状は逆台形状を呈する。排水施設ないし間仕切りなどの性格を持つことが考えられるが、他遺構との関連性は判別できなかった。SB4 より古い。

SK41 (第 5 図 写真 25) F-1 にグリッドに位置する。西側が調査区外になるため全体の形状は判断できない。底面から壁は垂直に立ち上がる。SK42 より古い遺構である。17 世紀中葉の遺物が出土している。

SK42 (第 5 図 写真 25) F-1 グリッドに位置する。西側は調査区外に広がっている。壁は底面から緩やかに段を有し立ち上がる。壁および底面は平滑ではなく不整形である。採土抗の可能性が考えられる。SU43 より古い。17 世紀後半の遺物が出土している。

SD44 (附図 1・第 3 図 写真 25) F-1.F-2 グリッドに位置する。SB31 と主軸を大きく異にする溝状遺構である。断面形は南側が深く、北側が高く段を有している。SB4 より古い。

SU47 (附図 1 写真 25) E-2 にグリッドに位置する。大部分を SD1 に攪乱されるため、底面の形状は判別できない。地下室と思われる。17 世紀後半の遺物が出土している。

SK49 (附図 1 写真 25) C-1.C-2 にグリッドに位置する。南北 60 cm 東西 150 cm の長方形を呈する。遺存深度は 30 cm である。SB4 より古い。

2 期の遺構 (附図 2)

SB4 (附図 2 写真 25) 調査区の広い範囲に検出されている。遺構の南北軸は南北 N-1°-E である。遺構の間隔は中心部で約 180 cm である。遺構の多くは直径 100 cm 以下の円形を呈する掘り方が残されたのみであったが、一番西側の並びの一部には 50 cm 四方の石材が遺存しており、上面を水平に据えられ柱材の基礎になっていたと思われる。礎石の上面は被熱した痕跡が認められ、火災により焼失した建物址と思われる。

SU16 (第 6 図 写真 25) B-1 グリッドに位置する。上部が攪乱を受けている。開口部から垂直

に掘りこまれ、室部は東側へと広がっている。室部は南北 190 cm、東西 130 cm の長方形を呈している。天井部の高さは底面から約 100 cm と推定される。元禄 16 (1703) 年の火災で被熱したと思われる遺物が出土している。

SU21 (第7図 写真20) C-1 グリッドに位置する。遺構の全体は検出できていない。開口部から垂直に縦坑が掘られ、室部は東側、西側へと広がっている。底面から天井部までの高さは 1.6 m である。底面はフラットで、壁も丁寧に調整されている。17 世紀後半の遺物が出土している。

SL22 (第8図 写真21) B-1 グリッドに位置する。埋土の最上部には焼土を含んでいる。2 層の青灰色粘質土と 3 層の暗褐色土の間には木枠などが存在した可能性が考えられる。便所跡と思われる。

SU23 (第9図 写真25) D-1.E-1 グリッドに位置する。遺構全体は検出できていない。南北 120 cm、東西 130 cm のやや歪んだ隅丸方形の開口部を有する縦坑が底面に至る。天井部までの高さは 130 cm である。元禄 16 年の火災で被熱したと思われる遺物が出土している。

SD28 (附図2 写真23・24) E-2.F-2 グリッドに位置する。溝状遺構である。間知石、切石を使用している。上部に石を乗せていることから暗渠状の排水施設と推定される。SD1 より古い。

SD36 (附図2 写真25) C-1 グリッドに位置する。北端・南端とも他遺構に攪乱されており、全体の規模は不明である。遺構の規模は東西 80 cm ほどで確認面からの深さは約 10 cm である。埋土に焼土・炭化物が多量に含まれていたことから火災の影響を受けていると思われる。

SK40 (附図2 写真25) A-1 グリッドに位置する。南北 100 cm、東西 70 cm の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 cm である。

SU43 (第5図 写真25) F-1 グリッドに位置する。遺構全体は検出できなかった。断面形状は上部が開いた袋状を呈すると思われる。地下室であろう。SK42 より新しい。17 世紀後半の遺物が出土している。

3 期の遺構 (附図2)

SD1 (第10・11・12図 写真1・2・3) E-1.E-2 グリッドに位置する石組み溝である。調査区を横切る様な形で検出された。調査区外の東側、西側とも遺構は続いていると思われる。遺構の軸は N-93°-E である。底面に延べ石を並べ両側から不揃いの石材で挟み込むような形態で検出された。一部間知石を使用している。遺構の中央部に升と思われる施設を伴うことから、排水施設と考えら

れる。遺構の東側では上部に蓋様に石材をかぶせ、暗渠として使用していたと思われる。

SD2 (第13・14・15図 写真4・5・6) C-1.C-2グリッドに位置する。石組み溝である。西側が攪乱されているが、調査区外東側、西側ともに延長しているものと思われる。遺構の軸はN-92°-Eで、中央部に升を有し、SD1同様排水施設と考えられる。底面に50cm四方の石材を並べ、両側から不整形の石材および間知石で挟み込むように導水部が作られる。上部に不揃いの石材、一部間知石を乗せて蓋石として用い、暗渠にしている。

SU3 (第16図 写真3) E-1グリッドに位置する。南北1m、東西1.3mの方形の開口部を有し、室部は北側に広がる。底面はフラットで天井部は50～100cmと傾斜して立ち上がっている。底面、壁とも平滑に仕上げられている。18世紀前半の遺物が出土している。

SD6 (第17図 写真11) A-1.A-2グリッドに位置する石組み溝である。遺構全体は検出できていない。間知石、切石などを使用して作られた排水施設と考えられる。遺構の東側はSD1、SD2と同様上部に石材が遺存しており、暗渠になっていたと推測される。

SU7 (附図2・第18図 写真25) C-1グリッドに位置する地下室である。確認面から底面までの深さは140cmで断面形状は袋状を呈する。18世紀後半の遺物が出土している。

SU8 (附図2・第18図 写真13) B-1.C-1グリッドに位置する。遺構の西側は調査区外へ続いていると思われ、全体は検出できていない。埋土中に、崩落と思われるロームブロックを含んでいることから天井を有する地下室と考えられる。18世紀後半の遺物が出土している。

SU9 (附図2・第18図 写真14) C-1グリッドに位置する。遺構の西側は調査区外に続いていると思われる。埋土中に崩落と思われるロームブロックを含むことから、天井部をもつ地下室と考えられる。

SU11 (第19図 写真15) D-1グリッドに位置する地下室である。南北100cm、東西110cmの方形の開口部をもつ。底面形状は南北150cm、東西130cmの方形で、平滑に整形されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面から天井部までの高さは80cmである。18世紀後半の遺物が出土している。

SU12 (第20図 写真16) C-1グリッドに位置する。南北90cm、東西120cmの方形の開口部を持つ。室部は開口部より南側と西側に広がっている。底面、壁とも平滑に仕上げられている。18世紀前半の遺物が出土している。

SU14 (第21図 写真25) B-1グリッドに位置する。遺構全体は検出できていない。上部が攪乱されているため確認できないが、おそらく天井部を持つ地下室であろう。壁は垂直に近く、やや内傾しながら立ち上がる。

SD19 (附図2 写真25) E-1.F-1グリッドに位置する。幅40cmで南北方向に軸を持つ溝状遺構である。確認面からの深さは30～40cmで、底面は南側に傾斜している。18世紀初頭の遺物が出土している。

SU20 (第22図 写真19) D-1グリッドに位置する。遺構の西側は調査区外になるため検出できていない。開口部の南側は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。北側は不整形に張り出しており、開口部直下の底面より5cmほど高くなっている。室部から天井へは傾斜しながら立ち上がる。底面より宝永のテフラが検出されている。

SU24 (第23図 写真25) E-1グリッドに位置する。西側は調査区外に続いている。確認面からの深さは210cmで北側は底面からやや内傾しながら立ち上がる。埋土に天井部の崩落と思われるロームブロックを含んでいる。地下室と思われる。

SU26 (第24図 写真22) E-1.F-1に位置する。遺構全体は検出できていない。平面形状は不整形で全体は検出できていない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は約50cmの段差を有し東側が高くなっている。西側の低くなった底面に深さ3～10cmほどの窪みを持つ。柱穴が自立するほどの深さではないので天井を押さえる柱などが存在していた可能性もある。

SU29 (附図2 写真25) B-1グリッドに位置する。調査区に西端で検出された。全体は検出できていない。確認面からの深さは160cmである。

SB34 (附図2 写真25) 調査区の全体に検出された。平面形は直径80～90cmの円形を呈している。遺構の間隔は中心部で1.8mである。遺構の南北軸はN-2°-Eである。

SU46 (附図2 写真25) E-1に位置する。調査区の西端で遺構の一部が確認できた。地下室と思われる。

SK48 (第25図 写真25) E-1グリッドに位置する。南北170cm、東西160cmの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは110cmで、壁は垂直に近く立ち上がる。SX5の直下であり、SX5より古い遺構である。

4 期の遺構 (附図 2)

SX5 (第 26 図 写真 10) E-1 グリッドに位置する。南北に軸を持つ。方形の延べ石状の石材を垂直に立てた状態で検出された。

SK10 (附図 2 写真 25) D-1 グリッドに位置する。南北 100 cm、東西 75 cm の長方形を呈する。底面の四隅の付近に 20 cm から 50 cm 深さをもつピットを有する。

SK18 (第 27 図 写真 25) F-1 グリッドに位置する。南北は遺存部分で 80 cm、東西は 70 cm。北側を他遺構に切られる。本来は南北方向に長軸を有する長方形であったと推測される。確認面からの深さは 30 cm である。底面にピットを有している。

SK45 (附図 2 写真 25) E-1 グリッドに位置する。南北 100 cm、東西 70 cm の長方形を呈する。底面に二カ所、ピットを有している。

SK51 (附図 2 写真 25) D-1 グリッドに位置する。上部が攪乱されているが、SK10 に類似した形状を有していたと思われる。ピットが 4 ヶ所検出された。このピットを隅に有する方形の遺構であったと推測される。

所属時期不明の遺構

SU13 (附図 1 写真 25) D-1 グリッドに位置する。調査区の西端に遺構の一部を検出できた。遺構全体の規模は不明である。遺物は出土していない。

SU17 (附図 1 写真 25) A-1.B-1 グリッドに位置する。遺構の一部を検出できたに過ぎない。地下室と思われるが遺構全体の規模は不明である。遺物は出土していない。

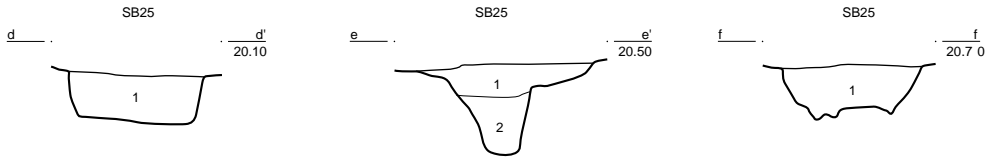
SK37 (附図 1 写真 25) C-2 グリッドに位置する。遺存部で南北 100 cm、東西 80 cm の方形を呈する。確認面からの深さは 5 cm 程度の浅い遺構である。南西および南東隅にそれぞれに石材が検出できた。遺構の性格、所属時期などは不明である。遺物は出土していない。

SB50 (附図 1 写真 25) D-1.E-1 グリッドに位置する。SB4、SB34 に接しているが切り合い関係は確かめられなかった。石を据え付けたものもみられ、何らかの建物址と考えられるが確定はできない。遺構間の距離も一定ではない。(香取祐一)

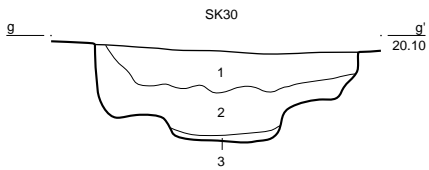
第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

遺構対応表

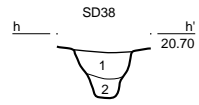
No.	種類	Grid	遺構PLNo	遺物PLNo	火災	所属時期	切り合い
SD1	溝	E-1.E-2	第10図・第11図・ 第12図	第28図		3	
SD2	溝	C-1.C-2	第13図・第14図・ 第15図	第28図		3	
SU3	地下室	E-1	第16図	第28図・第29図		3	
SB4	建物	A-1.B-1.C- 1.D-1.E-1.F- 1.B-2.C-2.D- 2.E-2.F-2	附図2・第17図		○	2	4>38.4>44.4 >49
SX5	不明	E-1	第26図			4	5>48
SD6	溝	A-1.A-2	第17図			3	
SU7	地下室	C-1	附図2・第18図	第29図		3	
SU8	地下室	B-1.C-1	附図2・第18図	第29図		3	
SU9	地下室	C-1	附図2・第18図	第30図		3	
SK10	土坑	D-1	附図2	第30図		4	
SU11	地下室	D-1	第19図	第30図・第31図		3	
SU12	地下室	C-1	第20図	第31図・第32図		3	
SU13	地下室	D-1	附図1			不明	
SU14	地下室	B-1	第21図			3	
SU15	地下室	B-1	第4図	第32図・第33図		1	
SU16	地下室	B-1	第6図	第34図		2	
SU17	地下室	A-1.B-1	附図1			不明	
SK18	土坑	F-1	第27図	第34図		4	
SD19	溝	E-1.F-1	附図2	第34図		3	
SU20	地下室	D-1	第22図	第34図		3	
SU21	地下室	C-1	第7図	第34図		2	
SL22	便所	B-1	第8図			2	
SU23	地下室	D-1.E-1	第9図	第35図		2	
SU24	地下室	E-1	第23図	第35図		3	
SB25	建物	A-1.B-1.C- 1.D-1	附図1・第3図			1	
SU26	地下室	E-1.F-1	第24図	第35図		3	
SD28	溝	E-2.F-2	附図2			2	
SU29	地下室	B-1	附図2	第35図		3	
SK30	土坑	A-2	附図1・第3図			1	
SB31	建物	B-2.C-2.D- 2.E-2.F-2	附図1			1	32>31
SK32	土坑	A-2	附図1	第36図		1	32>31
SK33	土坑	A-2.B-2	附図1			1	
SB34	建物	A-1.B-1.C- 1.D-1.E-1.F- 1.B-2.C-2.D- 2.E-2.F-2	附図2	第36図		3	
SK35	土坑	B-2.C-2	附図1			1	
SD36	溝	C-1	附図2	第36図	○	2	
SK37	土坑	C-2	附図1			不明	
SD38	溝	B-1.B-2.C- 1.C-2	附図1・第3図			1	4>38
SK40	土坑	A-1	附図2			2	
SK41	土坑	F-1	第5図			1	43>42>41
SK42	土坑	F-1	第5図	第36図		1	43>42>41
SU43	地下室	F-1	第5図	第36図		2	43>42>41
SD44	溝	F-1.F-2	附図2・第3図			1	4>44
SK45	土坑	E-1	附図2	第37図		4	
SU46	地下室	E-1	附図2			3	
SU47	地下室	E-2	附図1	第37図		1	
SK48	土坑	E-1	第25図			3	5>48
SK49	土坑	C-1.C-2	附図1			1	4>49
SB50	建物	D-1.E-1	附図1			不明	
SK51	土坑	D-1	附図1			4	



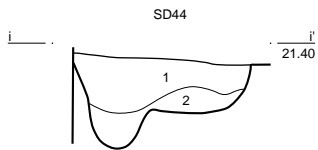
- SB25
 1 暗黄褐色土 (ロームブロック・小円礫含)
 2 褐色土 (ローム粒含)



- SK30
 1 暗灰褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
 2 暗黄褐色土 (ロームブロック含)
 3 黒褐色土 (ローム粒少含)



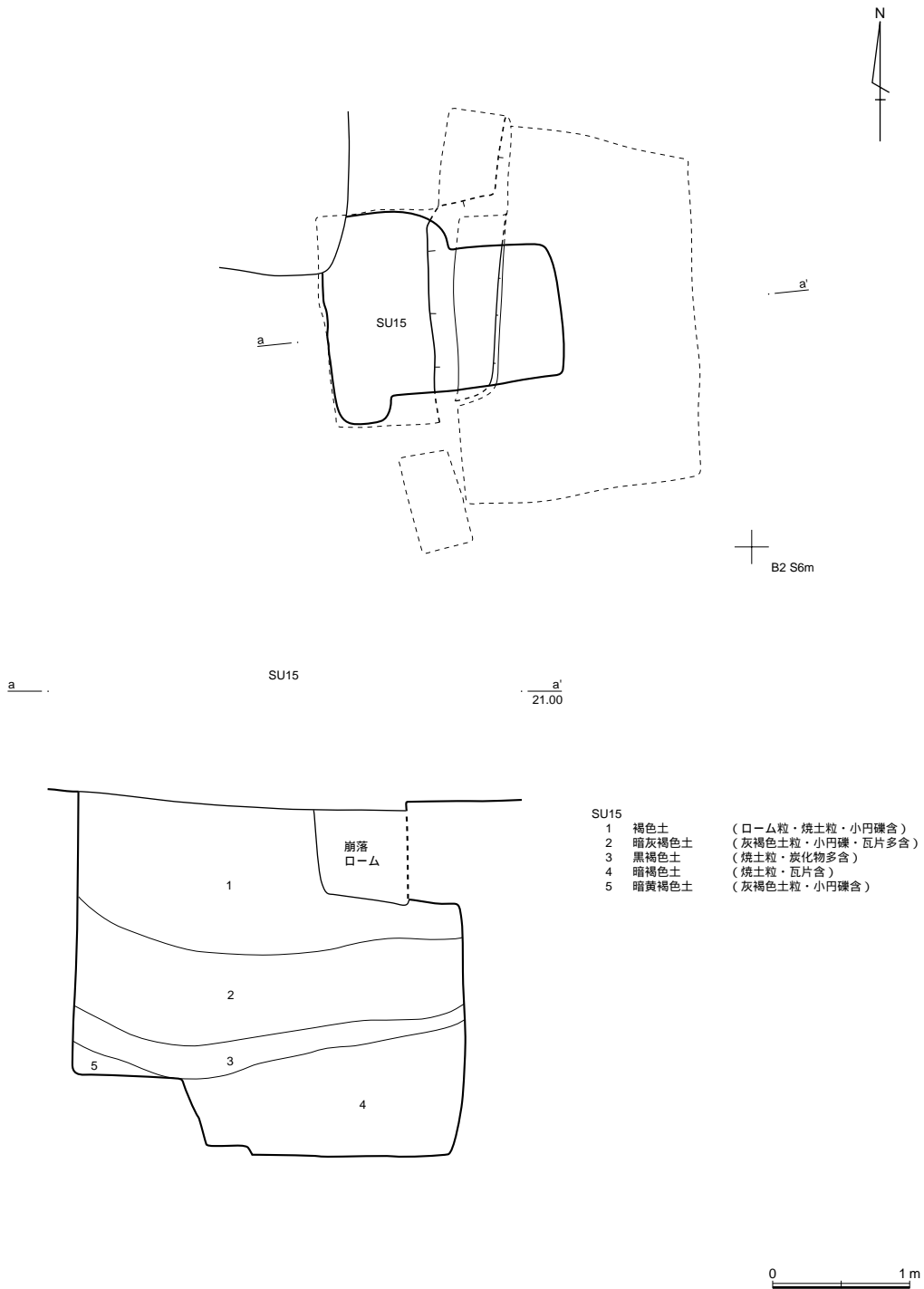
- SD38
 1 暗黄褐色土 (ローム粒含)
 2 暗黄褐色土 (灰褐色土粒)



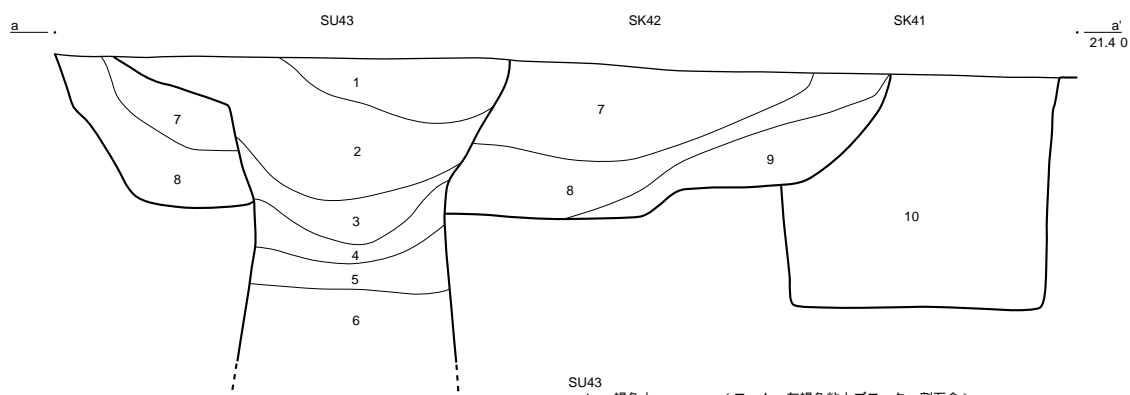
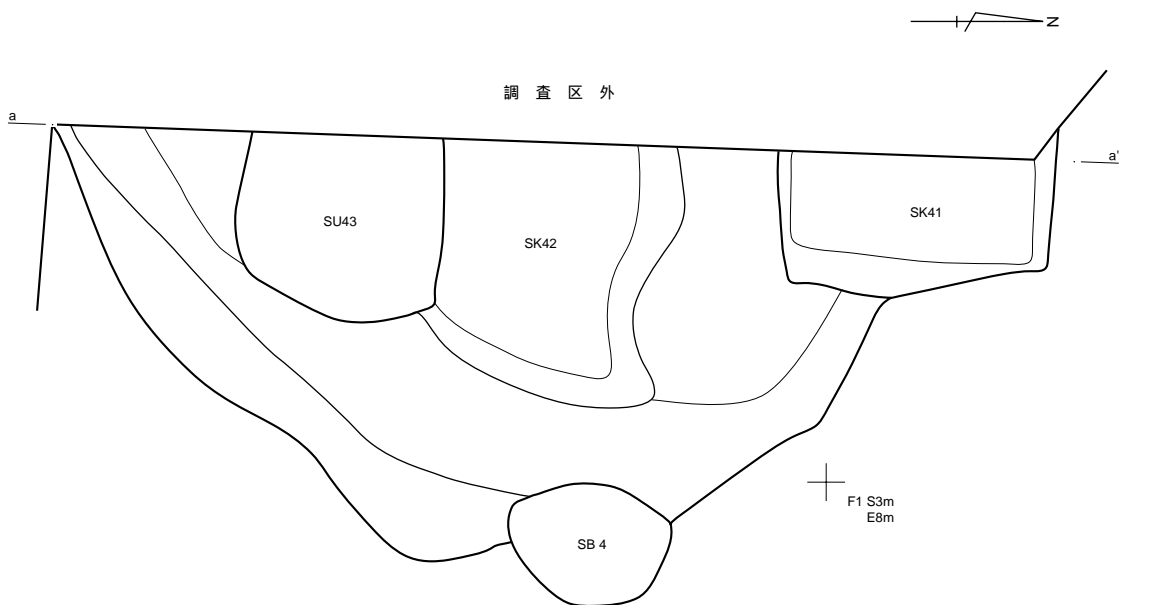
- SD44
 1 黒褐色土 (ローム粒・褐色土粒含)
 2 褐色土 (ローム粒微含)



第 3 図 SB25・SK30・SD38・SD44



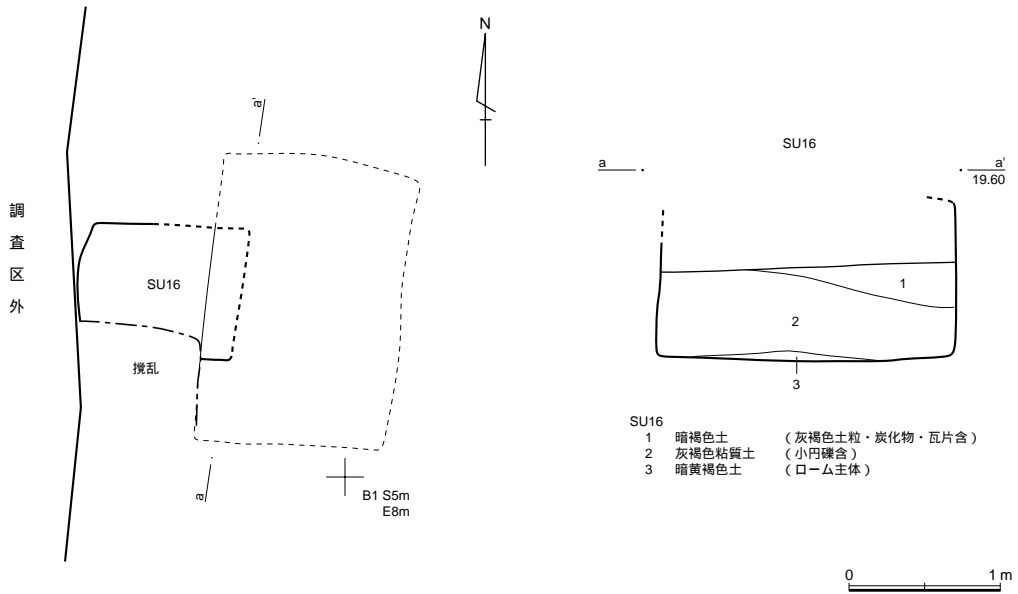
第4図 SU15



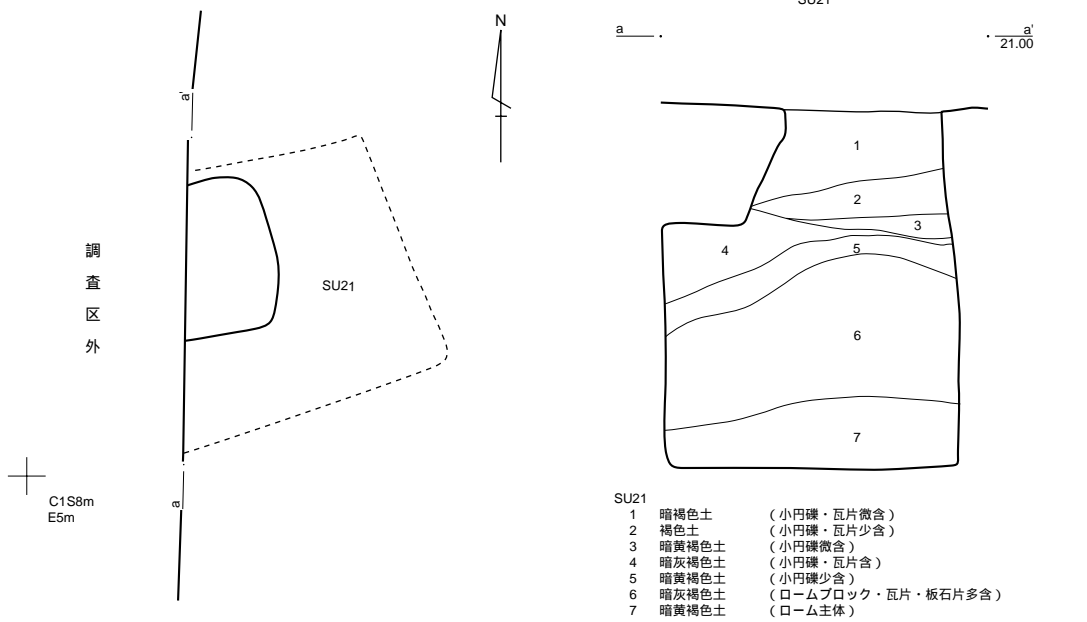
- | | |
|----------|---------------------|
| SU43 | |
| 1 褐色土 | (ローム・灰褐色粘土ブロック・割石含) |
| 2 暗灰褐色土 | (焼土粒・灰褐色粘土粒・瓦片) |
| 3 褐色土 | (ローム粒・焼土粒含) |
| 4 灰褐色土 | (ローム粒含) |
| 5 褐色土 | (ローム粒・焼土粒・炭化物含) |
| 6 暗灰褐色土 | (瓦片・割石含) |
| SK42 | |
| 7 暗灰褐色土 | (ローム粒少含) |
| 8 暗灰褐色土 | (ローム粒・小円礫少含) |
| 9 暗黄褐色土 | (ロームブロック含) |
| SK41 | |
| 10 暗黄褐色土 | (ロームブロック・灰褐色土ブロック含) |

第 5 図 SK41・SK42・SU43

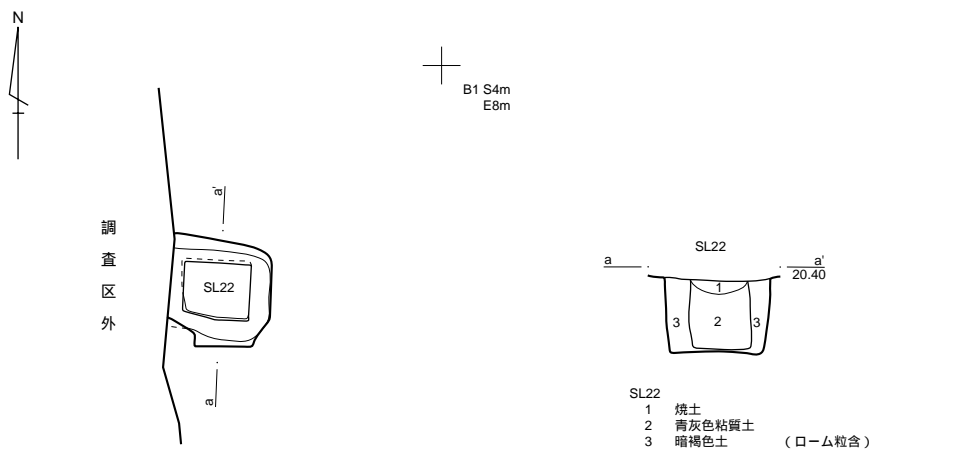
0 1m



第6図 SU16

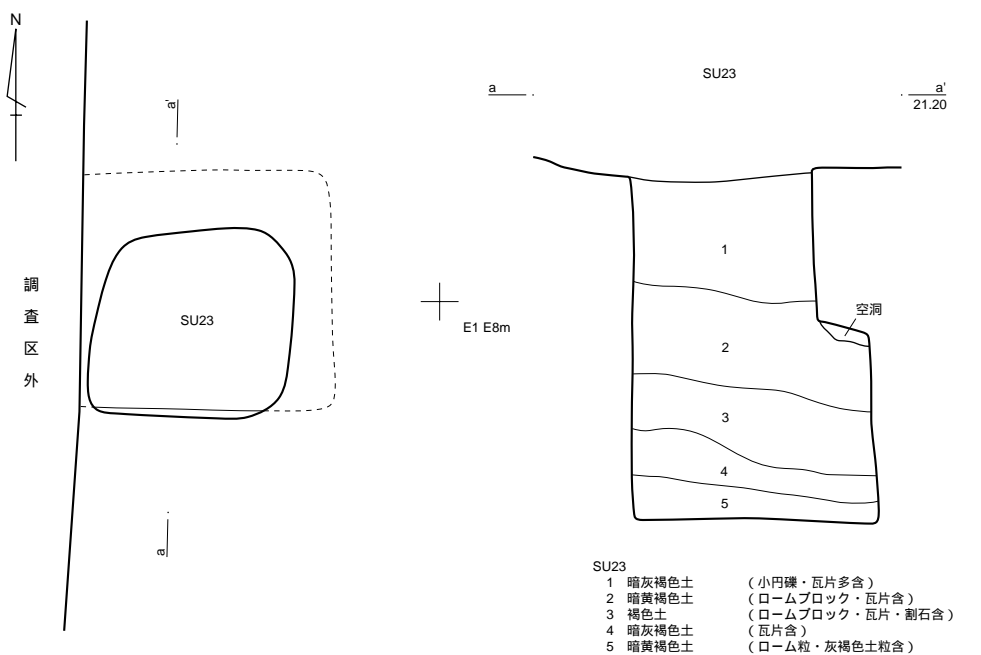


第7図 SU21



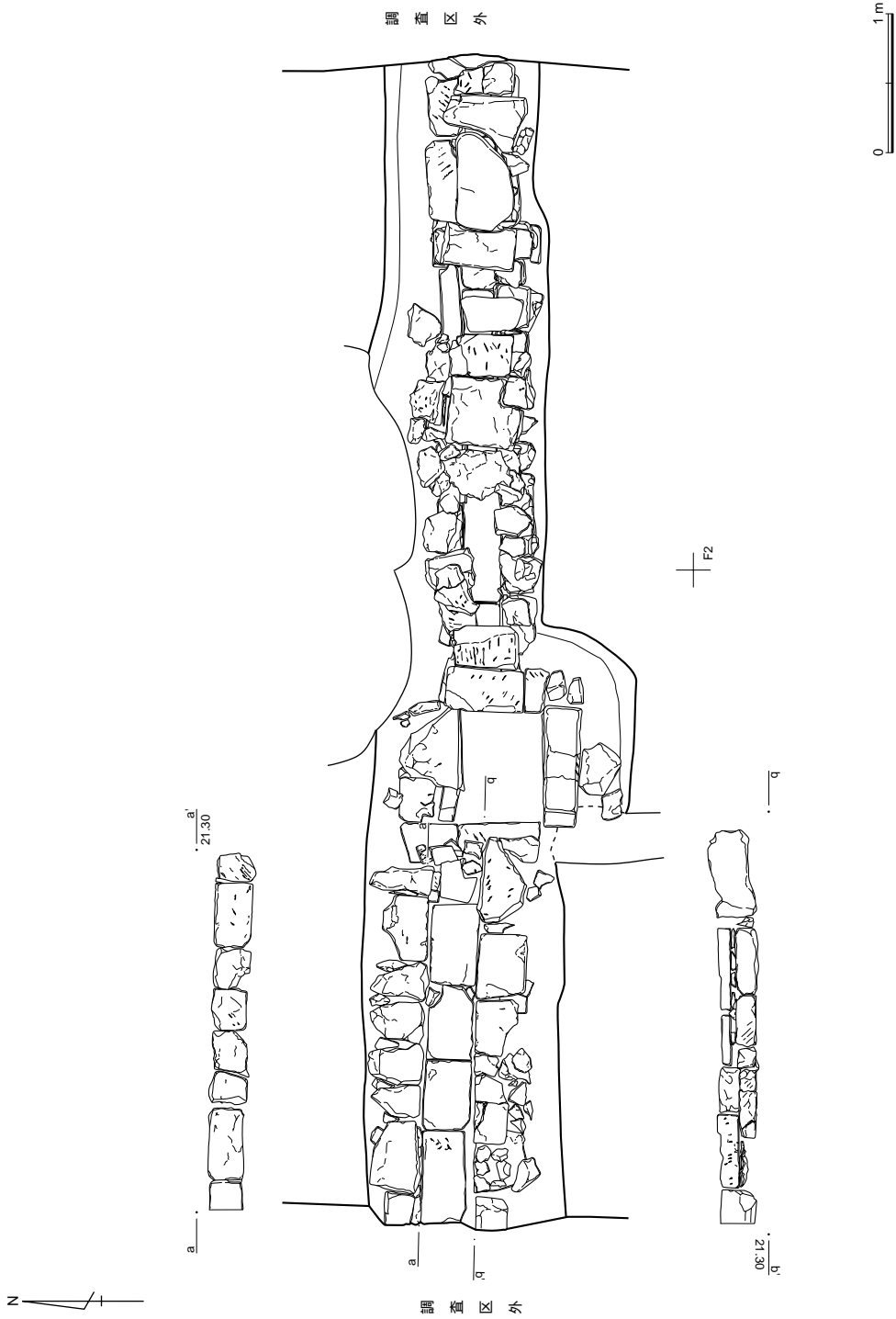
第 8 図 SL22

0 1 m

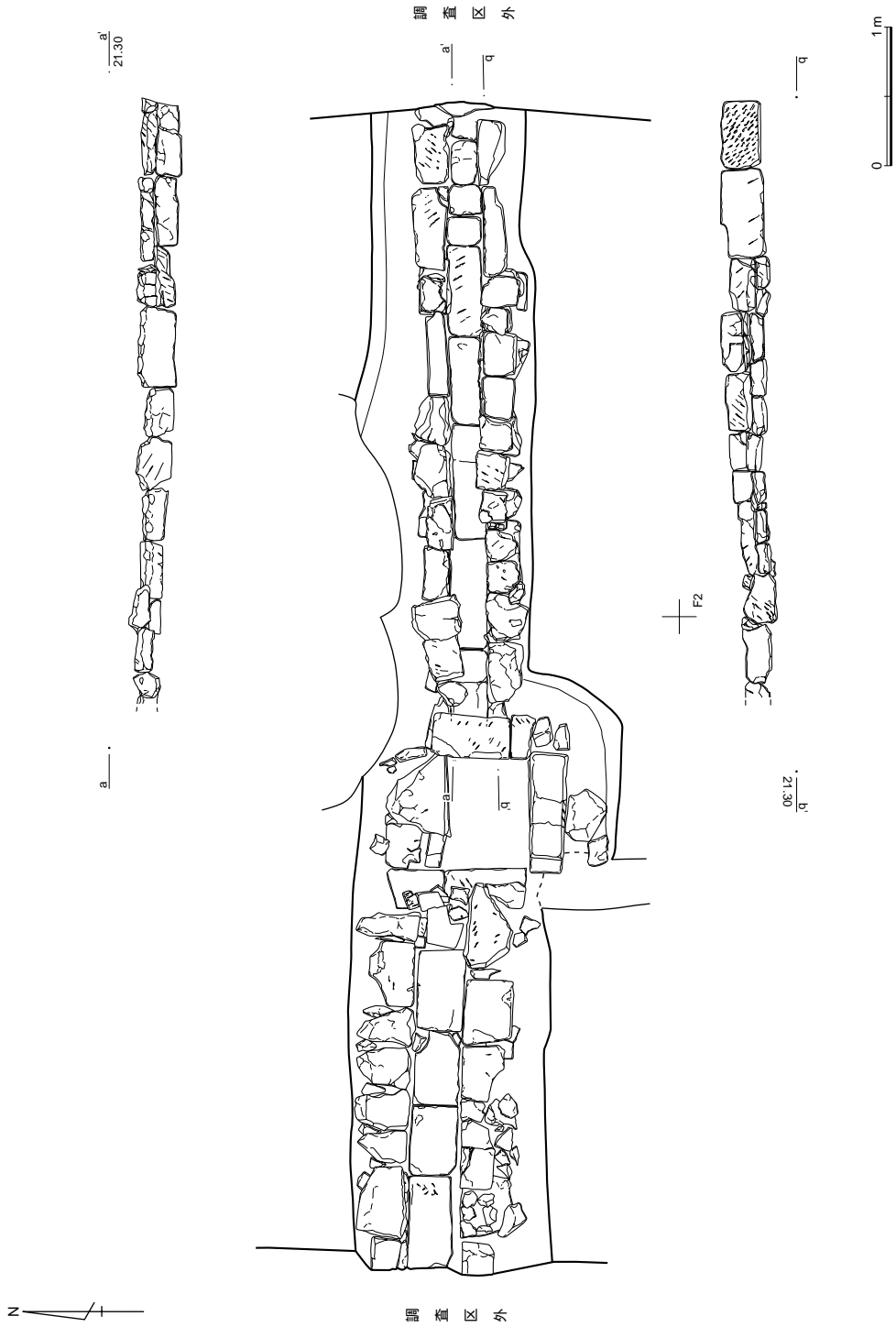


第 9 図 SU23

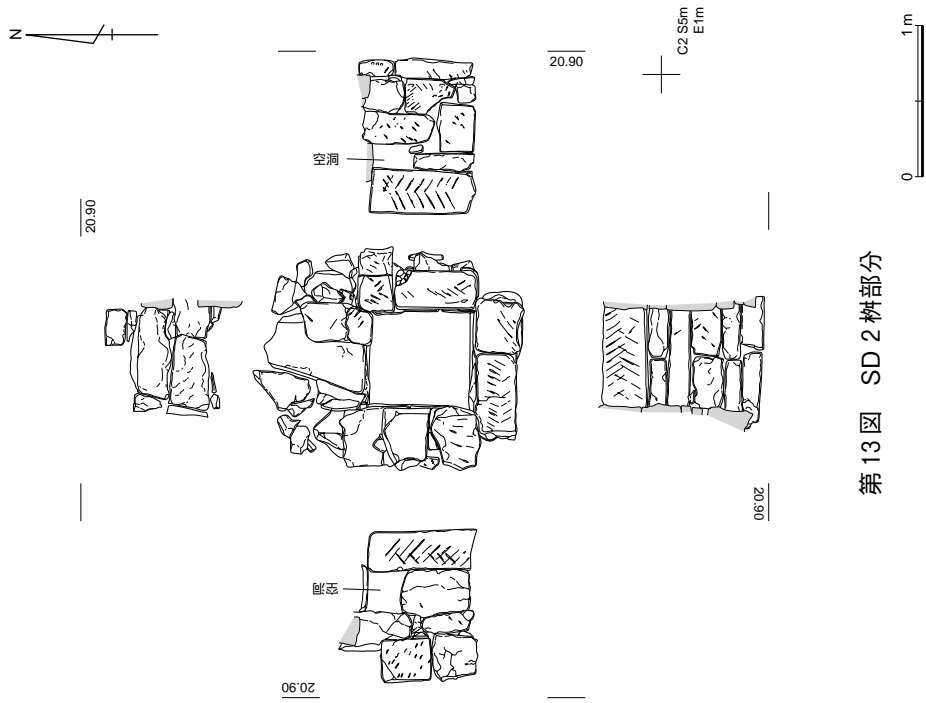
0 1 m



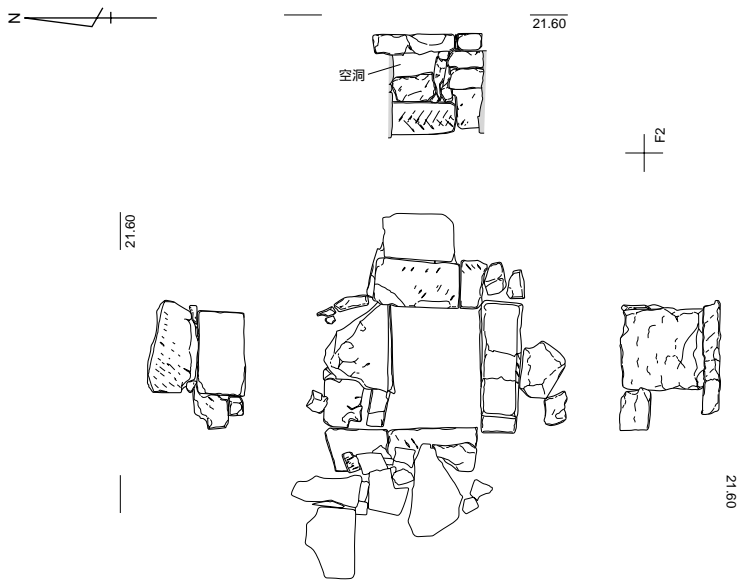
第10図 SD 1 上部



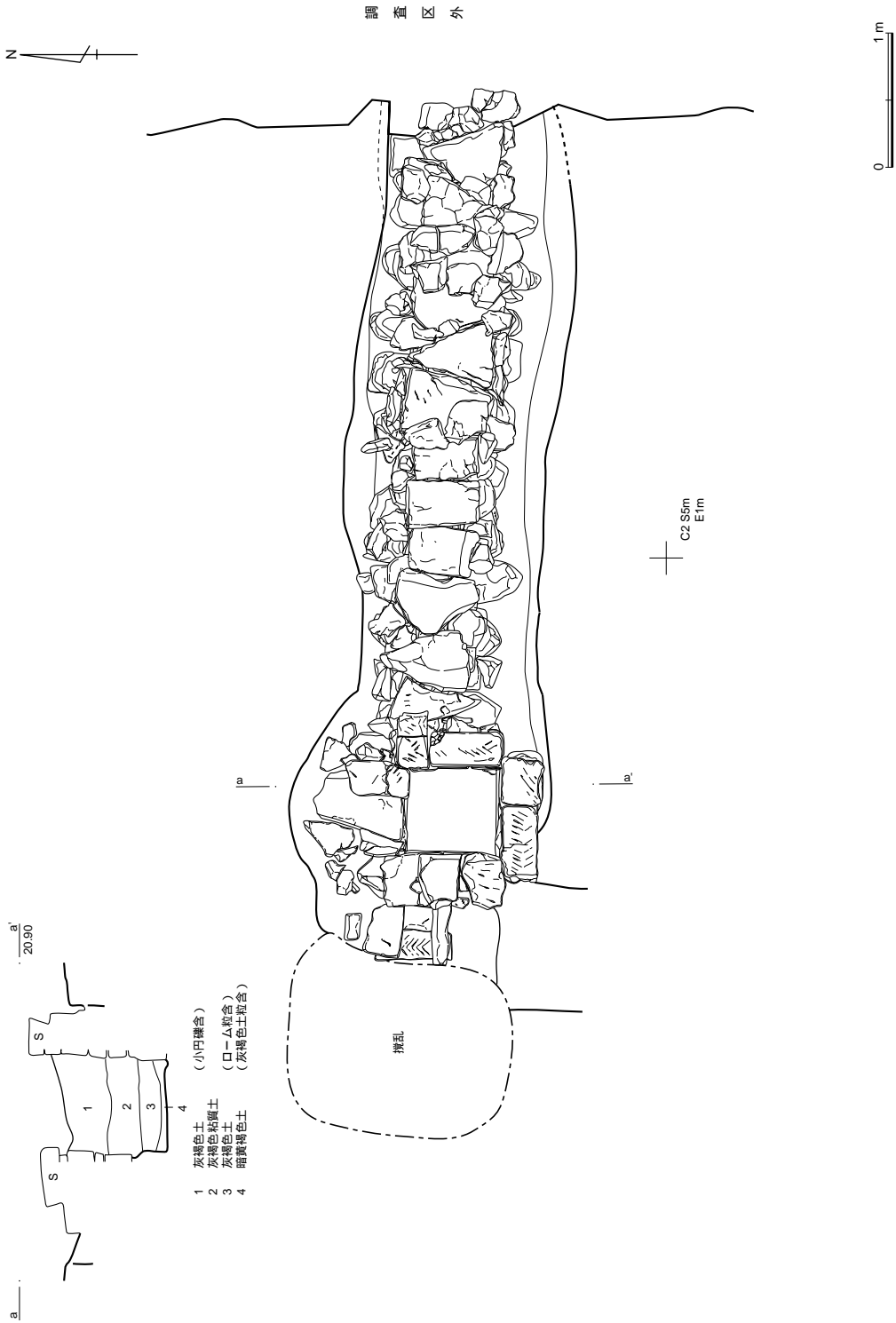
第11図 SD 1 下部



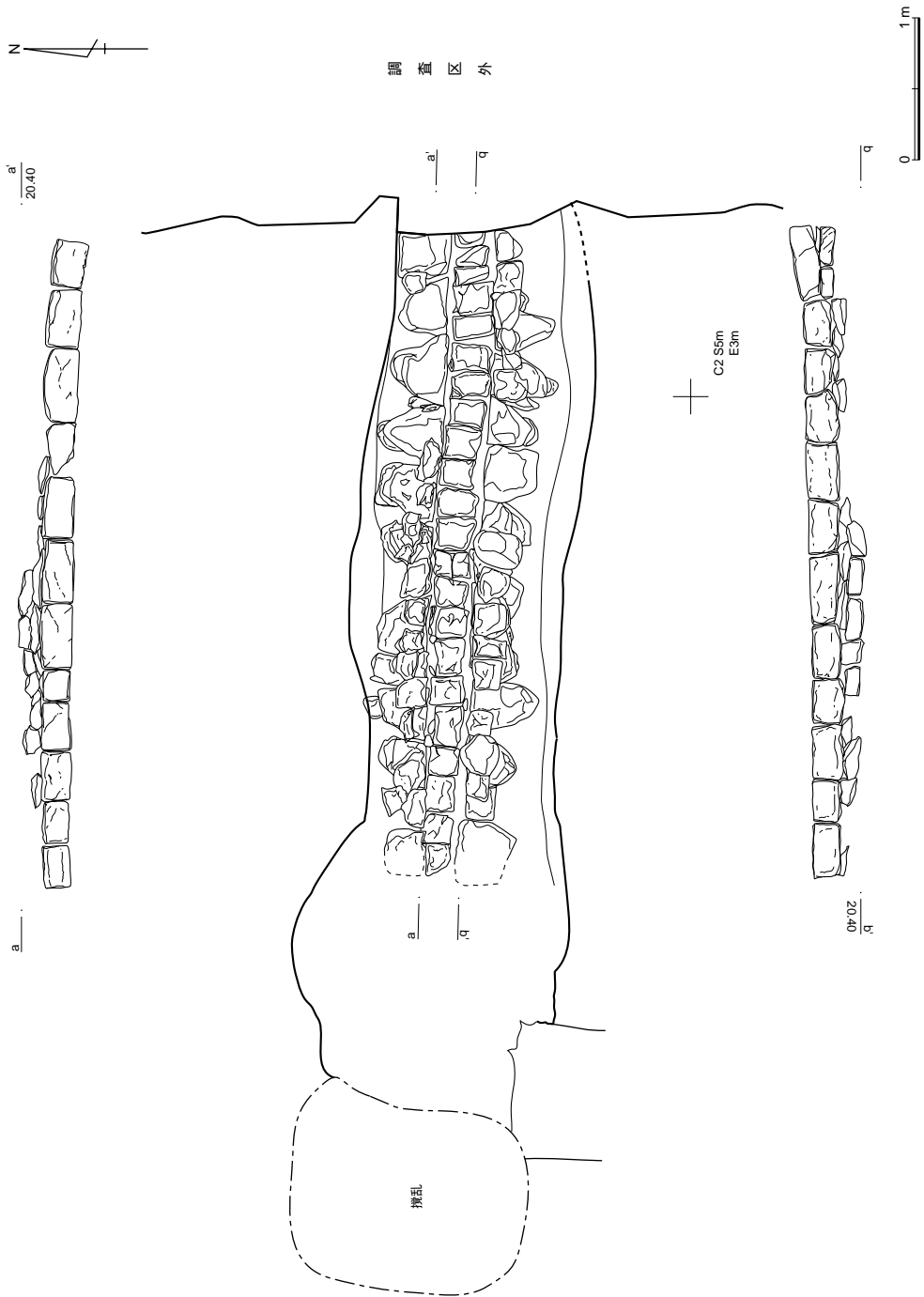
第13図 SD 2 柵部分



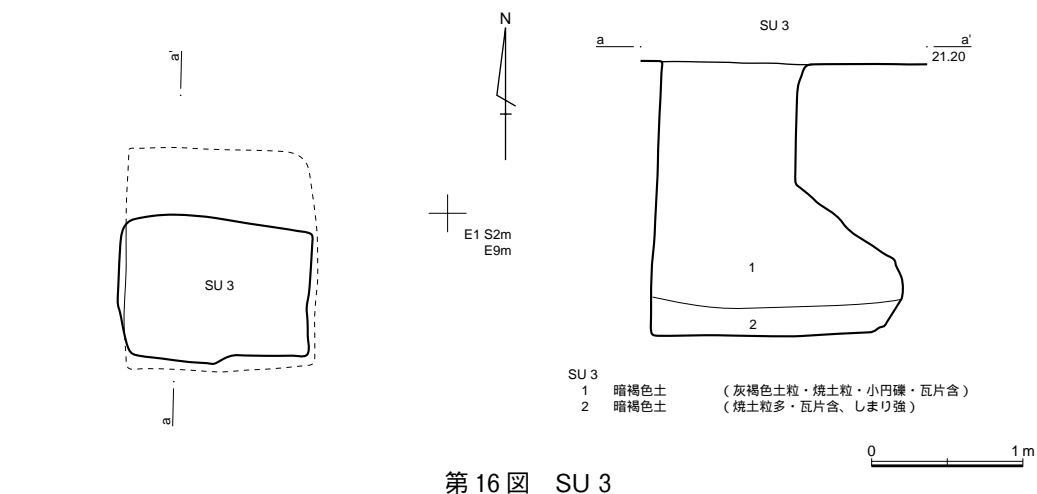
第12図 SD 1 柵部分



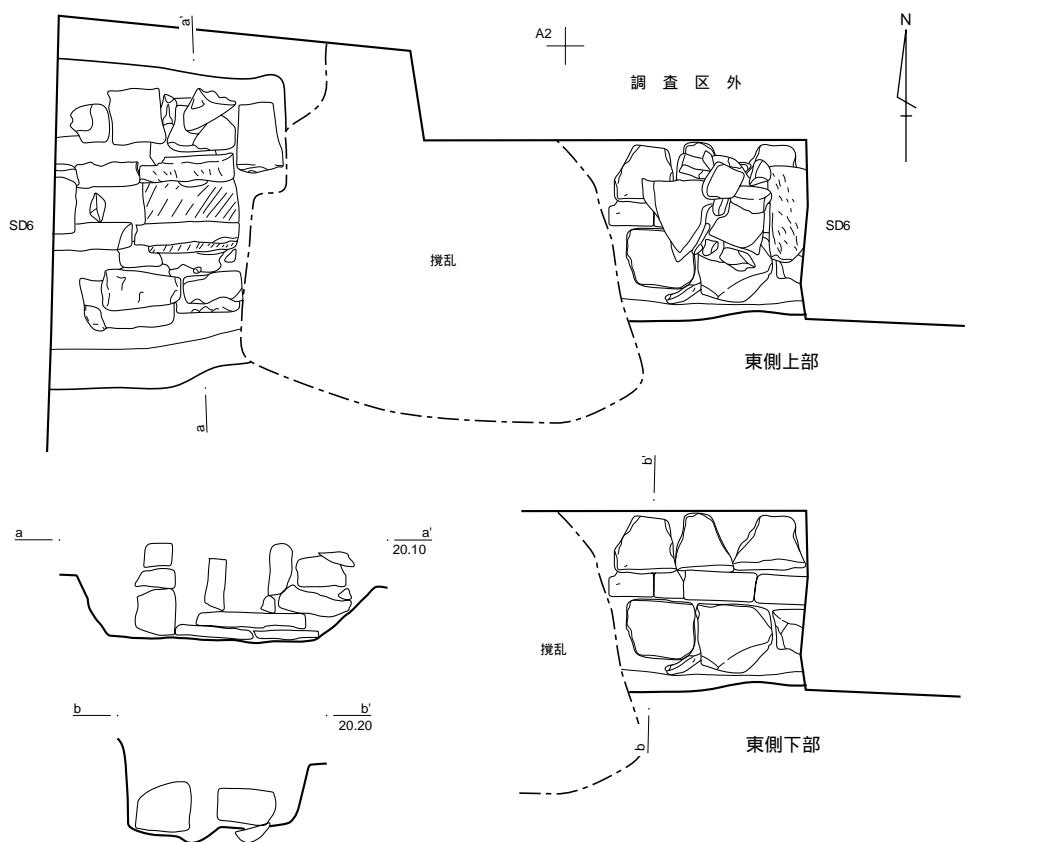
第 14 図 SD 2 上部



第15図 SD 2 下部

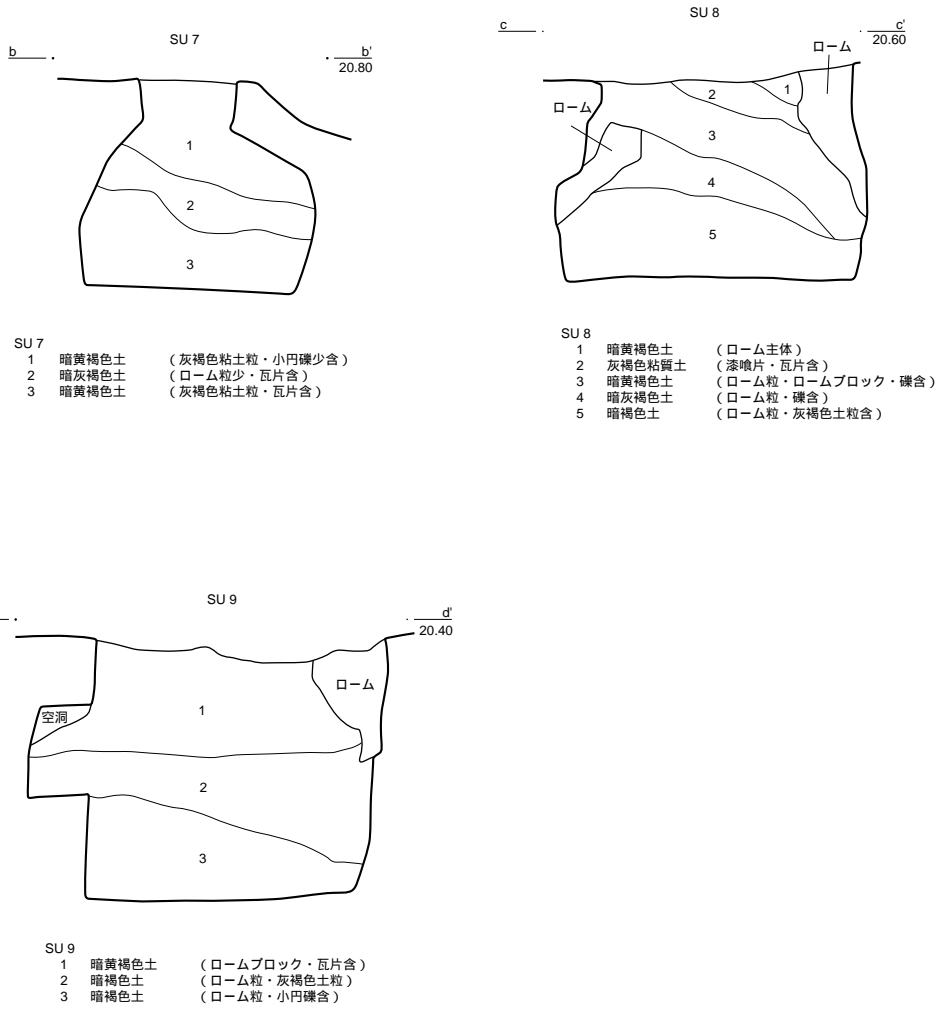


第 16 図 SU 3

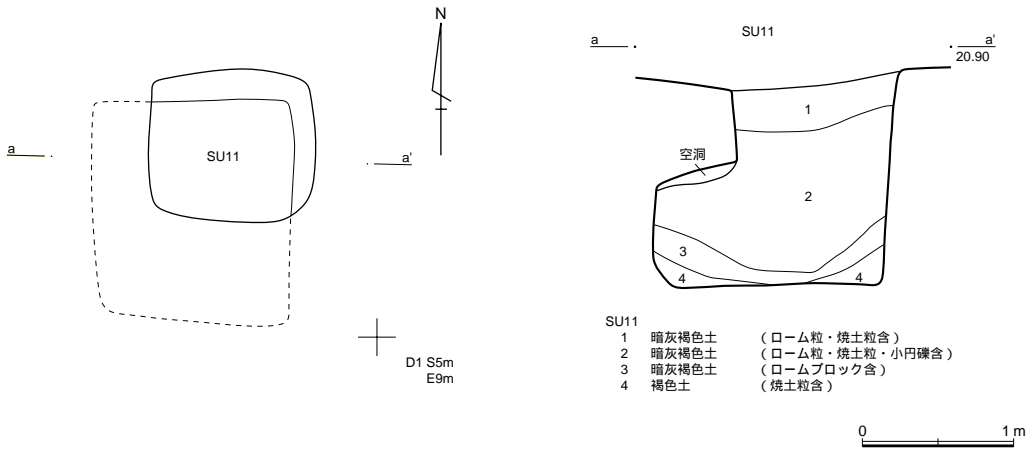


第 17 図 SD 6

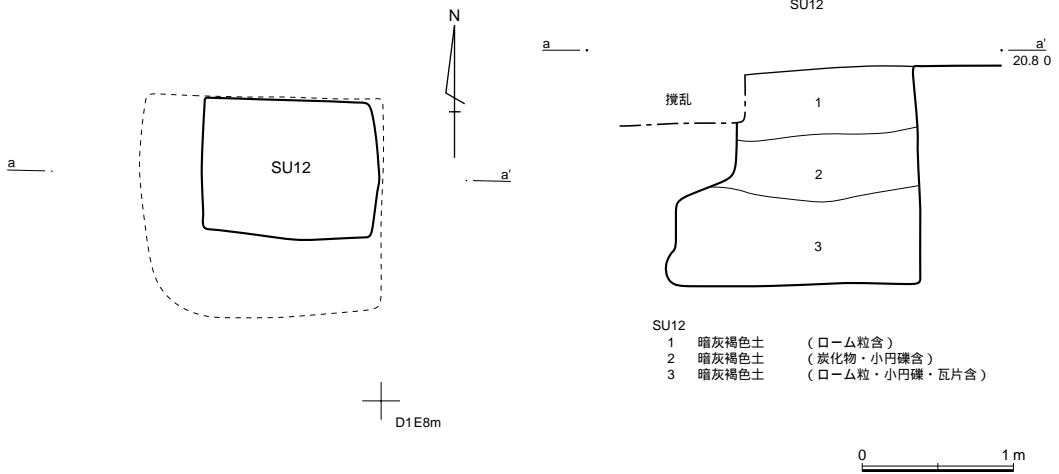
第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告



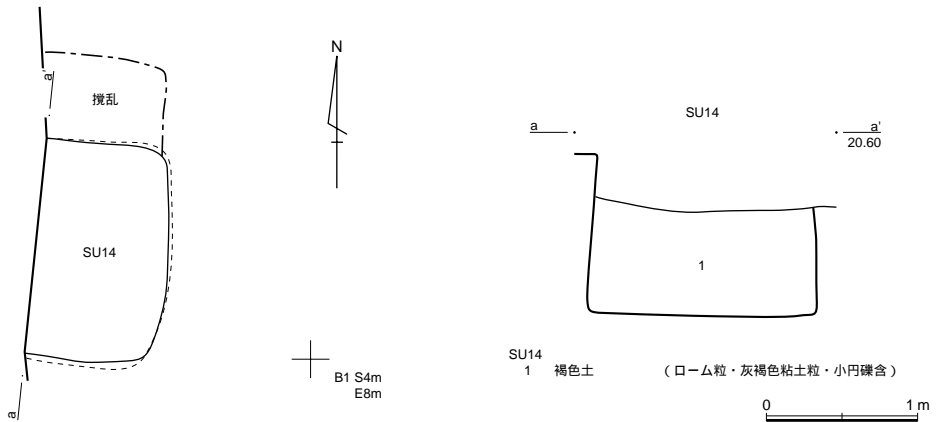
第18図 SU 7・SU 8・SU 9



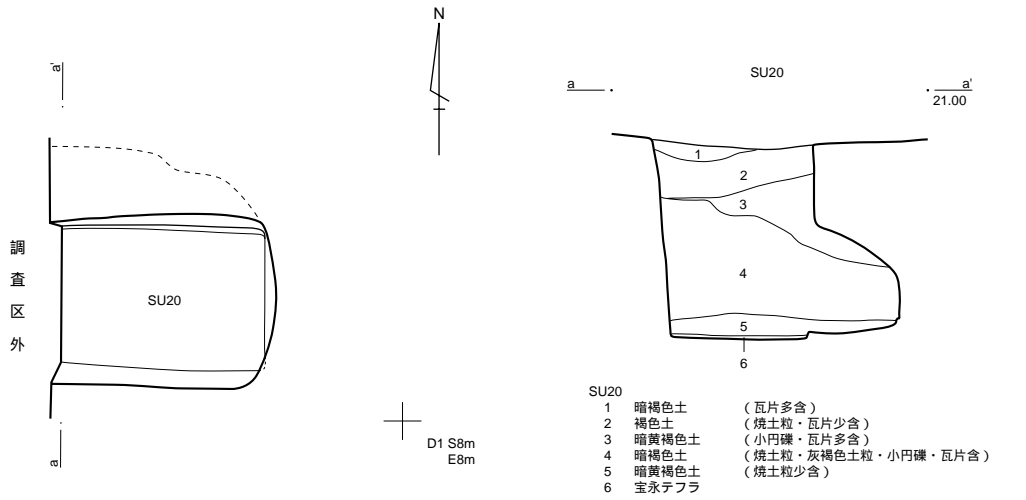
第 19 図 SU11



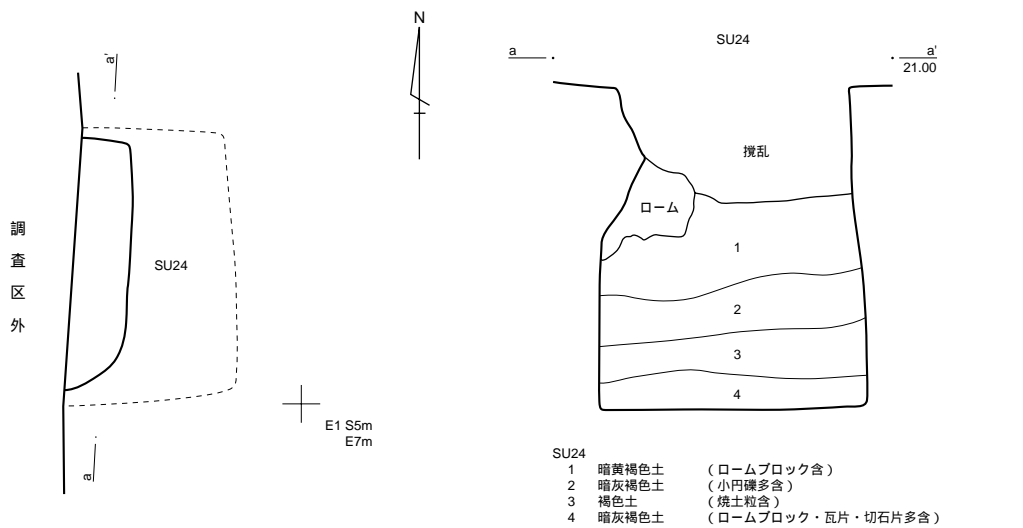
第 20 図 SU12



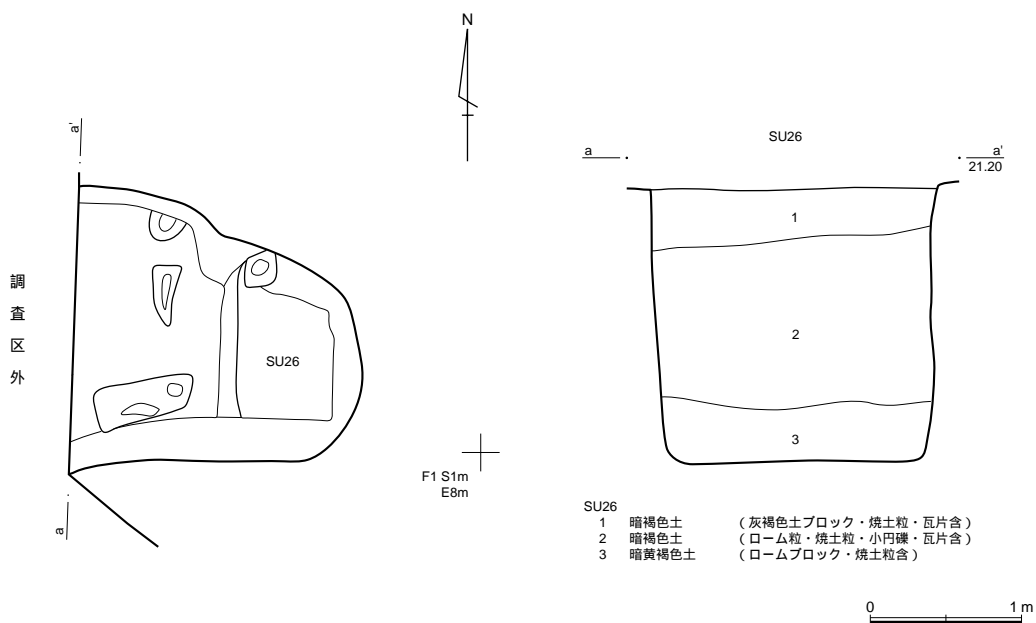
第 21 図 SU14



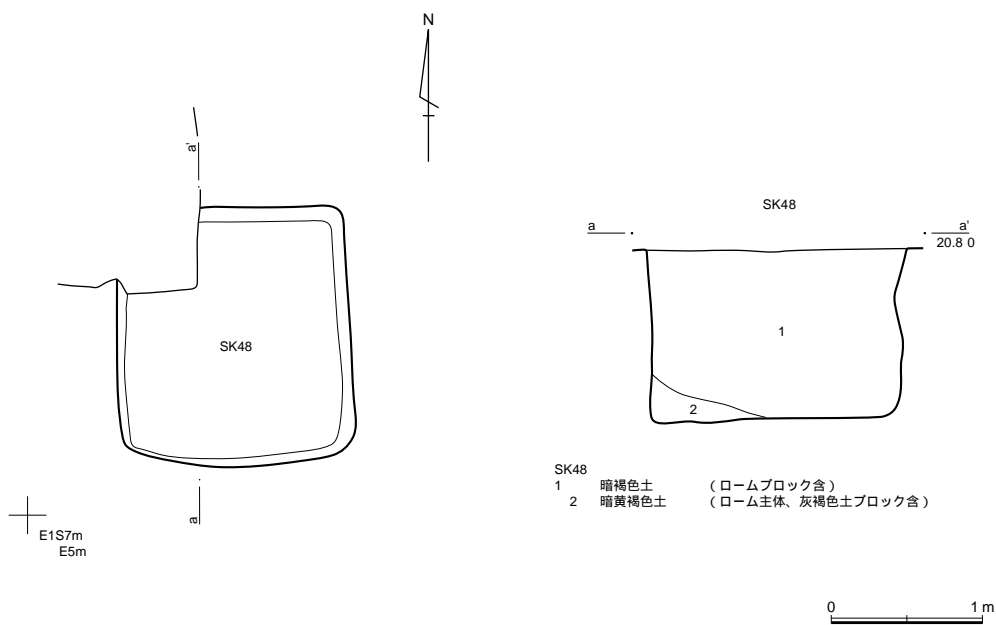
第22図 SU20



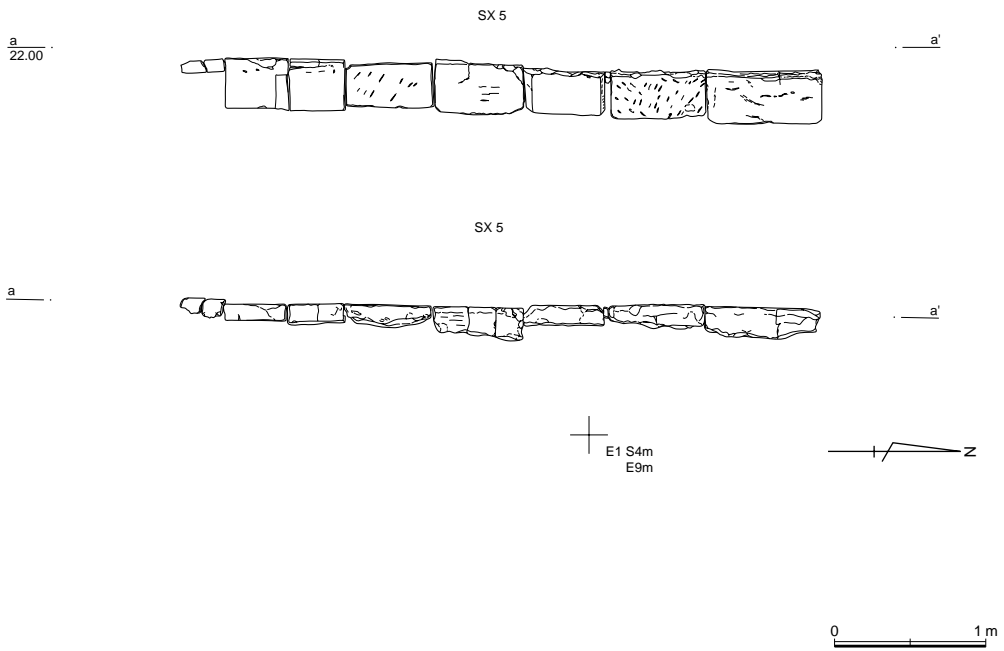
第23図 SU24



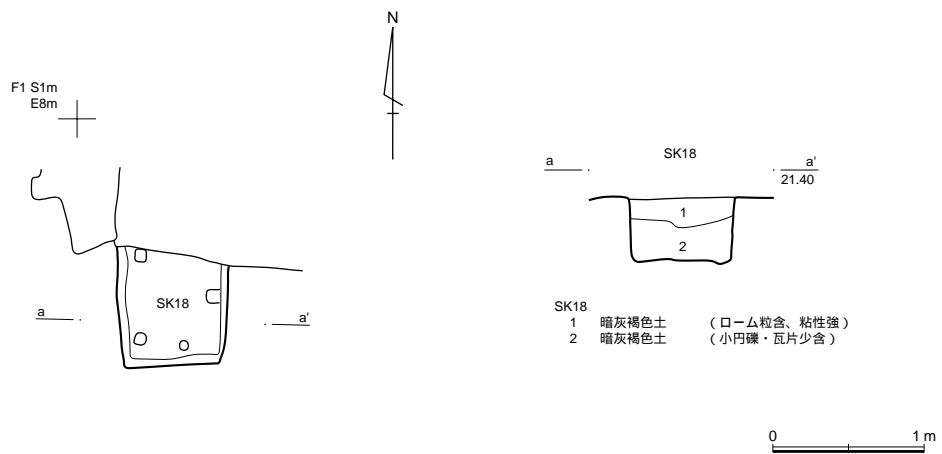
第 24 図 SU26



第 25 図 SK48



第26図 SX 5



第27図 SK18

IV 出土遺物

山上会館龍岡門別館地点では合計でコンテナにして61箱の遺物が出土している。特に多く出土した遺構はなく、当該地点が藩邸の隅にありながら、同様の立地である工学部1号館地点や医学部附属病院給水設備棟地点などの巨大な廃棄土坑が確認される地点とは異なった状況が窺える。本地点から検出された多くのピット群とこれらの様相は人間の居住空間にほど近い場所に位置していたことが想起できる。

本地点の遺構は、調査成果から包含層として記載した焼土混入層をはさんで、層的に上下に分けられることが確認される。遺物を掲載した遺構では焼土層より下層がSU15、SU16、SU21、上層ではSD1、SD2、SD3、SU7、SU8、SU9、SU11、SU12、SD19、SU20が該当する。包含層出土遺物群は、塩壺、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器の様相から東大編年Ⅲ～Ⅳ期（17世紀後半）に該当する構成を示す。焼土下の遺構はⅢ期に出土する製品が多いが、SU16出土碗例のように明らかにⅣ期に入る製品も包含されている。また、焼土より上層の遺構からは、古い段階の製品も認められてはいるが、新しい段階から出土する遺物が多い。一方、文献では当該期における火災の記録は、天和二（1682）年と元禄十六（1703）年が確認されている。この中で遺物、遺構の様相から焼土層形成の契機になる最も蓋然性の高い火災は元禄十六年の火災と推定される。

SD1（第28図） 1は刷毛目の碗で、TB-1-hに分類される。黒褐色の堅緻な胎土で、内面は打刷毛目である。器厚は薄く丁寧に作られている。

SD2（第28図） 1は染付碗で、JB-1-vに分類される。2は瀬戸・美濃系の太白手皿で、TC-2-hに分類される。灰褐色の胎土を呈している。3は瀬戸・美濃系灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。器面の片側には窯内での温度差によるとみられる気泡が濃密に確認できる。底部露胎部にはススが附着している。4、5は京都・信楽系銹絵染付碗で、TD-1-bに分類される。底部外周は面取りされ、全体に丁寧に作られている。6は柿釉油受け皿で、TC-40-cに分類される。外面下半に積み跡が巡っている。7は鎊釉徳利で、TF-10に分類される。底部と器面に二カ所に墨書が認められる。底部のみ判読でき、八に「森」の字が書かれている。8は金箔かわらけで、DZ-2-dに分類される。全体は平滑に研磨されており、見込みの一部に金箔が確認される。底部は薄黒である。9は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。器面の一部が剥落しており、受けが切れている部分には灯心の痕跡が確認できる。

SD3（第28・29図） 1は染付皿で、JB-2に分類される。一般的な製品とは異なり、高台径が小さくやや高い器形を呈している。外面の釉の一部は、黒色に変色している。2は灰釉徳利で、TC-10-aに分類される。一部の欠損もない完形である。胴部には釘彫りで八に「九」とバタ彫りされている。3は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が確認できる。4は瓦質製

品で、器種は不明である。器面の一部には判読はできないが墨書が認められる。5は軒丸瓦である。瓦当部の剣梅鉢は前田家の定紋であり、花卉はドーム状に作られる新しいタイプの製品である。

SU7（第29図） 1は銹絵丸碗で、TD-1-bに分類される。高台外周は面取りされている。同器種としては全体的にややラフな作りである。2は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は施釉の後、釉を拭き取っている。3は瓦質の火鉢で、DZ-31-jに分類される。口唇部は欠損しているが、口唇部の過半に敲打痕が明瞭に認められ、火入れ・灰落ととして利用されていたと推定できる。

SU8（第29図） 1は染付丸碗で、JB-1-eに分類される。底部裏にはラフに渦福が染め付けられている。断面には漆継ぎの痕跡が認められる。2は青磁香炉で、JB-9-bに分類される。底部外周は面取りされている。3は色絵碗で、TD-1-bに分類される。赤以外の顔料は剥落している。底部外周は面取りされ、全体的に丁寧に作られている。4は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が確認される。5は軒丸瓦である。瓦当部には前田家の定紋である剣梅鉢が型打ちされている。表面は丁寧に研磨されており、瓦頂部には二カ所、穿孔されている。孔の周囲には鉄錆が付着している。内面は布目痕が顕著に認められる。

SU9（第30図） 1は丸碗の蓋で、JB-00-aに分類される。内面中央には手描き五弁花が書かれている。銘款は二重角枠内渦福である。2は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。3は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。器面は剥落が顕著に認められる。4は無印の板作りの塩壺で、DZ-51-abに分類される。内面には細かい布目痕が観察される。

SK10（第30図） 1は灰釉の灯明上皿で、TD-2-bに分類される。全く破損していない完形である。2は灰釉徳利で、TC-10-cに分類される。胎土は白色の粗砂粒が多く混入している。器面には「川」の列点状の釘彫りの痕跡が認められる。

SU11（第30・31図） 1、2は肥前系染付磁器で、1はJB-1-c、2はJB-7-bに分類される。1は底部にラフに角福が書かれている。3は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。4は銹絵丸碗で、TD-1-bに分類される。高台外周は面取りされている。5、6はいわゆる軟質施釉陶器でTZ-1に分類される。5は成形→絵付→外面素三彩、内面低火度釉施釉、6は成形→赤化粧土塗布→絵付→低火度釉施釉の順で作られている。胎土は橙褐色を呈し、白色の砂粒を少量含んでいる。5、6とも文様の剥落が激しく、全体を復元できないが、5は青、緑の顔料が部分的に遺存している。7は焼締めの小瓶で、TE-10に分類される。底部には三カ所の小さいトチンの痕跡が認められる。8は灰釉鉄絵皿で、TC-2-eに分類される。見込み中央の藤文は摺絵で施文されている。トチンの痕跡が認められる。9は褐釉の五合徳利で、TC-10-dに分類される。器面には「△」とベタ彫りされている。底部は釉が拭き取られている。10はTF-10に分類される。器面には判読不明

と「ハト」?の二カ所、底部に「□一」(□は欠損して不明)の墨書が認められる。11は見込み挿目が「クロスパターン」を呈する挿鉢で、TL-29に分類される。注口はやや幅が狭い。12、13は銑絵染付の水注で、TD-27-aに分類される。同一個体であろうと思われる。非常に薄作りで、丁寧に作られている。見込みには三カ所のピン痕が認められる。底部無釉部分にはススが付着している。14はかわらけで、DZ-2-bに分類される。口唇部には遺存している約1/3周すべてに灯心痕が認められる。15は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。底部は左方向の回転糸切り離し痕が確認できる。16は瓦質火鉢で、DZ-31-hに分類される。口縁部から下方に切り込みが入っている。

SU12 (第31・32図) 1は肥前系染付磁器碗で、JB-1-dに分類される。底部には二重角枠内渦福の銘が入る。2は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。3はいわゆる菊皿で、TC-2-kに分類される。内型で成形されており、外側は棒状工具でシノギがつけられている。高台は貼り付けられている。4は色絵の灰落として、TD-24に分類される。器面には竹、松が緑で上絵付けされている。口唇部は全周敲打痕が確認できる。5は灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。器面には「さ」がベタ彫りされている。6は一升徳利で、TF-10に分類される。7は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。内面の一部にいわゆる銀彩がみられ、受けが切れている部分には灯心の痕跡が確認できる。8、9は土師質鉢で、DZ-5-aに分類される。底部は左回転の回転糸切り離し痕が認められる。10は板作りの塩壺で、DZ-51-gに分類される。「泉湊伊織」の刻印が押されている。内面には布目痕が確認できる。11は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が確認できる。12は黄灰褐色を呈する中砥石である。使い込まれる以前に破損したと推定され、部分的に購入時にあったであろうと思われる角の面取りが確認できる。全面に使用痕が確認できるのは三面であり、上面、片側面、片端面である。片側面には調整時のノミ痕が認められる。また、破損時には廃棄しなかったらしく、接合した一ブロックのみ使用されている状況が看取された。上端面は破損後に再調整した痕跡が認められる。両端面には墨書が書かれており、その片面には「上々吉」と書かれていたと思われる。

SU15 (第32・33図) 1～3は肥前系磁器である。1は青磁染付の碗で、JB-1-eに分類される。底部には二重角枠内渦福が描かれている。2は瑠璃釉の蓋物で、JB-13に分類される。高台内および内面は透明釉がかけられている。器面は二次的な火熱を受けている。3は染付蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2-kに分類される。胎土、呉須の色調とも悪い。4は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。5は志野織部皿で、TC-2-sに分類される。廃棄後の農耕具などの接触によって器面全体が摩耗している。6は青緑釉蛇ノ目釉剥ぎの皿で、TB-2-aに分類される。7は五合のいわゆる尾呂徳利で、TC-10-dに分類される。全く欠損なしの完形である。器面には釘彫りなどの痕跡は認められない。8は灰釉徳利で、TC-10-aに分類される。器面には「二」および判読不明の二カ所のベタ彫りが認められる。9はかわらけでDZ-2-bに分類される。遺存している過半全周に灯心痕が確認できる。

10は輪積み成形の塩壺でDZ-51に分類される。遺存部分には刻印は認められない。11は軒丸瓦である。瓦当部には前田本家の定紋である剣梅鉢が型打ちされている。表面は丁寧に研磨されており、頂部には遺存部分では一カ所、穿孔が確認できる。内面は布目痕が顕著に認められる。12は棟瓦である。

SU16 (第34図) 1は肥前系染付碗で、JB-1-dに分類される。胎土は白色で、薄作りされている。

SU18 (第34図) 1～3は瀬戸・美濃系染付碗で、JC-1-dに分類される。口縁部の端反り、高台の削りだしなどから同器種の初現的な特徴が看取できる。4は薄手の型物の急須で、TI-16に分類される。上下型作りで、胴部中位で接合されている。底部、肩部は布目の痕跡が明瞭に観察される。内面は施釉されている。5は硬質瓦質の火鉢で、DZ-31に分類される。器面、底面は丁寧に研磨されている。

SD19 (第34図) 1、2は板作りの塩壺で、DZ-51-jに分類される。共に3ピースである。1は底面にも刻印が認められる。3は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が観察できる。

SU20 (第34図) 1は肥前系染付碗で、JB-1-fに分類される。底部には二重角枠内渦福の刻印が書かれている。2は土師質の火鉢で、DZ-31-aに分類される。遺存している口唇部の形状からあるいは風炉の可能性もある。

SU21 (第34図) 1はいわゆる呉器手の碗で、TB-1-aに分類される。大振り、17世紀に入る製品であると考えられる。2、3はともに文銭である。

SU23 (第35図) 1、2は肥前系染付で、1は碗、2は坏である。1はJB-1-d、2はJB-6-aに分類される。2は型紙刷りで文様が描かれている。3はいわゆる呉器手の碗で、TB-1-aに分類される。4は嬉野の内野山窯の青緑釉輪剥皿で、TB-2-aに分類される。

SU24 (第35図) 1は肥前系染付坏で、JB-6-aに分類される。文様はコンニャク判で描かれている。

SU26 (第35図) 1は蓋物で、JB-00-fに分類される。2は銕絵半球碗で、TD-1-bに分類される。3は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。4は柿釉灯明上皿で、TC-2-oに分類される。見込みには輪状の溶着痕が観察される。5は見込み挿目が「クロスパターン」の焼締め挿鉢で、TL-29に分類される。見込みには焼台の痕跡が確認できる。6は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。受けが切れている部分には灯心の痕跡が確認できる。7は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面はナデ調整されているが、部分的に細かい布目痕が確認できる。

SU29 (第 35 図) 1 は染付蓋物で、JB-13-a に分類される。高台は幅広高台に作られている。2 は灰釉鉄釉流しの碗で、TC-1 に分類される。底部は畳付けの他は全釉されている。3 は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-d に分類される。「・・堺見など伊織」の刻印が押印されている。

SK32 (第 36 図) 1 はいわゆる呉器手の碗で、TB-1-a に分類される。大振りで、17 世紀の製品であると考えられる。

SB34 (第 36 図) 1 はいわゆる菊皿で、TC-2-k に分類される。口縁部には緑釉が流し掛けられている。体部外面はシノギが施されている。2 は軒丸瓦の瓦当部である。剣が無い梅鉢が型作りされている。花卉も断面ドーム型に丸味を持っている。

SD36 (第 36 図) 1 は古寛永通宝である。2 は皇宗通宝、初鑄年代は 1038 年。

SK42 (第 36 図) 1、2 は染付皿で、1 は JB-2-d に分類される。絵付け、成形、胎土などきわめて良好で、質的に高い製品である。二重角枠内に「金」銘が描かれている。2 は JB-2-a に分類される。釉薬はやや青味がかかっている。3 はかわらけで、DZ-2-a に分類される。口唇部は灯心痕が遺存部すべてに確認される。4 は瓦質製品で、器種は不明である。SD3 からも同様の製品が出土している。5 は古寛永通宝。

SU43 (第 36 図) 1 は青磁輪剥皿で、JB-2-k に分類される。底部は無釉である。2 は色絵瓶で、JB-10 に分類される。器面の顔料は一部剥落しているが、赤、呉須などが確認できる。3 は灰釉碗で、TC-1-c に分類される。底部は無釉である。底部や釉調などやや古い様相が確認でき、TC-1-c とは異なる系統のものかもしれない。4 は天目茶碗で TC-1-a に分類される。5 は塩壺の蓋で、DZ-00-c に分類される。内面外周部はナデで消されているが、部分的に細かい布目痕が確認できる。6 は軒平瓦、7 は剣梅鉢の軒丸瓦である。

SK45 (第 37 図) 1 は染付皿で、JC-2-a に分類される。2 は灰釉徳利で TC-10-c に分類される。釘彫りで、「久〇」、「た□り」、「御そんじ／たまりや」と彫られている。

SU47 (第 37 図) 1 はやや白濁した灰釉がかかる輪禿皿で、TC-2-m に分類される。底部は無釉である。2 は柿釉の壺の蓋で、TC-00-b に分類される。

包含層 (第 37・38 図) 1～10 は磁器で、2～4 は白磁、5 は色絵、他は染付である。1 は JB-5-b に分類される。胎土、呉須の発色など良好である。高台裏には「宣明年製」の銘が書かれている。

2はJB-5-fに分類される鉢である。体部は直線的に開き、うがい茶碗として用いられた可能性もあろう。器面上位には、ヘラ状工具による片彫りが認められる。3はJB-5-fに分類される。内面上位には宝珠状の浮文が型打ちされている。4はJB-6-bに分類される。高台は断面三角形に削り出されている。器面には型紙刷りで、蔓草が白泥で施文されている。5は漳州窯系の大鉢で、JA2-5に分類される。胎土は白色で堅緻である。文様は上絵で、赤、緑で草花文が描かれる。畳付には白色の粗砂粒が多く付着している。6,7はいわゆる初期伊万里で、JB-2-aに分類される。胎土、呉須の発色、施文共にやや粗雑である。7は見込みに降灰が認められる。8はJB-2-cに分類される。文様は墨弾きの技法が用いられている。3枚以上のセットで確認されている。二次的な火熱を受けている。9は糸切細工の型皿で、JB-2-rに分類される。10は壺の蓋で、JB-00-gに分類される。文様の様相から17世紀前～中葉の製品であろうと推定できる。

11は鉄絵碗、12は灰釉碗で共にTD-1に分類される。11は胎土が堅緻な茶褐色を呈し、白泥と鉄絵によって文様が施されている。12の胎土は堅緻な灰色を呈する。見込みには三ヶ所のピン痕が認められる。底部は全釉されている。13はいわゆる菊皿で、TC-2-kに分類される。口縁部には緑釉が流し掛けられている。見込みやや外周にはトチンの痕跡が確認できる。

14はかわらけで、DZ-2-bに分類される。遺存している口唇部には密に灯心痕が確認できる。15は軟質瓦質の瓦燈で、DZ-45に分類される。器面の剥落は著しい。16は二重椀「天下一堺ミなど藤左衛門」銘の輪積み成形の塩壺で、DZ-51-cに分類される。17は輪積み成形の塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土には白色の粗砂粒が少量含まれる。18は軒丸瓦の瓦当部である。左回りの巴が浮文されている。(堀内秀樹・香取祐一)

出土遺物観察表

SD 1

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	(11.3)	(4.2)	5.6	刷毛目		TB-1-h	刷毛目

SD 2

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	(10.8)	3.6	4.9	染付		JB-1-v	くらわんか
2	皿	(12.8)	7.0	3.1	染付		TC-2-h	太白手
3	碗	11.7	5.0	8.0	灰軸		TC-1-c	
4	碗	9.3	(3.2)	5.9	錆絵染付		TD-1-b	
5	碗	(9.2)	3.0	5.7	錆絵染付		TD-1-b	
6	油受け皿	(10.4)	4.4	2.3	柿軸		TC-40-c	
7	瓶	3.5	10.5	28.0	筋軸		TF-10	
8	皿	(11.0)	(5.2)	2.0			DZ-2-d	金箔かわらけ
9	油受け皿	12.2	6.7	3.0			DZ-40-d	

SD 3

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	(20.3)	(10.0)	5.0	染付		JB-2	
2	瓶	3.8	6.6	18.3	灰軸		TC-10-a	
3	塩壺(蓋)	7.7		2.1			DZ-00-c	

No.	種別	法量(cm)	材質	備考
4	不明	最大幅49	瓦	墨書あり

No.	種別	法量(cm)	文様	備考
5	軒丸瓦	瓦当径15.3 文様区径11.4 瓦当厚2.8	劍梅鉢	

SU 7

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	(8.6)	3.3	5.6	錆絵		TD-1-b	
2	碗	(17.2)	5.6	9.1	灰軸		TC-1-c	
3	火鉢	-	13.2	(9.2)			DZ-31-j	口唇部敲打痕あり

SU 8

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	-	4.1	(4.6)	染付	二重角枠内満福	JB-1-e	
2	香炉・火入れ	(11.0)	(7.7)	8.3	青磁		JB-9-b	蛇ノ目高台
3	碗	9.3	3.0	5.7	色絵		TD-1-b	
4	塩壺(蓋)	7.3		1.9			DZ-00-c	

No.	種別	法量(cm)	文様	備考
5	軒丸瓦	瓦当径15.6 長さ41.7 玉縁長1.9 文様区径11.7 瓦当厚2.9	劍梅鉢	

SU 9

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗(蓋)	9.7		3.0	染付	二重角枠内満福	JB-00-a	
2	碗	13.8	6.0	10.1	灰軸		TC-1-c	
3	油受け皿	8.4	6.4	3.1			DZ-40-d	
4	塩壺	5.8	6.4	8.2			DZ-51-ab	

SK10

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	7.5	2.7	1.6	灰軸		TD-2-b	灯明皿
2	瓶		6.7	(19.5)	灰軸		TC-10-c	

SU11

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	-	4.0	(2.0)	染付	角福	JB-1-c	
2	猪口	(7.3)	4.4	5.3	染付		JB-7-b	
3	碗	11.3	4.4	7.3	灰軸		TC-1-c	
4	碗	9.0	3.1	5.6	錆絵		TD-1-b	

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

5	碗	(120)	6.5	3.5			TZ-1	軟質施釉陶器
6	碗	90	(42)	7.3			TZ-1	軟質施釉陶器
7	瓶	1.5	6.2	5.0	鉄軸		TE-10	
8	皿	(120)	6.5	3.5	灰軸鉄絵		TC-2e	摺絵
9	瓶	3.2	7.4	20.9	灰軸		TC-10-d	釘書き
10	瓶		10.3	(25.7)	鉄軸		TF-10	墨書
11	摺鉢	225	11.3	8.8			TL-29	
12	水注(蓋)	9.7	8.2	(1.8)	鉄絵染付		TD-27-a	13と同一個体
13	水注	9.8	6.6	9.8	鉄絵染付		TD-27-a	12と同一個体
14	皿	(112)	(6.6)	2.2			DZ-2-b	
15	油受け皿	11.8	8.8	6.0			DZ-40-d	
16	火鉢	(210)	-	8.5			DZ-31-h	風炉

SU12

No.	器種	法量(cm)			釉薬・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	10.5	4.7	6.1	染付	二重角枠内満福	JB-1-d	
2	碗	11.5	4.7	7.8	灰軸		TC-1-c	
3	皿	17.6	6.2	4.0	灰軸・緑軸		TC-2-k	菊皿
4	火入れ・灰落とし	-	5.4	7.7	色絵		TD-24	敲打痕あり
5	瓶		8.3	(19.5)	灰軸		TC-10-d	
6	瓶	3.9	11.1	27.9	鉄軸		TF-10	
7	油受け皿	12.2	6.3	8.3			DZ-40-d	
8	鉢	7.5	4.8	5.1			DZ-5-a	
9	鉢	7.1	4.8	4.6			DZ-5-a	
10	埴壺	6.0	5.4	8.6		泉添伊織	DZ-51-g	
11	埴壺(蓋)	7.6		2.1			DZ-00-c	

No.	種別	法量(cm)	備考
12	砥石	長さ18.3 幅5.4 厚さ8.2	

SU15

No.	器種	法量(cm)			釉薬・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	-	4.4	3.4	青磁染付	二重角枠内満福	JB-1-e	
2	薬物	(10.0)	6.6	9.1	瑠璃釉		JB-13	
3	皿	(11.5)	4.0	3.3	染付		JB-2-k	蛇ノ目軸はぎ
4	碗	(12.5)	5.3	8.1	灰軸		TC-1-c	
5	皿	(12.0)	6.4	3.3	灰軸・緑軸・鉄絵		TC-2-s	
6	皿	11.5	4.2	3.3	灰軸・青緑釉		TB-2-a	
7	瓶	2.8	8.7	21.3	灰軸		TC-10-d	
8	瓶	(2.8)	6.8	9.5	灰軸		TC-10-a	
9	皿	9.7	4.3	1.9			DZ-2-b	
10	埴壺	(6.5)	5.4	10.0			DZ-51	輪積み成形

No.	種別	法量(cm)	文様	備考
11	軒丸瓦	瓦当径16.1 文様区径11.0 瓦当厚2.5	劍梅鉢	
12	棟瓦	長さ36.7 幅13.5 厚さ3.2	唐草	

SU16

No.	器種	法量(cm)			釉薬・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	10.1	4.1	5.8	染付		JB-1-d	

SU18

No.	器種	法量(cm)			釉薬・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	9.4	4.0	5.1	染付		JC-1-d	
2	碗	9.5	4.0	4.9	染付		JC-1-d	
3	碗	9.2	4.0	5.1	染付		JC-1-d	
4	急須	7.3	6.5	6.4			TI-16	
5	火鉢	-	23.5	10.0			DZ-31	

SD19

No.	器種	法量(cm)			釉薬・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	埴壺	6.2	5.0	9.1		泉州麻生	DZ-51-j	
2	埴壺	6.3	5.6	9.9		泉州麻生	DZ-51-j	
3	埴壺(蓋)	7.6		1.8			DZ-00-c	

SU20

No.	器種	法量(cm)			釉薬・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	9.8	5.6	5.0	染付	二重角枠内満福	JB-1-f	

東京大学構内遺跡調査研究年報 4

2	火鉢	30.8	23.2	11.5			DZ-31-a	
---	----	------	------	------	--	--	---------	--

SU21

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	12.2	5.0	9.8	灰軸		TB-1-a	

No.	種別	名称	分類	法量(mm)		材質	初跡年代	備考
2	銭貨	新寛永通宝	新寛永・文銭	外径20.4	穿径5.5 厚さ1.4	銅	1668	背文
3	銭貨	新寛永通宝	新寛永・文銭	外径24.9	穿径5.4 厚さ1.5	銅	1668	背文

SU23

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	9.8	3.8	5.5	染付		JB-1-d	
2	坏	(6.5)	(2.8)	3.2	染付		JB-6-a	摺紙摺り
3	碗	(11.4)	5.0	7.4	灰軸		TB-1-a	
4	皿	-	4.7	2.5	青緑釉		TB-2-a	

SU24

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	坏	(5.9)	2.2	2.7	染付		JB-6-a	コンニャク判

SU26

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	蓋物(蓋)	10.4	13.6	4.1	染付		JB-00-f	
2	碗	(9.0)	(3.1)	5.4	錆絵		TD-1-b	
3	碗	12.7	6.0	8.5	灰軸		TC-1-c	
4	皿	11.0	5.5	1.4	釉軸		TC-2-o	灯明皿
5	襷鉢	(36.0)	(16.0)	13.7			TL-29	
6	油受け皿	12.0	7.0	2.9			DZ-40-d	
7	塩壺(蓋)	7.5		1.9			DZ-00-c	

SU29

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	蓋物	6.6	3.2	3.2	染付		JB-13-a	
2	碗	(11.3)	4.7	6.9	灰軸・鉄軸		TC-1	
3	塩壺	-	-	9.9		「・・・堺見なと伊織」	DZ-51-d	

SK32

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	碗	(12.2)	5.0	8.1	灰軸		TB-1-a	

SB34

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	(12.5)			灰軸・緑釉		TC-2-k	

No.	種別	法量(cm)		文様	備考
2	軒丸瓦	瓦当厚21		梅鉢	

SD36

No.	種別	名称	分類	法量(mm)		材質	初跡年代	備考
1	銭貨	寛永通宝	古寛永	外径24.4	穿径5.3 厚さ1.4	銅	1636	
2	銭貨	皇宗通宝	渡来銭	外径24.4	穿径6.9 厚さ1.0	銅	1038	

SK42

No.	器種	法量(cm)			軸葉・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	(12.4)	8.0	4.4	染付	「金」	JB-2-d	
2	皿	-	(8.0)	(3.1)	染付		JB-2-a	初期伊万里
3	皿	11.2	(6.6)	2.1			DZ-2-a	

No.	種別	法量(cm)		材質	備考
4	不明	最大幅4.2		瓦	墨書あり

No.	種別	名称	分類	法量(mm)		材質	初跡年代	備考
5	銭貨	寛永通宝	古寛永	外径24.3	穿径5.2 厚さ1.4	銅	1636	

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

SU43

No.	器種	法量(cm)			種業・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	(13.8)	4.7	3.4	青磁		JB-2-k	蛇ノ目輪はぎ
2	瓶	-	5.0	(12.1)	色絵		JB-10	
3	碗	10.5	5.2	7.3	灰軸		TC-1-c	
4	碗	10.8	4.4	6.1	鉄軸		TC-1-a	天目
5	塩壺(蓋)	7.8		2.5			DZ-00-c	

No.	種別	法量(cm)	文様	備考
6	軒平瓦	瓦当厚4.5	唐草	
7	軒丸瓦	瓦当径15.7 文様区径11.2 瓦当厚2.5	劍梅鉢	

SK45

No.	器種	法量(cm)			種業・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	13.3	8.2	3.8	染付		JC-2-a	
2	瓶	3.4	6.4	15.3	灰軸		TC-10-c	「たまり」 「御そんじたまりや」 釘書き

SU47

No.	器種	法量(cm)			種業・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	皿	(12.8)	5.8	3.0	灰軸		TC-2-m	
2	壺・甕(蓋)	4.4	8.0	1.5-1.7	灰軸		TC-00-b	

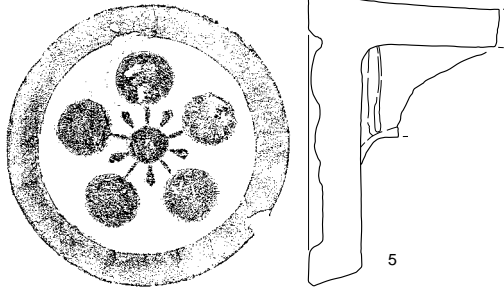
包含層

No.	器種	法量(cm)			種業・絵付け	刻印・銘	分類	備考
		口径	底径	器高				
1	鉢	15.6	6.4	8.0	染付		JB-5-b	
2	鉢	(14.4)	(5.0)	6.1	白磁		JB-5-f	
3	鉢	(9.0)	2.9	4.9	白磁・陽刻		JB-5-f	
4	坏	(6.7)	3.2	4.7	白磁・陽刻		JB-6-b	
5	皿			(2.4)	色絵		JA2.5	涼州窯
6	皿	13.4	6.5	3.4	染付		JB-2-a	
7	皿	12.8	4.9	2.7	染付		JB-2-a	
8	皿	14.0	8.2	2.8	染付		JB-2-c	墨弾き
9	皿	-	-	3.1	染付		JB-2-r	型皿
10	壺・甕(蓋)	5.8		2.8	染付		JB-00-b	
11	碗	(14.0)	(5.1)	4.2-4.4	鏽絵		TD-1	
12	碗	12.1	4.2	5.1-5.5	灰軸		TD-1	
13	皿	13.8	7.4	3.6-4.0	灰軸・緑軸		TC-2-k	
14	皿	12.3	7.0	2.0			DZ-2-b	
15	瓦燈	(17.4)	20.0	5.8-6.0			DZ-4.5	
16	塩壺	5.7	4.0	11.0		「天下第一堺ミなと藤左衛門」	DZ-51-c	
17	塩壺(蓋)	7.4		2.7			DZ-00-a	

No.	種別	法量(cm)	文様	備考
18	軒丸瓦	瓦当径16.5 文様区径11.9 瓦当厚2.9	連珠三つ巴	



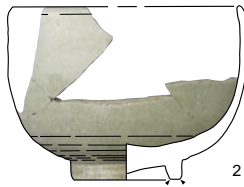
第 28 図 SD 1・SD 2・SU 3(1)



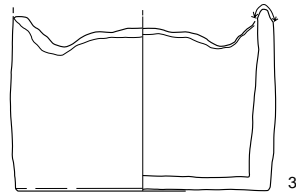
SD 3 (2)



1

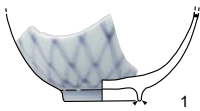


2

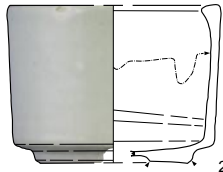


3

SU 7



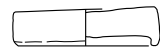
1



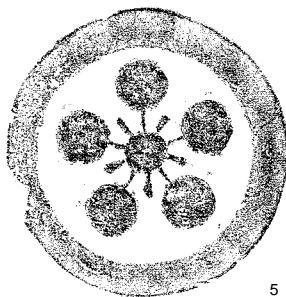
2



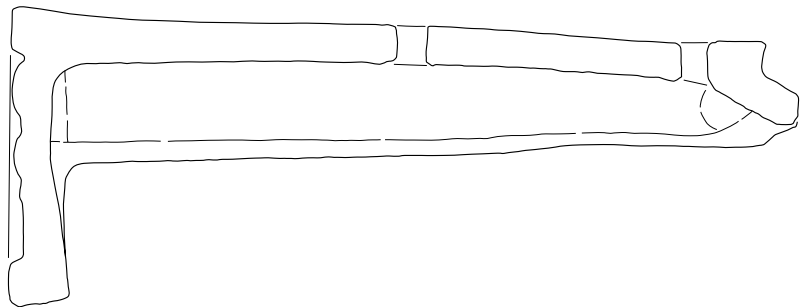
3



4



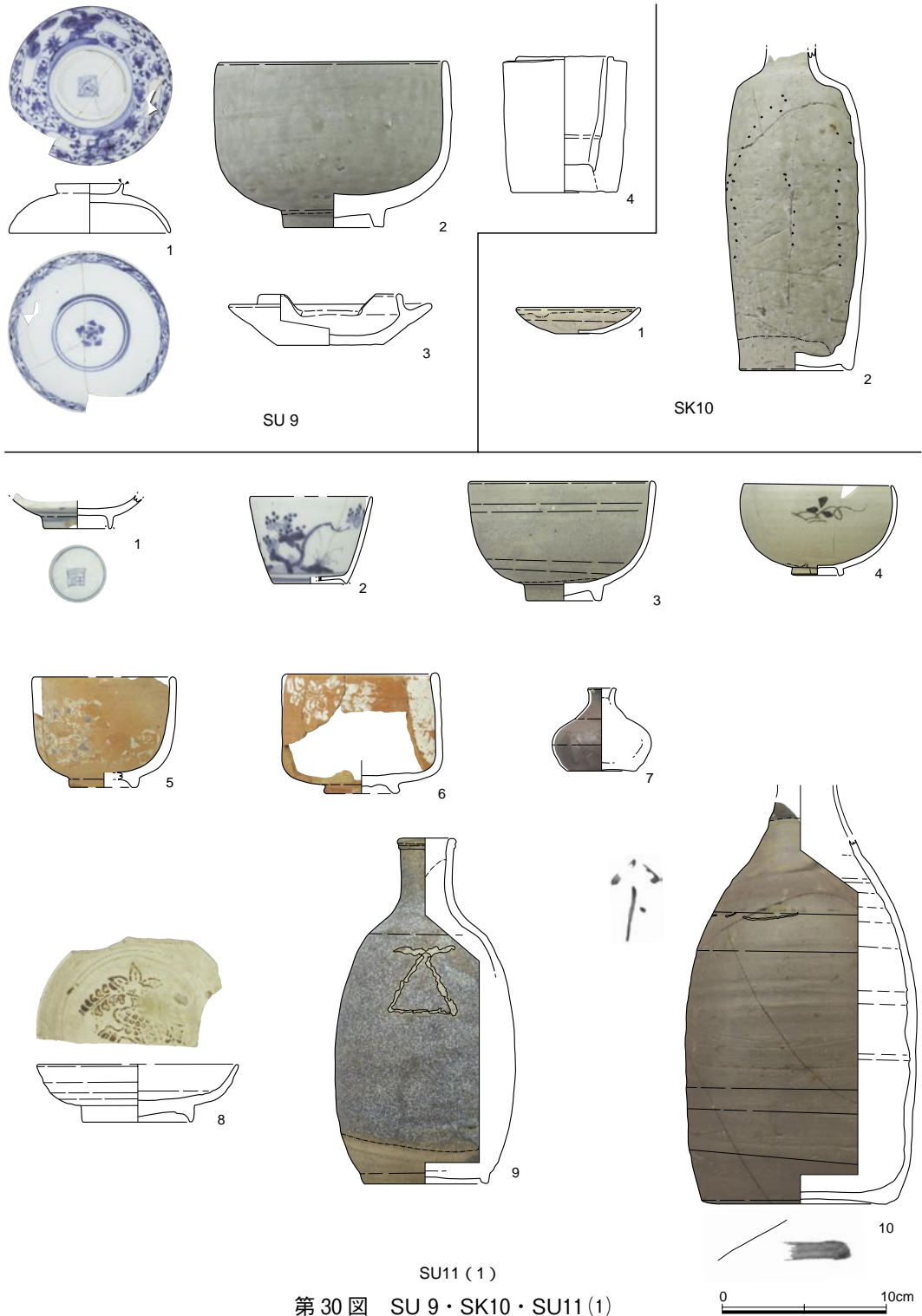
5



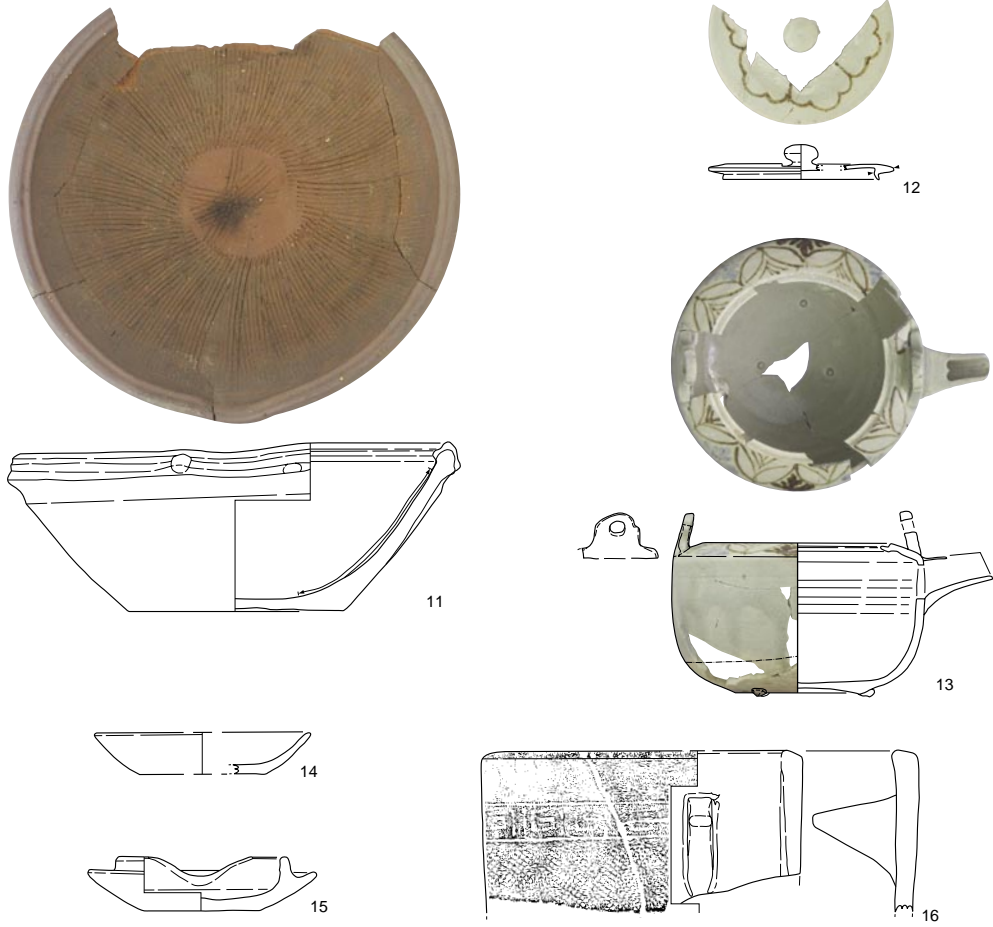
SU 8

第29図 SU 3(2)・SU 7・SU8

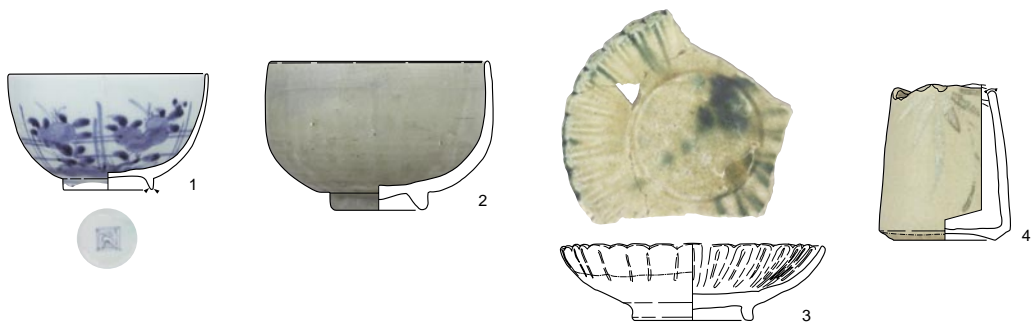




第 30 図 SU 9・SK10・SU11(1)



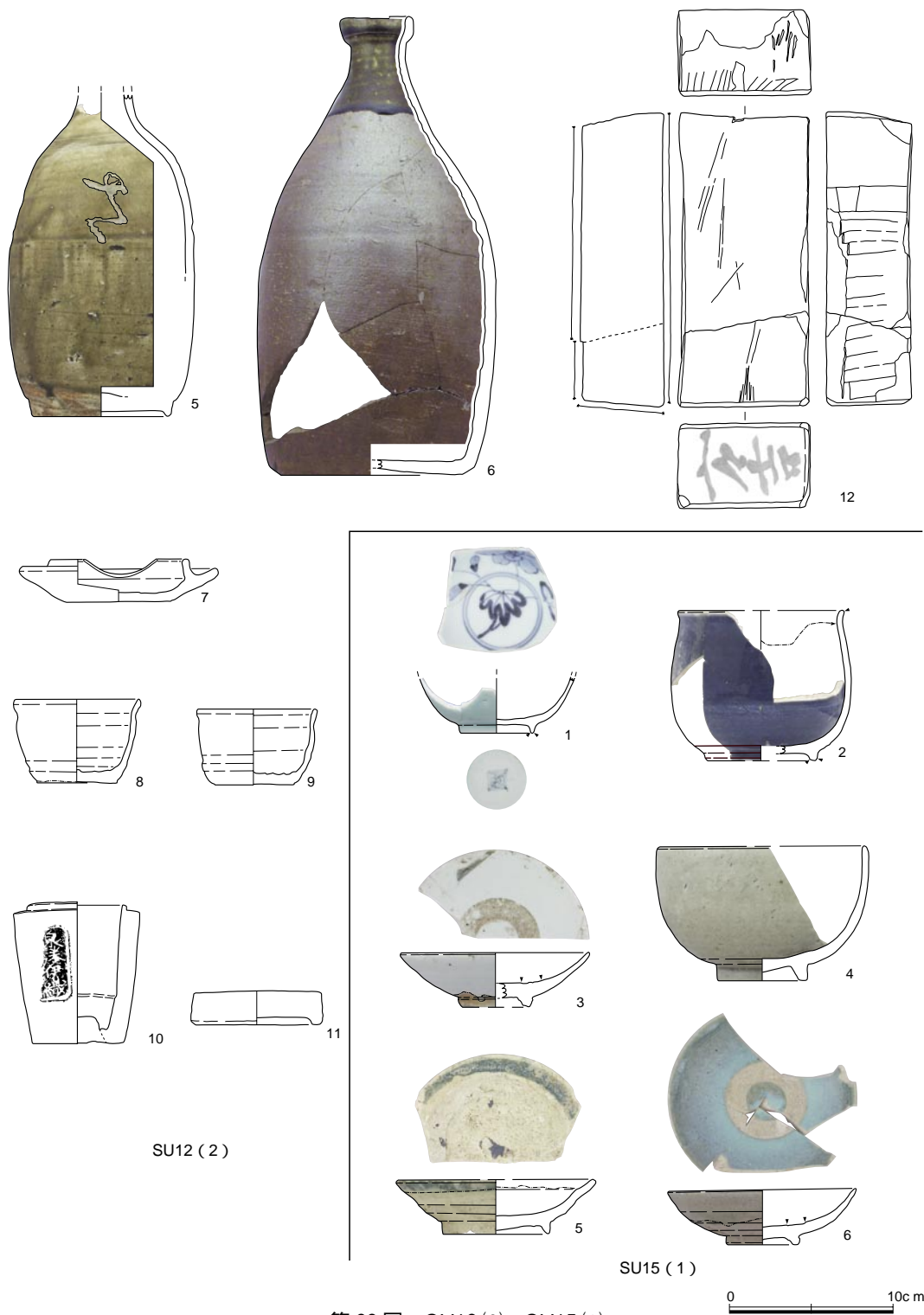
SU11 (2)



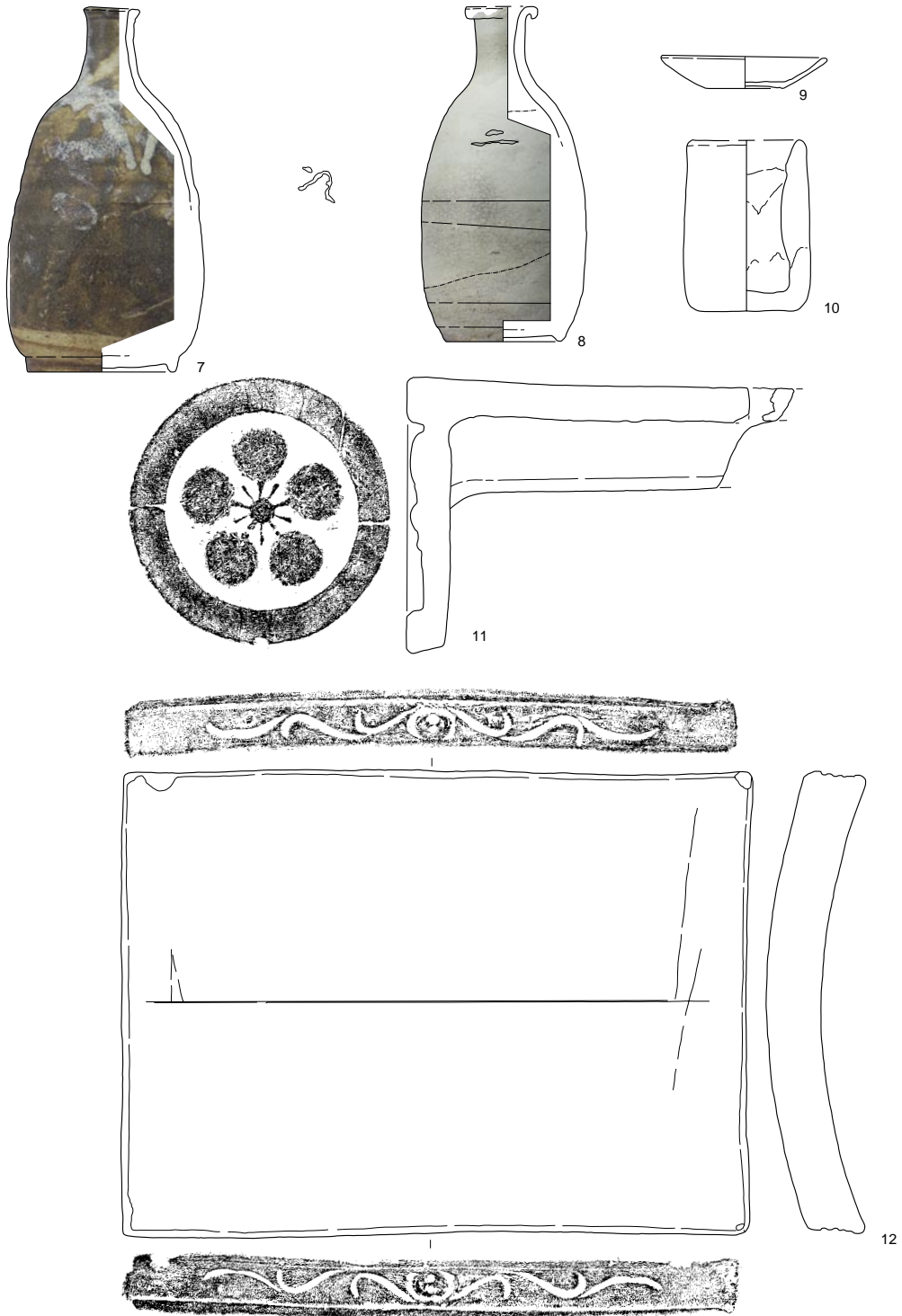
SU12 (1)

第31図 SU11 (2)・SU12 (1)



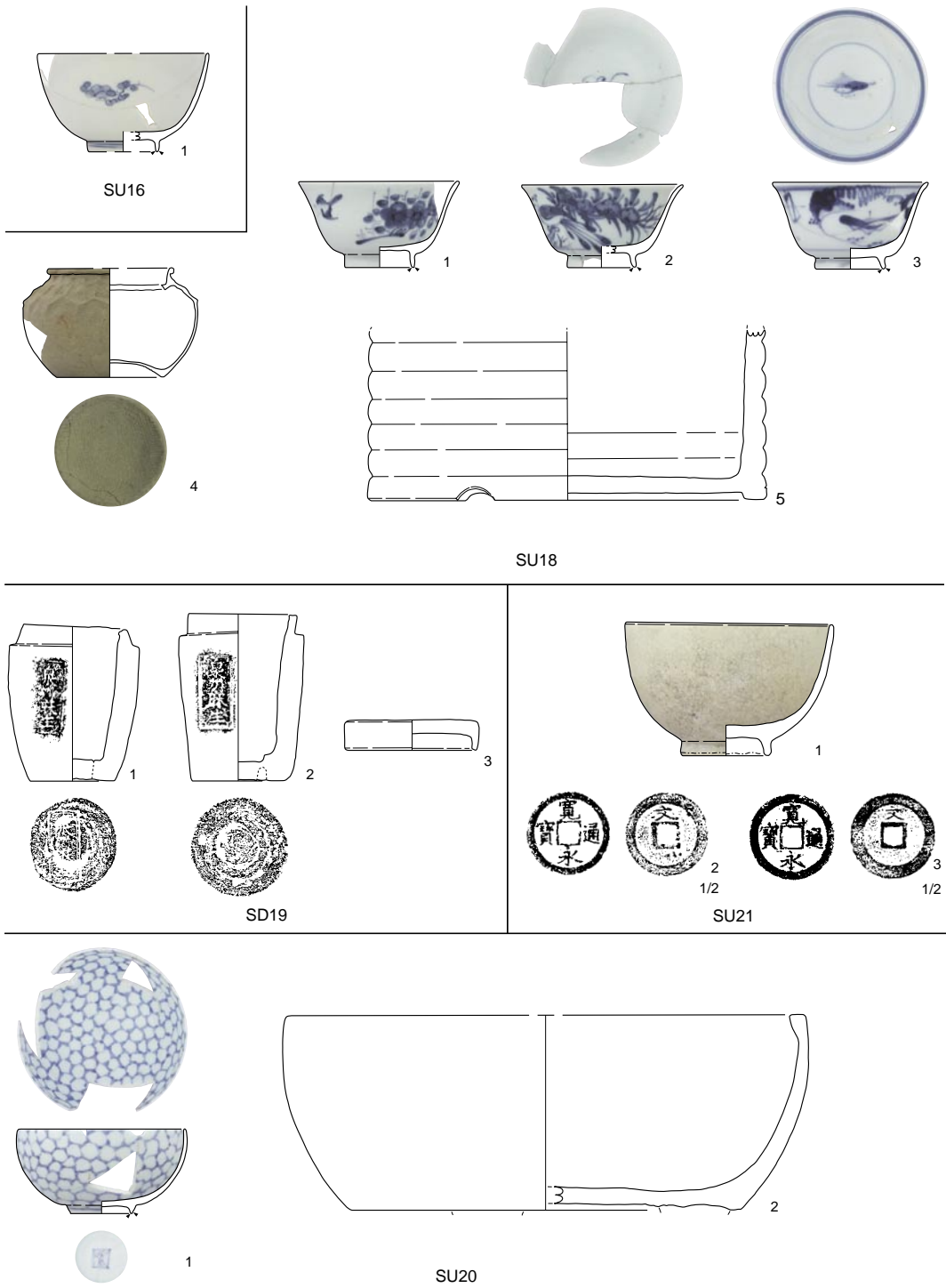


第 32 図 SU12(2)・SU15(1)



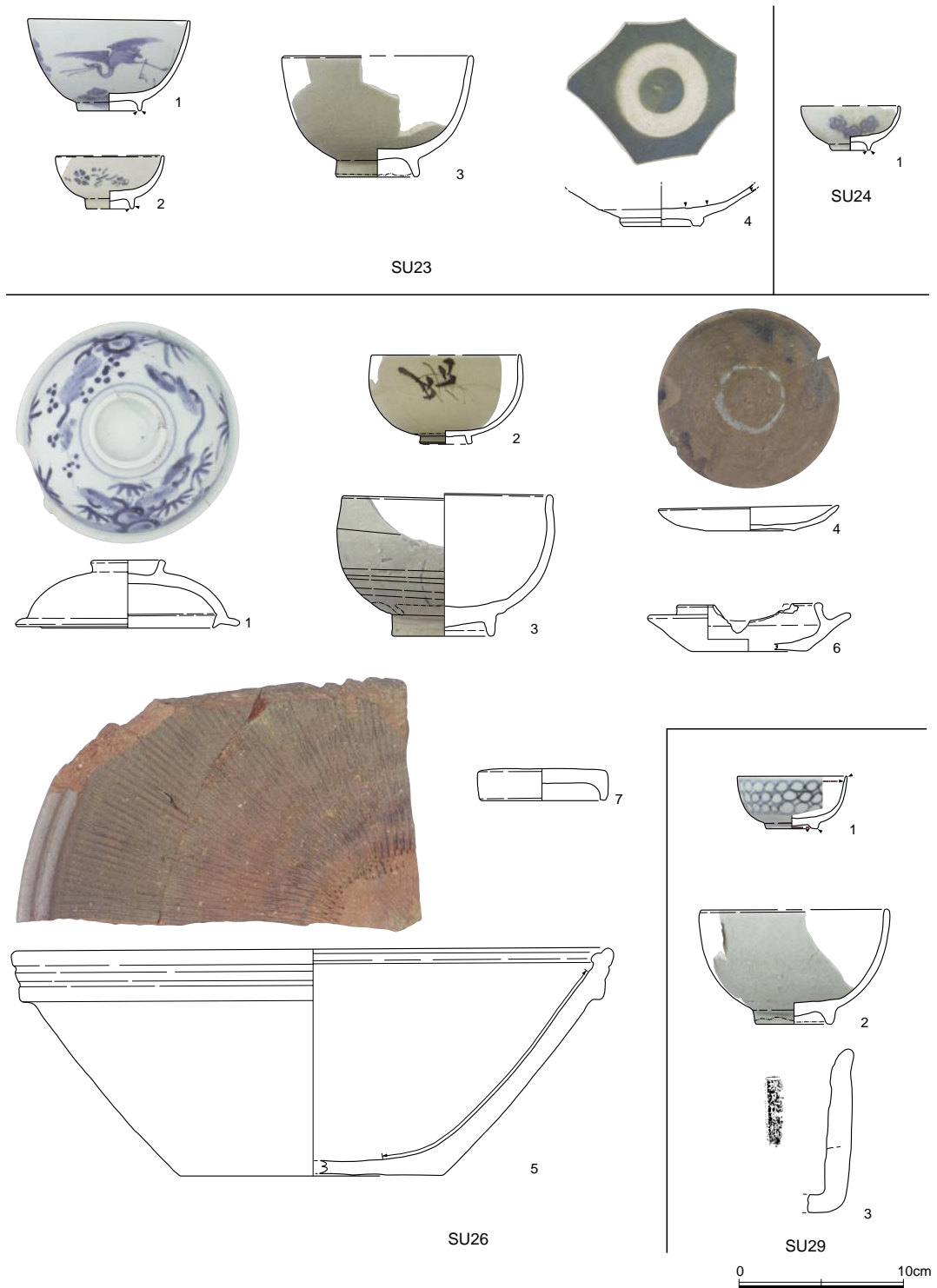
第33図 SU15(2)

0 10cm

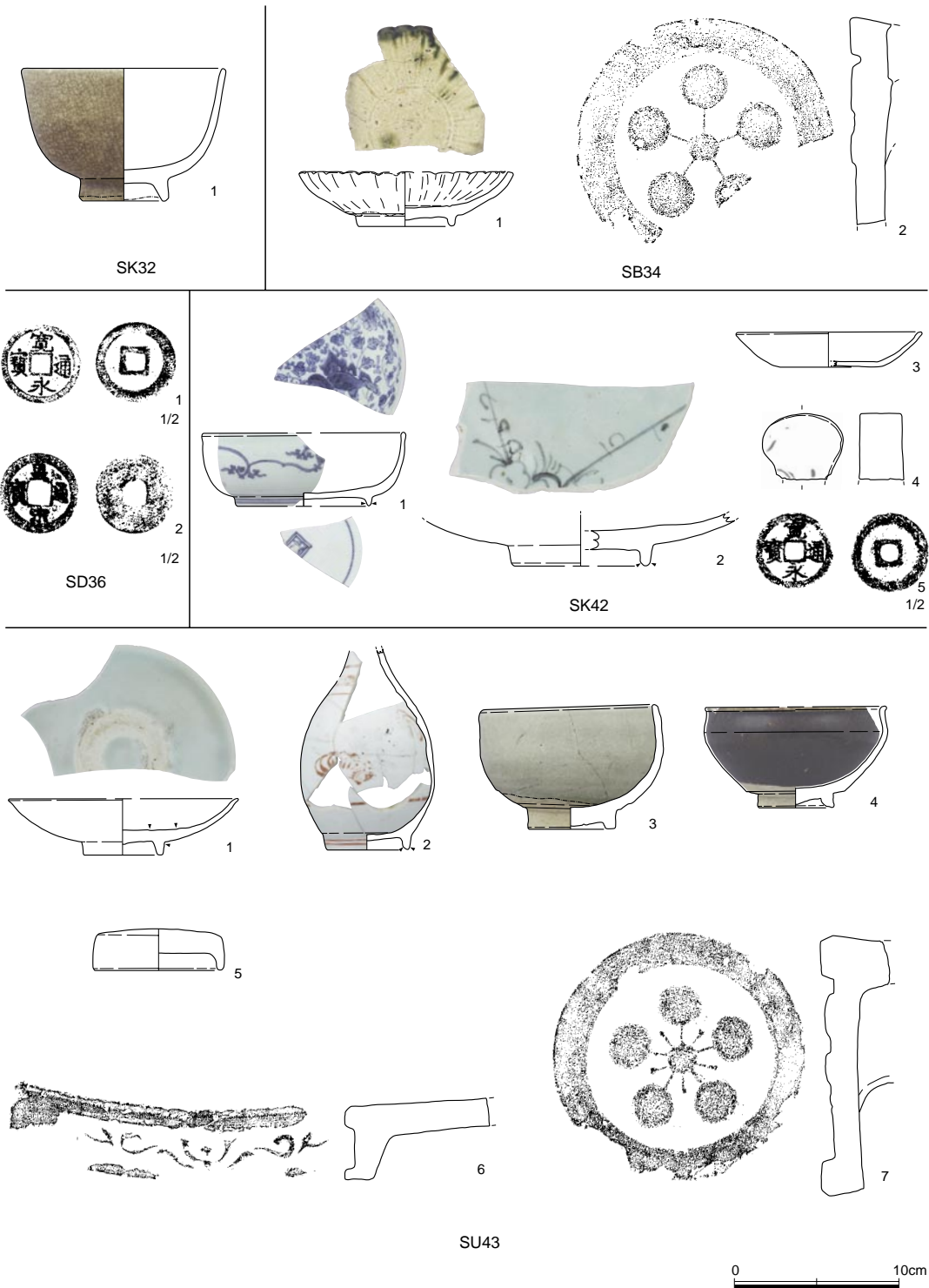


第 34 図 SU16・SU18・SD19・SU20・SU21

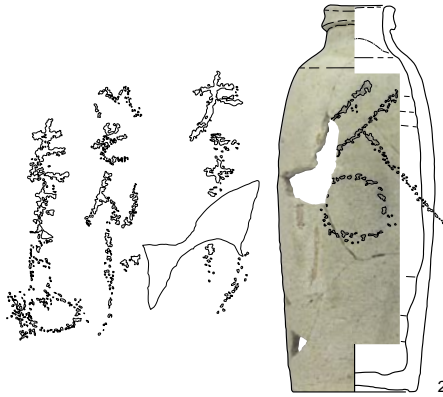
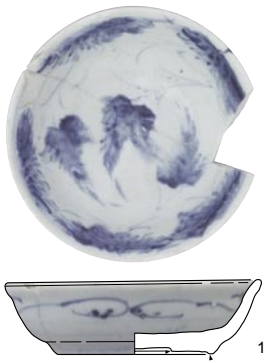
0 10cm



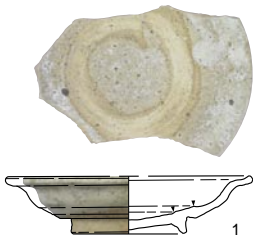
第35図 SU23・SU24・SU26・SU29



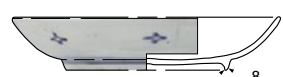
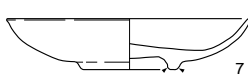
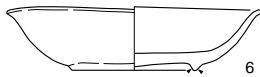
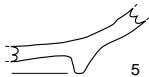
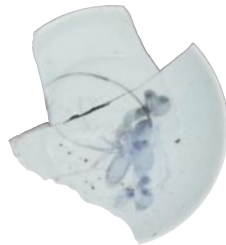
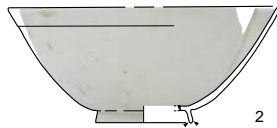
第 36 図 SK32・SB34・SD36・SK42・SU43



SK45



SU47



包含層(1)



第37図 SK45・SU47・包含層(1)



0 10cm

第 38 図 包含層(2)

V 研究編・加賀藩本郷邸表長屋の変遷

香取 祐一

今回の調査では建物址、地下室を中心に多くの遺構が検出された。これらの遺構を絵図面との対比、および今回の報告書作成時に行った現地調査で得た新知見を加え、江戸時代の加賀藩本郷邸から近代東京大学構内で本地点がどのように変遷していくのかを述べてゆきたい。

画期の設定

III章でも述べたとおり、本地点で検出された遺構は4期に区分することができる。まず調査区の広い範囲で検出された焼土層を鍵層として上位の遺構群、下位の遺構群の二期に区分することができた。この焼土層の年代はIV章で述べたように、これまで行ってきた東京大学構内の発掘調査成果および陶磁器の年代観から、元禄16(1703)年の火災を与えることができる。この焼土層の下位から検出された主な遺構として調査区東側に一列に伸びるSB31と、調査区のほぼ全面に広がるSB4があげられる。SB31とSB4の新旧関係はSB34が古く、SB4が新しい。このことから焼土層下位の時期を、SB31を中心とした遺構群の1期と、SB4を中心とした遺構群の2期の2段階に設定した。SB31から出土した遺物の量は少なく、SB31単体で所属時期を特定することは難しいが、17世紀末の遺物が出土しているSK32との切り合い関係によりSK32より古い遺構であることが判断できた。さらにその後続く2期の遺構群と著しく様相を異にすることから、1期と2期の間には大きな転換が予想される。この転換は元禄16(1703)年の火災以前では加賀藩本郷邸(以下本郷邸)が、下屋敷から上屋敷へと移行する契機となった天和2(1682)年の火災の蓋然性が高い。このことから17世紀末を1期の下限と設定した。

2期の遺構群の中心であるSB4は、礎石となった石材の上部に被熱した痕跡を認めることができ、上述の元禄16年の火災の際に焼失したものと思われる。したがって2期の年代は、17世紀末からSB4が火災により焼失した元禄16年(1703)の年代が与えられる。

焼土層上位で検出されたSB34はSB4を中心とした2期に引き続き、調査区全面にわたり検出された。3期の上限は上記のように2期の下限である元禄16(1703)年の火災以降であることは判別しているが、下限については層位的に明確には判断し得ない。本来ならば3期は1703年以降とすべきではあるが、後述するように文久3年(1863)の絵図面により、時期を特定できる遺構群を抽出することができ、この遺構群を4期に設定し、それ以外の遺構群を3期に設定した。4期の遺構群の構築年代は文久3(1863)年以前であることが、絵図面より判断できるが、その上限はそのほかの文献史料、絵図面より安政2(1855)年を遡らないことが推測できた。したがって3期を元禄16(1703)年の火災から安政2(1855)年までとし、4期を安政2(1855)年以降と設定した。

遺構の変遷

1 期（～ 17 世紀末）

1 期の特徴である SB31 は、各ピットの直径が 150 ～ 200 cm であるのに対して、確認面からの遺存深度が浅く 10 ～ 40 cm 程度であり、深さに比して直径が大きく感じられる。底面は概して平坦であり、掘立て柱基礎の柱穴跡とは考えづらく、礎石の抜き取り穴ないし生け垣などの可能性が考えられる。この SB31 と遺構軸を等しくする SK30、SK32 は断面形状に類似点が認められ、SB31 と何らかの関連性を有するとも考えられる。遺構の形状および対になって検出されていることから大型の柱穴、たとえば門のような遺構の可能性も考えられるが推測の域をでない。SB25 は一部、深い掘り込みを有し、掘立て柱の柱穴状の形状を呈しているが、概ね底部は平坦であり礎石を伴う柱穴列であると思われる。調査区外である西側に関連する遺構を伴い、建物を構成する可能性が考えられる。

天和 2 年の火災以前、本郷邸が下屋敷であった時期の屋敷内を描いた絵図面は残されておらず屋敷内の詳細についてははっきりしたことは分かっていない。しかし切絵図の「新板江戸外絵図」（寛文図第 3）、寛文 11 (1671) 年 (第 39 図) により本郷邸の範囲を知ることができる。この切絵図は縮尺・方位が比較的正確に記載されているとされている^(註1)。これによると寛文年間には現在の東京大学本郷キャンパスの外郭とかなりの部分で共通していることが窺え、本地点は 17 世紀の後半から本郷邸の東縁辺に所在し、現在に至ることが推測できる。したがってこの 1 期の段階で、すでに本地点は東側の道に近接していたと考えられ、SB31 から東側に平行する道との距離は 1 間未満と推測される。SB31 は道と境にあった塀などの境界施設としての遺構か、ないしそれに付帯する遺構の可能性を有し、元禄元 (1688) 年作成とされる「武州本郷第図」（第 40 図）にみられる表長屋の形態を持つ建物は、この時期には存在していなかった可能性が高い。

なお明暦の大火 (1654) 以後に「朝比奈左近」、「本多丹下」、「坪内半三郎与力」などの屋敷が新たに加賀藩に拝領された。本地点はその一部に該当することが文献調査によって確認されている (宮崎 1990)。しかし今回の調査では、明暦の大火以前の遺構、遺物は検出されていないため、この時期の詳細はわかっていない。

2 期 (17 世紀末～ 1703)

調査区全面に検出された SB4 の各ピットの間隔は、180 cm を基本としており、大形の建物址であることが推測できる。いくつかの礎石が遺存した状態で検出され、礎石表面に赤化・ひび割れが認められ、礎石自体が土中より露出していたと思われる。このことから SB4 は石場立て基礎^(註2)であったことが推測され、上述したように焼土層の直下に検出されたことから、元禄 16 (1703) 年の火災時に焼失したと思われる。地下室である SU16、SU21、SU23、SU43 は SB4 より西側に検出されている。そのうち SU16、SU23 からは被熱した遺物が検出された。火災後の廃棄に関連があると思われる。SD36 は埋土に多量の焼土・炭化物を含んでおり、SB4 との位置関係、遺構軸から

雨落ち溝のような性格を有する可能性が考えられる。厠跡と思われる SL22 も埋土に焼土を含んでおり、やはり火災の影響が看取できる。

この時期に当たる藩邸内の絵図面は「武州本郷第図」(1688)(山上会館・御殿下記念館地点報告書第3分冊 写真1)と「上屋敷殿閣図」(1687～1702)(山上会館・御殿下記念館地点報告書第3分冊 写真2)の二枚が残されている。山上会館・御殿下記念館の報告によると、この二枚の絵図面は密接な関係があり、邸内の造営の様子から「上屋敷殿閣図」が後に作成されたものであろうと推定されており、「武州本郷第図」は普請予定図であらうと推定されている^(註3)。絵図面自体も一間が一分と1/600のスケールで描かれており、既出の東京大学本郷構内の遺跡の調査報告書の分析に使用されており、検出された遺構との対比も精度が高く非常に精緻な絵図面である^(註4)。

第40図は「武州本郷第図」の調査地点に当たる部分を拡大したものである。「役人並」「侍分並」「与力並」と役職名・身分が書かれ、中級以上の藩士がこの地点に居住していたようである。役職名・身分が書かれた範囲と東西方向の間口間数が書かれた間の二本線は「庇」を意味していると推定されている^(註5)。役職名、身分が書かれた範囲は前庭であらう。

「武州本郷第図」と本地点の対比を試みてみたい。表長屋の角であるのところに記された「十七間」は他の間取りに記載された間数から比べると短いようであり、南北方向の距離を定めることができない。しかし表長屋の外壁すなわち屋敷の境と思われる位置から「庇」までの距離は「四間」と記載された距離とほぼ等しいようである。現在の東京大学本郷キャンパスの範囲と、この時期の屋敷の範囲が同じであると仮定すると、SB4の一番西側の並びまでは本地点の東側に位置する道から約7.2m前後であり、SB4の東西方向の範囲と符合する。よってSB4は「武州本郷第図」に描かれている南北の方向に藩邸の外郭に沿った間口4間ないし5間の「表長屋」と推測され、この表長屋の西側の前庭部分にSU16、SU21、SU23、SU43、SL22と地下室・厠が構築されていたと考えられる。この傾向は「武州本郷第図」と長屋の位置関係を対比した上記報告の空間利用の様子と類似する。しかし両地点と本地点は同じ「詰人空間」に属した長屋であり、立地条件などに大きな違いは見られないが、両地点ではこの時期の建物址の掘り方は検出されていない。もちろん両地点では削平された可能性も考えられるが、このことは本地点のSB4は両地点に比べ、より重量のある建物が建っていたと推測することができ、建物の上部構造の差異を表している可能性が考えられる。したがって本地点のSB4は同じ「長屋」とはいても、瓦が葺かれている、外壁が頑健に構築されているなどの、より堅牢な建築構造を呈していた可能性が考えられる。

3期 (1703～1855)

2期に引き続き、調査区全面に建物址SB34が検出された。各ピットの間隔は中心部で180cmとなっている。大形の建物址で長屋と推測される。礎石が残されている掘り方はなかった。しかしピットの形状から底部に礎石を据えた石場立て基礎であったと推測できる。さらに排水施設と思われるSD1、SD2、SD6が調査区を東西に横断する形で検出されている。これらは石材形状に違いがみられるが、構築形態は類似している。導水部は調査区の西側から東側へ低くなっており、屋敷の外

へ排水されていたようである。SD6は攪乱を受け判別できないが、SD1、SD2は升を伴い、その升部はSB34より西側に構築されている。升より東側SB34の建物の下に当たる部分は覆石が乗せられ、暗渠になっている。建物の存在する時期に、建物下部にこれらの遺構を構築することはできないので、SB34とSD1、SD2には同時期に構築された可能性が考えられ、構築の計画性が窺える。SB34、SD1、SD2は出土遺物から18世紀前半の構築年代が考えられる。そのほかに12基の地下室が検出されている。このうちSU20では底面より宝永のテフラが検出されている。SU3、SU7、SU8、SU9、SU11、SU12、SU14、SU20、SU24、SU26、SU29、SU46はいずれもSB34の西側に構築されている。

この3期に該当する絵図面は多く残されているが前述の「上屋敷殿閣図」（1687～1702）（山上会館・御殿下記念館地点報告書第3分冊 写真2）から「前田家本郷御屋敷図」（1761～1771）（山上会館・御殿下記念館地点報告書第3分冊 写真3）までは絵図面が残されていないため、18世紀前半の加賀藩本郷邸内の詳細については詳しくわかってはいない。18世紀後半から幕末までの絵図面に描かれた当該地点の周辺の状況は概ね似通っており、本地点に継続して表長屋が存在し、前庭を有していた様子が窺え、この状況は2期の本地点の空間構成と共通する。このことから本地点は、2期以降継続して表長屋が存在していたと推測され、SB34はこの表長屋に相当する建物址であろうと思われる。18世紀前半に構築されたと思われるSB34の表長屋は18世紀後半の絵図との対比からは存続時期の下限を明確にすることができず、どの時点で建て替えが行われたのかは判断できない。

絵図面の残されていない18世紀前半について東京大学本郷構内の遺跡の地下室を類型化し空間利用を分析した論文（成瀬 1994）から若干復元してみたい。形状の判別できる当該期の9基の地下室を上述の論文の分類に当てはめるとSU3、SU7、SU11、SU12、SU20が天井の低い1類に属し、小規模の地下室が密集して構築されている状況が看取できる。これらの地下室からは18世紀中葉以前の遺物が出土しており、その存続期間は18世紀前半と推測される。成瀬は1類・2類は小形で比較的安価に構築されたであろうと推定し、長屋の前庭の限られた空間内に構築されるとされ、詰人空間における空間利用に共通する点であるとされている。当該期のSB34の西側前庭部分に集中して1類の地下室が多く構築された状況は、これに類似し、2期から継続して本地点地点が詰人空間として利用されたことを表していると思われる。

4期（1855～）

画期の設定のところでも述べたように、層位的には焼土層上位の遺構は区分できないが、実年代のわかる絵図面の記載と一致した遺構を抽出した。

元禄16年の火災以降、本地点に該当する絵図面に文久3（1863）年の大鋸コレクション「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」の「東長屋上壇」（第41図）および北側に続く「東御長屋下壇」（第42図）が残されている。この絵図面は各室の間取り、前庭、厠、井戸が非常に緻密に描かれている。各室の使用状況を赤い部分が板の間、黄色い部分が畳、土間が灰色と統一した彩色が施され、「イ

ロリ」「ナガシ」「土間」「湯殿」、畳数、戸などの位置も記されている。この「東御長屋上壇」および「東御長屋下壇」に描かれた間取りと一致する絵図面に「江戸本郷邸図」(山上会館・御殿下記念館地点報告書第3分冊 写真26)がある。この絵図面の製作年代は1863～1868年とされており、1840～1845年製作とされる「江戸御上屋敷絵図」(第43図)に描かれた調査地点付近とは相違点が認められる。第43図の「東御長屋上壇」部分には各室の間取りが描かれているが、第41図の文久3(1863)年の大鋸コレクション「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」に記載された「東長屋上壇」の間取り数とは違っている。さらに「江戸御上屋敷絵図」(1840～1845)に描かれた藩邸南側の表長屋部分(山上会館・御殿下記念館地点報告書 附図8 94「南御長屋」)が「江戸本郷邸図」(1863)(山上会館・御殿下記念館地点報告書第3分冊 写真26)と著しく変化している。1845年から1863年の間でこの変化の要因として考えられるものに、安政2(1855)年の地震がある。この地震が本郷邸に与えた被害は甚大で『加賀藩史料 幕末編上巻』(前田育徳会 1932)に詳細な記述がみられる。このうち上述の絵図面の変化に関係のあるところを抜き出すと「一、南之方表長屋百十三間一棟震損、腰瓦落。」「東南之方表長屋七十三間一棟破損、腰石崩落。内二十四間余皆潰。」とあり、「南御長屋」が損壊した様子が記述されており、「江戸本郷邸図」と「江戸御上屋敷絵図」の変化の要因として安政2年の地震の被害が影響しているのは間違いないだろう。さらに「一、東御門統御長屋北の方半分計潰(後略)」とあり、「東御長屋下壇」部分が被害を受けた様子が記述されており、本地点に該当する「東御長屋」にも地震の影響があったことが看取できる。地震後の普請については記述がみられないが、地震の翌年の安政3年に「去年の地震による江戸邸殿閣の修繕を向五カ年延期すべきことを命ず」(『幕末編上巻』p758)とあり、文久年間までは修繕が待たれたことが推測でき、大鋸コレクション「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」の「東御長屋上壇」(第41図)、および北側に続く「東御長屋下壇」(第42図)が構築ないし修復されたのは、文久3年からさほど遡らないであろう。よって4期の年代を1855年以降と設定した。

絵図面のほかに明治43年(1910)撮影とされる調査地点付近に当たる2枚の写真が残されている。この写真については角田真弓により分析がなされている(角田 2000)。再度検証を試みると第44図A地点の写真には表札が写されており、「本郷區元富士町一」と読むことができる。この番地は当時の東京帝国大学本郷構内を指している。この時点で表長屋状の建物を残しているところは明治43～44年の「東京帝国大学平面図」(第45図 東京大学施設部蔵)のa地点以外にはなく、南側から撮影されたと推測される。第47図B地点の写真も同じ時に撮影されたとされている。織田一麿による「東京風景十六 本郷竜岡町」(第46図)の石版画と比較すると二枚の写真を結びつけることができ、第47図B地点の写真はA地点の北側に続く長屋門と見られる。「東御長屋下壇」(第42図)に描かれた「東御門」は明治43年撮影の長屋門と類似点が認められ、同一である可能性が高い。

今回報告書作成に当たり現地を再確認していくつかの知見を得ることができた。第47図B地点の写真の白い丸で囲った部分に側溝を渡る石橋が掛かっており、その橋の縁に石を穿った臍がみえる。この部分が第48図e地点の部分と同一であることが判明した。橋の反対側部分の臍も現地

で確認でき、門の間隔は 6.7 m である。この門の間は石垣と同質の石材で充填され石垣が続いているように見える。

さらに 3 期の SD1、SD2、SD6 は調査区外東側へ延びているが、SD1 の延長上の排水口は現在も石垣の第 48 図 b 地点に残されている。この石垣に残されている排水口は第 48 図 a 地点と b 地点のみと考えられていたが、今回 SD2 の排水口の c 地点、SD6 の排水口の同 d 地点に石垣の石材に使用している安山岩系の石材と異なる石材によって塞がれた排水口跡を確認することができ、検出された遺構との一致をみることもできた。

現地の状況および明治 43 年に撮影された写真と「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」の対比を試みる。「東御長屋上壇」の角から「東御長屋下壇」に見える「東御門」までの距離は絵図面では 60 間と計算できる。現在の「石垣の角地点」から石垣に臍の穿たれた「東御門」の南側の地点 (e 地点) までの距離は 110 m であるので 1 間あたり 1.833 となる。この縮尺に合わせ現況と「東御長屋上壇」「東御長屋下壇」を対比させると調査区の西側に現存している井戸^(註5)と位置的に近接しており、絵図面の精度は高いと思われる (第 49 図)。さらに本地点の遺構と対比させると焼土層上位の遺構のうち SK10、SK18、SK45、SK51 が絵図面上で「ナガシ」と記された部分と間隔的な一致をみる事ができる。この SK10、SK18、SK45 は南北 1 m、東西 80 cm の方形を呈し、底面にピットをもち、形態的に類似点が認められる。SK51 は上部が削平され底部のピットのみが遺存している状態であるが、各遺構間 7.5 m でこれらの遺構は直線上に並んでおり、同一の性格を有する可能性が考えられた。このうち SK10、SK18、SK45 からは 19 世紀代の遺物が出土しており、一連の遺構は文久 3 (1863) 年に描かれたとされる大鋸コレクション「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」の「東御長屋上壇」に記載された「ナガシ」であることが判明する。第 50 図は「東長屋上壇」の復元図を前述の「ナガシ」位置に配置し直したものである。SK10、SK18、SK45、SK51 が「ナガシ」の位置に相当している様子が看取される。さらに表長屋の西端に沿う形で SX5 が検出されている。SX5 は 18 世紀代と思われる遺物を出土した SK48 より新しいことが分かっており、東御長屋に伴う可能性が考えられ 4 期に含めて考えた。

さらに絵図面と現地との対比を進めると、現在は第 34 図の断面図にあるように三段の構成になっているが、上述の織田一磨による「東京風景十六 本郷竜岡町」(大正 6 年)には二段の石垣として描かれている。「東御長屋上壇」と「東御長屋下壇」の境の部分は大正 10 年に撮影された写真(文京区教育委員会 1997)が残されている。撮影部分は第 48 図 h の地点になり、現在の地点と一致する^(註6)。では g 地点はどうであろうか、g 地点と h 地点の石垣を比較してみると h 地点は段差の縦方向の境目が下部にまで及んでいるのに対し、g 地点では段差の境目部分が下部とは一致しない。このことから g 地点の段差は、石垣の構築時から存在していたとは考えづらく、大正 10 年に以降に削平された可能性が考えられ、本来は 2 段構造を呈し、その比高差は 2m 以上あったと推測される。

II 章で述べたように、調査地点の自然地形は南から北へ緩く下っているが、明治 16 年の時点では不自然な整地により平場が形成されている。これは本来の傾斜に盛土を行い、表長屋を上壇と下

壇に区分けし構築した結果であろう。「東長屋上壇」と「東御長屋下壇」の名前は、この段差ゆえにその名を附していたと思われる。

おわりに

今回の発掘調査によって判明したことをまとめてみたい。

・調査地点付近は天和2年の火災以前の下屋敷時代より、本郷邸は現在の東京大学の外郭に非常に近いところに位置していると考えられる。

・天和2年以前の下屋敷時代には「表長屋」は存在していなかった。

・天和3年以降、本郷邸が上屋敷になってから「表長屋」は構築された。

以上の点が、発掘調査で得られた成果と、絵図面・文献史料および現地調査を照らし合わせ明らかになった。今回は特に現地調査により新たに得られた部分が大いように思える。そういった意味では調査地点付近に江戸時代の史跡と呼べる石垣が存在したことは非常に幸運であった。しかし今回の調査報告では「表長屋」の基礎構造、基準尺の変遷について十分に言及することができなかった。今後、他の東京大学本郷構内遺跡との比較・検討を行い明らかにしていきたい。（香取祐一）

註

- 1 『古板江戸図集成』巻3 新板江戸外絵図（寛文図第3 寛文13年 P28「西洋図法を採りいれ実測図であること、しかも、その縮尺が一分を五間に積った分間図であること（後略）」と解説されている。
- 2 「石場建て」の定義は渋江 1987 およびそれを踏襲した梶原 2001 に準じている。
- 4 この章の絵図面について解釈はすべて細川 1990 を参考にしている。
- 3 『理学部7号館地点』「第8章 第3節 絵図面と考古資料の対比」（山口・羽生・細川 1989）および『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』の「研究編第五章 江戸藩邸内土地利用研究の一指針」（成瀬 1990）
- 5 写真14「本郷キャンパス史跡マップ」『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』2000 東京大学コレクション X 東京大学総合研究博物館
- 6 『私の文京アルバム』p14「帝大竜岡門近くのなまこ壁」に大正10年の「東御長屋上壇」「東御長屋下壇」の一部が撮影されている。現在の石垣とこの写真を比較すると石垣の下方は一致するが上部は変更されているようである。

参考文献

- 梶原勝 「第2節 多摩地域における近世の掘立柱建物」『埋もれた中近世の住まい』同成社 2001
- 渋江芳浩 「近世農家のイメージ」『貝塚』1987
- 角田真弓 「写された大名屋敷」『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学コレクション X 東京大学総合研究博物館 2000
- 成瀬晃司 「研究編第五章 江戸藩邸内土地利用研究の一指針」『東京大学本郷構内の遺跡 法学

部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』1990

成瀬晃司 「江戸藩邸の地下空間」『武家屋敷』山川出版社 1994

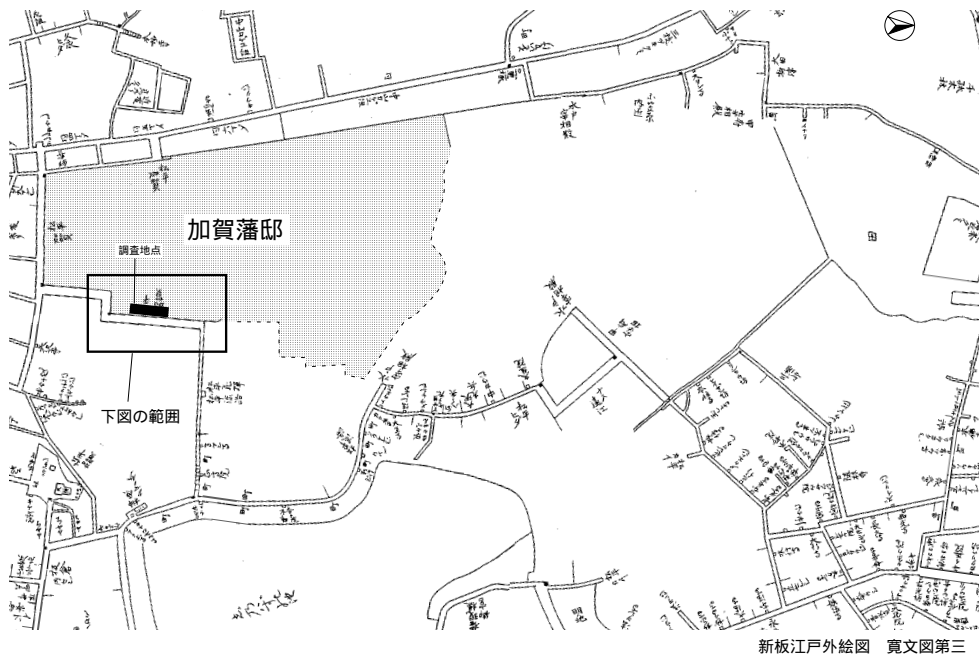
文京区教育委員会『私の文京アルバム』1997

細川義 「加賀本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館
第 3 分冊 考察編』1990

前田育徳会『加賀藩史料 幕末編上巻』1932

宮崎勝美 「第 1 節 加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館
第 3 分冊 考察編』1990

山口剛志・羽生淳子・細川義 「第 8 章 第 3 節 絵図面と考古資料の対比」『東京大学本郷構内の
遺跡 理学部 7 号館地点』1989



第39図 下屋敷時代の加賀藩邸

第40図 「武州本郷第図」(尊経閣文庫所蔵、無番)部分

大塚コレクション「加賀藩邸江戸御屋敷長屋敷図」（石川県立歴史博物館所蔵）

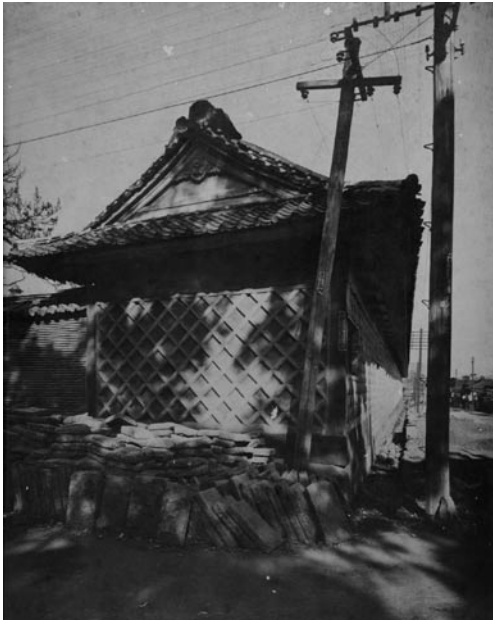
第 41 図 東御長屋上壇

大塚コレクション「加賀藩邸江戸御屋敷長屋敷図」（石川県立歴史博物館所蔵）

（金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫、特18.6-27-1）

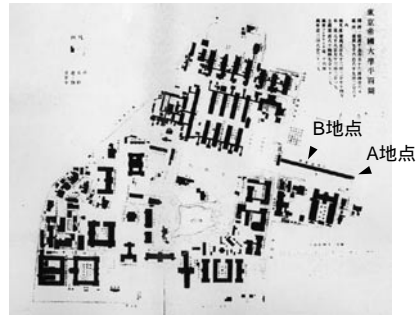
第 42 図 東御長屋下壇

第 43 図 「江戸御上屋敷絵図」



(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵)

第44図 A地点



(東京大学施設部蔵)

第45図 東京帝国大学平面図(明治43~44年)

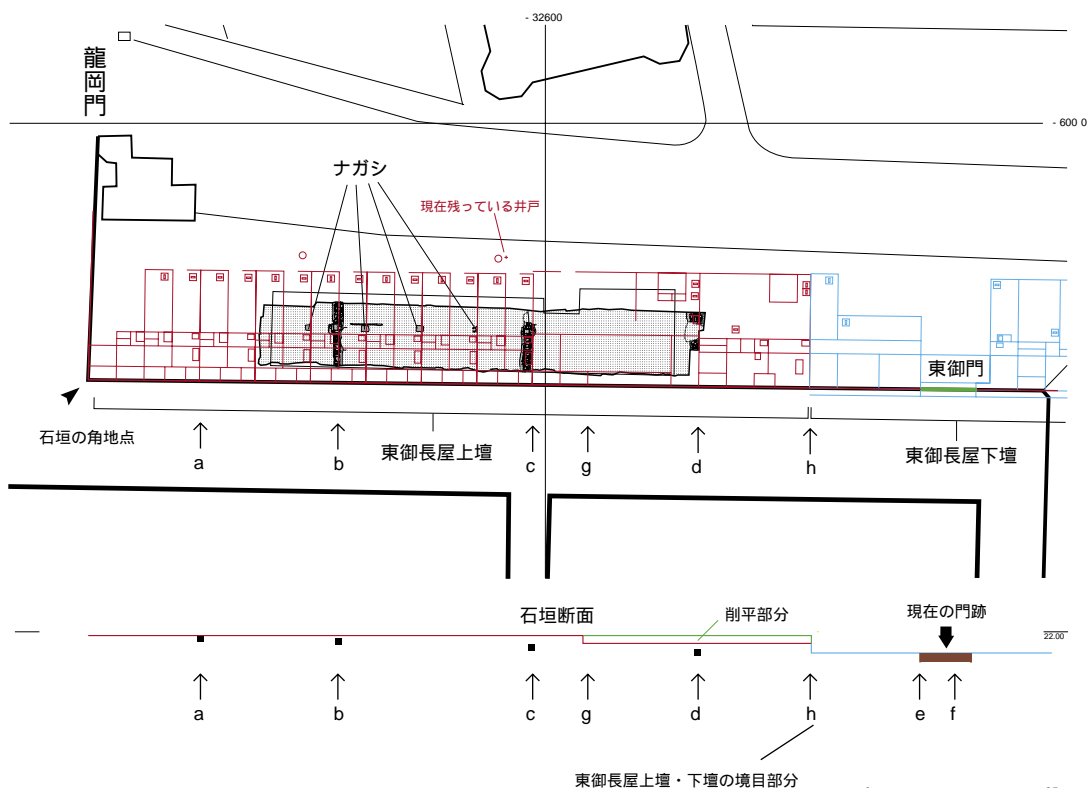


(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵)

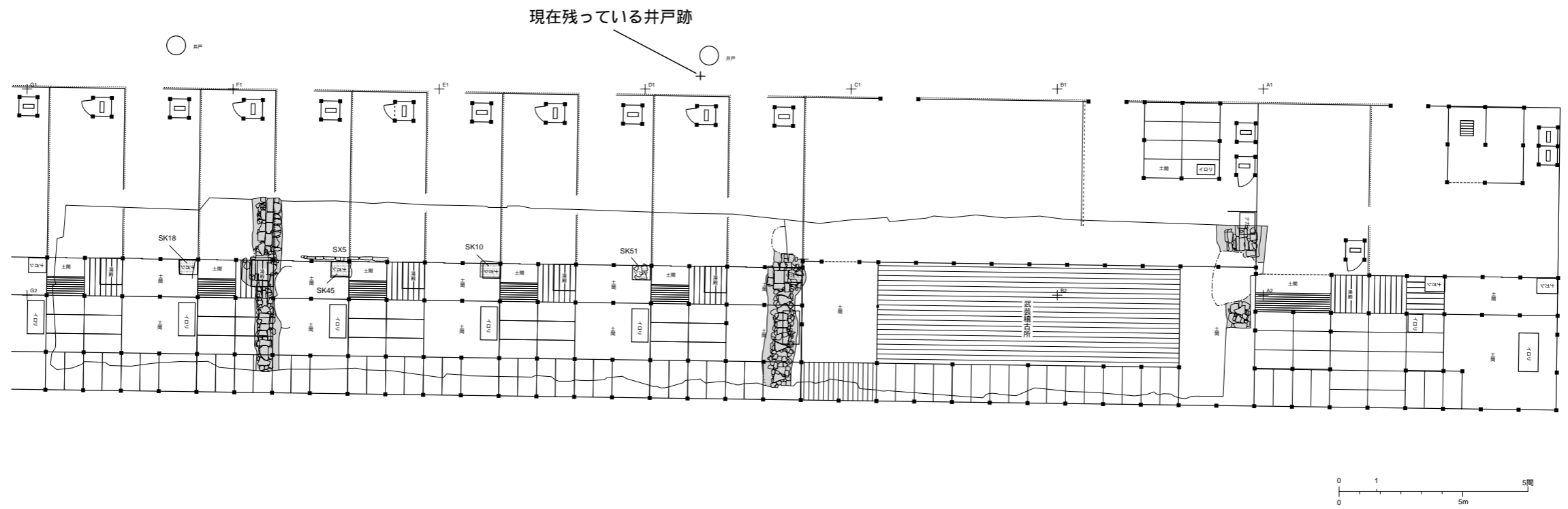
第47図 B地点



第 48 図 現在の状況



第 49 図 現況・長屋合成図



第 50 図 4 期遺構・東御長屋上壇復元図

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせき ちょうさけんきゅうねんぽう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	4							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	東京大学埋蔵文化財調査室							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1駒場リサーチキャンパス 56号館 03-5452-5103							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 の遺跡（本郷台遺 跡群）山上会館龍 岡門 別館地点	とうきょうとふんきょうくほんごう 東京都文京区本郷7- 3-1	13105	47	35° 42' 23" ~ 35° 42' 21"	139° 46' 02" ~ 139° 46' 03"	1994年8月17 日~10月19日	593	東京大学山上 会館龍岡門別 館新営に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
東京大学本郷構内 の遺跡 山上会館 龍岡門別館地点	生活関連遺構	江戸時代	建物址	5基	陶磁器・土器			
			溝	8基	金属製品			
			地下室	20基	石製品			
			土坑	14基				
			便所	1基				
			性格不明	1基				

東京大学本郷構内の遺跡

農学部校舎 (7 号館) 地点発掘調査報告

2004

東京大学埋蔵文化財調査室

例言

1. 東京都文京区弥生1目1番地1号東京大学に所在する、農学部校舎（7号館）新営工事に伴う埋蔵文化財遺跡調査報告書である。遺跡名は東京大学本郷構内の遺跡農学部7号館地点である。
2. 遺跡調査は武藤康弘（現奈良女子大学）が担当した。調査期間、調査面積は1992年1月試掘調査、1992年10月6日～11月16日（Ⅰ期調査）、1170㎡、1993年11月3～26日（Ⅱ期調査）、1000㎡である。調査時の所見は、武藤康弘1997「8 農学部校舎（7号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報1』PP.27-28を参照いただきたい。
3. 本書の編集は原祐一、香取祐一が担当した。陶磁器類の分類は堀内秀樹が監修した。遺物実測は、今井雅子、川原良子、坂野貞子が行った。遺物写真撮影は、青山正昭、文書調査は原が行った。
4. 整理作業から報告書作成までの期間は以下である。

実測図作成	2002年11月27～28日
遺物写真撮影	2003年1月8日～2月6日
図版作成	2001年11月1日～2002年2月28日
報告書編集	2004年1月19～2月23日

凡例

1. 遺構実測図の表記方法は、調査室がこれまで行ってきた方法によった。縮尺は、1/50スケールである。
2. 遺物実測図の表記方法は、調査室がこれまで行ってきた方法によった。縮尺は、基本的に1/4スケールである。異なる縮尺の場合は図に明記した。
3. 遺構の法量等は、遺構観察表に記載した。
4. 遺物の分類、法量は、遺物観察表に記載した。遺物の分類は、東京大学埋蔵文化財調査室1999『東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊 東京大学構内の遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)1997年度』を基に行った。

第1章 調査の結果

1. 文書調査

警視庁、東京都公文書館で射的場関連文書の調査を行った。文京区弥生町在住の青木誠氏によって収蔵されている浅野家関連文書には、浅野地区と周辺住宅地に関する文書が含まれ、農学部の一部に関する記述も確認された。

2. 遺構

調査者の所見では、東端部遺構検出面で、武蔵野ローム層下層の堆積が確認されていること、遺構の検出状況と、SD01の陶磁器年代から、調査区全域が幕末期に削平されたとしている^(注1)。しかし、この削平は工学部武田先端知ビル地点、農学部総合研究棟の成果から^(注2)、明治期に行われたことは明らかである。

杭列、井戸、地下室、土坑など、41遺構を検出した(写真1・2)。遺構検出面の標高は、西側に位置するSU20が20.3m、東側に位置するSP7が19.5mで、西から東に緩やかに傾斜していた。一部を除いて浅い遺構が多い。これは、前述の削平によって遺跡全面が削平されたためと考えられる。遺構軸は、溝状遺構SD1に直行、平行する遺構、柱穴列SB16に直行、平行する遺構がある。遺構軸の差が、遺構構築年代を示すことが、これまでの東大構内の調査で明らかになった例があるが、現在のところ水戸藩邸内の絵図を実見できないこと、遺物量が遺構年代を評価するのに十分でなく、一部に明治時代の遺物混入が見られることから、土地利用状況については言及できないため今後の課題としたい。以下に、個別の遺構について述べる。

SD01・SK39 (写真4)

SD1は、確認された範囲で長軸45mの遺構で、西側の調査区外へ伸びる溝状遺構である。覆土から19世紀前半の時期の陶磁器が大量に出土した。調査者は東側に位置するSK39は、溝状遺構に接続する溜枳としている。遺構内には、約1m四方の木杵の痕跡が認められた。

SK05 (写真3)

平面形が長方形、断面形が長方形を呈する。南側が攪乱を受けているため全体の規模は不明である。

SK06・SK32・SK33

平面形が長方形、断面形が長方形を呈する。南側が攪乱を受けているため全体の規模は不明である。これら3遺構が並んで検出された。

SU09 (写真5)

平面形はほぼ長方形、断面形は長方形を呈する。西壁際と東壁際、遺構底部に杭穴が確認されて

いる。上部は削平により不明であるが、木杵があったものと考えられる。遺物量が多いことからごみ穴と考えられる。

SK13

平面形が長方形、断面形が長方形を呈する。遺物が多いことからごみ穴と考えられる。

SB16・SB17

両遺構とも柱穴の平面形が長方形、方形、遺構断面が台形、不整形を呈する。同じ遺構軸である、SK26・SK28・SK29との関連性が予想されるが、これらの遺構から遺物が出土していないため遺構年代は明確にできない。

SU20

平面形が長方形、断面形が台形を呈する。北西角が一段低くなっている。遺物量が多いことからごみ穴と考えられる。

SB23・SB24

SD1と同じ遺構軸の柱穴列である。両遺構とも柱穴の平面形が方形、断面形が長方形、方形を呈する。

SK26

平面形が長方形、断面形が長方形を呈する。SB16と同じ遺構軸である。

SK28

平面形が長方形、断面形が長方形を呈する。SB16と同じ遺構軸である。

3. 遺物

遺物は、縄文時代晩期の土器片が僅かながら確認されている。実測図は、江戸時代の遺物を中心に77遺物を掲載した。注目される遺物は、以下に、各遺構の遺物について述べる。

SD1

碗、皿、碗蓋の他、土玉、土製人形、ミニチュアの皿、泥面子、火打石などが出土した。1は瀬戸・美濃系磁器である。人形玩具類が比較的多く出土している。図16-14の弾丸は着弾による変形、ライフルマークが確認できる。図化していないが、江戸時代の整地面直上の青灰色粘土層から弾丸2点が出土している。現在の浅野地区西側に位置していた明治時代の射的場との位置関係から、農学部で出土した弾丸は、射的場外に着弾したものと考えられる。弾丸がたびたび敷地内に着弾するこ

とから、射的場の移転を嘆願する文書の状況を反映する遺物である^(注3)。

SU9

碗、坏、徳利、尿瓶、乗燭などが出土した。これらの遺物は比較的完形に近い。5には「𠂔」、6には「𠂔」の釘書がある。9は櫛で鼈甲を加工したものと考えられる。10は石を加工したもので、硯と考えられる。

SU13

碗、坏、皿、仏飯器、半胴甕、土瓶、灯明具類、塩壺、焙烙などが出土した。これらの遺物は比較的完形に近い。10は底部に穿孔されており、植木鉢に転用されている。

SU14

碗、カワラケ、陶器製ミニチュアの瓢箪、土製人形、火打石が出土した。

SU20

碗、仏飯器、片口鉢、瓶掛、徳利、灯明具、砥石、土玉、土製人形が出土した。これらの遺物は比較的完形に近い。2は瀬戸・美濃系磁器である。8には「長」、9には「高サキ」の釘書がある。

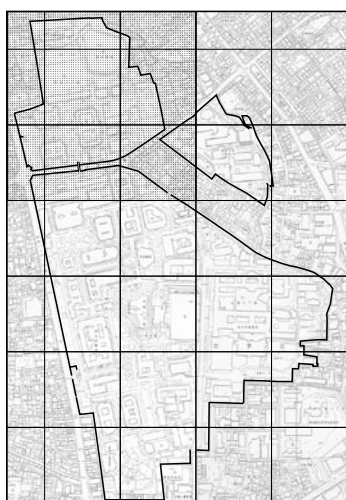
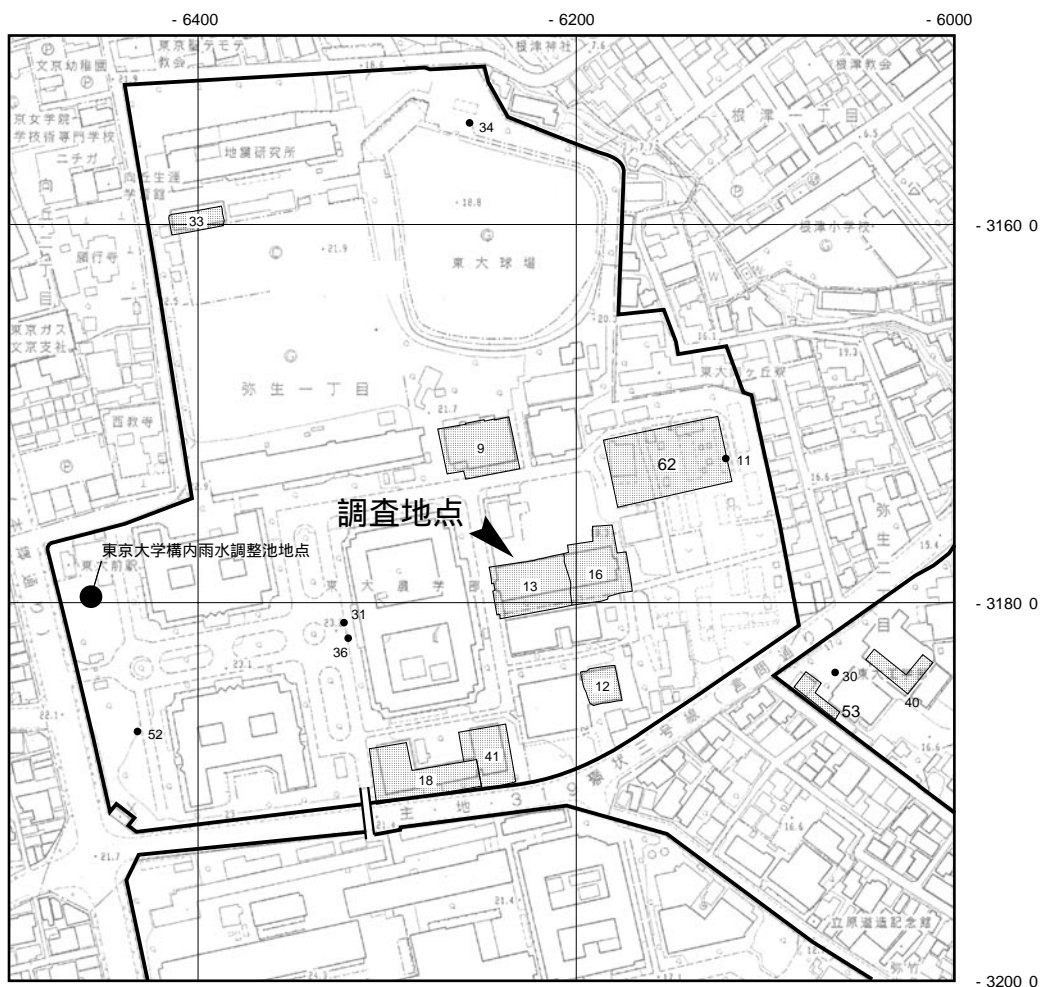
SU20

碗、鉢、土製人形が出土している。1は瀬戸・美濃系磁器である。

注

1. 武藤康弘 1997「8 農学部校舎（7号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報1』PP.27-28
2. 原祐一 2001「武田先端知ビル地点遺跡発掘調査の成果と課題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点1次調査速報』（東京大学施設部提出文書）。原祐一 2001「考察2 武田先端知ビル地点の射的場と出土弾丸」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）。原祐一 2002「(仮称) 農学部総合研究棟地点の成果と仮題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 (仮称) 農学部総合研究棟地点調査速報』（東京大学施設部提出文書）。原祐一 2002「工学部武田先端知ビル地点の発掘調査 - 明治時代の射的場跡と弥生時代の方形周溝墓 -」東京大学広報委員会 2002.2.27『学内広報 NO.1231』PP.7-8。原祐一 2002「農学部総合研究棟 (仮称) 建設予定地の発掘調査」東京大学広報委員会『学内広報 NO.1237』PP.23-24。
3. 本郷区役所編 1937「第三篇 第七章 衛生 第四節 伝染病」『本郷区史』P916。
「脚気病院は明治初年、癲狂院と同じく東片町に設置せる処であるが、明治十五年には早くも之を閉鎖することとなつた。此の両病院は陸軍用地に隣接し、射的場よりの流弾に見舞はらるることが多かつたので、射的場の移転法を当局に陳情した記録が東京府に残っている。」

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告



- 9 農学部家畜病院
- 11 農学部ガラス室
- 12 農学部図書館
- 13 農学部校舎(7号館)(1期)
- 16 農学部校舎(7号館)(2期)
- 18 農学部総合研究棟(SK)
- 30 工学部全径間風洞実験室新管支障ケーブル移設
- 31 ATMネットワーク施設整備
- 33 地震研究所テレメタリング観測施設
- 34 グランド
- 36 農学部ガス管理設
- 40 工学部全径間風洞実験室
- 41 ペンチャー・ビジネス・ラボラトリー
- 52 農学部(21世紀館)木質ホール
- 62 農学部総合研究棟(NS01)

図1 調査地点の位置

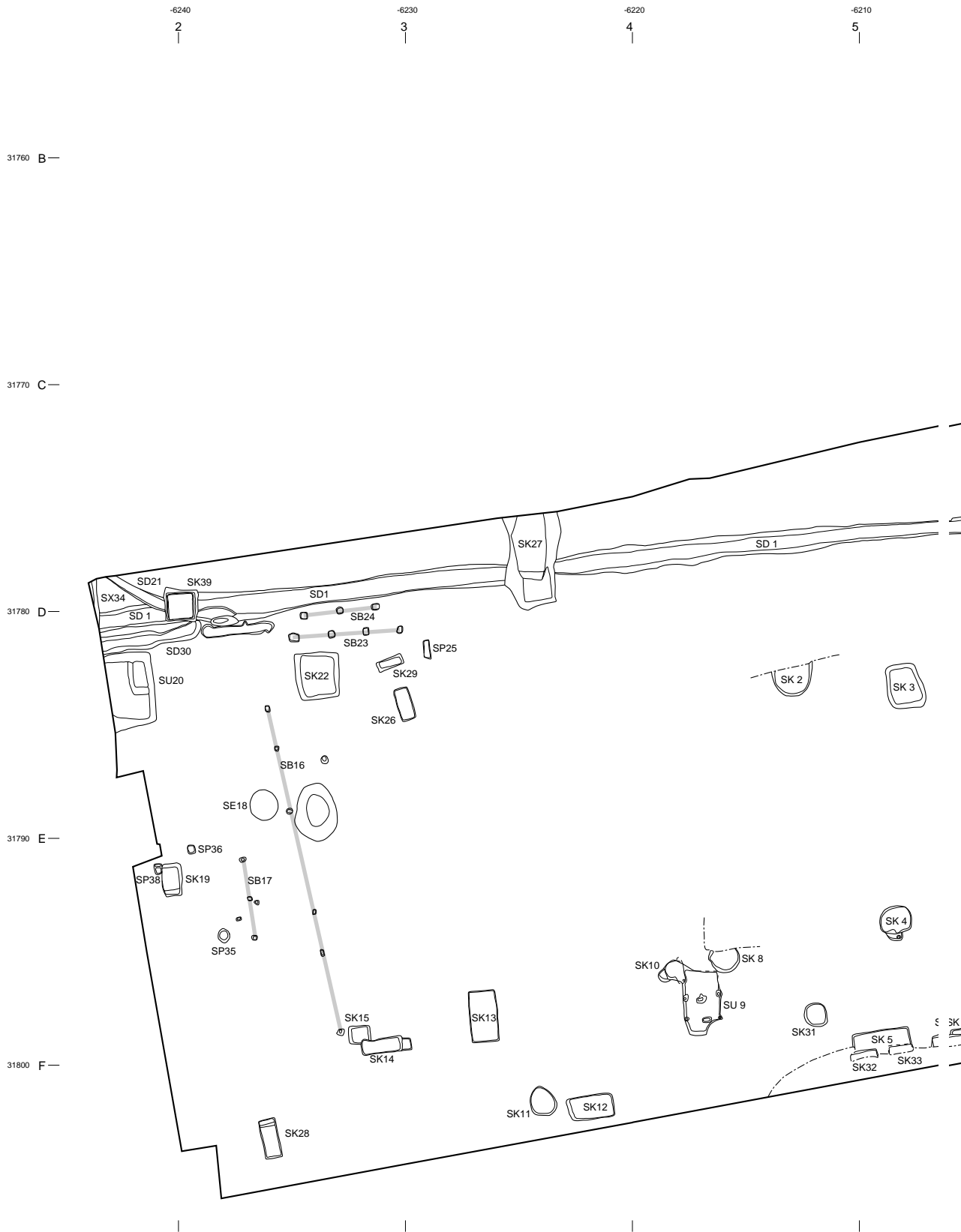


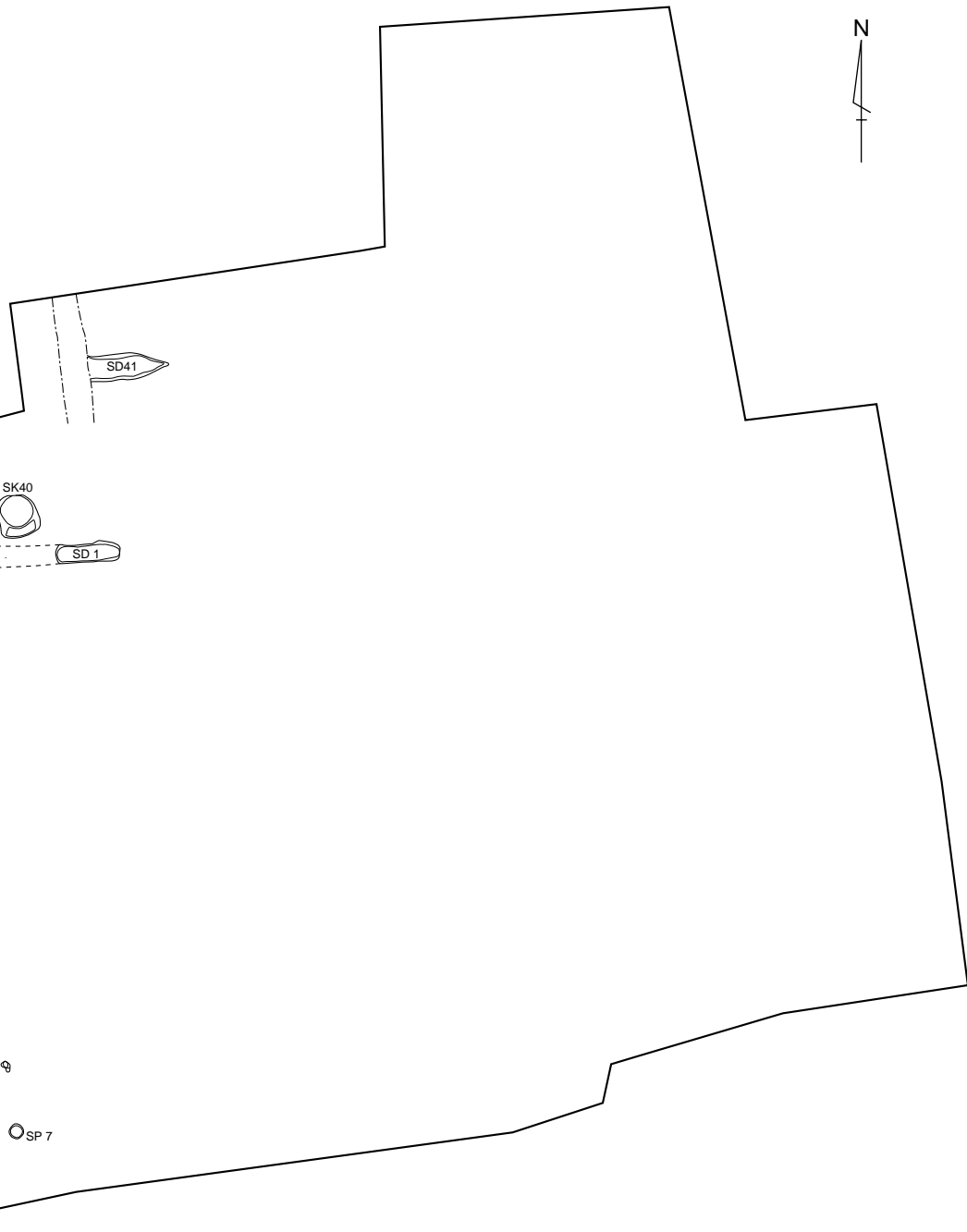
図 2 遺構配置図

-6200
6

-6190
7

-6180
8

-6170
9



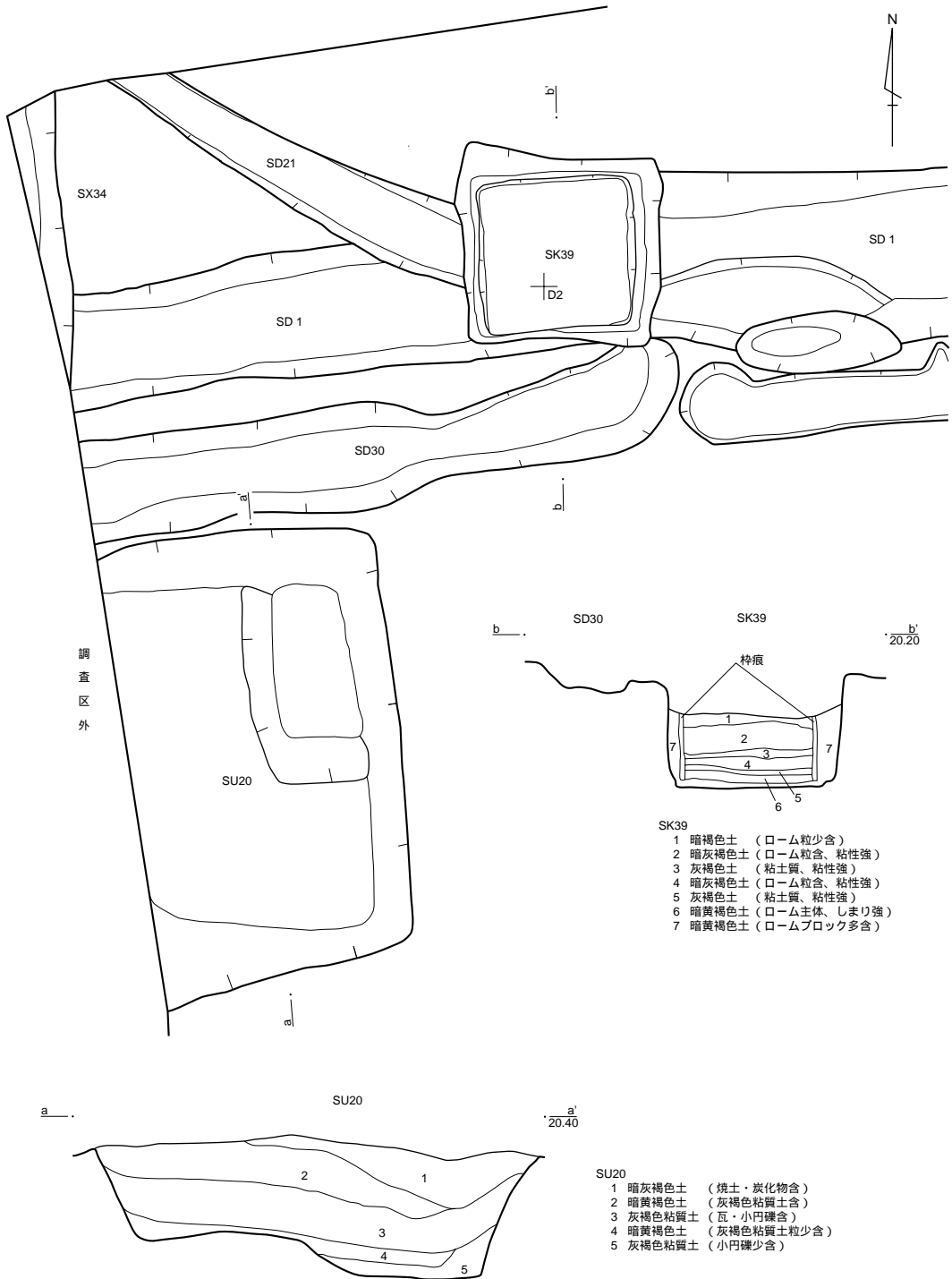


図3 SD 1(1)・SU20・SD21・SD30・SX34・SK39

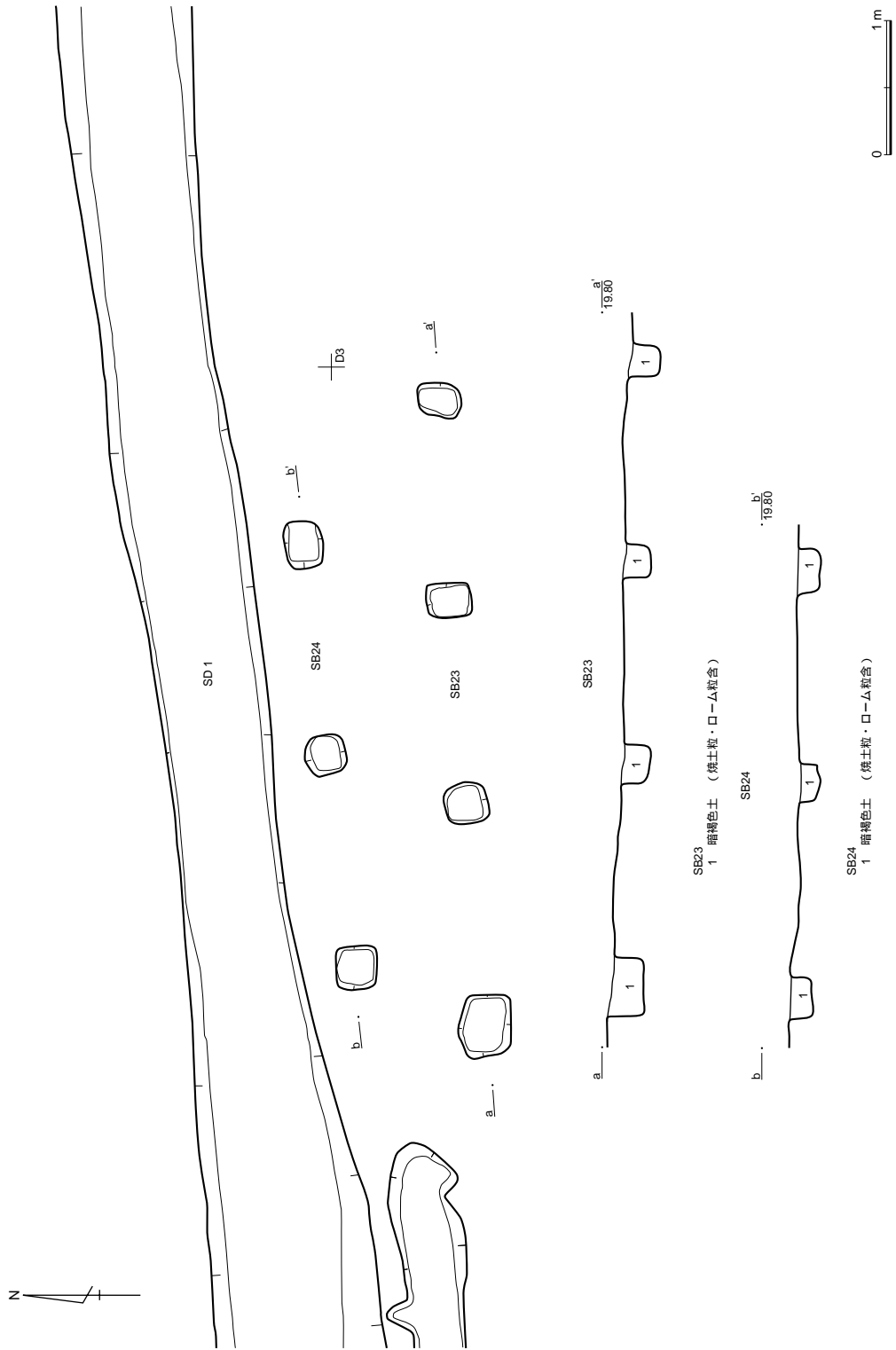


図4 SD 1 (2)・SB23・SB24

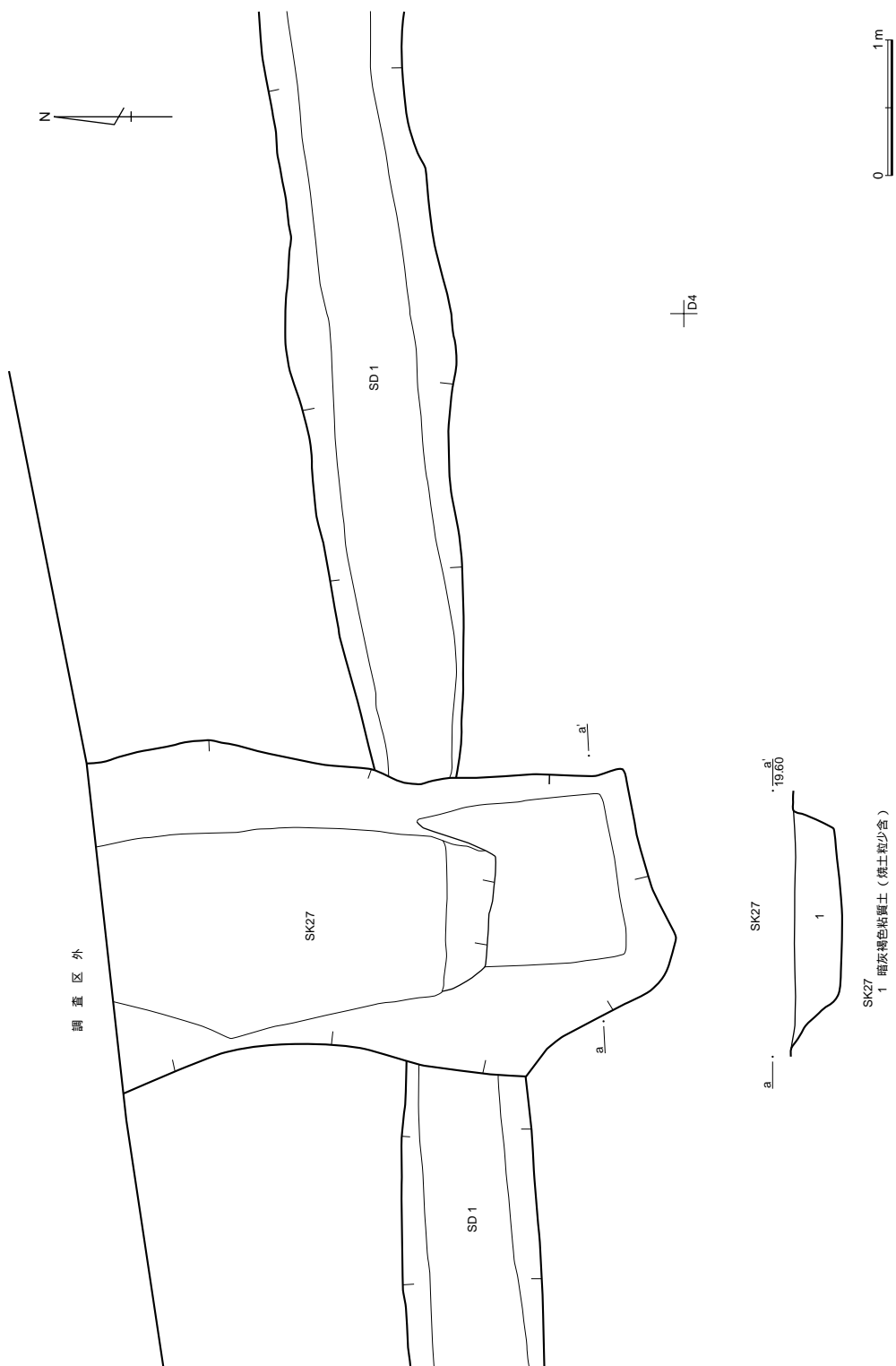


図 5 SD 1 (3) ・ SK27

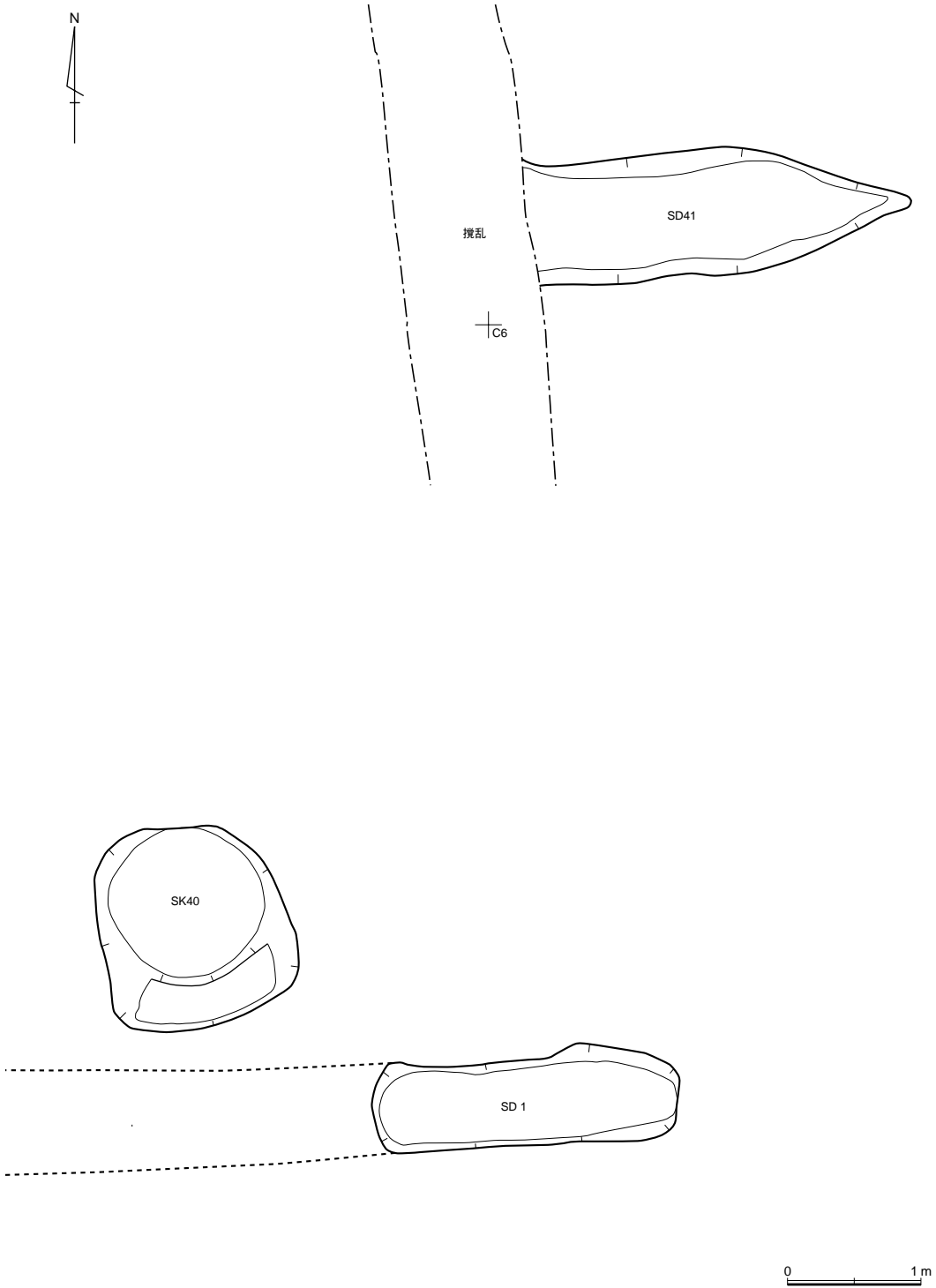


図6 SD 1(4)・SK40・SK41

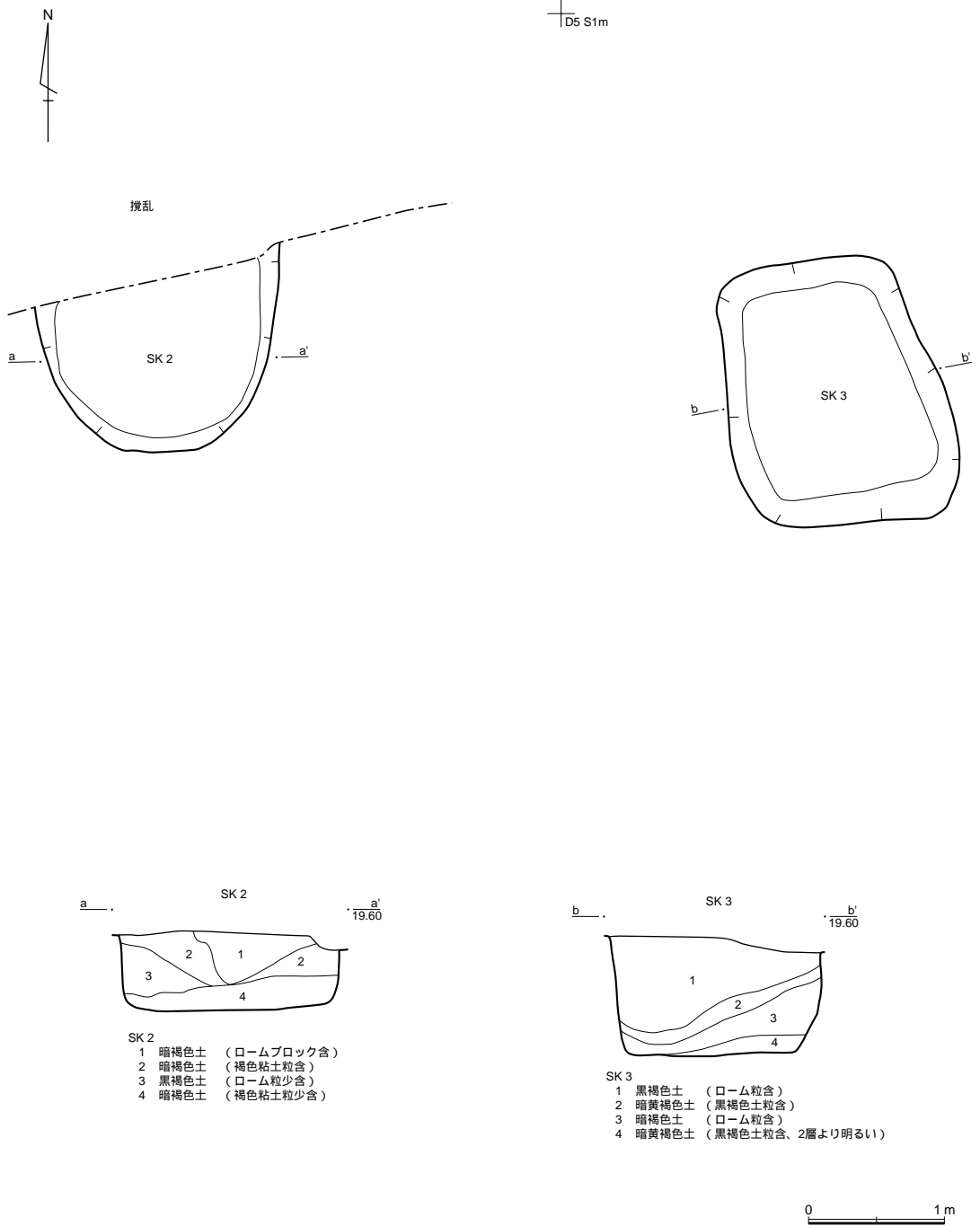


図 7 SK 2・SK 3

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

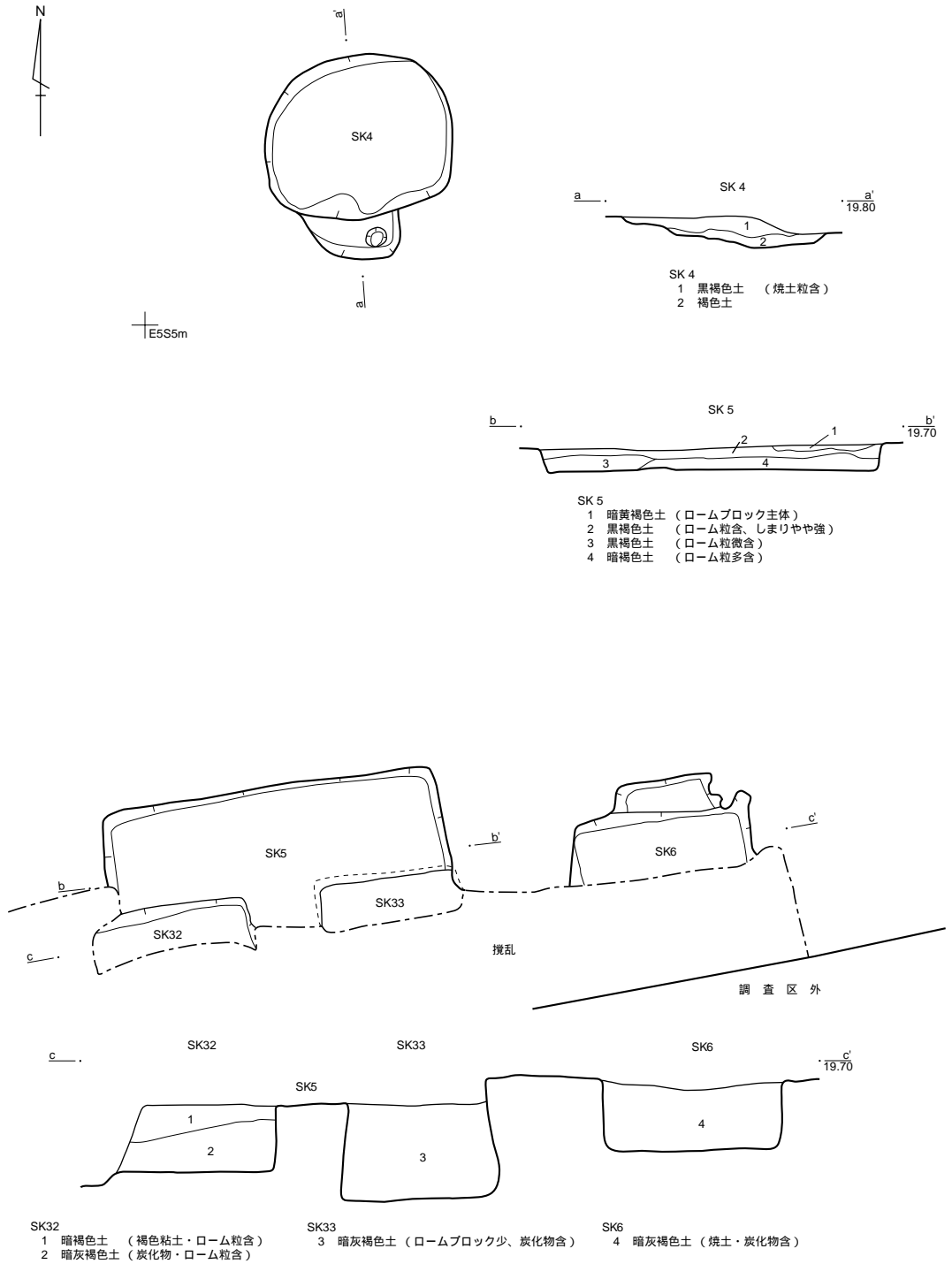


図8 SK4・SK5・SK6・SK32・SK33

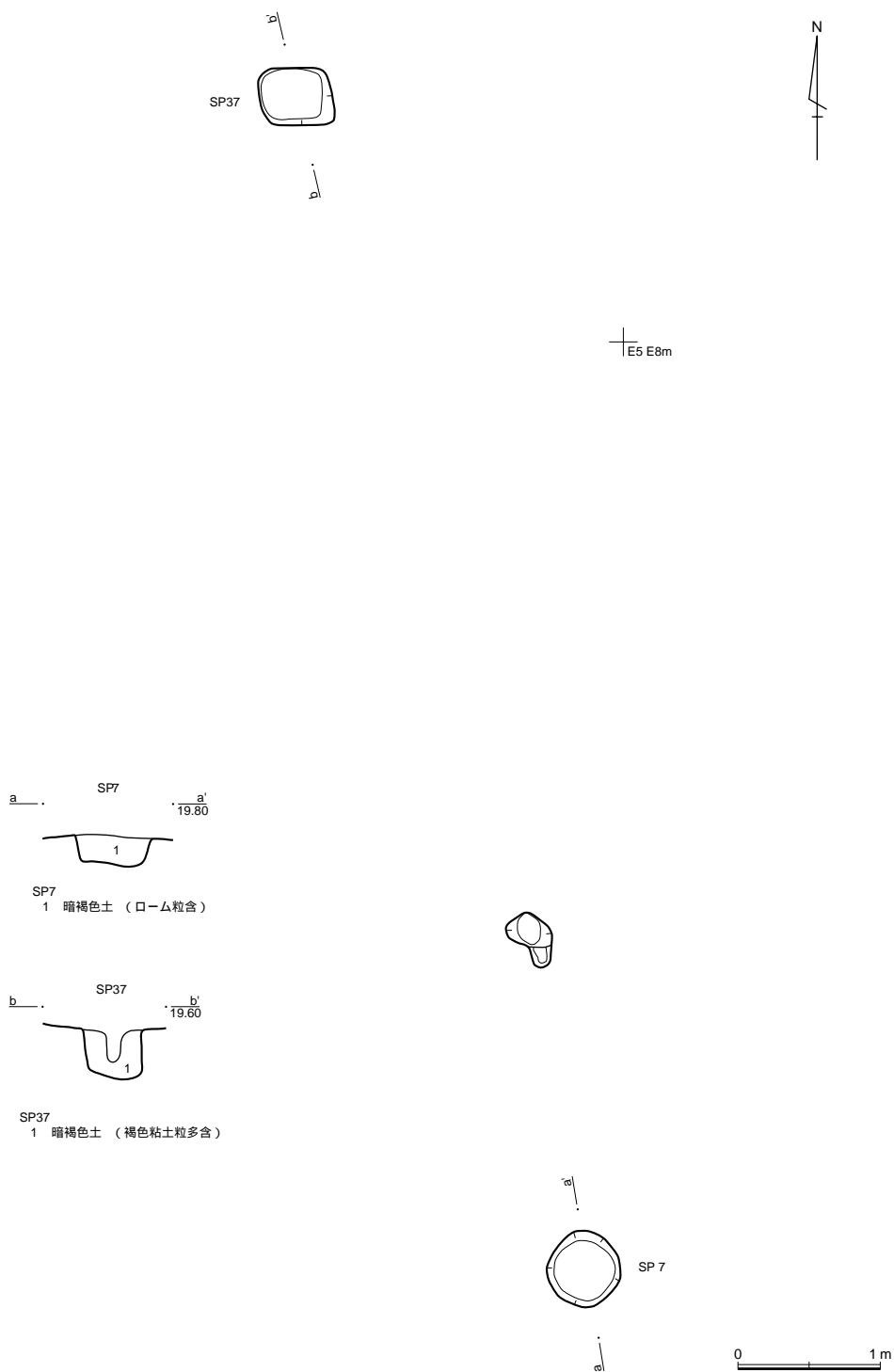


図 9 SP 7・SP37

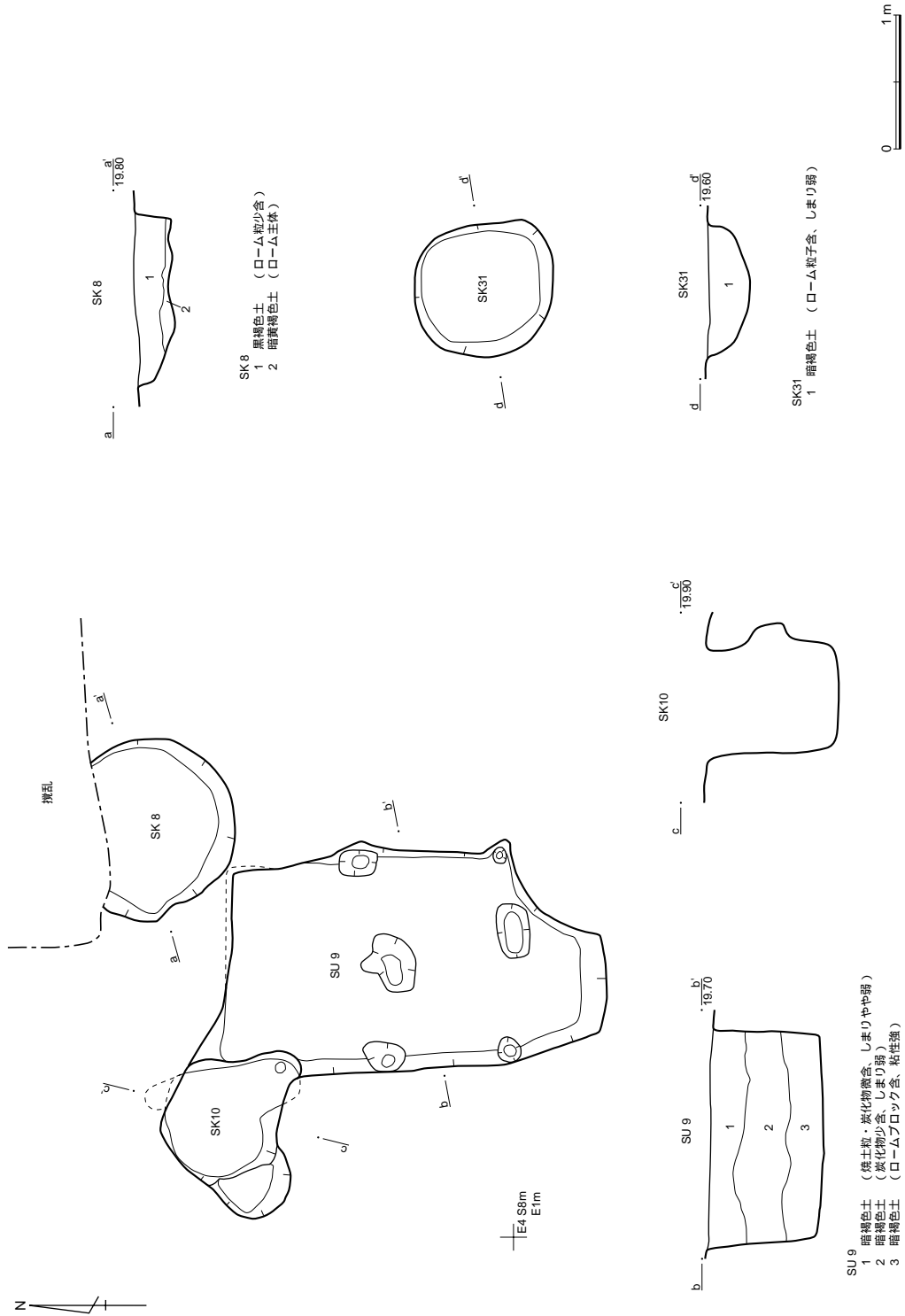


図10 SK8・SU9・SK10・SK31

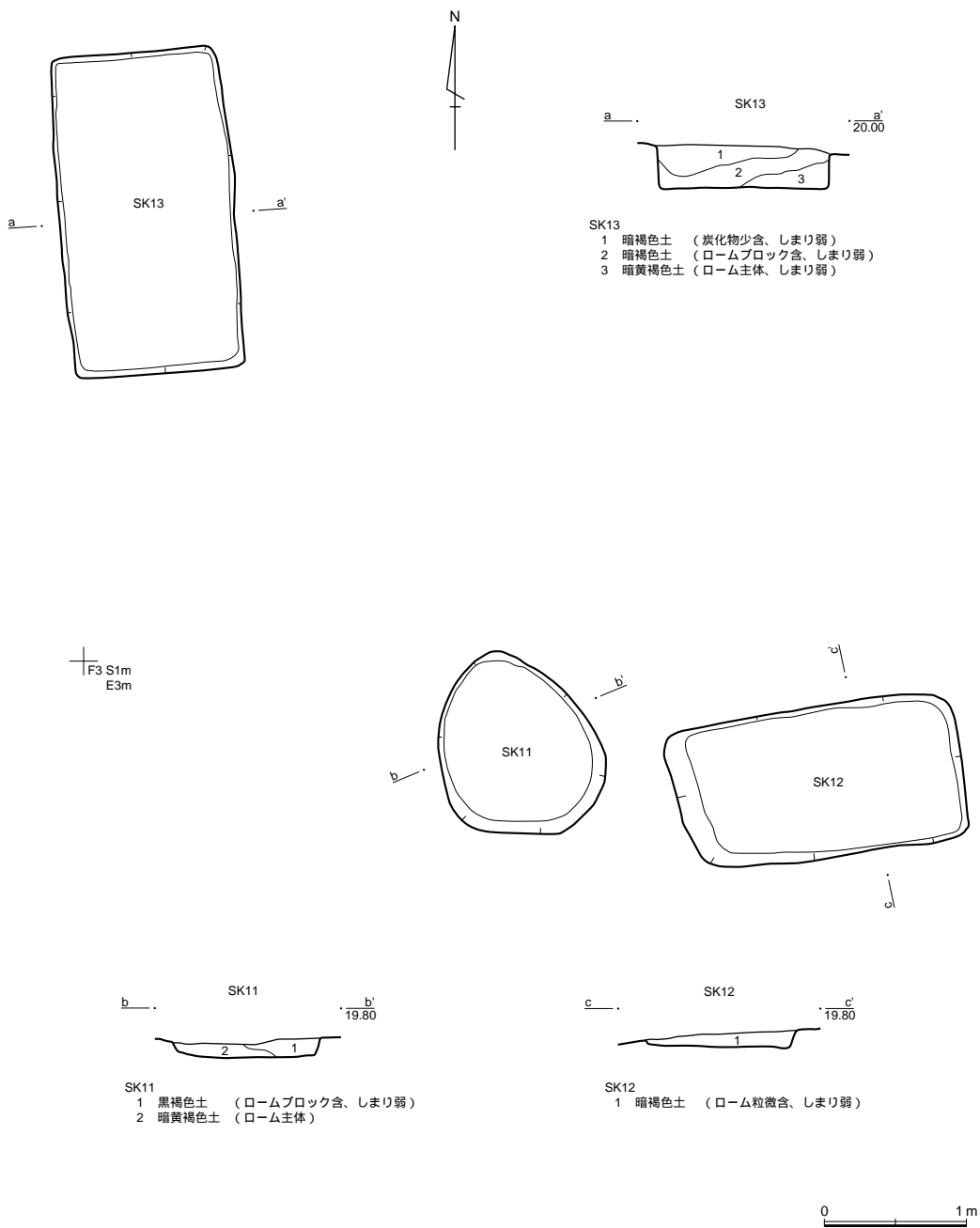


図 11 SK11・SK12・SK13

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

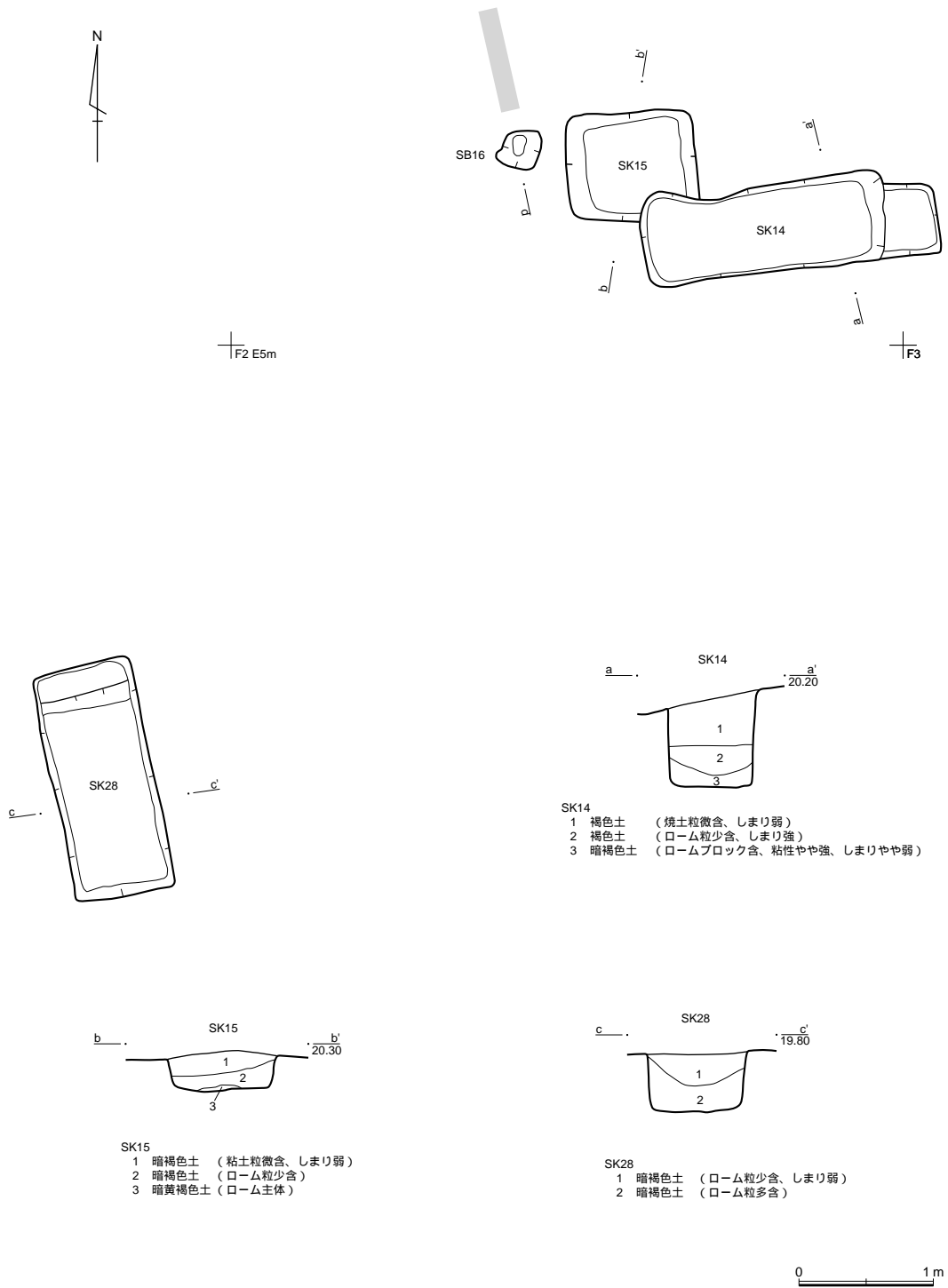


図 12 SK14・SK15・SB16(1)・SK28

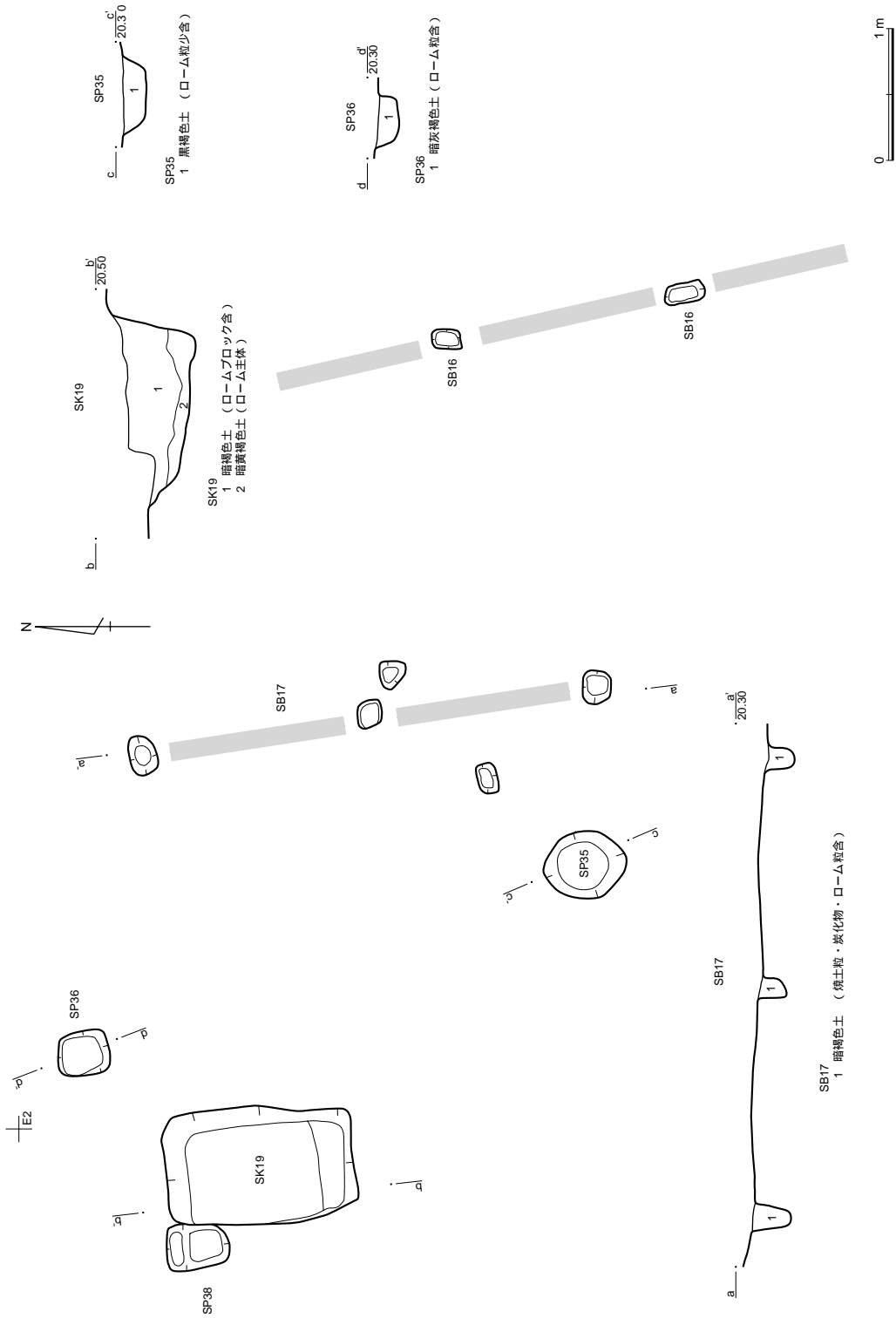


図 13 SB16 (2)・SB17・SK19・SP35・SP36・SP38

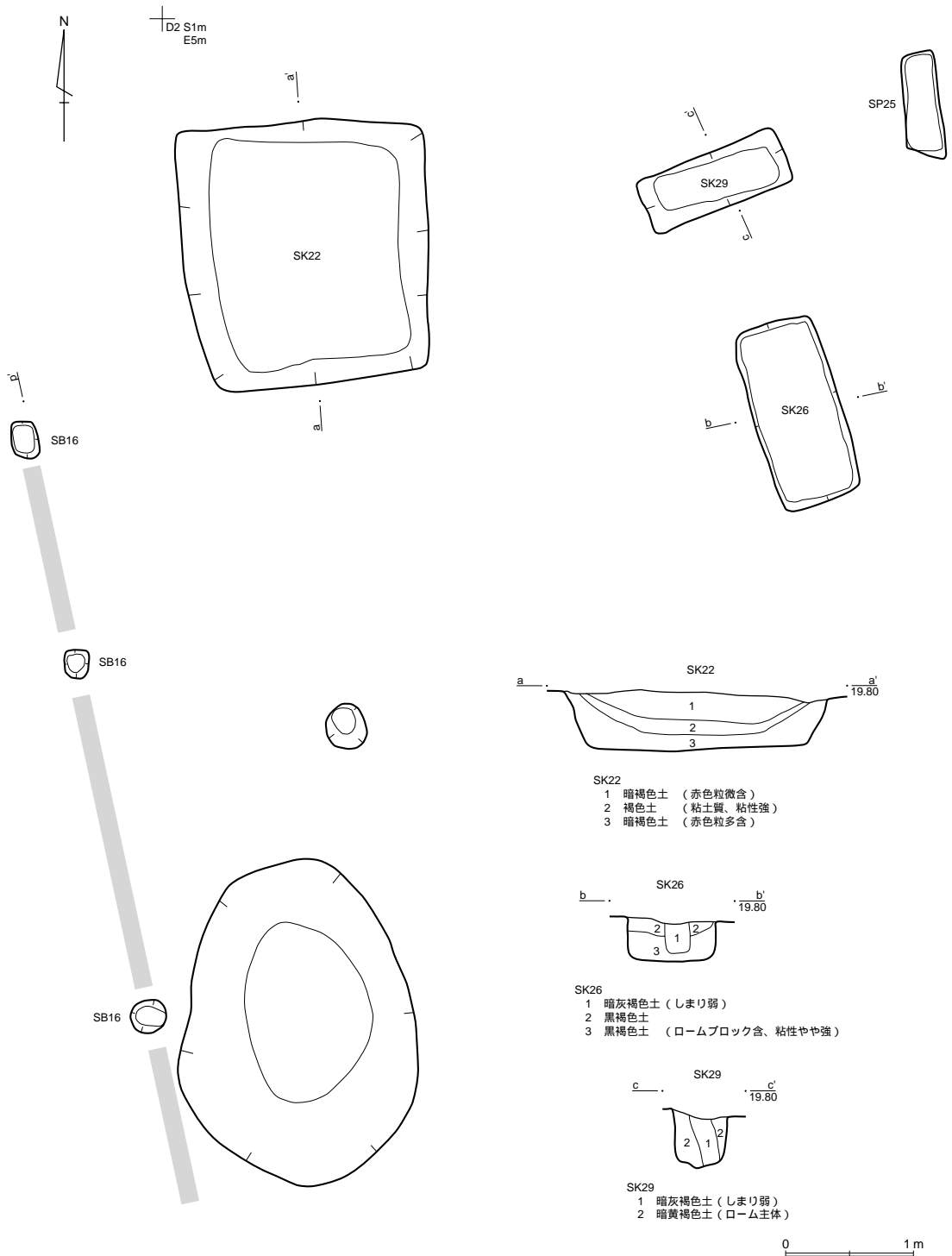


図 14 SB16(3)・SK22・SP25・SK26・SK29

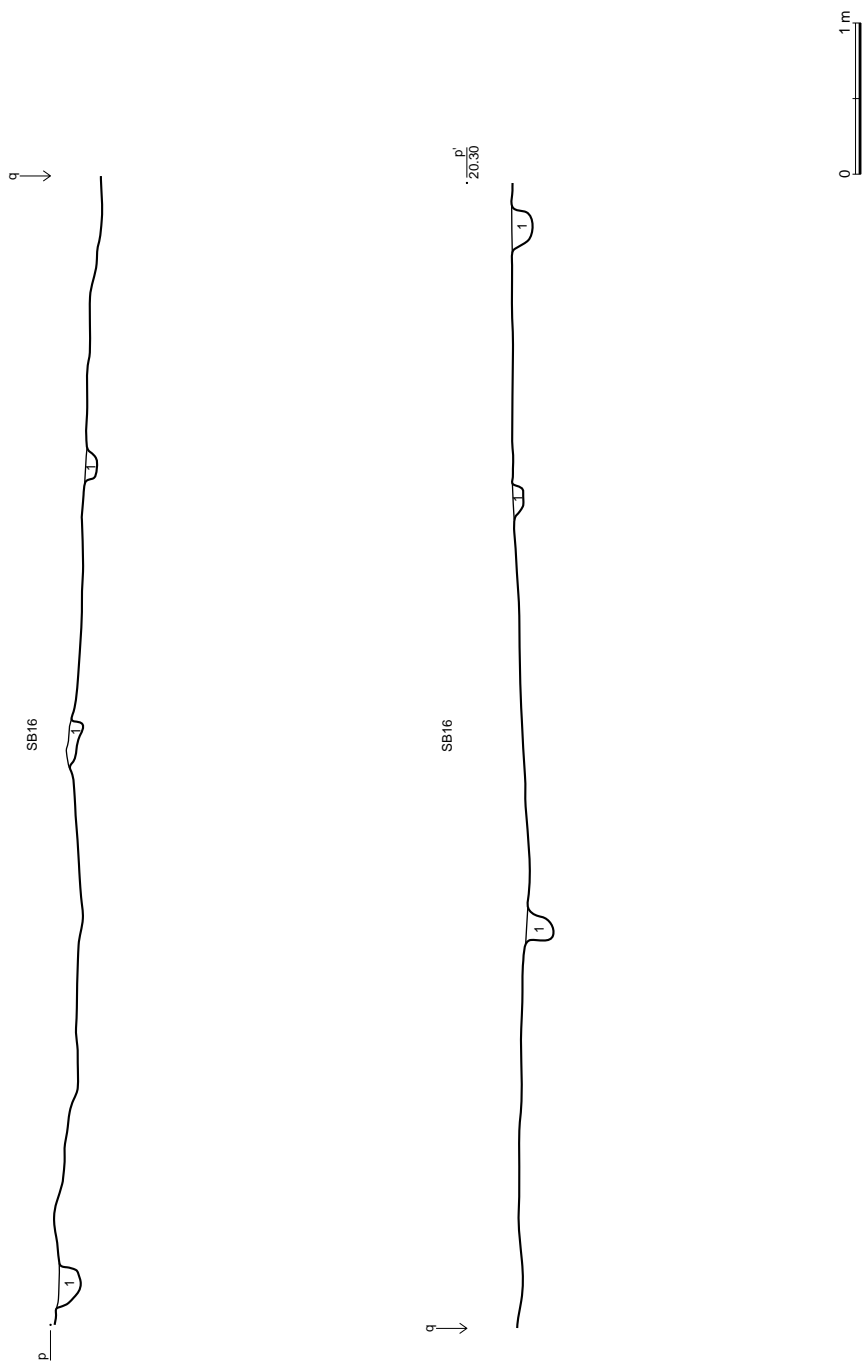
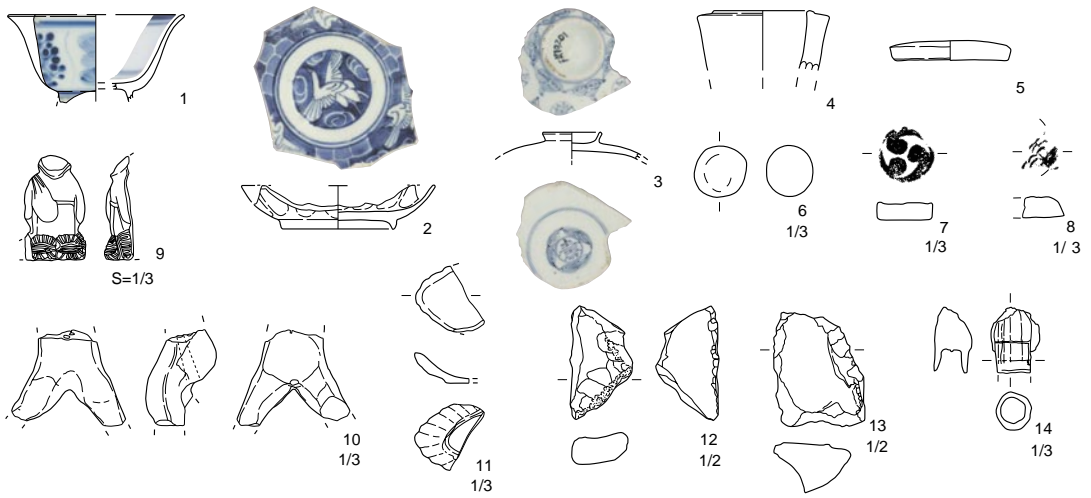


図 15 SB16 (4)

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

表1 遺構観察表

遺構 NO.	図版番号	遺構性格	規模 (m)			遺構軸	備考
			長軸	短軸	深さ		
SD1	第1・3・4・6図	溝状遺構	45	1.2	—	SD1 遺構軸	
SK2	第1・7図	土坑	1.6	1.3	0.6		
SK3	第1・7図	土坑	2	1.7	0.9		
SK4	第1・8図	土坑	1.5	1.4	0.3		
SK5	第1・5・8図	土坑	2.6	1.1	0.2	SD1 遺構軸	
SK6	第1・8図	土坑	1.4	0.7	0.6	SD1 遺構軸	
SP7	第1・9図	小穴	0.6	0.5	0.4		
SK8	第1・10図	土坑	1.4	1	—		
SU9	第1・10図	地下室	2.9	1.8	0.8	SD1 遺構軸	杭と板?で壁面を土留め
SK10	第1・10図	土坑	1.3	0.8	0.9		
SK11	第1・11図	土坑	1.4	1.2	0.1		
SK12	第1・11図	土坑	2	1.1	0.1	SD1 遺構軸	
SK13	第1・11図	土坑	2.3	1.2	0.3	SD1 遺構軸	
SK14	第1・12図	土坑	2.7	0.7	0.7	SD1 遺構軸	
SK15	第1・12図	土坑	1	0.8	0.3	SD1 遺構軸	
SB16	第1・12・13・14・15図	柱穴列	—	—	—	SB16 遺構軸	小穴が6基並ぶ
SB17	第1・13図	柱穴列	—	—	—	SB16 遺構軸	小穴が3基並ぶ
SE18	第1図	井戸	1.3	1.2	—		
SK19	第1・13図	土坑	1.4	0.9	0.7	SD1 遺構軸	
SU20	第1・3図	地下室?	3.3	2	1.1	SD1 遺構軸	
SD21	第1・3図	溝状遺構	3	0.6	—		
SK22	第1・14図	土坑	2.1	2	0.5	SD1 遺構軸	
SB23	第1・4図	柱穴列	—	—	—	SD1 遺構軸	小穴が4基並ぶ
SB24	第1・4図	柱穴列	—	—	—	SD1 遺構軸	小穴が3基並ぶ
SP25	第1・14図	土坑	0.9	0.3	—		
SK26	第1・14図	土坑	1.5	0.7	0.4	SB16 遺構軸	
SK27	第1・5図	土坑	4.2	2.3	3.8		
SK28	第1・12図	土坑	1.8	0.8	0.3	SB16 遺構軸	
SK29	第1・14図	土坑	1.2	0.5	0.5	SB16 遺構軸	
SD30	第1・3図	溝状遺構	4.5	0.8	—	SD1 遺構軸	
SK31	第1・10図	土坑	1.1	1	0.3		
SK32	第1・8図	土坑	1.2	0.5	0.5	SD1 遺構軸	
SK33	第1・8図	土坑	1.1	0.8	0.9	SD1 遺構軸	
SX34	第1・3図	不明	—	—	—		
SP35	第1・13図	小穴	0.8	0.6	0.1		
SP36	第1・13図	小穴	0.4	0.3	0.1		
SK37	第1・9図	杭穴	0.5	0.4	0.3		
SP38	第1・13図	小穴	0.5	0.4	—		
SK39	第1・3図	溜枳	1.5	1.5	0.8	SD1 遺構軸	木枠を伴う SD1 遺構関連
SK40	第1・6図	土坑	1.5	1.5	—		
SD41	第1・6図	溝状遺構	2.9	0.9	—	SD1 遺構軸	



SD 1

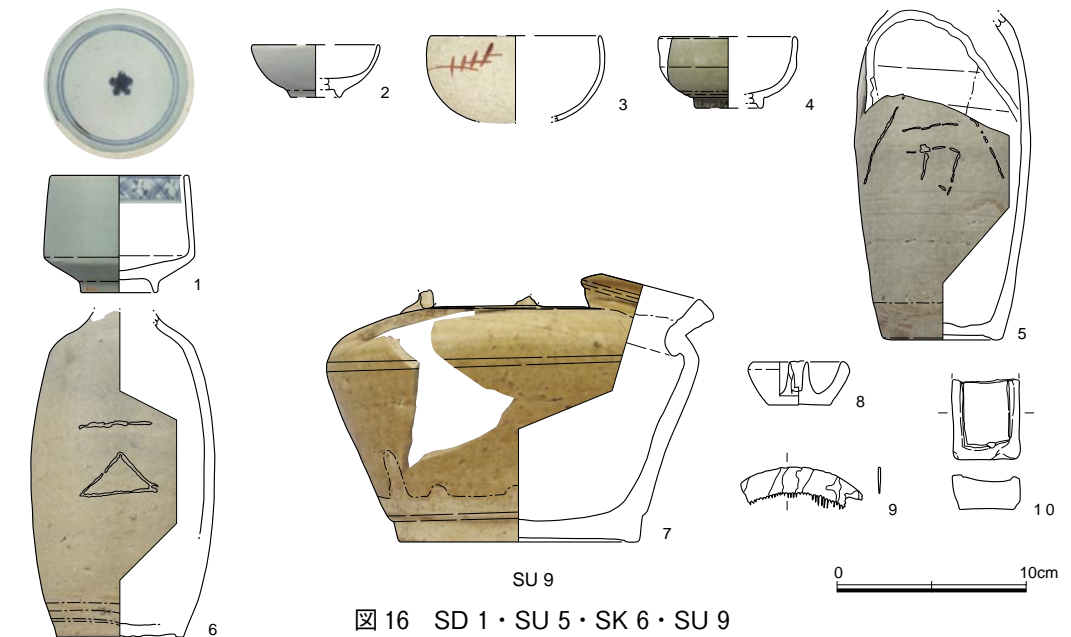
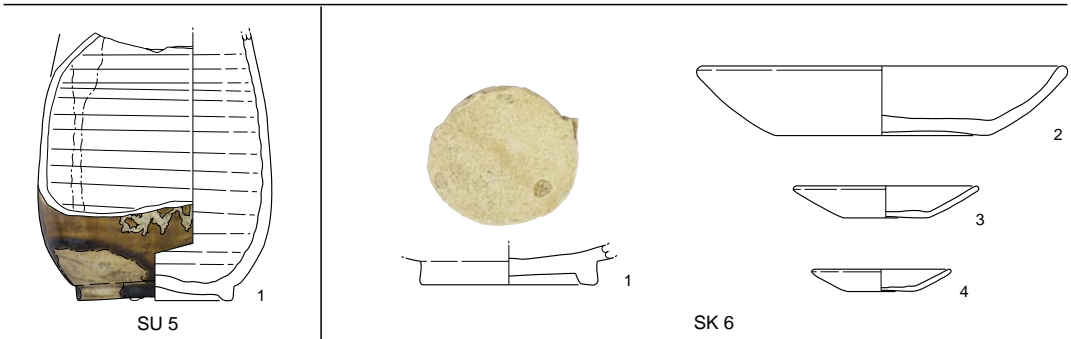


図 16 SD 1・SU 5・SK 6・SU 9

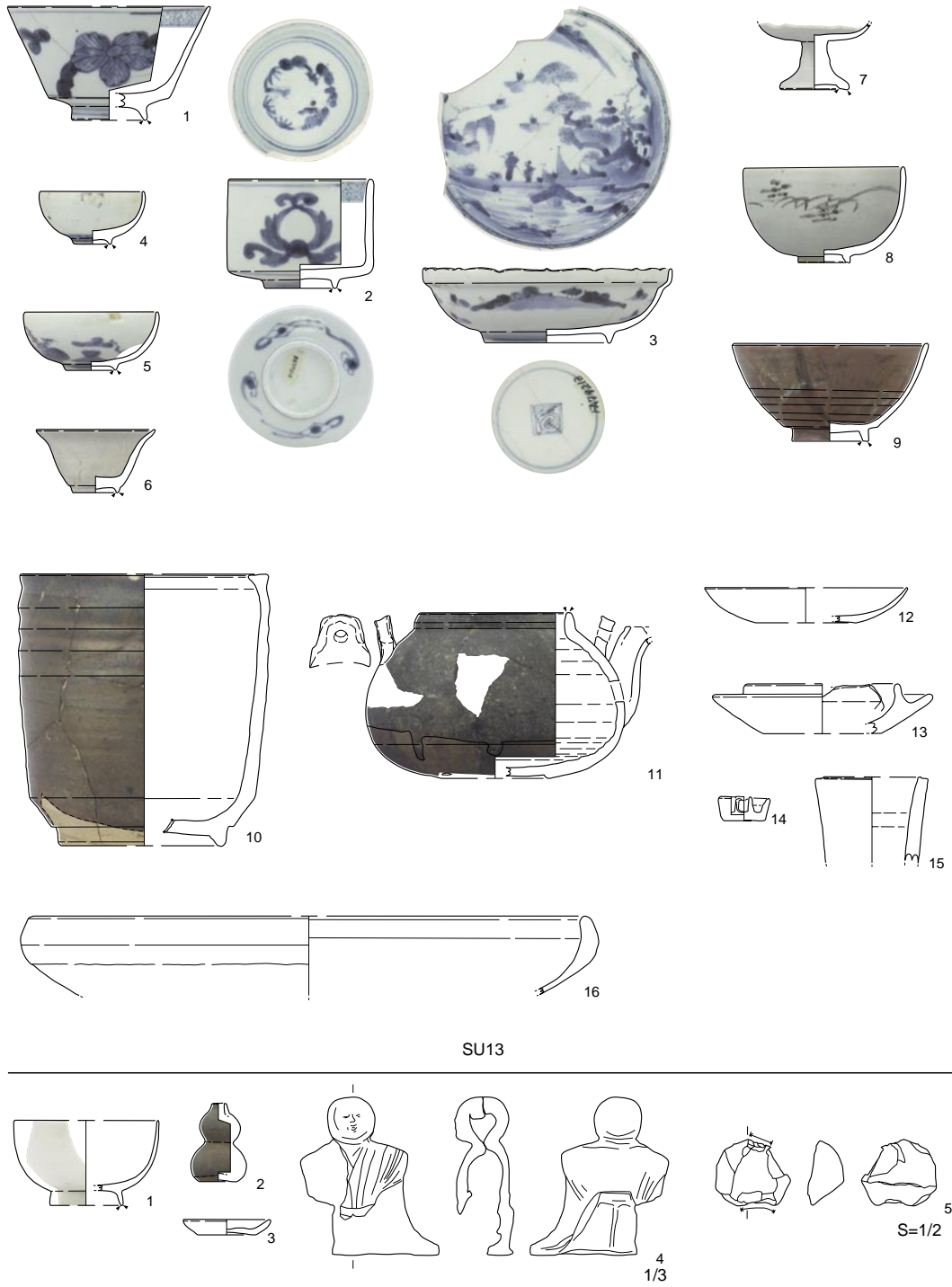


図 17 SU13・SU14

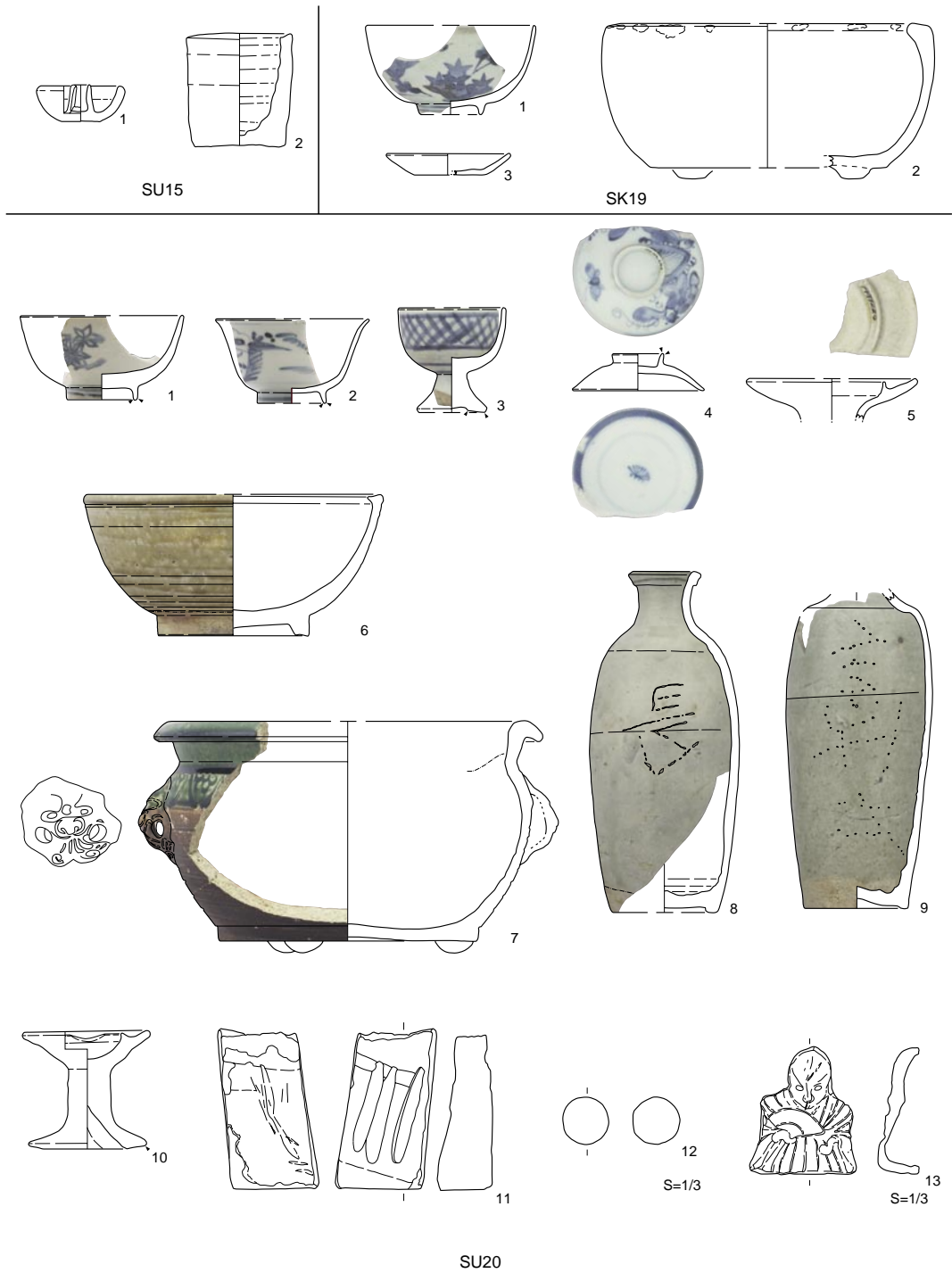


図 18 SU15・SK19・SU20

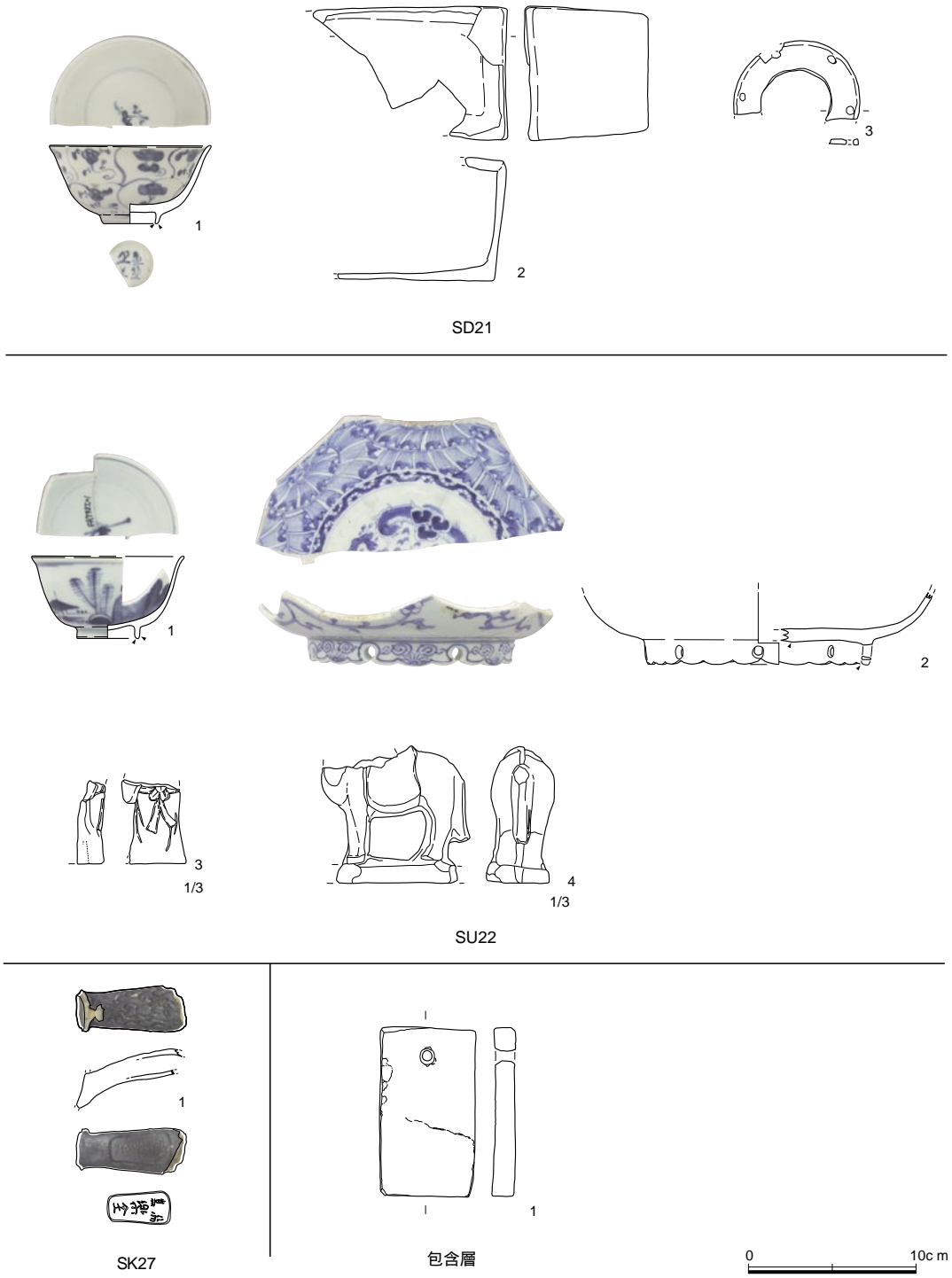


図19 SD21・SU22・SK27・包含層

表 2 遺物観察表

遺構 NO.	図版番号	東大分類	器種 品名	胎質 材質	法量 (cm)			備考
					口径 (縦)	底径 (横)	高さ	
SD1	第 16 図 SD1-1	JC-1-d	碗	磁器	9.3	-	-	
	第 16 図 SD1-2	JB-2-q	皿	磁器	-	3.2	-	
	第 16 図 SD1-3	JB-00-e	碗蓋	磁器	10	5.8	2.3	
	第 16 図 SD1-4	DZ-51	塩壺	土器	5	-	-	板作り成形
	第 16 図 SD1-5	DZ-00-g	塩壺蓋	土器	5.7	6	1.1	
	第 16 図 SD1-6	DZ-57	玉	土器	1.9 ~ 2.1	-	-	
	第 16 図 SD1-7	DZ-55	泥面子	土器	2.3	-	0.7	三つ巴
	第 16 図 SD1-8	DZ-55	泥面子	土器	5	5	0.9	紋様有り
	第 16 図 SD1-9	DZ-60-c	人形	土器	-	-	1.2	
	第 16 図 SD1-10	DZ-60	人形	土器	-	-	-	
	第 16 図 SD1-11	JB-61	ミニチュア	磁器	-	-	-	
	第 16 図 SD1-12	-	火打石	石	3	1.7	0.9	
	第 16 図 SD1-13	-	火打石	石	3	2.4	1.4	
	第 16 図 SD1-14	-	弾丸	金属	2.6	1.9	1.5	
SU5	第 16 図 SU5-1	TC-10-d	瓶	陶器	-	8	-	釘書
SK6	第 16 図 SK6-1	TC-23	片口鉢	陶器	-	9	-	
	第 16 図 SK6-2	DZ-2-b	カワラケ	土器	19	11.2	3.65	
	第 16 図 SK6-3	DZ-2-b	カワラケ	土器	9.6	4.5	1.7	
	第 16 図 SK6-4	DZ-2-b	カワラケ	土器	7.2	3.6	1.2	
SU9	第 16 図 SU9-1	JB-1-1	碗	磁器	7.3	4	6.2	
	第 16 図 SU9-2	JB-6-a	坏	磁器	6.6	2.5	2.8	
	第 16 図 SU9-3	TD-1- b	碗	陶器	8.5	-	-	
	第 16 図 SU9-4	TC-6	碗	陶器	7	3.5	3.8	
	第 16 図 SU9-5	TC-10-a	瓶	陶器	-	6.3	-	釘書「ㇿ」
	第 16 図 SU9-6	TC-10-a	瓶	陶器	-	6.7	-	釘書「ㇿ」
	第 16 図 SU9-7	TC-28	尿瓶	陶器	-	12.5	-	
	第 16 図 SU9-8	DZ-44-b	乗燭	土器	4.8	3.3	2.3	鉛釉
	第 16 図 SU9-9	-	樽	骨角	2.2	6.4	0.2	
	第 16 図 SU9-10	-	硯	石	-	3.6	1.8	
SU13	第 17 図 SU13-1	JB-1-r	碗	磁器	11.7	4.2	6.7	
	第 17 図 SU13-2	JB-1-l	碗	磁器	8.2	4	6.4	
	第 17 図 SU13-3	JB-2-f	皿	磁器	14.4	7.2	4.4	
	第 17 図 SU13-4	JB-6-f	坏	磁器	5.9	2.1	3.1	外面上絵
	第 17 図 SU13-5	JB-6-f	坏	磁器	7.7	2.9	3.4	
	第 17 図 SU13-6	JB-6-b	坏	磁器	6.8	2.6	3.7	
	第 17 図 SU13-7	JB-8-b	仏飯器	磁器	-	3.9	3.7	
	第 17 図 SU13-8	TD-1-b	碗	磁器	9.2	3	5.5	
	第 17 図 SU13-9	TC-1	碗	陶器	11.3	4.4	5.8	
	第 17 図 SU13-10	TC-15-a	半胴	陶器	14.3	9.5	16	植木鉢
	第 17 図 SU13-11	TZ-34-e	土瓶	陶器	8.5	6.2	9.7	
	第 17 図 SU13-12	DZ-2-d	カワラケ	土器	11.8	5.8	2.1	

表3 遺物観察表

遺構 NO.	図版番号	東大分類	器種 品名	胎質 材質	法量 (cm)			備考
					口径 (縦)	底径 (横)	高さ	
SU13	第17図 SU13-13	DZ-40-d	油受皿	土器	12.5	6.4	2.9	
	第17図 SU13-14	DZ-44-c	乗燭	土器	2.8	2.3	1.3	
	第17図 SU13-15	DZ-51	塩壺	土器	5.6	-	-	ロクロ成形
	第17図 SU13-16	DZ-47-a	焙烙	土器	32	-	-	
SU14	第17図 SU14-1	JB-1	碗	磁器	8.3	4.1	5	白磁
	第17図 SU14-2	TZ-61	ミニチュア	陶器	0.8	2.2	4.6	鉄釉
	第17図 SU14-3	DZ-2-b	カワラケ	土器	5	3.3	0.9	
	第17図 SU14-4	DZ-60-e	人形	土器	-	-	6	
	第17図 SU14-5	-	火打石	石	1.9	2.1	1	
SU15	第18図 SU15-1	DZ-44-b	乗燭	土器	4.7	2.2	2.2	
	第18図 SU15-2	DZ-51-w	塩壺	土器	6.1	5.3	6.8	
SK19	第18図 SK19-1	JB-1-u	碗	磁器	9.8	3.5	5.3	
	第18図 SK19-2	DZ-31-a	火鉢	土器	17	14	9.2	
	第18図 SK19-3	DZ-2-b	カワラケ	土器	7.1	3.8	1.3	
SU20	第18図 SU20-1	JB-1-g	碗	磁器	9.5	4	5	
	第18図 SU20-2	JC-1-d	碗	磁器	8.8	4	5	
	第18図 SU20-3	JC-00-d	仏飯器	磁器	6	3.8	6.2	
	第18図 SU20-4	JB-00-c	碗蓋	磁器	7.5	2.9	2.2	
	第18図 SU20-5	TD-40-a	油受皿脚付	陶器	9.6	-	-	
	第18図 SU20-6	TC-23-b	片口鉢	陶器	17.2	8.8	8.4	
	第18図 SU20-7	TC-31-a	火鉢	陶器	21	15	13.7	瓶掛
	第18図 SU20-8	TC-10-a	瓶	陶器	3.4	6	20.2	釘書「長」
	第18図 SU20-9	TC-10-c	瓶	陶器		6	18.7	釘書「高サキ」
	第18図 SU20-10	DZ-40-a	油受皿脚付	土器	7.2	6.7	6.9	鉛釉
	第18図 SU20-11	-	砥石	石	9.5	5.2	3.2	
	第18図 SU20-12	DZ-57	土玉	土器	2~2.1	-	-	
	第18図 SU20-13	DZ-60-e	人形	土器	-	4.7	5.1	
SD21	第19図 SD21-1	JC-1-d	碗	磁器	9.5	3.2	4.7	
	第19図 SD21-2	DZ-61	ミニチュア	土器	11.5	8	7.3	カマド
	第19図 SD21-3	-	輪?	土器	7.4	-	0.3	
SU22	第19図 SU22-1	JC-1-d	碗	磁器	9	3.6	4.9	
	第19図 SU22-2	JB-5	鉢	陶器	-	13	-	蛇ノ目凹形高台
	第19図 SU22-3	DZ-60-k	人形	土器	-	-	-	
	第19図 SU22-4	DZ-60-h	人形	土器	-	-	-	
SK27	第19図 SK27-1	TZ-42-b	行平鍋	陶器	-	-	-	「湯嵩楽全」
包含層	第19図 包含層-1	-	温石	石	10.1	5.6	1.4	

第2章 総括

農学部校舎(7号館)地点の成果と課題

—農学部周辺で行われた明治時代の開発—

原 祐一

はじめに

農学部と浅野地区、本郷キャンパスの一部は、江戸時代の水戸藩邸等に該当する。明治6年「沽券図」には、陸軍用地、警視局用地、「明治12年御届」の図には警視局御用地 射的場。参謀本部陸軍部測量局の明治16年測量図には（以下、「明治16年測量図」）、には、東京共同射的会社、東京府癲狂院、避病院などの記述がある。明治27年、第一高等学校敷地となり、昭和10年、第一高等学校との敷地交換により帝大敷地となり現在に至る。調査の結果、江戸時代の遺跡、調査地点全域で行われた明治期の削平が確認された。

1. 明治時代の掘平・範囲・要因

図20は、「明治16年測量図」の等高線を現在の地図に重ね、調査地点を重ねた図である（香取祐一作成）^(注1)。調査地点の標高は、「明治16年測量図」が、西側で22m、東側で20mである。遺構検出標高は、調査地点西側が20.3m、東側が19.5mで、明治16年の標高に比べ2m低いことが確認できた。この結果から、農学部7号館地点で確認された削平は、明治16年以降に行われたことは確実である。

調査地点東に位置する、農学部農学部総合研究棟地点でも調査地点全域で削平を確認した^(注2)。現在の地形を考慮すると、削平が行われた範囲は農学部7号館地点から、農園部分で行われたと考えられる。「明治16年測量図」では「東京癲狂院」東の区画がそれにあたると考えられる。

農学部隣接する、浅野地区 工学部武田先端地ビル地点で射的場造営と廃絶に伴う明治期の削平を確認した。「明治16年測量図」によれば射的場は、地面を掘削した地下構造であった。発掘調査の成果と「明治16年測量図」の検討から、造営時、掘削した土によって防護壁が築かれ、土の一部は搬出されたと考えられる。射的場廃絶時、防護壁の土手が崩され、搬出された掘削土の不足を補うために、周辺部が広範囲に削平されたと推定した^(注3)。農学部で確認された削平の年代と要因、射的場との関連は明確でないが、今後の課題としたい。

江戸時代の調査地点と周辺の土地利用状況については、水戸藩関連の絵図を実見できないため検討できない。加賀藩邸、富山藩邸、大聖寺藩邸では建物、屋敷割りなどを踏襲する形で大学敷地等になっていることから^(注4)、江戸図と「明治16年測量図」から幕末の土地利用状況を具体的に検討できるのとは対照的である。発掘調査は、水戸藩邸の土地利用状況を具体的に検討することができる唯一の方法である、今後、他の地点とあわせて検討を行いたい。

まとめ

今回の調査で、明治時代、調査地点周辺で大規模な開発が行われたことが明らかになった。当地点で確認された開発は、江戸時代から明治時代の大名藩邸の官有地化、都市化を具体的に示す点で重要である。今後、他の地域を含めた検討、文書調査を行った上で再検討を行いたい。

調査地点が位置する「弥生町」は、「弥生時代」の名称の発祥地として著名で^(注5)、仮に、農学部が弥生時代の遺跡が存在したと仮定すると、調査で確認された開発によって、農学部構内東側の遺跡が失われたのは確実である。浅野地区には、明治時代から現在までの開発を免れた弥生時代の遺跡が残されており、浅野地区は弥生時代の研究史にとって貴重な区域であることが、農学部7号館地点の調査によって再確認された。

参考文献

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点1次調査速報』（東京大学施設部提出文書）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡（仮称）農学部総合研究棟地点調査速報』（東京大学施設部提出文書）
- 文京区役所 1981『文京区史』巻3 PP156-157
- 武藤康弘 1997「8 農学部校舎（7号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報1』PP.27-28
- 谷根千工房 1998「特集 向ヶ丘弥生町読本」『谷中・根津・千駄木』53 PP2-23

注

1. 原祐一、森本幹彦 2002「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点で検出した方形周溝墓」『東京考古20』東京考古談話会 P.63。
2. 原祐一 2002「（仮称）農学部総合研究棟地点の成果と仮題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡（仮称）農学部総合研究棟地点調査速報』（東京大学施設部提出文書）。原祐一 2002「（仮称）農学部総合研究棟地点の成果と仮題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡（仮称）農学部総合研究棟地点調査速報』（東京大学施設部提出文書）。
3. 原祐一 2001「武田先端知ビル地点遺跡発掘調査の成果と課題」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点1次調査速報』（東京大学施設部提出文書）。
4. 寺島孝一 1988「更新世から江戸時代まで」東京大学総合研究資料館『東京大学本郷キャンパスの百年』PP.48-50。
5. 鈴木健之 2002「窓 弥生町の歴史」東京大学広報委員会『学内広報 NO.1231』P.10。

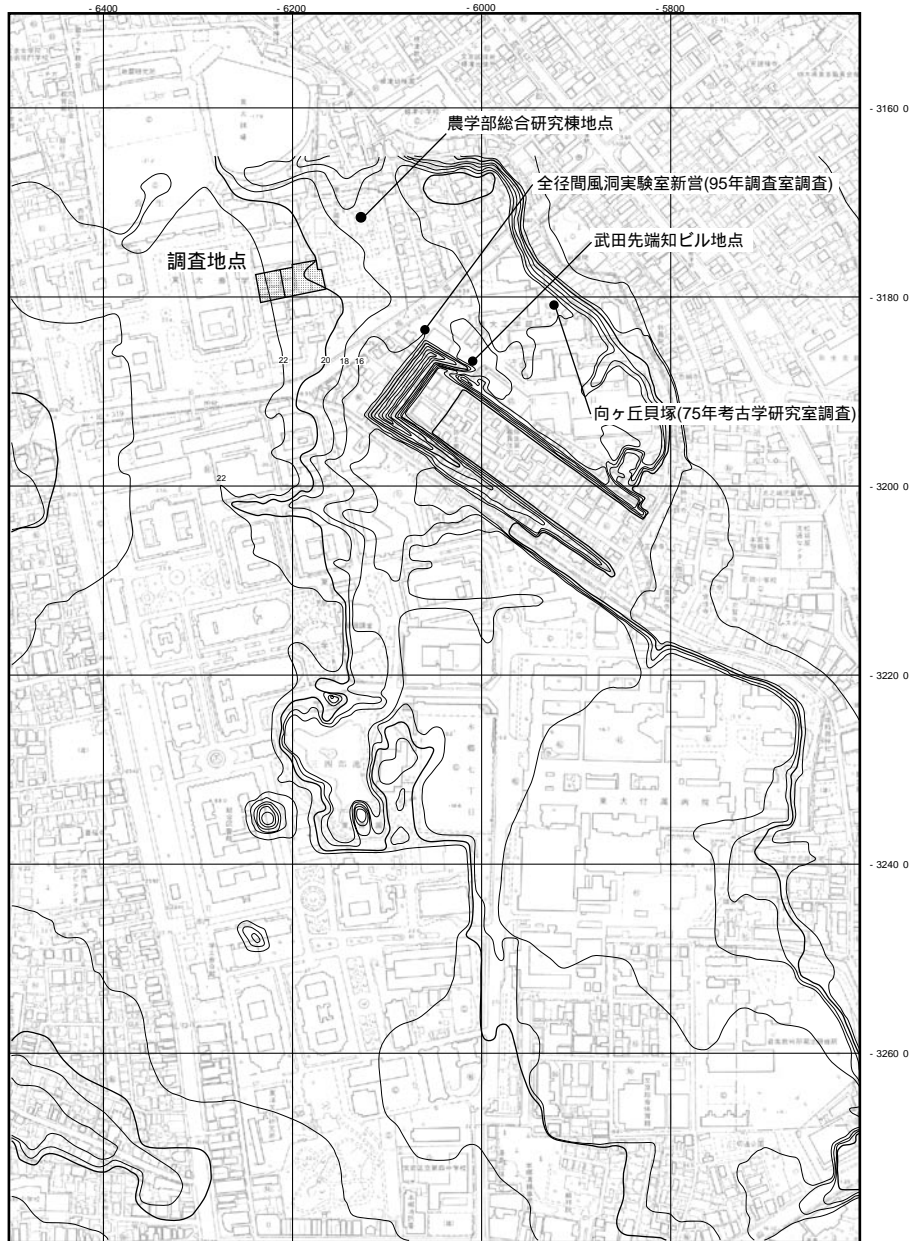


図 20 明治 16 年の地形と現在の東京大学周辺と調査地点

明治16年測量 参謀本部陸軍部測量局-東京北部、明治19年 帝国大学平面図、藤川啓介 1988「東京大学の誕生」挿図2全体配置図、東京大学総合研究資料館『本郷キャンパスの百年』P54、1:2500東京都地形図「上野公園」より香取祐一作成、
『東京大学本郷構内の遺跡 東京大学基幹整備共同溝その他地点調査報告書』(編集掲載)挿図に加筆

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

ふりがな	とうきょうだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつけんきゅうねんぼう							
書名	東京大学埋蔵文化財調査室研究年報							
副書名								
巻次	4							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	東京大学埋蔵文化財調査室							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場Ⅱキャンパス内56号館							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とうきょうだいがくほんごうこう 東京大学本郷構 内の遺跡(本郷台 遺跡群) 農学部7 号館地点	とうきょうとふんきょうく 東京都文京区 弥生1-1	13105	47	35° 42' 47"	139° 45' 52"	1992年10月6日 ～11月16日 1993年11月3日 ～26日	1170 1000	東京大学農学部 7号館新営に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
東京大学本郷構内 の遺跡 農学部7 号館地点	生活関連遺構	江戸時代	井戸 溝 地下室 土坑	1基 4基 2基 23基	陶磁器・土器 金属製品 石製品			

第 3 部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

企画展「加賀殿再訪 —東京大学本郷キャンパスの遺跡—」開催

本年報が扱う期間の調査室の活動として特筆しておくべきものに、本学総合研究博物館において開催された「加賀殿再訪 —東京大学本郷キャンパスの遺跡—」展（2000年5月20日～7月9日）があげられる。総合研究博物館と共催したこの企画展では、江戸時代に現在の本郷キャンパスの地にあった加賀藩をはじめとした大名屋敷での営みを、発掘調査の成果を中心に、文献や建築史といった分野と協力して多角的に明らかにしていくことを心がけた。

折しも2000年は、1990年に学内組織として発足した埋蔵文化財調査室にとって設立10周年を迎える年であった。調査室設立の節目に、調査室の活動の一端を展示という形で紹介する機会を得たことは、室員一同にとって貴重な経験となった。

展示は加賀藩邸の御殿空間・詰人



公開講演会風景（今村啓爾室長）

空間のそれぞれから出土した遺物が中心であった。加えて経済学部地点から検出された地下室の部分的な復元や、附属病院病棟地点から検出された礎石を用いての長屋の復元など、展示スペースの許される範囲で立体的な構成を心がけた。多種多様な人形や、単身赴任であった藩士達の暮らしぶりを彷彿とさせる大量の徳利などの展示については、藩邸に暮らす人々に親近感を抱くようになったという来館者からの反応をいただいた。

本企画展に関連する事業として、総合研究博物館での公開講座（「江戸の考古学—加賀藩本

郷邸を掘る一」2000年5月26日～7月7日）や、学内外から講師を招いた公開講演会（「江戸の考古学を語る」2000年6月10日）を実施した。これについても多くの方々に参加していただくことができた。

赤門や三四郎池など、かつての大名屋敷の名残を残す本郷キャンパスには、学外からの来訪者も決して少なくない。そうしたキャンパスの地中から姿を現した当時の暮らしぶりを物語る品々は、学内の来館者にも新鮮なものと映ったようである。

方形周溝墓の移築保存

本郷キャンパスの浅野地区で実施した武田先端知ビル地点の発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓が検出された（詳細については本年報第1部を参照）。方形周溝墓からは土器・ガラス玉・管玉といった副葬品と思われる遺物が出土した。調査室では関連諸機関と協議した結果、この方形周溝墓を移築保存することを決定、実施した。駒場リサーチキャンパスでの公開を経て、現在は調査室の収蔵庫に保管している。



方形周溝墓検出状況

ホームページ開設

2003年9月、調査室は駒場リサーチキャンパス内の16号館から56号館へと移転した。それに伴い情報基盤を大きく変更した（郵便送付先・電話番号は従来通り）。これを機に調査室ではホームページを開設した。ホームページはなお改善の余地はあるものの、12月から公開している。

ホームページでは年報3のPDFファイルや、「加賀殿再訪」展で館内放映のために作成したビデオ（「本郷構内の発掘調査」・10分）を公開している。今後は発掘調査の速報など、より広範囲で活用していく予定である。

URL <http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

2000～2002年度室員活動内容

成瀬晃司

執筆

2000年3月30日

『考古資料(3)大正2年の火災で焼失したセトモノ屋の店先』沼津市歴史民俗資料館資料集17、堀内秀樹、辻真人、瀬川裕市郎共著 1-41頁

2000年5月20日

「考古学からみた加賀藩本郷邸『詰人空間』」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』166-179頁

2000年11月1日

「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論集』197-212頁

2001年4月25日

江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』（共編著）柏書房

2001年9月30日

「市中墓にみられる大深度地下利用」『考古学ジャーナル』No.477 4-8頁

2001年10月15日

「下級武士長屋」186頁、「陶磁器窯波佐見」356頁、「酒器」366頁、「火事と片付け」537頁 林英夫、青木美智男代表編集『事典しらべる江戸時代』柏書房

2001年12月

「最近の江戸遺跡における実年代資料から」『関西近世考古学研究』IX 55-61頁

2002年3月29日

「陶磁器から見た中吉原宿」『中吉原宿遺跡 中吉原宿遺跡第5地区詳細確認調査報告書』17-26頁 堀内秀樹共著

2002年9月1日

「加賀藩本郷邸の残映」『歴史読本』9月号 188-195頁

講演

2000年7月7日「考古資料にみる加賀藩勤番武士の生活」（「江戸の考古学－加賀藩邸を掘る－東京大学総合研究博物館」）

2000年10月25日

「掘り出された加賀藩本郷邸」（東京北国クラブ）

2002年1月19日

「遺物が語る加賀藩邸の雅」（平成13年度石川県民大学校大学院論文発表会記念講演）

2002年3月24日

「江戸の宴」(たばこと塩の博物館 第56回江戸講座)

研究発表

2000年12月16日

「江戸遺跡における実年代資料」(第12回関西近世考古学研究会大会「近世の実年代資料」)

2001年1月27日

「長屋で使用された陶磁器」(第14回江戸遺跡研究会大会「食器にみる江戸の食生活」)

2002年9月19日

「東京大学本郷構内の遺跡 - 医学部附属病院第2中央診療棟地点の調査」(江戸遺跡研究会第87回例会、追川吉生共同発表)

2003年2月1日

「大名藩邸における廃棄の一例 - 災害と造成からみた -」(第16回江戸遺跡研究会大会「遺跡からみた江戸のゴミ」)

2003年2月9日

「江戸遺跡出土の鍋島」(第13回九州近世陶磁学会「鍋島の生産と流通」)

堀内秀樹

執筆

2000年3月30日

『考古資料(3)大正2年の火災で焼失したセトモノ屋』沼津市歴史民俗資料館資料集17、成瀬晃司、辻真人、瀬川裕市郎共著 1-41頁

2000年5月20日

「史料から見た御成と池遺構出土資料」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪』138-143頁

2000年5月20日

「本郷キャンパスにおける発掘調査の成果」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪』大成可乃70-78頁

2000年11月17日

「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその年代について」『竹石健二先生・沢田大多郎先生還暦記念論文集』213-231頁

2001年4月25日

江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』(共編著) 柏書房

2001年5月1日

「中国貿易陶磁器研究の到達点 - 明・清代 -」『基準資料としての貿易陶磁器』季刊考古学75 18-19頁

2001年10月15日

「食器」ほか『しらべる江戸時代』 柏書房

2002年3月29日

「陶磁器から見た中吉原宿」『中吉原宿遺跡 中吉原宿遺跡第5地区詳細確認調査報告書』成瀬晃司共著 17-26頁

2002年5月15日

「日本考古五」『史学雑誌 2001年の歴史学会一回顧と展望』111-5 30-35頁

2002年9月25日

「十七から十九世紀の東洋陶磁とヨーロッパ市場の動向(一)—沈船引き上げ資料の器種 組成の検討から—」『掘り出された都市 日蘭出土資料の検討から』日外アソシエーツ 109-132頁

2002年10月30日

「府中宿および近隣遺跡出土陶磁器・土器の様相」『武蔵国府関連遺跡 ヒルズ府中白糸台ノアーヂェ建設に伴う事前調査報告書』47-55頁

2003年1月15日

「旧小倉家出土陶磁器の年代と特色」『下鶴間の小倉家資料調査報告書3 =埋蔵資料=』大和市文化財調査報告書第84集 9-11頁

2003年2月25日

「江戸遺跡出土の清朝銭」『出土銭貨』18 47-56頁

講演

2000年5月20日

「新視点・日本の歴史(1)—旧石器時代と縄文時代—発掘はどのように行うか」
(朝日カルチャースクール横浜校)

2000年6月2日

「加賀御殿の発掘」(「江戸の考古学—加賀藩邸を掘る—」東京大学総合研究博物館)

2001年5月20日

「江戸の飲食屋」(考古学入門講座「飲み食いの考古学」葛飾区郷土と天文の博物館)

2002年1月18日

「江戸大名の食べもの」(かながわ考古学財団 平成13年度考古学ゼミナール「くらしを考える—食べもの—」)

2002年5月19日

「加賀藩本郷邸の発掘調査」(歴史講座「江戸の大名屋敷」文京区ふるさと歴史館)

2002年9月21～22日

「江戸遺跡出土の産地不明の貿易陶磁器」(日本貿易陶磁研究会 第23回研究集会)

2002年10月12日

「東京大学本郷構内遺跡出土の「古九谷」(金沢大学考古学研究室ほか「九谷と有田・染付文様」)

研究発表

2000年7月15日

「江戸の四国産陶磁器出土の様相」(第2回徳島城下町研究会「四国・淡路の陶磁器—生産と流通1—」)

2001年1月27～28日

「基調報告 食器にみる食生活」(第14回江戸遺跡研究会大会「食器にみる江戸の食生活」)

2001年2月10～11日

「関東地方(1)—江戸遺跡出土の肥前陶磁—」(第11回九州近世陶磁学会「国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる—」)

2001年5月26日

「江戸遺跡出土の丹波産播鉢」(第1回中近世丹波焼研究会『関西近世考古学研究9』所収137-171頁)

2002年6月2日

「考古学と近代陶磁」(第3回近代国際陶磁研究会)

大成可乃

執筆

2000年5月20日

「本郷キャンパスにおける発掘調査の成果」『東京大学コレクション X 加賀殿再訪』堀内秀樹共著 70-78頁

「やきもの」考『東京大学コレクション X 加賀殿再訪』 79-93頁

2002年7月10日

「東京大学構内遺跡」『東京都の地名』 526-527頁

2003年1月31日

「東大キャンパス地下めぐり I」『淡青』8号 28-29頁

2003年3月31日

「東大キャンパス地下めぐり II」『淡青』9号 26-27頁

講演

2000年6月23日

「加賀藩邸のやきもの」(「江戸の考古学—加賀藩邸を掘る—」東京大学総合研究博物館)

研究発表

2001年3月3日

「東京大学附属病院病棟地点の概要」(こうらい茶碗研究会第6回発表会)

2001年5月16日

「大村藩下屋敷跡の調査—港区東京大学白金構内遺跡—」(江戸遺跡研究会第80回例会)

追川吉生

執筆

2000年5月20日

「発掘された加賀御殿」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪』 118-132頁

2000年12月20日

「漆器椀の収納について —漆器椀収納箱の型式と収納漆器椀の形態組成—」『東京都立大学考古学報告5 人類誌集報2000』 63-80頁

2001年5月30日

「徳島城下町と江戸遺跡出土の漆器椀 —動物園跡と江戸における17世紀後半代の遺構一括資料の比較—」『徳島城下町通信』5 1-7頁

2001年12月20日

「漆器の絵付けに関連する絵図資料について —安代町ふるさと資料館収蔵品の分類から—」『東京都立大学考古学報告6 人類誌集報2001』 3-44頁

2002年5月20日

「江戸時代の胞衣埋納に関する一考察 —江戸遺跡における検出事例の分析を中心に—」『東京考古』20 127-172頁

講演

2002年9月24日

「発掘調査にみる加賀藩本郷邸」(東京消防庁本郷消防署教養講座)

研究発表

2002年1月27日

「江戸遺跡出土の胞衣埋納遺構」(江戸遺跡研究会第15回大会『江戸の祈り』 269-282頁所収)

2002年9月19日

「東京大学本郷構内の遺跡 —医学部附属病院第2中央診療棟地点の調査」(江戸遺跡研究会第87回例会、成瀬晃司共同発表)

資料活用状況

年度	貸出先	貸出・掲載目的	貸出・掲載資料
2000	里文出版	小林 克「めし茶碗の謎」『目の眼』7月号	御殿下記念館地点233号遺構出土磁器写真16点
	東京国立博物館	『日本の船載陶磁ー朝鮮・ベトナム・タイ・イスラムー』展	御殿下記念館地点出土陶磁器9点
	岩波書店	坂井 隆『海のアジア第6巻 海を渡った日本陶磁』	病棟地点C2層出土陶器1点
	戸栗美術館	『鑑蔵 鍋島藩三十六万石・至宝のお庭焼』展	病棟地点C2層出土磁器1点
	中近東文化センター	『トルコ陶器とタイル』展	病棟地点C2層出土陶器7点
	京都文化博物館	『こころの交流 朝鮮通信使ー江戸時代からのメッセージ』展	病棟地点出土土製品1点
	戸栗美術館	『華麗なる柿右衛門の世界』展	病棟地点SK03ほか出土磁器30点
	江戸東京博物館	常設展示	理学部7号館地点出土資料ほか80点
	人形芸能史研究所	『人形芸能史研究』創刊号	病棟地点出土木製品写真撮影・掲載8点
	葛飾区郷土と天文の博物館	共同研究と分析の為	医科学総合研究棟地点出土瓦23点
柏書房	『図説江戸考古学研究事典』	経済学部総合研究棟地点ほか遺構写真4点	
2001	東京国立博物館	常設展示	御殿下記念館地点出土陶磁器ほか37点
	講談社	週刊『再現日本史』	経済学部総合研究棟地点SU107遺構写真1点
	平凡社	大橋康二『別冊太陽 そば猪口事典』	御殿下記念館地点678号遺構出土磁器写真撮影・掲載1点
	佐野美術館	『みしま～三島暦から三島茶碗へ』展	外来診療棟地点SU143出土陶器1点
	小平市教育委員会	『暮らしの道具』展	御殿下記念館地点出土資料ほか18点
	港区教育委員会	『いろ・COLOR な話ー色と人をめぐる文化誌ー』展	医学部総合研究棟地点ほか出土資料写真7点
	加賀市教育委員会	レプリカ作成の為	中央診療棟地点F27-1出土磁器1点

第3部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

	至文堂	「発掘された庭園」『日本の美術』第429号	中央診療棟地点ほか遺構・出土資料写真3点
	石川県立歴史博物館	『-利家とまつの生きた時代- 戦い・くらし・女たち』展	病棟地点出土銭貨写真1点
	日本暦学会	稲垣正宏「謎の暦茶碗」『日本暦学会』第9号	外来診療棟地点SU143出土陶器写真1点
	伊万里市総務部市史編さん室	『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』	御殿下記念館地点618号遺構出土磁器1点
	江戸東京博物館	常設展示	理学部7号館地点出土資料ほか80点
2002	飯能市郷土館	常設展示	医科学総合研究棟地点SX207ほか出土陶器2点
	東京国立博物館	常設展示	御殿下記念館地点出土陶磁器ほか37点
	北國新聞社	『ふるさと石川歴史館』	経済学部総合研究棟地点SU107ほか写真3点
	岡山市立オリエント美術館	『魅惑のトルコ陶器-ビザンティン時代からオスマン帝国まで-』展	病棟地点C2層出土陶磁器15点
	東京大学総合研究博物館	『東京大学コレクションXⅢ 北の異界-古代オホーツクと氷民文化』展	理学部附属臨海実験所新研究棟(新井城跡)出土資料2点
	教育出版株式会社	古泉 弘『地下からあらわれた江戸』	経済学部総合研究棟地点SU107ほか写真5点
	NHK名古屋放送局	『利家とまつ 加賀百万石物語』展	医学部教育研究棟SK961ほか瓦6点
	大阪市立美術館	『白と黒の競演-中国・磁州窯系陶器の世界-』展	御殿下記念館地点618号遺構出土磁器2点
	武蔵野文化財修復研究所	宣伝広告用	武田先端知ビル地点方形周溝墓保存施工時撮影写真1点
	根津美術館	『知られざる唐津』展	病棟地点D1層ほか出土陶器9点
	書信館出版株式会社	西脇 康「江戸期の地方金貨」月刊『収集』第28巻第2号	病棟地点出土銭貨写真1点
	新泉社	勅使河原 彰『武蔵野の遺跡を歩く 都心編』	御殿下記念館地点全景写真1点
	新人物往来社	稲垣正宏「特集日本の暦と歳時記」『別冊歴史読本』第31号	外来診療棟地点SU143出土陶器写真撮影・掲載1点
	河原書店	稲垣正宏・鈴木裕子『高麗茶碗-論考と資料』	看護婦宿舎地点SK299出土陶器実測図掲載3点

○東京大学埋蔵文化財運営委員会規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学に東京大学埋蔵文化財運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、東京大学構内における埋蔵文化財に関する重要事項及び埋蔵文化財調査室の運営等に関し必要な事項を審議することを任務とする。

(組織)

第3条 委員会は、委員長及び委員若干名をもつて組織する。

(委員長)

第4条 委員長は、総長特別補佐のうちから総長が指名する。

(委員)

第5条 委員は、次の各号に掲げる者に総長が委嘱する。

- (1) 医学部長、工学部長、文学部長、理学部長、東洋文化研究所長、史料編さん所長及び事務局長
- (2) 埋蔵文化財調査室長
- (3) その他総長が必要と認めた者

2 前項第3号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置く。

2 幹事は、総務部長、経理部長及び施設部長をもつてあてる。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、事務局施設部企画課において処理する。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

○埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学埋蔵文化財運営委員会の下に埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

(業務)

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査(以下「遺跡調査」という。)に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- (1) 遺跡調査に対する総括的指導助言
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- (3) 遺物等の保管及び管理
- (4) 遺跡調査の方法に関する調査研究
- (5) 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

(室長)

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は助教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

(室員)

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

(庶務)

第5条 調査室の庶務は、事務局総務部総務課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表（2000～2002年度）

室長（人文社会系研究科教授）	今村啓爾
室員（人文社会系研究科助教授）	寺島孝一
室員（人分社会系研究科助手）	成瀬晃司
〃	堀内秀樹
〃	原 祐一
〃	大成可乃
〃	追川吉生
事務補佐員	安芸毬子
	青山正昭
	池田奈津子
	今井雅子
	大貫浩子
	香取祐一
	川原良子
	坂野貞子
	渋谷葉子(01年1月～03年3月)
	野村 遊
	宮本尚子（～03年3月）

第 4 部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 4

江戸のゴミをめぐる二三の問題について (寺島孝一)

肥前国大村藩白金下屋敷について (渋谷葉子)

江戸のゴミをめぐる二三の問題について

寺島 孝一

はじめに

江戸のゴミ事情については、1982年に刊行された『江戸の夢の島』が、まとまったものとしては唯一のものである。一方、江戸の発掘調査が本格的に行われるようになって四半世紀ほどたち、地下にねむる江戸の様子もだいたいわかってきた。その成果をもとりこんだ、岩淵令治さんの一連の考察は、江戸のゴミ処理についての優れた問題提起として高く評価されるものであろう。

これらをふまえたうえで、発掘調査に携わる者の視点から、町触・川柳・随筆などを読んでいて、気づいた二三の問題についてふれてみたい。

1. 江戸のゴミとは何か

今のような大量消費社会でない当時、一体どのようなものがゴミであったのか？。伊藤氏や岩淵さんもこれにふれられているが、今ひとつ判然としないものがある。

「大名屋敷跡などのゴミためてみつかるものがゴミである」と言ってしまうまでであろうが、そのような廃棄のようすが江戸で普遍的なものであったのか。江戸のゴミが持ちこまれたという永代島や越中島あたりの発掘調査をしてみれば、（腐ってしまったものは調べようがないが）当時の一般的なごみの様子が見えてくるだろうが、今までのところその機会はないようだ。

江戸の人口の大多数を占めていた「下級」武士（直参であろうと^{またもの}陪臣であろうと）や、^{うらだな}裏店の住人たち、そしてまた「伊勢屋」に代表される、質素な暮らしぶりの奉公人たちは、どのようなものを「ゴミ」として捨てていたのだろうか。単純に想像しても、魚のアラ（これらは半野生の犬や猫が食べたかもしれない）・茄子や胡瓜の^{へた}蒂、沢庵の尻尾、野菜クズなどぐらいしか思いうかべることができない。

『守貞謄稿』に竈の灰まで買い集めるという記載があることから、江戸は徹底した「リサイクル」社会であったという向きもあるようだ。しかし例えば、文久三年十二月の町触（16823—塙書房『江戸町触集成』の通し番号、以下同じ）には「市中商家では木灰を貯置いて（その）渡世のものに売り渡しているが、武家寺社等においては取り捨て」ているとしているから、ゴミとして捨てられていたことがわかる。また元治元年の町触（16893）では、特別な所を除いては、「魚腸之汚物」を「廃流」していたとある（同様の記事が17248の町触にもみられる）。このことから魚のアラなどは、一部を犬が食べたとしても（歙形蕙齋『江戸職人づくし』の魚市の場面に、その描写がある）、近くの下水などに放り込んでいたらしいことが想像されるのである。

また以下、川柳を中心にして、ゴミの一端にふれてみたい。

縄と唇斗はきだめへすて

『やない筈』四編（天明六年）

ごく簡単な謎句で、^{アンコウ}鮫鱈の吊し切りをして、利用価値のない口の部分と、鮫鱈をつってぬめりのついた縄をゴミ溜めに捨てたというほどの意味だろう。庶民が日常鮫鱈のような魚を食べていたかどうかは疑問だが、はきだめにもものを捨てる良い例がなかったのでこれをあげた。また、

鳥の毛を捨に風を見すまして ぎやうさんなこと々『誹風柳多留』二編（明和四年）10

という句がある。式亭三馬の『浮世床』（文化九年）に、青首（雄鴨）を六百文で買わないかという会話があるし、年末には「鴨と芹」の料理で一年の無事を祝った家もあったらしい（どの程度普及していたかは私はわからない）。また、川柳には鴨の骨を叩くという描写が頻繁に出てくるから、鴨の骨は立派な食材であったことがわかる（骨はいくら叩いても食べられないだろうから、ダシにでもしたのだろうか）。

青首を六百文で勧められた男は「おいらにはかしわメンドリが相応だ」と断るが、玉子を生まなくなった雌鶏も相当たべられていたらしい。ただこれがどれほど「正規」の取引で流通していたのか？。川柳では裏長屋住まいの独り者が、その辺にいる鶏（玉子を生まなくなった鶏は、神社や寺に放されることが多かったようだ）を捕まえてきて絞めている所を、酒屋の御用聞きに見つけられ、口止めしている光景がよく描かれている。上記の句もその類であろうが、掃溜めに捨てるにしろ、その辺にまき散らすにしろ、ゴミの一つではあったはずだ。通常のゴミについてはこれ以上は私にはわからない。

ただ日常のゴミでも、いわゆる事業ゴミとよべるものがあるろう。

繁昌ハたへず鳥の毛海老のから すて、置けり々

『万句合』寶暦七年 11-15

の句は、八百善や萬八楼などの有名料亭の繁盛の様子を詠んだものだろうが、かなり多くのゴミが出たことは容易に想像される。このうちの一部は、奉公人の余得として持ち帰られたかも知れないが、その殆どは、まとまった良質の肥料の原材料として葛西方面に舟で運ばれたろう。

このほかに年中行事に伴うゴミや季節的なゴミがあろう。まず、

元日のちりハ扇子のしめばかり こほれたりけり々

『万句合』安永元年 8-25

かみくずの溜りはじめハたからふね うき々とする々

『万句合』安永二年 9-25

元旦には、扇子箱に入れた扇子をもって、年始回りをする風習があった。箱は回収業者が買い集

めたようだが、扇子の先に巻いた紙ばかりは、ゴミとして捨てられたのだろう。宝船を印刷した紙は初夢が無事に目出たくすめば、紙屑として捨て（溜めて払い下げたのだろうが）られたのだろう。

幕の跡、紙斗りなる花の山 あきらかな事々

『万句合』安永元年8-15

春の花見の光景である。小袖？などの幕で一座の席をかこった、盛大な宴会の跡には紙屑ばかりが残されているといった光景だろう。このような宴会をどのような階層の人々がしたのかわからないが、紙屑などは捨てていったのだろう（勿論そのあと屑拾いが集めてまわったのだろうが）。

江戸の町触によく見られる年中行事に、正月の「左義長」と盆の「精霊棚」がある。左義長は「正月の松飾りなどを燃してはいけない。ゴミ舟で捨てるか家々の竈で燃料にしろ」というもの、精霊棚は「精霊祭で使ったものを、堀や川に流してはいけない」という触れで、共に毎年のように出されている。

この両者のうち、左義長については川柳などにも殆ど見られないから、禁令はかなり厳密に守られていたようだ。江戸の町では、路上での喫煙が厳しく戒められており、また夜鷹蕎麦の営業が一時は禁止になるなど、幕府は火元には過敏であったから、この触れに反するものはいなかったのだろう。

これにたいして精霊棚は、

はし杭ハしやうりやう様の馬とゞめ よいかげんなり々 『万句合』寶暦13年10-25

しやうりやうハちまきのやうな川ながれ つれ立にけり々 『万句合』寶暦13年11-5

しやうりやうか来て岡釣りのじやまをする 『万句合』安永7年8-25

など多くの句が見られる。またやや古い時期ではあるが河村瑞軒が、品川の浜辺に流れ着いた精霊飾りの茄子や胡瓜を、漬物にして人夫たちに売り歩き、利を得た話はあまりにも有名である。これらのことから、毎年の触れにもかかわらず、精霊棚についてはあまり禁令が守られなかったことが理解できる。直接に生命・財産にかかわらないことについては、幕府の取り締まりもさほど厳しくなかったのかもしれない。

この二例からも、毎年同じように触れが出ているものでも、その守られ方はさまざまであって、一様には論じられないことがわかる。

さて季節的なゴミで最も量の多いものといえば（現在でも事情は全く同じだが）秋の（太陰暦では冬か？）落葉であろう（堀内秀樹氏の御教示による）。山中であれば（決してゴミでなく）豊かな腐葉土を作る落葉も、町中では立派なゴミになる。特に堀や川の畔に植えられた樹木から落ちる葉は、底に堆積して水深を浅くし、重要な交通・物資輸送の水路の確保を困難にしたと考えられよう（後述）。

さらに季節的なゴミ（広い意味で）考える必要があるのは雪である。

宝永四年（1707）の町触（4157）に、

海道^并河岸端ニ有之候雪砂、御堀^江入候由相聞、不届ニ候、向後雪砂其外何ニ^而も御堀^江入申間敷候、若相背者候ハ、急度可被仰付旨、従町御奉行所被仰付候間、堅相守候様、町中不残可被相触候、以上

十二月廿二日

町年寄三人

とある。「雪砂」の意味をだいたい考えたが、触れの出た季節を考慮すれば、雪かきをして道のきわに積みあげた雪だろうと推察される。今のようにほとんど全ての道路が舗装されていれば、雪はアスファルトの表面の僅かな汚れを含むだけだろうが、当時の舗装されていない道では、大量の土砂が雪について積みあげられたにちがいない。これを堀に投げ込めば、かなりの土砂が堀の底に積もったことが想像される。

ここで同様な例として、宝暦九年（1759）の触れ（『御触書宝暦集成』1422）で、「赤坂溜池へ塵芥土砂を流れ込ませないため、今後（隣接する）畑地を廃止し、向側屋敷々々にも右の段を申しわたした」とあるのが想起される。

表面が草や木で覆われていない土地では、降雨のたびに土砂が流されるのは当然で、広大な武家屋敷の場合は格別、町屋や小身の武家地の場合、その殆どが土むき出しの地面だったろうし、江戸町中の道路は、人の通行が多ければ多いほど、草もはえず浸食されやすい状態だったのだろう。

だから、幕府はこれによって重要な交通・物資流通の手段であった堀や川が埋まらないよう常に監視する必要があった。

火災によるゴミはすでに述べられているので、ここでは川柳を一句紹介するにとどめたい。

焼土の瓦の匂ふ通りあめ　はれはれとする々　『万句合』宝暦11年10-25

私たちは発掘調査で、焼け土の一面に広がる地層をよくみつける。そのような面は、年代決定の上で重要な史料を提供してくれるが、阪神淡路大震災で放映された一面に広がる焼土は、震災・火災の悲惨さを改めて認識させるものであった。

紹介した句は、火災の跡に通り雨がふり、まだ燻っている焼土や瓦から、独特の匂いがたち昇っている光景だろう。ここで興味深いのは前句の「はれはれとする」で、火災の多い江戸ではの表現ではなかろうか。

つまり、失うものの少ない裏店住いの人であれば、江戸再建のために「建築業」関係を中心に景気がよくなるだろうという期待、金持ちであれば、失ったものは大きかったが、またこれから働いて出直しだという気分（半ばやけくそかもしれないが）を私は見るのである。

2. 堀浚い

堀浚いについては、伊藤氏や岩淵さんがふれておられるので、ここでは、それによってまちがどのような影響を受けていたかについてのみふれる。

明和二年（1765）の三河町など十一町の名主の「覚」がある（町触 7805）。

此度御堀浚御普請ニ付、私共町々御預り明地内_江、土高サ三四尺通り敷平均シ、直ニ置付ケニ相成候_而も、町々相障候義ハ無之哉と御尋ニ御座候、……所寄明地内地面高キ場所は、当時大雨之節町家之方_江水流込迷惑仕候間、此上明地内一鉢地面三四尺通り高ク相成候ハ、大雨之節ハ別_而往還_江水押出シ、町家之方_江水流込難儀ニ奉存候、先年御堀浚御普請有之節ハ、水絞之内明地内_江浚土被差置、干上り候上、深川辺_江右揚土被差遣候処、此度ハ敷平均直ニ置附ケニ相成候義ニ御座候得は、前書申上候通難儀ニ奉存候得共、御用之儀ニ御座候得は、相障り候と申上候義は難申上旨、先達_而御返答申上候……………

要約すれば、「町々に幕府が預けている空地（この「覚」では十一町）に、堀浚いで出た土を三～四尺積み置きたいがどうか？」という町奉行所からの問いに、「空き地の中でも地盤の高い所は、今でも大雨の際には町屋に水が流れ込んで迷惑しています。この上空き地全体に三～四尺も土を盛れば、今以上に往來に水が出て町家に水が流れ込んで難儀します。先年の堀浚いでは、水を抜く間だけ空地に仮置き、乾いてから深川辺に送った。ところが今度は置きっぱなしにするのでは、難儀しますが、御用の儀とあれば、困るとも申し上げられません」といったところだろう。

三～四尺といえば、当時の江戸の人々の身長からいって、目の高さから胸の高さにあたろう。なんともうっとうしいことだろうが、先の「雪砂」のようなものまで取り締まっても、大量の土砂の堆積は避けられなかったようだ。

川柳では、

一と盛_り町家のくらひ堀さらひ 山のごとくに々 『万句合』寶曆12年10-15

が、「覚」中にみえる「水が乾燥するまでの仮置き場」を表したものであることは容易に理解できる。それにしても「山のごとくに」の表現に窺われるように、周囲の人々にとっては、相当に圧迫感のあるものであったことであろう。また塵芥と直接は関係ないが、堀浚いには、

すつほんをかき入にするほりさらい こしらへにけり々 『万句合』寶曆13年11-15

といった余得もあったようだ。

3. 定濠いその後

御堀の浮芥濠いを条件に、鑑札を受けた町々の芥取りは、その後無料で引きうけた「定濠い」に精勤していたのだろうか。

寶曆九年（1759）三月、町年寄の樽屋で次のような申し渡しがあつた。

神田橋_三数寄屋橋御門迄、汐入御堀内浮芥濠、先年定請負之儀、町々芥取七拾人之者共相願被仰付候処、今以平日浮芥濠揚候哉、又は未熟ニ相成候哉、

これに対し名主たちから次のような返事がある。

御堀通浮芥濠請負之者、平生濠候儀見掛候哉と御尋ニ御座候、町々之者_江相尋候処、前々は時々見掛候得共、近頃は透_而見懸ケ不申由候、町内ニ寄、今以稀ニは濠舟見請候由申者も御座候、又は一向見請不申と申者も御座候、畢竟近年濠方悪敷様ニ奉存候

どうも鑑札と引き替えに請け負った「定濠い」には（当初はまじめにやったのだろうが）あまり熱心ではなかったようだ。この状況に対し町奉行所からきつい「お叱り」があつたようで、芥取請負人長左衛門ほか六拾六人から、

以来は別段御焼印札式枚ツゝ、両御番所江御出置被遊候間、其順ニ当り候_而舟式艘差出、芥濠ニ出候者共、早朝御月番之御番所_江罷出、右札請取、終日浮芥又は下水落口濠等致、夕方仕廻候節、右之札御番所_江相納、毎日右之通無懈怠可致候、若不埒ニ候ハゝ、御吟味之上御咎可被仰付、今日当御番所御内寄合_江被召出、右之趣被仰渡奉畏候、為後日依_而如件（以上、町触 7303）

と、御番所（町奉行所）に対して、具体的な改善策を細かに記した「誓約書」を提出させられている。

これによって、どの程度仕事が改善されたのかわからないが、しばらくあとの川柳に、

ちよろつこひ事をして居常_ッさらひ らくな事かな々？ 『万句合』天明2年3-27

の句があるから、当座は改善されたとしても、すぐに元の木阿弥に戻ったことが想像されるのである。

4. 町の清潔度

町触 6608（寛保元年）に、つぎのような記事がある。

江戸御町中有之候下水、芥土相滞候節ハ、其町々ニ_ニ賃銭を出シ浚来申候、此儀ニ付、乍恐私共相考申候段、近年糖（糠？）干鰯殊之外高直ニ罷成、在々百姓方田畑養物払底ニ御座候ニ付、右申上候下水土望罷在候得共、其儘ニ_ハ船積難致候ニ付、無是非相捨り申候、此度私共制法仕干立、在々積送申候得ハ、殊之外百姓方こやしニ罷成候、甚調法仕候儀ニ御座候

と、下水の土を干しあげることによって在々へ運ぶことが可能となり、これを肥料として売ることができるので、これまでより安く下水浚いを請け負いたいという申し出をしている。この願いは、これまで下水浚いを請け負っていたものに影響が大きいなどの理由で却下されるが、この記事によって江戸の下水に溜まった土が（立派な）肥料になるほど、有機物を多く含んでいたものであることがわかる。

また嘉永二年（1849）に江戸堀江町に生まれた鹿島萬兵衛は、

今より思へば（傍点一筆者）明治以前の江戸は随分不潔の都でありました。道路に小便溜りの黄金水流れ出し小河を作れるは珍らしくらず、横町の銭湯の前などは義経八艘飛びより今一層余分に飛越しの煩ひあり、まつすぐに歩行くことはとても出来ません。府下一流の町でも路地に入れば、掃溜めに塵芥山をなし、猫や鼠の死体芥とともに堆積し、夏季などは臭気甚だしく総雪隠は列をなし、秋口に至れば夜中人魂の飛び出すことあり。場末の貧民窟のごときは路地の入口より鼻を被ふて出はひりするほどでありました。泥溝板は跳ね返り、溝の悪臭に嘔吐を催す、それでも住居せる人々は馴れて平気なものです。道路は勝手に盛土をなし我家の前だけ砂利を敷くなど、凹凸ありて躓きまろぶ人も多し。 『江戸の夕栄』（大正11年）

と、江戸の裏店の様子を（大正時代の町を基準に）書き表している。

さらに川柳で江戸の町のありさまを拾ってみると、

にんじんのふとに程なに砂をかけ	うかれ社しり々	『万句合』明和7年11-15
餅に酒其外茶売馬ふんかき	こみ合にけり々	『万句合』寶暦8年9-25
くそふねの百もこきぬく柳ばし	大いふんなこと々	『万句合』安永元年11-5
こいふねはやかた一ッそうつまゝせる	そのはつのこと々	『万句合』明和2年9-25

などの句をあげることができる。

初めの句は、江戸名物の「伊勢屋稲荷に犬の糞」を思い浮かべればすぐに理解できよう。路地裏々

に飼われて（住みついて？）いた犬や猫の糞を、現在のようにきちんと処理していたわけではなく、そのまま放置するか、近くの下水に放り込んだのだろう。日和下駄の流行も、その理由の一部は犬の糞よけのためとする説もあるようだ。

二番目は品川や新宿などの宿場の光景を詠んだものであろうか。後にも述べるが、馬や牛を重要な交通・運搬の手段としていた当時、その糞は海道の至る所に鎮座ましましていたにちがいない。

後の二句は江戸の堀や河を縦横に通行していた肥舟の描写である。いうまでもなく柳橋は外堀の最下流にかけられた端で、これを潜ればすぐに隅田川である。江戸でも有数の粋な場所であったとされている。このようなところでも、下肥運搬の舟が日に百艘も通っていたというのだから、今の私たちの感覚からみれば、随分と劣悪な環境といわざるをえない。

屋形船による舟遊びも、肥舟とすれ違うたびに息をとめるほどの臭気が只よってくるのである。

先にあげた有機物の多い下水も、夏ともなれば相当の臭気をあたりに漂わせたに違いない。しかしそこに住む人々は、鹿島萬兵衛のいうように「住居せる人々は馴れて平気なもの」であったろうし、下水や肥舟の臭気を当然のこととして受けとめていたのである。

また、外堀に関してみれば、文久元年五月の町触（16568）に、「牛込御門市谷御門四谷御門迄之間御堀」に釣り人が多数でているが、これはまかりならないとある。これに対して時期は相当さかのぼるが、

美しひ名の下水をハ神田もち

『万句合』天明3年9-25

の句がある。つまり、上流の四谷～牛込御門あたりは魚釣りができる程の堀であっても、神田あたりまでくると、密集した町家からの生活廃水によってずいぶん汚れ「神田川」などという美しい呼び方より、下水と呼ぶのが相応という見方もできたのだろう。

ただ、だからといって、江戸の町が不潔であるという言い方は成り立たないだろう。当時の人々はどのような貧しい裏長屋であろうとも、それぞれの感性で清潔（不潔ではない）と思える程度には環境整備をしていた点は間違いないのだから。

5. 貧乏徳利について

いゝ酒屋ほどびんぼうをたんと持

『俳風柳多留』81編（文政七年）35

の句にみられるように、ある時期からいわゆる貧乏徳利が相当に普及するようだ。実際発掘調査でも大量の徳利の破片が見つかるし、またその中に破損していない完全な形のものも多数含まれている。

その背景には、徳利が大量に生産され流通したことによるのは勿論だが、一体消費者が安易に捨ててしまえる程のものであったものだろうか。

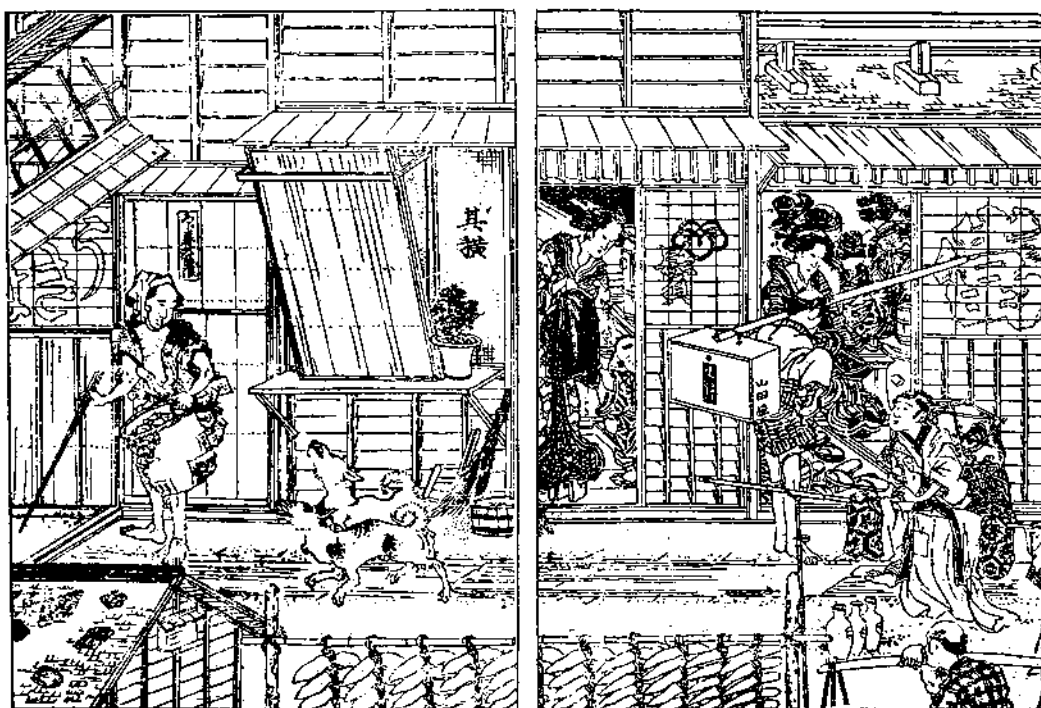
近頃ではビール瓶がどれほど流通しているものか知らないが、記憶が正しければ瓶の「預かり金」として、5円ほど代金に上乗せされ、瓶を返却する時、それが返される制度だった気がする。これほどであれば、花壇の縁に底を上にして埋め込むなどの加役につくこともあったし、その辺に放り投げておいてもだれかがこっそりと持ち去ることもなかったような気がする。酒屋にしても5円の「預かり金」をとっておれば、それほどの損はなかったのだろう。

上記の句より時期はややのぼるが、

おはぐるつぼへとしまやとほつて有り めいわくな事々 『万句合』安永5年10-15

という句がある。これが豊島屋という酒屋の徳利を、お歯黒壺として使っているさまを詠んだものであることはいうまでもないが、「めいわくな事々」という前句に、今のビール瓶の場合とはやや異なる印象をうける。

ここでは、徳利の回収、あるいは酒屋と消費者の関係（つきあい方）を川柳を中心に考えてみたい（なお、「彫ってあり」とあるから、発掘でよくみつかる釘状の利器による点描と思われる。



式亭三馬『浮世床 二編』文化九年十二月序

明^キ徳利御用のゆびになつたよう よくにはなれて々 『万句合』明和5年11-15
 両の手に御用八ッハはさむさり ちらり々と々 『万句合』明和4年9-5

とあるように、酒屋の御用聞きが、明徳利を回収（上記二句の場合、両手の指に差しこんで持ち帰ったようだが、全てがこのような回収法であったのではあるまい）して歩いたようだ。『浮世床』に、

外^との方にかやゝと音して入来るは、何曾^{なぞ}の者ぞ。只見^{とみれば}、躰^みには柿色染^{はりめぎぬ}の襦袢衣を穿ち、アレ見
 な、酒屋の小二め、何所からか風を引ずって来ながら覗^{のぞ}に来た。

（式亭三馬『浮世床』二編、文政九年）

とある。巻頭に裏店の路地の絵があり、大きな風を背に負うた酒屋の調市と、屑拾いなどが描かれている。この絵で注目されるのが、路地の片すみに置かれた3本の貧乏徳利（胴部には酒屋の屋号らしいものが書かれているが、釘描きかどうか判然とはしない）である（前頁の図）。

この徳利がどのような意味でここに置かれているか、文中に説明はないので想像するしかないが、路上に放置されていることから、中味が入っているとは考えにくい。むしろ、今の鮎桶や、釜飯太郎の容器のように、明いた器を外に出しておく、御用聞きがかってに収集してゆくものとするのが自然ではなからうか。絵でみてもわかるように、「御用」はまだ前髪を落とさない十代前半（今の中学生の年頃）の男の子だったようだ。

雪の日やあれも人の子樽拾ひ 『続俳家奇人談』（天保三年）

の句は安藤冠^{かんり}里の作と伝えられ、雪の日にも樽や貧乏徳利を集め歩く辛い光景を描いた名句といわれている。

現在の感覚からみれば、この年頃で他人の家に奉公することは「児童虐待」のようにも思えるが、

樽拾ひ目^ま合^あを見てハ風を上^あ春めきにけり々 『誹風柳多留』初編（明和二年）26
 穴一をひつたてゝ行にいし（丹石）染 『誹風柳多留』8編（安永二年）35
 すをくんな御用あないちしているよ 『誹風柳多留』20編（天明五年）9

などの句にみえるように、遊びざかりの年頃であれば「目^ま合^あ」をみて風あげをしたり、穴一をしたりしていたようだ（尚、丹石染とは、『浮世床』に見える「柿石染」と同じで、前垂のこと）。

さて、空き徳利回収の具体的な場面は、見つけることができなかったが、配達時、あるいは酒屋の店頭での御用と顧客（特に武家）の関係を詠んだ句がある。

番頭がそういつたかと御用せめ つき出^しにけり々 『万句合』明和5年10-5

こい口をならせハ御用置て行キ そんなことかな々 『万句合』明和4年10-5

初めの句は、武家か町方かはわからないが、「お宅は掛け金がたまっているから、少しでも入れてくれなければ酒の配達はできない」とでもいったのだろう。二番目の句は、銭とひきかえに酒を配達するつもりが、相手の武士に刀の鯉口を切られて、あわてて酒を置き、逃げ帰ったようすだろう。特に不良侍にとって御用は手ごろな恫喝とからかいの対象だったようで、

なくさみに御用をしぼる組やしき うらみ社^{こそ}すれ々 『万句合』安永3年9-25

のようなどんでもない句もある。

とすれば、特に武家（単身者の場合が殆どだろうが）の場合には、御用に対するイジメからか、あるいは単に不精のせいかわからないが、徳利を返さないということも、頻繁にあったのではないか？

よこさずハなけと古参^シの御用いゝ 間^タ々に々 『万句合』明和8年9-15

の句が、徳利を巡るものかどうかはわからないが、商家と顧客の間には、日々のつきあいのなかで、丁々発止のやりとりがあったのではないか。

また酒屋ではないが、越後屋などの呉服屋では、にわか雨などの時に、顧客に傘を貸す習慣があったようで、

かへしたかあるかゑちこや傘を干^シ ならひ社すれ々 『万句合』安永5年10-25

一^ト雨に三両つゝとごふく店 おそろしい事々？ 『万句合』安永5年11-15

などの句がある。初めの句は、「越後屋で傘を干している。返された傘があるようで珍しいことだ」という意味だろうし、後の句は、「貸した傘が返ってこないので、一雨ごとに（傘の補充のために）三両づつも掛る」といったところだろう。このような川柳はほかにもいくつかあり、客は借りた傘（もちろん越後屋などの屋号が大きく描かれているだろう）を、その後も「自家用」に堂々と使っているようすが窺われるのである。

話を戻せば、発掘で見つける数多くの貧乏徳利は、生産量が多くなり、大量に安く供給されたことが背景にあるもちろんだろう。しかし単に、「かけ流し—使い捨て」の風潮といった理解でかたづくものではなく、種々の要因が複雑にからんだ結果とみるべきと思うのである。

6. 山の手のごみ事情

寛政年間ごろに書かれたといわれる『梅翁随筆』に次のような記事がある。

大八車、牛車、小荷駄馬近頃みだりに成たるゆへ、御書付出て触下し給ふ。却て小荷駄馬は忒正きり続引、夫より十間程づゝも間をおき忒正づゝ引様にとの事なり。しかるにその如くせば、四谷通りの如く馬多くては、凡六時に大木戸辺へ来る馬、横町々々より出る馬とたがひに礼讓謙退して前書の如く間を置き歩行時は、暮におよぶ頃、漸く四谷御門辺へ参るべきなり。其跡より追々引来る馬は、新宿、追分、淀橋、高井戸向寄々々に遅滞するとも、溜り居るべき所もなき程成べし。斯の如く滞らば、江戸中の掃除支へて、人々難儀に及ぶべしと申もの有けり。

「掃除」が下肥なのか、塵芥なのか私にはわからないが、牛車などに積んで運搬するわけだから、少なくとも近郊農家が堆肥にできるような生ゴミであったことが想像できよう。そして大量運搬が可能な舟の便の利用しにくい山の手では、道路が非常に混雑していたことが読みとれるのである。

うし車先_キがあるくとあるくなり とくなもの也々 『万句合』安永2年11-5

と、たいへんのどかではあったろうが、山の手の人口の増加にともない、それは深刻な問題であったにちがいない。

幕末に近い天保年間にあっても事情は同じで、

山の手ハ馬の背て持つ八里半 『誹風柳多留』別編中（天保4年）31
牛車乗つてく粕の大納言 『誹風柳多留』別編下（天保4年）3

などの句を拾うことができる。

初めの句は、山の手では薩摩芋（八里半）を運ぶのに馬を使ったという意味だし、後の句は、大納言（小豆）のカスを農家が肥料の原料として（たぶん菓子屋から）買い、牛車で運ぶようすを、「粕の大納言」とお公家風に表現し、それが、牛車（ぎっしゃ）に乗っていると見立てたものだろう。

ここで、幕府の評定所が編纂した『御触書集成』の塵芥の部のタイトルが、「御堀_所々橋塵芥捨場等之部」であることに改めて注目する必要がある。

つまり、幕府にとってゴミ問題とは、基本的には（もちろん全てというつもりはないが）重要な交通・運搬手段であった堀（や川）の機能を維持することであって、江戸の住民の衛生や環境を守るという発想はなかった（少なかった）ということである。このことは、『江戸町触集成』を通読していても、強く感じたところであった。（尚、「御堀」といった場合、内堀をさす場合が多いという御指摘を岩淵令治氏からいただいた。ただ、『御触書集成』をみると、例えば寛文元年五月条に「牛

込土橋より筋違橋迄、土手并御堀之近辺云々」の記事があり、外堀も含めたものと考えた)。

だから、すでに指摘されているように山の手では、水路を利用しやすかった下町にくらべ、問題はより深刻であったと想像されるのである。

まとめ

以上、とりとめもなく、江戸のゴミ事情の周辺部を、思いつくままに並べてみた。

「江戸の社会」というものが、さまざまな場で語られるたびに思うのだが、一体「江戸の人々」と一括りで語れるような「人々」が存在したのだろうか？ 例えば、食文化を例にとってみれば、江戸も中盤以降、外食産業が発達し、高級料亭が隆盛をきわめるとともに、盛り場を中心に屋台など手軽な食事処が賑ったという。では、そのような「高級料亭」や「屋台」を享受したのはどのような階層であったのか。

料亭は各藩の御留守居役の寄り合いや、武家の用人などと商家の接待の場として多く使われたろうし、江戸中でみればほんの一握りの人々がその「豪華」な料理を楽しんだにすぎないだろう。

屋台など「庶民」の飲み食い処は、特に独身の(女日照りの江戸であれば多かったにちがいない)職人たちなどにとっては、便利なところだったろう。しかし、大店の奉公人が頻繁にそのような店を利用したとは思えないし(育ち盛りの丁稚が、お使いの駄賃でこっそり天ぷらを買って食いするようなことはあったかもしれないが)、武家にしても勝小吉(勝海舟の父)のような「不良御家人」であれば格別(『夢酔独言』)、かなり高禄の旗本であっても、日々の食事は決まりきった質素なものだったようだ(当主はやや品数が多かったようだが—『名ごりの夢』)。また、単身赴任の勤番武士であっても、江戸での暮らしは経済的にかなり厳しかったようで、いかに安く江戸巡りをするかの指南書?を、交替の者たちが読んで参考にしたといわれている(『江戸自慢』)。だから、表面的には華やかな江戸の「食文化」も、それをどのような階層のひとびとが、どの程度享受していたのかを考えることが重要だと考えている。貧乏徳利の項でもふれたが、その大量の廃棄が何を意味するのか、慎重にそれぞれの「場」を考える必要があるろうし、塵芥についても武家地・町方、下町・山の手、あるいは家族持・独り者といった違いを考えながら、発掘史料や文献を見てゆく必要があると思う。

最後に本稿の論旨を補強し、かつ古今東西普遍の真理を詠んだ句を紹介して筆を置きたい。

あらごみの内ハ女の声ハなし つかもない事々?

『万句合』安永8年9-15

追記

川柳の前句の後に?をつけたものがいくつかある。これは板行された『万句合』の冒頭に前句(お題)を掲げているものの、選ばれた付句の頭に、どの前句に対応するかの記号がないものである。私の話に都合のよさそうな前句を選んだため、?を付した。多分間違いはなかろうが保証の限りで

はない。

(本稿は2004年2月1日の「江戸遺跡研究会大会」での口頭発表「江戸のゴミとその周辺」を纏めたものである。)

参考文献

伊藤好一『江戸の夢の島』(〈江戸〉選書9、吉川弘文館、1982年)。

岩淵令治「江戸のゴミ処理再考—“リサイクル都市”・“清潔都市”像をこえて」(『国立歴史民俗博物館研究報告』118集、2004年3月)。

比企 修編『川柳評万句合』(プリント製本12冊本、1971年～)

『誹風柳多留全集』全12巻(三省堂)。

『江戸町触集成』全19巻(塙書房)。

『御触書集成(寛保・寶暦・天明・天保)』(岩波書店)。

『京都町触集成』(岩波書店)。

鹿島萬兵衛『江戸の夕栄』(大正11年、中公文庫)。

式亭三馬『浮世床二編』(文化九年)。

筆者未詳『梅翁随筆』(『日本随筆大成』第二期11巻所収、吉川弘文館)。

勝小吉『夢酔独言』(平凡社東洋文庫138)。

今泉みね『名ごりの夢—蘭医桂川家に生れて—』(平凡社東洋文庫9)。

原田某『江戸自慢』(『三田村鳶魚編未刊随筆百種』第八巻所収、中央公論社)。

鋏形蕙斎『江戸職人づくし』大田南畝他詞、文化年間(双書美術の泉46、岩崎美術社)。

肥前国大村藩白金下屋敷について

渋谷葉子

はじめに

本稿は、東京大学白金構内医科学研究所附属病院診療棟・総合研究所の建設に伴って行われた発掘調査に関連する文献調査の報告である。

発掘調査区域は、『復元・江戸情報地図』（朝日新聞社、1994年）によれば、安政3年（1856）ころには肥前国大村藩（現長崎県）大村純熙の所有する屋敷の一部であったことが判明する。この屋敷地は寛文元年（1661）12月15日、大村藩が白金村のうち5,600坪を江戸幕府より下屋敷として拝領したもので、以来「白金下屋敷」として、同藩が幕末まで所持し続けた。

第一章 白金下屋敷の概要

第一節 大村藩大村氏と江戸屋敷

まず、この屋敷地を所有した、大村藩と藩主大村氏について述べておく。

大村藩は肥前国南西部、大村湾に臨むそのま彼杵郡のほぼ一帯を占めた。朱印高は2万7,973石8斗7升7合、藩主は、鎌倉期以来周辺の在地領主であった大村氏が、江戸時代を通じて勤めた。日本初のキリシタン大名で、長崎を開港しポルトガル船との貿易を積極的に行ったことで知られる、大村すみただ純忠を父にもつよしあき喜前を初代として、すみより純頼・すみのぶ純信・すみなが純長・すみまさ純尹・すみつね純庸・すみひさ純富・すみもり純保・すみやす純鎮・すみよし純昌・すみあき純顕・すみひろ純熙と12代にわたった（表1「大村藩主一覧」参照）。

大村藩の藩主は、諸大名のような隔年での江戸参勤が、基本的に免除されていた。これは幕府より長崎警衛の役を命じられていたことによる。その内容は、不法外国人などの大村牟取監、異国船の航路にあたる藩領沿岸の海上警備、異国船入津中の長崎市中の警備が主たるものであった。3代純信の藩主期、寛永18年（1641）に長崎警衛が本格化して以後、異国船の長崎入津が6月から9月だったことから、2月に幕府より帰国の暇を受けて3月に江戸を出立し、35～40日の道中を経て4月に大村着、約1年半在国し、9月のオランダ船出帆を見届けてから大村を出発し、11月に参府、というのが定式化した。これが一時、4代純長期の万治3年（1660）から、4月就封、翌年4月参府という諸大名同様の参勤形態となるが、正徳4年（1714）、6代純庸が2月暇賜・翌年11月参府という旧例の復活を願い出て許可された。これ以後、大村藩主の在府、つまり江戸屋敷での滞在は4ヶ月ほどの短い期間に定着することになる⁽¹⁾。また長崎における異国船の入津や出帆の情勢により、江戸への参勤を免除される場合もあった。

大村藩が幕府から最初に与えられた江戸屋敷は、江戸城の南方、外桜田の地1,935坪半であった。屋敷北側の表門正面が町人地の備前町だったことから「外桜田備前町屋敷」と通称されたこの屋敷

の拝領年は、江戸時代の文化年中（1804～17）の段階ですでに不明とされ、慶長期（1596～1614）の末に「江戸屋敷番」という役職が存在したことを根拠に、そのころには与えられていたものと類推されている⁽²⁾。この屋敷は藩主が参勤時に住まう居屋敷、いわゆる江戸上屋敷とされ、白金の下屋敷拝領前は、大村藩唯一の幕府からの拝領屋敷であった。

第二節 白金下屋敷の拝領

白金下屋敷の拝領は、3代藩主純信夫人究竟院および4代藩主純長の実父で、幕府勘定奉行を勤める伊丹勝長が、幕府へ下屋敷拝領を願い出るよう指示し、大村藩がこれに従ったことから実現したものであった⁽³⁾。

それより前、大村藩が所持した拝領屋敷は、既述のように外桜田備前町の屋敷のみだった。勝長からの指示を受けて、大村藩用人安田与左衛門が下屋敷の用地を探し、二本榎にある大村家の菩提寺、長祐山承教寺近くの白金原を選定した。幕府への下屋敷拝領の願い出は、藩自らが拝領を希望する土地を選定し、その絵図を作成して提出するというものであったが、出願の前に幕府老中に内談する慣例があった⁽⁴⁾。大村藩の場合は、勝長が老中稲葉正則へ白金村での下屋敷拝領を願い、その内諾を得て出願にこぎつけている。このとき勝長が稲葉に述べた口上によれば、第一に、大村純長は下屋敷を所持しておらず、前藩主純信のころから上屋敷は飽和状態で、町屋に住む家中の者がいたこと、第二に大村藩は長崎と大村藩領内の番所に家臣を多く派遣する必要から、江戸へ参勤で伴う者は少なくとよとされていたが、江戸で火消しの番を命じられたために、江戸詰の家臣が多くなったこと、以上から下屋敷を拝領する必要性が生じた、ということであった⁽⁵⁾。稲葉はこれを聞き届け、白金村の希望地を描いた絵図を受け取ったことから、万治2年（1659）12月、幕府へ出願の運びとなり、下屋敷の拝領が事実上確定した。

土地の下賜は、寛文元年（1661）12月15日に正式に申し渡された。このとき大村家を含めて44の大名家が同時に下屋敷を与えられた。この達しは、藩主在国中の場合はその親類が受けたが、純長も大村に帰国中で、おそらく伊丹勝長が老中からこれを受けたものと推定される⁽⁶⁾。拝領場所は白金村のうち、京間で東西62間1尺4寸・南北90間、総坪数5,600坪であった⁽⁷⁾。万治2年12月の出願以来、2年を経過しての下賜申し渡しであったが、土地の授受はさらに遅れて寛文2年（1662）3月21日になってようやく行われ、ここに大村藩の白金下屋敷拝領が完了した。

第三節 白金下屋敷拝領の背景

伊丹勝長が、大村藩に下屋敷拝領の出願を働きかけた背景には、明暦3年（1657）1月18・19日に起った、いわゆる明暦の大火の後、幕府が諸大名へ避災屋敷としての下屋敷の下賜を、政策的に進めていたことがあった。大村家が拝領した寛文元年12月5日には、一挙に44家へ下屋敷が下賜されており、この前後、万治元年（1658）閏12月19日と寛文4年（1664）12月15日にも、それぞれ38件と31件の下屋敷一括下賜が行われている⁽⁸⁾。

明暦の大火では、大村藩の外桜田備前町上屋敷も焼失し、そのとき藩主純長は在国中で、2月7

日に参勤した際には、上屋敷の焼け跡の小屋掛けに居住している⁹⁾。火災時、上屋敷に居住していたはずの純長夫人都智と究竟院については、避難先やその後の住居が不明である。都智は火災のあった翌年、万治元年2月17日に死去するが、その間の居所は明らかにならない。究竟院に関しては、くだつて寛文元年(1661)8月9日、牛込屋敷に完成した殿舎に引き移ったとの記録が確認される。この牛込屋敷は獲得した年月や経緯が全く明らかでないが、寛文13年(1673)刊「新板江戸大絵図」には「大村イナバ」と記載があり、大村藩が所持していたことは確かである。興味深いのは、同図の大村家屋敷の東隣に「イタミ大スミ」、つまり勝長の子で藩主純長の実兄、そして究竟院の実弟でもある伊丹大隅守勝政の屋敷がみられることである。さかのぼって、明暦の大火後間もない頃の様相を描いたとされる「江戸大絵図」では、大村家の牛込屋敷は存在せず、その一帯が「伊丹内蔵」、つまり勝長の所有となっている。この屋敷地はおそらく、勝長の父で幕府勘定奉行を勤めた伊丹康勝(順斎)が元和8年(1622)、幕府より拝領した牛込佐渡原(砂土原)下屋敷1万3,565坪で、以来伊丹家の屋敷として存続していたものと推定される¹⁰⁾。すなわち牛込屋敷は、明暦の大火の後から寛文元年までの約4年の間に、伊丹家が自らの下屋敷の一部を大村家に割譲したものだことが判明する。同じ間、伊丹勝長は大村藩に下屋敷拝領の出願を働きかけているが、牛込屋敷はその代替機能を果たすものとして、伊丹家から大村家へ融通された可能性が指摘される。

寛文元年に牛込屋敷を新たに整備し8月9日に究竟院が引き移ったのは、同年9月10日に藩主純長が日向国延岡藩主有馬康純女亀を継室として迎えることになっていたのに伴う措置と考えられる。同年には上屋敷でも大規模な作事が行われていることが確認できる。その着手した日付は不明だが、11月13日付で「御居屋敷御作事ニ入ル金銀」として金小判945両1分・銀28匁3分2厘が書き上げられている。「御居屋敷」の指し示す場所が殿舎全体かその一部かの判断は難しいが、継室亀の入輿にあたり、少なくともその住居となる殿舎奥向きは新たに作事されたことが確実である。

以上を踏まえて、大村藩が寛文元年末の段階で所持した3つの江戸屋敷を、大名屋敷の機能による一般的な分類に当てはめるなら、藩主とその夫人が居住する上屋敷は外桜田備前町、隠居した藩主や世子が居住する中屋敷的な機能を持つ牛込、そして被災時の避難所である下屋敷は白金、と位置付けられ、ここに大村藩江戸屋敷の整備が完了したといえることができる。

大名屋敷の上・中・下という屋敷の機能分化は、明暦の大火後に見られるようになったといわれる。大村藩の江戸屋敷整備もその趨勢に即したものと見えるが、それを志向し、且つなし得たのは伊丹勝長の存在があったからといっても過言ではなからう。勝長は第一に、自らの屋敷の一部を大村家に割譲し、その中屋敷的な機能を補完した。第二に、幕府の下屋敷下賜政策を利用し、とりわけ武家が町屋に混住する現象である町宿や、幕府の役と江戸詰家臣の増加を関連付けて、下屋敷の必要性を強調して拝領運動を展開した。町宿などは当時、幕府・諸藩で問題化しており、これらを出願理由に巧みに取り入れたことは、武家社会で懸案とされている問題を的確にとらえた幕閣勝長ならではの方策といえる。これと関連して第三に、勝長は土地拝領に関する幕府内でのさまざまな情報、例えば拝領希望地の競合相手の有無なども入手することが可能な立場にあった¹¹⁾。幕府との

交渉者が勝長だったことで、大村藩の下屋敷拝領は比較的円滑に運んだことが想像されるのである。

第四節 白金下屋敷の範囲と立地

白金村のうち、大村藩が拝領を希望した周辺は「江戸大絵図」（図1）によれば、明暦3年頃には武家屋敷がほとんど見当たらない。幕府に対して、大村藩が下屋敷拝領を出願した際、ここを「白金原」と呼称していることから、辺りは野原のような場所であったことが窺われる。寛文元年12月15日の拝領後も、しばらくは周辺隣接地に武家屋敷はなかったようである。これは徳島藩蜂須賀家が下屋敷拝領の出願にあたって作成した「御望屋鋪之絵図」（図2）から判明する¹²⁾。その内容年代は、上限が、記載の屋敷所持者名から寛文元年12月15日、下限は、蜂須賀家が大村家の南隣に目黒下屋敷を拝領する同4年（1664）12月15日である。絵図上「大村因幡守屋敷」と貼紙のある矩形の土地が白金下屋敷だが、この絵図は正確な測量に基づいて作成されたものではないといい、確かに実際の敷地の形とは異なっている。しかし絵図作成の目的上、少なくとも蜂須賀家が拝領を望む土地周辺の地形的な特徴は、凡そ捉えられているとみてよかろう。これによれば白金下屋敷は、南側と西側に大きな谷が切れ込み、それらをあがりきった、比較的高い場所に立地したことが看取される。

屋敷地の範囲を確定してみよう。図3は弘化3年（1846）、幕府普請方が作成した「御府内場末往還其外沿革図書」をトレースしたもので、中央の「大村丹後守下屋敷」が白金下屋敷、「丹後守」とは11代藩主純顕のことである。図4は明治28年（1895）、内務省地図局発行「東京実測全図」のうち、旧白金下屋敷の周辺である白金三光町附近部分、そして図5は現在の東京大学医科学研究所の地図である。図3の「大村丹後守下屋敷」北側に沿ってほぼ東西に走る道Aは、図4の道A'、さらに図5の道A''へ受け継がれたと考えられる。道Aは、図3では「大村丹後守下屋敷」の西隣、「藤堂秉之丞」屋敷の内部に至って行き止まりとなっているが、図4によれば明治期にはそれより東側、図3でいうと「大村丹後守下屋敷」の内部北西の「大村当分御預地」の北西角と道Aを隔てた北側の「白金村」の南西角を結んだところで突き当たりになったことがわかる。白金下屋敷は京間で東西62間1尺4寸（約122m）・南北90間（約177m）であったといい、図4上で道A'西端の突き当たりを基点に、東へ62間1尺4寸＝約122メートル、南へ90間＝約177メートル四方の範囲が、江戸時代の白金下屋敷であったことになる。これは図4の316・317番地の範囲に合致している。さらに、図5の道A''は図4の道A'を踏襲しており、前と同様、道A''西端から道沿いにそれぞれ東へ約122m、南へ約177m四方が図4の316・317番地、つまりは江戸時代の白金下屋敷ということになる。この範囲は図5上に太破線で限った部分に相当し、これがすなわち江戸時代の白金下屋敷の範囲と確定される。

範囲の確定を受けて再び図4に注目する。江戸時代の白金下屋敷の範囲に等しいことが確認された316・317番地は、南半と北半では地形的に相異することが読みとれる。南半は平坦な広がりを見せ、北半やや東寄りには谷地で、北に向かって傾斜している。図3と考え合せると、この地が白金下屋敷だった当時から明治28年まで、大幅な地形的改変はないと理解され、江戸時代の白金下屋

敷は、基本的には台地上に位置するが南側の平坦面から北に向かって緩斜するという地形的条件に立地していたことが明らかになるのである。

第五節 白金下屋敷の空間構造

白金下屋敷はその下屋敷としての機能に依拠すれば、火災などによる被災時には藩主やその家族が直ちに避難、さらには居住もできるように、ある程度の殿舎を恒常的に整備していたと推定される。また拝領出願の際に伊丹勝長が述べていたように、ここには多くの家臣も居住していたと考えられる。したがってこの屋敷にも大名屋敷内部の二元的な空間構造の概念、すなわち藩主やその夫人らの生活の場である「御殿空間」と、家臣や陪臣が起居する「詰人空間」は当てはめられる¹³⁾。今のところ白金下屋敷の絵図などはまったく確認されておらず、屋敷地の利用について直接的に知りうる史料はないが、白金下屋敷の空間利用は、南半と北半で地形が相異するという条件に大きく規定されざるを得なかったことは想像に難くない。仮に北半を「御殿空間」とすると、地形的に高い南半が「詰人空間」となり、長屋が2階建ての場合「御殿空間」の内部が見下ろせる恐れが生じる。また表向き・奥向きを備えた殿舎を傾斜地に建造することは技術面等でさまざまな困難があろう。したがって北半は「御殿空間」には不向きと判断される。発掘調査では調査区東側から掘立柱建物址が検出され、構造的にみて家臣の住居である長屋か、それに類する建築物と推定されていることから、北半が「詰人空間」で、南半が「御殿空間」だったと想定するのがおおむね妥当であろう。

さらに史料によれば、白金下屋敷の受け取りに際して、屋敷地の四方の側に堀を掘り、土居を築きあげ、竹を植えることが幕府から命じられたといい、大村藩はおそらくこの指示に従ったとみられる。以上から白金下屋敷は、外部とは土居と堀によって隔てられ、内部は藩主らが滞在する殿舎を含む「御殿空間」を南半に、家臣団の長屋群を含む「詰人空間」を北半に、それぞれ配した空間構造だったことが想定される。

第二章 江戸屋敷の変遷と白金下屋敷¹⁴⁾

第一節 備前町上屋敷の焼失と白金下屋敷—17世紀後半

寛文8年(1668)2月1日、外桜田備前町上屋敷が焼失した。同年5月28日、参府した藩主純長は白金下屋敷を居屋敷とする旨を幕府に届け出た¹⁵⁾。拝領から6年以上を経たこのとき初めて、白金下屋敷は上屋敷再建までの藩主居屋敷として利用されることになった。

白金下屋敷には、寛文2年3月の受け取り時点で番屋が設けられたようだが、そのほかに建物が作事されたかは史料的にはまったく明らかにならない。「詰人空間」については下屋敷拝領の出願理由に家臣団居住用地の確保をあげていたことから推すと、長屋は拝領当初から建設が進められたと考えられる。一方「御殿空間」の純長が入った殿舎が、既存だったか、あるいは上屋敷焼失に応じて建設されたのかは確認しえないが、参府が上屋敷焼失から約4ヶ月を経ていること、4月に参

府すべきところを5月末まで延期していることなどから、殿舎の有無、いずれにしても純長が居住できるよう環境を整備するため時間を要したことが推察される。純長は翌寛文9年6月24日に大村に帰城したことから、5月下旬まで在府していたとみられる。

純長の次の参府は寛文10年(1670)4月であったが、いずれを居屋敷としたかは明らかにならない。焼失した備前町上屋敷は、ある時点で再建に着手され、寛文11年(1671)1月23日には完成していたようである。これは同日、大老酒井忠清と老中稲葉正則が江戸城よりの帰途、大村藩邸に立ち寄ったという記録から窺われることである⁶⁶。大村藩の場合、藩主の道中および在国中に作事を進め、次の参府にあわせて殿舎の完成をみる事が多く、このときも純長の出府にあわせて上屋敷建設が進行した可能性がある。これにしたがえば、寛文10年4月には上屋敷殿舎が出来していたことになる。以上の推定も踏まえると、少なくとも寛文8年5月末から翌9年5月下旬までの約1年間、白金下屋敷は藩主居屋敷として機能していたといえることができる。

下って元禄2年(1689)、純長の世子純真が廢嫡となった。純真は帰国して大村に居住することになったが、その住まい完成まで、同年4月から約5ヶ月間、白金下屋敷に滞在したことが判明する⁶⁷。元禄13年(1700)10月2日には、門前に辻番所を設置することが申し渡されており、18世紀に入ると、江戸の中心部における慢性的な屋敷地不足が江戸近郊村落の市街地化を促すが、白金周辺もその影響から元禄期に武家屋敷などが増加し、閑静な土地柄が変容した様子が窺われる⁶⁸。

第二節 備前町上屋敷と白金下屋敷の焼失—18世紀半ば

享保16年(1731)4月18日、護国寺より出火の延焼により備前町上屋敷が類焼した。藩主純富はこのとき在府中であつたが、6月7日には大村に帰城した。35～40日という道中の日数を考慮すると、4月末から5月初めには江戸を出立したことになり、避災のため、いったんは白金下屋敷に退去したとみられるが、滞在はごく短期だったと考えられる。純富が翌17年(1732)11月の参府時、いずれを居屋敷としたか明記する史料はない。この在府中の享保18年(1733)1月8日、白金下屋敷奥向きからの失火で殿舎の半ばが焼け、居住していた純富の妹藤などが負傷したことが確認されるが、純富がそこに滞在していた様子はない⁶⁹。同年3月16日に純富は江戸を發ち、4月13日に大村に帰国、同月25日には前年、つまり享保17年の江戸屋敷作事を賞した、家臣への加増を行っている⁷⁰。ここでいう江戸屋敷とは上屋敷と考えられ、享保17年のうち、おそらく純富の参府前に上屋敷の殿舎が急遽建造され、純富は参府してここに入ったと推定される。加増は急な作事に働いた家臣に対する報奨だったのであろう。ただし享保19年(1734)の幕府に対する上申で、困窮のために上屋敷を元通りに再建するのが早急には難しいと述べており⁷¹、これは仮に作事された殿舎だったことが窺われる。6年後の元文5年(1740)1月19日には、江戸屋敷作事のため国許から役人4人と職人など36人が参府した⁷²。これは同年12月28日、純富に上野沼田藩主本多正武の女恵津が入興することが決まり、奥向きの殿舎を整備する必要性に基づくものだったと判断されるが、上屋敷の元通りの再建も、このときまで保留されていた可能性もあろう。

なお、享保16年の上屋敷火災時には、白金下屋敷は藩主居屋敷とはならなかった様子だが、純

富生母紋は江戸上屋敷に居住していたはずで、その火災の折には白金下屋敷に避難した可能性が高く、あるいは上屋敷再建まで居住したことも考えられよう。藤については、既述のとおり下屋敷焼失時、そこに居住していたことが確認されるが、それが恒常的な居住か、上屋敷焼失に伴う一時的なものだったのかは明らかにしえない。

享保18年の火災後、白金下屋敷の殿舎が再建されたかも不明である。下って明和9年(1772)2月29日の、いわゆる目黒行人坂火事も白金下屋敷に延焼し、被災状況は不明だが、このときは同年のうちに家作と七社が元通り再興されたということである²³。享保18年から明和9年までの約40年で、藩主は純庸・純富・純保・純鎮と代替わりしたが、この間、江戸屋敷の狭隘化が進んでいた。享保18年から元文3年(1738)までは純庸が隠居としており、また奥向きには寛延3～明和2年(1750～65)と安永6～天明6年(1777～86)には、前々代および前代、そして当代の藩主夫人3人が江戸に居住するという状態になった²⁴。このほか子女もあり、上屋敷のみでは物理的に収容困難で、白金下屋敷も住居として使用されていたことがじゅうぶんありうる。したがってこの当時については、白金下屋敷の殿舎は火災後、すみやかに再建されたとみるのが妥当と思われる。

第三節 上屋敷替地と白金下屋敷—18世紀末

寛政6年(1794)1月10日、麴町5丁目からの出火により備前町上屋敷が全焼した。火災時、藩主純鎮は在国で、被災した家族は湯島天神下屋敷に退去した²⁵。この屋敷は寛政2年(1790)11月11日、前代藩主純保夫人の真如院の所望により、姫路藩酒井家所有で分家の姫路新田藩酒井家が使用していた1,866坪を、相対替で獲得したものである。真如院は、前節で述べたような18世紀中葉の屋敷不足の状況から、この屋敷獲得に動いたと推察される。寛政4年(1792)2月18日の真如院没後の利用状況、およびこの火災に際して、藩主家族が白金下屋敷ではなく湯島天神下屋敷に避難した理由については定かでない。

さて幕府は、この火災を機に、新シ橋から幸橋間の堀沿いの町人地を火除地に転換することを決めた。町人地の移転先として、この火災で焼失した武家屋敷地が充てられることになり、備前町上屋敷もこれに含まれ、寛政6年3月14日に上地、代地として永田町横丁通りに面した米倉三八および伊沢内記の屋敷跡3,600坪が与えられた。備前町上屋敷は、延宝8年(1680)8月、捕鯨などによって蓄財した深沢儀太夫勝清が、隣接する戸田某の屋敷地783坪8合を買得して大村家に献上したことから2,719坪3合に拡大、さらに宝暦9年(1759)7月3日には、南隣の佐久間小路通井関玄説屋敷961坪を相対替によって獲得し3,680坪2合となっていた²⁶。永田町に下賜された3,600坪はこれに見合った面積だったと推定され、また同時に引料(引越料)として銀250枚も与えられた。

寛政6年11月22日、藩主純鎮は参府し、永田町上屋敷が完成していないことを理由に、白金下屋敷を居屋敷とする旨を幕府に届け出た²⁷。永田町上屋敷は本来的に藩主居屋敷であるにもかかわらず、その作事は拝領後2年以上を経過した寛政8年(1796)10月1日になって、表長屋からようやく始まった²⁸。それから3年を経た寛政11年(1799)12月に殿舎がおおむね出来し、同月10日に藩主家族が、次いで15日には家中が、新たな永田町上屋敷に引き移った²⁹。純鎮は寛政12年(1800)

11月の参府からこの新邸に入っている。火災後の急ごしらえの再建とは大きく性質を異にし、新たな拝領地への建築という点で、新規の正式な殿舎や長屋の設計・施工計画の検討、さらにそれを実行するための資金・資材の調達は急には難しく、時間を必要としたのであろう。結果、白金下屋敷は寛政6年11月以来、約6年もの長きにわたり藩主在府時の居屋敷として機能したのである。

第四節 相対替による屋敷地獲得と白金下屋敷—18世紀末～19世紀前半

白金下屋敷は藩主居屋敷として利用された一方、寛政期の末頃から、その一部を用地とした相対替が積極的に行われるようになる（表2「大村藩江戸屋敷関係相対替一覧」参照）。これより前、宝暦9年（1759）7月3日の備前町上屋敷添地と、寛政2年（1790）11月11日の湯島天神下下屋敷の獲得に際して白金下屋敷の一部が替地に利用されたが、この時期の白金下屋敷を用地とする相対替で獲得されたのは、すべて永田町上屋敷の隣接地である。相対替は、寛政10年（1798）4月25日、天保3年（1832）9月23日、同5年（1834）8月29日、同8年（1837）9月1日に行われ、4回で合計1,449坪を得た。これらは替地が下屋敷であったため、麴町元山王下下屋敷と呼称されたが、永田町上屋敷はこれらを囲い込んで5,049坪に事実上拡大した⁹⁹。一方白金下屋敷は、4回で合計553坪が割譲されたが、このうち天保3・5・8年の相対替の内実は拝領屋敷の売買であった。具体的には、大村藩は引料の名目で相手方に数百両の金銭を支払って麴町元山王下の屋敷地を獲得し、白金下屋敷の替地は所持し続けたことが史料で確認される¹⁰⁰。また明記されてはいないが、寛政10年の相対替も同様であったことが窺われる。根拠は第一に、大村藩は麴町元山王下屋敷を所持する内藤弥左衛門に金400両もの引料を支払っていること、そして第二の根拠は市谷薬王寺前下屋敷の獲得時に求められる。この屋敷地は寛政12年と文化7年に湯島天神下下屋敷との相対替で獲得したが（表2-④・⑤）、実はこれより前、寛政8年（1796）に大村藩は溝口模守から市谷の1,000坪を借用し、うち400坪を能勢又十郎に譲渡して、幕府へは追って正式に相対替を願い出ること、その後は表向きは能勢が白金下屋敷のうち303坪を受け取ったことになるが、辻番などは大村藩で引き続き勤め、市谷の屋敷に関する諸事は能勢が引き受けることが約定された。つまり大村藩は買得で麴町元山王下屋敷を獲得し、能勢への白金下屋敷割譲はあくまでも幕府への届け出上のことで、実際には市谷の屋敷地を譲渡して、白金の替地は温存したと理解されるのである。以上から寛政10年の相対替もその後3回と同様の内実であったとみられる。なおこのとき届け出上割譲された土地は、文政4年（1821）4月14日、相対替によって能勢から大村藩に再度わたり、最終的には届け出と実際の所持者の一致をみた。そしてこれによって大村藩の所持する江戸屋敷は、永田町上屋敷と白金下屋敷の2ヶ所となった（表2-⑥）。

このような拝領屋敷地の所有者をめぐる届け出と実態の乖離は、幕府による相対替年限の規制によるものと考えられる¹⁰¹。しかし天保期末になると、相対替で大村藩が名目上他家へ譲渡した土地に関して、預地という形態での授受が行われるようになる（表4「大村藩白金下屋敷替地所持者変遷」参照）。これは幕府による土地所有者の名実の一致と下級幕臣への下賜地確保のための施策であったと考えられる。具体的には、譲渡地を幕府が上地し預地として大村藩に渡す、またその預地を幕

府が再び取公し幕臣に下賜するなど、天保14年(1843)12月25日、嘉永5年(1852)2月11日、安政5年(1858)4月4日、同6年(1859)12月7日、万延元年(1860)11月2日の5回行われ、幕末の白金下屋敷は354坪ほど減少することになった(表3「大村藩江戸屋敷変遷」参照)。

第五節 幕末の白金下屋敷—19世紀半ば

大村藩の所持する江戸屋敷は、文政4年、永田町上屋敷と白金下屋敷の2ヶ所に絞られたが、幕末は両屋敷とも度々の災害に見舞われた。まず弘化2年(1845)1月24日、青山からの出火が飛び火して白金下屋敷の2間梁8間の表長屋1棟を焼いた。拝領当初、周囲に廻らされた堀はある時点で埋め立てられ、長屋が建設されたことがここから判明する³³⁾。

嘉永3年(1850)2月5日、麴町4丁目からの出火により、永田町上屋敷が殿舎・長屋とも全焼した。藩主純熙は在国中で、その家族は白金下屋敷に避難した³⁴⁾。上屋敷は、同年4月7日に国許から出府した作事奉行らによって再建に着手され、翌4年(1851)5月26日までに完成、藩主家族はこれと同時に戻ったと考えられ、白金下屋敷での居住は1年3ヶ月ほどだったとみられる。藩主純熙は同年冬の参府から新邸に入ったという³⁵⁾。そして安政元年(1854)10月12日、今度は白金下屋敷が、西隣の藤堂乗之丞屋敷からの出火により全焼した。藤堂家の屋敷とは「合壁」、つまり堀1枚で隣り合っていたため延焼したという。このとき白金下屋敷に居住していた前藩主純顕夫人整は菩提寺の承教寺へ避難し、その後同人の休息所が上屋敷奥向きに建造され、藩主純熙夫人嘉庸と同居することになった³⁶⁾。整は安政3年(1856)4月8日に白金下屋敷へ移り住んでおり³⁷⁾、その殿舎が完成したこと、また整は白金を恒常的な住まいとしていたことが判明する。

白金下屋敷は焼失から1年半という比較的短期のうちに再建された。建設中の安政2年10月2日には安政の大地震に見舞われており、これを勘案すれば非常に迅速といえよう。下屋敷火災当時、上屋敷奥向きには嘉庸のほか、前々代藩主純昌夫人恭容院も居住しており、整が入ることで著しく狭隘化したと推察され、早急に原状回復するため、白金下屋敷の再建が急がれたのであろう。また整が恒常的に住まったことから判断すると、白金下屋敷は隠居屋敷だったと考えられる。整の主人、つまり前藩主純顕は弘化4年(1847)2月11日、持病を理由に27歳の若さで隠居、療養のために帰国した。順快したことから嘉永5年(1852)3月26日に再出府するが病が再発、同年11月2日、幕府に帰国療養を願い出て許可されて間もなく江戸を離れ、その後は4年に1度、幕府に在邑の届けを提出して国許に居住した³⁸⁾。隠居した前藩主は、基本的には江戸居住とされ、純顕は病身でそれが困難なことから国許に住まうことが幕府から許されていたが、嘉永5年の例にみるように、治療をみれば江戸居住しなければならず、その住まいは整えておく必要があったと考えられ、これも早期再建を促した理由とみられる。

安政2年の大地震時、白金下屋敷が建設中だったことは述べたが、その被害状況は明らかにならない。永田町上屋敷では殿舎・長屋・石垣・堀・土蔵が被害を受け、このうち殿舎奥向きでは嘉庸と恭容院の住居の破損が甚大で、比較的被害の少なかった表居間や庭などに避難したという。整の休息所は新築のためか、さほどの被害はなかったようである³⁹⁾。また白金下屋敷完成後間もない安

政3年8月25日、江戸は激しい風水害（安政の大風雨）に襲われ、白金下屋敷も被害を受けたというが、状況はまったく不明である。永田町上屋敷では書院など殿舎表向きのおちこちが破損し、長屋1棟が倒壊して死傷者が出たといい、下屋敷も相当に被災したおそれがある⁴⁰⁾。万延元年（1860）7月24日にも大風雨の被害に見舞われたというが具体的な状況は不明である⁴¹⁾。

文久2年（1862）、幕政改革により大名妻子の在府・在国が自由とされたのを機に、大村藩では江戸の妻子らを翌文久3年（1863）3月までにすべて帰国させた。同改革では、大名の江戸参勤も3年ごと100日に緩和されたが、藩主純熙は文久3年から長崎惣奉行に任命されたため、在職中の参勤を免除されていた。翌元治元年（1864）、その職を辞したことから参勤せざるを得なくなり、翌慶応元年（1865）3月に純熙は参府の途に就くが、京都滞在中第2次長州征伐により幕府から九州諸侯へ帰国命令が出されたため、大村へ引き返した。また同年、幕府より大名妻子・嫡子の江戸居住命令が再び発せられ、大村藩ではこれに応じなかったが、純顯夫人整のみは江戸居住を強く望み、慶応2年4月よりその居宅の建設が始まった⁴²⁾。その場所は不明だが、前例からすると白金下屋敷内であったのではないか。これ以外は文久3年以降、藩主とその家族が江戸屋敷に居住することはなく、江戸詰家臣も慶応4年（1868）2月15日までにはすべて帰国した⁴³⁾。そして同年8月、明治維新政府によって諸侯の江戸藩邸が没収されることになり、これを受けて永田町上屋敷・白金下屋敷、ともに大村藩の手を離れたとみられる。

第三章 白金下屋敷の土地利用

第一節 白金下屋敷利用の画期

大村藩江戸屋敷の所持状況は、概ね表3「大村藩江戸屋敷変遷」のように、備前町、続く永田町上屋敷と白金下屋敷の2ヶ所の屋敷を基本としていた。機能としては藩主居屋敷は備前町、そして永田町上屋敷、その補助屋敷としての白金下屋敷、と位置づけられていたと考えられる。白金下屋敷の場合、災害時の避災屋敷としての利用はもちろんだが、隠居屋敷の機能を果たした時期が何回かあったことは変遷にみたとおりである。

白金下屋敷の利用に関して特に注目したいのは、寛政6年（1794）3月の備前町から永田町への上屋敷替地時である。永田町の屋敷地拝領後、建築はしばらく見送られ、当面白金下屋敷が藩主居屋敷とされた。そして永田町の新邸は着工までに2年以上、それから完成までに3年半以上を費やし、拝領から藩主移徙まで通して約6年を要し、その間白金下屋敷が藩主居屋敷としての機能を負ったのである。このことによって白金下屋敷は以下のような変化を来たことが推定しうる。すなわち「御殿空間」は藩主在府時の恒常的な生活の場になるとともに、書院などの儀式空間や政務全般を執行する役所向きなど必要な施設が増設され、「詰人空間」でも従来居住していた藩士に上屋敷居住だったものが加わることになり、そのための長屋が増築されたとみられる。つまり「御殿空間」・「詰人空間」とも、多くの建物を新築・増設する必要が生じたと考えられるのである。

そこで想起されるのが発掘調査によって検出された版築の遺構である⁴⁴。屋敷地東側、谷の入りこんだ部分を嵩上げて西側と同じ高さの平場にするため構築されたもので、その土中に「寛政年製」銘の陶磁器底部片など、18世紀末頃のものと思われる陶磁器類を多く包含することから、そのころに行われたと推定されている。前述のように白金下屋敷は、地形的に南から北へ傾斜するため屋敷地として利用しにくい場所があった。居屋敷化に伴い、建物を新築・増設する用地を新たに確保する必要から、これまで利用されずにあった傾斜地部分を版築によって平坦にし、屋敷地への転換を図ったものと考えられる。18世紀末という構築時期からも、居屋敷化との関連性は間違いなからう。しかもこのとき、従来あった掘立柱建物が埋め立てられたという指摘もあり、建物配置など白金下屋敷全体の平面構成が大きく見直された可能性も考えられる。版築によって造成された土地も含めた、新たな屋敷地利用が計画、実行され、18世紀末、白金下屋敷の利用は、大きな画期を迎えたと推定されるのである。

第二節 相対替用地としての白金下屋敷

白金下屋敷の土地利用ではもうひとつ、相対替用地としての利用を考えなければならない。敷地ごとに所有者の変遷を整理したのが表4「大村藩白金下屋敷替地所持者変遷」である。図3によれば、相対替の替地とされて大村藩から他家へわたったのは、名目上のものを含めて、白金下屋敷の北東角のⅠ・Ⅱ・Ⅲおよび北西角のⅣ・Ⅴで、すべて北側を東西に走る道Aに面していることがわかる。

このうち北西角のⅣに関しては、道沿い（東西）10間、奥行き（南北）5間と判明する⁴⁵。これに隣接するⅤはⅣ同様50坪、また図3によれば奥行きも同じで、したがって図4に書き入れたような範囲を占めたと推定される。一方北東角についてみると、図4で316番地と317番地を隔てるラインは、替地と白金下屋敷の境界の名残とみられ、Ⅲ西側の境界線を南へ延長したものが316・317番地を隔するラインとなる。図4によれば317番地の道沿いは約45.5メートル＝25.2間ほど、またⅠ・Ⅱ・Ⅲの坪数合計は954坪であることから単純計算すると奥行きは約38間となる。ただしⅠ・Ⅲの奥行きは等しいがⅡの敷地はL字型を呈しており、仮にⅠ・Ⅲの奥行きを30間と想定した場合にⅠ・Ⅱ・Ⅲの各坪数の辻褄が合うことから、おそらく図4に記入したような範囲を占めたものと考えられる。

これに基づいて、それぞれの敷地がどのような地形であったかを考えてみたい。まず屋敷地北東角から、Ⅰは途中2つに分割され、特に東側の内藤家の敷地は急勾配を示し、西側の小林家の所有地も傾斜地で、いずれも屋敷地としては利用しにくかったであろう。内藤家の居屋敷は裏二番町に500坪で、白金今里村200坪は「地守附置」と記されている⁴⁶。小林家は小川町水道橋通400坪の拝領屋敷を所持、弘化4年（1847）9月には相対替で小石川門内土手通415坪に移っており、これが居屋敷だったと考えられる⁴⁷。Ⅱの敷地はL字型を呈し、ⅠとⅢに挟まれた部分の傾斜は緩やかだが、Ⅰの南側は南東方向に急勾配しており屋敷地に利用するのは困難である。表4のように嘉永5年、早川鉄五郎がこの土地304坪を幕府から受け取った際、拝領屋敷は200坪で、残りの104坪は預地とされた。幕府は、急傾斜地（「崖なだれ」などと呼称）に関しては拝領屋敷とは別に預地

として渡す例が多くみられ、この場合も地形的にみて南側が預地 104 坪、I と III の間が拝領地 200 坪だったと推定される。III も傾斜地で屋敷地には不向きであったといえよう。所持者の三浦源太夫は山木数馬拝領屋敷四谷大原町 200 坪を借用して居屋敷としていたらしい⁴⁸⁾。次に北西角について、IV は全体的に平坦で屋敷地としての利用は可能だろうが、V は傾斜部分にかかっており利用しにくかったことが察せられる。V を所持した高木家は交代寄合 4000 石で、牛込神楽坂上 1,411 坪を居屋敷とし、また拝領下屋敷として深川海辺新田 1,706 坪も所持していたことが判明する⁴⁹⁾。

以上から、白金下屋敷のうち替地に利用された部分はほとんどが急な傾斜地で、屋敷地としての利用が困難な場所だったことが指摘される。各敷地の所持者の多くは別に居屋敷を所持していたこともあり、白金の敷地は居住するために獲得されたものではなかったということができよう⁵⁰⁾。

おわりに

本稿では大村藩江戸屋敷のうち、白金下屋敷の立地条件や空間構造、居住者や利用の変遷について、関連する文献や絵図・地図など各種資料に基いて記述した。屋敷絵図や江戸での動静を具体的に知りうる史料がほとんどないため、多くを推定に拠らざるを得なかったが、最後に白金下屋敷の土地利用から示唆をうけた課題をひとつ示して結びたい。

大村藩では、屋敷地としての利用が困難な部分を相対替の替地に充てたと窺われた。これは相対替の実態の一端を示す事例として興味深い。では相対替後、その替地はどのように利用されたのか。大村藩は名目のみ他家へ譲渡した場所をどのように利用したのか、また替地として傾斜地を受けとった場合はどう利用したのか、という点はいまだ明らかになっていない。さらにその替地は幕府によって収公や再下賜されることもあり、また預地とされる場合もあった。以上のような幕府の土地政策も含めて、替地とされた、屋敷地に不向きな土地の利用の実態を明らかにしていく必要がある。これは武家屋敷のみならず、都市江戸の土地利用を考えるうえでも、ひとつの論点となりうると思う。

【補註】

- (1) 大村藩の参勤交代については「純庸公御代々百日御暇御免許之事」（藤野保編『大村見聞集』高科書店、1994 年、958～62 頁、以後『見聞集』958～62 と略す）による。
- (2) 「備前町御屋舗之事、附屋舗図之事」（『見聞集』77～80）。現在の港区西新橋 1 丁目附近に所在し、のちに添地で隣接することになる「佐久間小路」や周辺一帯の呼称である「愛宕下」、また近隣の町人地「久保町」などを冠して呼ばれることもある。藤野保氏によれば『見聞集』の内容の下限は文化年中とされ、このころにはすでに拝領年月が不明だったということである。慶長 10 年（1605）、2 代藩主純頼の世子時代、伏見で徳川家康・秀忠父子に初拝謁したのち、家康に供奉して江戸に赴いたときの滞在先は不明で、江戸屋敷は未拝領だったと考えられる。

- (3) 以下の本章の記述は概ね「白金御下屋舗并牛込之事、附湯島御屋敷之事」(『見聞集』81～84)に依拠し、その他による場合のみ註を付す。
- (4) 一般的な屋敷地拝領の方法と手順については、宮崎勝美「江戸の土地—大名・幕臣の土地問題」(吉田伸之編『日本の近世』第9巻、中央公論社、1992年)137～40頁を参照されたい。また特に寛文期の下屋敷拝領に関しては金行信輔「寛文期江戸における大名下屋敷拝領過程」(『日本建築学会計画系論文集』第516号、1999年)が詳しい。金行氏によれば、大名家は拝領を希望する土地にまず「望杭」を打ってその意思表示をしてから、幕府に希望地の絵図を提出したという。
- (5) 「(屋敷届ノ儀ニ付書状)」(大村市立史料館所蔵大村家史料106-31)。
- (6) 『東京市史稿』市街篇第7(臨川書店、1994年復刻版)、1208～10頁。
- (7) 「白金村下屋敷請取事」(「大村家覚書」巻之七、大村市立史料館所蔵、東京大学史料編纂所所蔵写真帳を使用、以下「覚書」七、と略す)。なお、この条は日付が寛文元年3月21日とされているが、他史料との比較から、寛文2年の誤記と考えられる。
- (8) 『御府内備考』第一(雄山閣出版、1967年)
- (9) 「上屋舗火災之事」(「覚書」七、明暦3年1月18日条)。
- (10) 『東京市史稿』市街篇第4(臨川書店、1994年復刻版)、122～23頁。なお本稿で参照する絵図資料は概ね『5千分の1江戸—東京市街地図集成—1657(明暦3)年～1895(明治28)年—』(柏書房、1988年)に収録されている。
- (11) 白金下屋敷の南側に下屋敷を拝領した徳島藩蜂須賀家の場合、幕府内での情報収集に非常に苦慮した様子が窺われる。詳しくは註(4)金行論文参照。
- (12) 国文学研究資料館史料館所蔵阿波蜂須賀家文書1269。これは拝領の出願に伴い幕府に提出された絵図の控えと考えられ、前節で記した白金下屋敷拝領の出願時に伊丹勝長が老中稲葉正則に提出した絵図もこのようなものだったと考えられる。なお絵図の内容年代等は註(4)金行論文に拠った。
- (13) 吉田伸之「近世の城下町・江戸から金沢へ」(『週刊朝日百科日本の歴史・別冊歴史の読み方2・都市と景観の読み方』朝日新聞社、1988年、所収)。
- (14) 本章の記述は概ね「備前町御屋舗之事、附御屋舗図之事」・「永田町御屋舗之事」・「白金御下屋舗并牛込之事、附湯島御屋敷之事」(『見聞集』77～84)に依拠し、その他による場合のみ註を付す。
- (15) 「上屋舗類焼之事」(「覚書」七、寛文8年2月1日条)。
- (16) 『九葉実録』第一冊(大村史談会、1994年)、39頁、寛文11年1月23日条。
- (17) 「純真在所住居之事」(「覚書」八、元禄2年月日不詳条)。白金下屋敷を出立した日にちは判明しないが、9月25日に帰国していることから、8月下旬には江戸を発ったと考えられる。
- (18) 「下屋舗辻番所之事」(「覚書」八)。
- (19) 『九葉実録』第二冊(大村史談会、1995年)43頁。

- (20) 『同』第二冊、46 頁。
- (21) 『同』第二冊、52 頁。
- (22) 『同』第二冊、75 頁。
- (23) 「下屋敷類焼之事」(「覚書」十三)。
- (24) 寛延 3～明和 2 年には、純庸夫人長松院(紋)・純富夫人正寿院(恵津)・純保夫人秀が、安永 6～天明 6 年には正寿院・真如院(秀)・純鎮夫人留、が江戸屋敷に居住していた。なお、純庸は隠居後大村に帰国したが、隠居・世子は江戸居住が幕府が定めた基本方針であり、藩はその屋敷を確保しておかなければならなかったとみられる。
- (25) 「江戸屋敷火災之事」(「覚書」十四)。
- (26) 「上屋敷坪数書出之事」(「覚書」十)・「上屋敷坪数加入之事」(「同」十二)。
- (27) 「下屋敷住居之事」(「同」十四)。
- (28) 『九葉実録』第二冊、354 頁。
- (29) 「永田町屋敷引移之事」(「覚書」十四)。
- (30) 安政 3 年(1856)頃に幕府屋敷改が作成した「諸向地面取調書」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第 14 卷、汲古書院、1982 年、62 頁)では、当初拝領の 3,600 坪に相對替による獲得地を合せた 5,049 坪が永田町上屋敷の坪数として記載され、実質的に両者は一体に把握されていたようである
- (31) 「白金下屋鋪切坪相對替、上屋敷坪数加入之事」(「覚書」十七、天保 3 年 8 月 13 日条)・「白金下屋鋪切坪相對替、上屋敷坪数加入の事」(「同」十七、同 5 年 8 月 25 日条)・「白銀下屋鋪切坪相對替、上屋敷坪数加入之事」(「同」十八、同 8 年 8 月 11 日条)。このうち天保 3 年の相對替では河内に引料金 200 兩支払ったことが判明、同 5・8 年にはそれぞれ石川・村上へ、金額は不明だが引料を支払ったことが明記されている。
- (32) 相對替年限の制限については宮崎勝美「江戸の武家屋敷地」(吉田伸之編『日本の近世』第 9 卷、中央公論社、1992 年、所収)参照。
- (33) 屋敷周りの堀を埋め立てて囲い込んだ例は安永 8 年(1779)8 月、武蔵忍藩主阿部氏の蛸殻町中屋敷があり、屋敷地不足が問題化すると諸藩で同様のことが行われたと推察される。
- (34) 「永田町上屋敷類焼之事」(「覚書」二十)。
- (35) 「永田町上屋敷作事成就の事」(「覚書」二十)。これによれば「翌年(嘉永四年—引用者註)五月廿六日迄に成就、同冬參勤の節より新屋敷に着府」とあり、純熙の參勤は「同冬」すなわち嘉永 4 年 10～12 月に參府したことになる。嘉永年間は諸史料を欠き、純熙參勤の正確な年月日を知ることができない。森崎兼広「大村藩の參勤交代代表(江戸後期)」(『大村史談』50、1999 年)は出府・帰国の順当なサイクルを想定し、嘉永 2 年 4 月帰城・翌 3 年 10 月大村発とするが、「覚書」には前述のように記され、また当時江戸の屋敷は過密な状況にあり、下屋敷が藩主居屋敷となる状態になかったことが察せられ、嘉永 3 年 10 月の參府は上屋敷の成就まで控えられた可能性がある。
- (36) 「白銀下屋敷類焼之事」(「覚書」二十一)・『九葉実録』第五冊(大村史談会、1996 年)128～

29頁。

- (37) 『同』第五冊、146頁。
- (38) 「在所住居之事」(「覚書」十九、弘化4年3月5日条)・『同』第五冊、96頁。
- (39) 「江戸地震、上下屋敷破損之事」(「同」二十一)・『同』第五冊、140～41頁。
- (40) 「江戸大風雨、居屋敷・下屋敷所々破損之事」(「同」二十一)・『同』第五冊、151頁。
- (41) 『同』第五冊、193頁。
- (42) 『同』第五冊、63頁。
- (43) 『東京市史稿』市街篇第48、750頁。
- (44) 調査内容に関する記述は「東京大学白金構内遺跡 医科学研究所付属病院診療棟・総合研究所地点発掘調査略報」に拠った。
- (45) 『東京市史稿』市街篇第45、319頁。
- (46) 「諸向地面取調書」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第14巻)448頁。
- (47) 『東京市史稿』市街篇第42、249頁。
- (48) 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』第5巻(東洋書林、1998年)、2919頁「山木兵庫勝茂」の項・「諸向地面取調書」333頁。
- (49) 「諸向地面取調書」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第15巻、汲古書院、1982年)769頁。
- (50) ただしIVに関しては、当初は完全な名目上の譲渡であったが、途中から少禄の幕臣に与えられており、屋敷地としての利用にも耐える土地であったことから、実際の居住があった可能性もある。

【付記】本稿の作成にあたり、大村市立史料館、学習院大学史料館のみなさんに大変お世話になりました。また大村家御子孫の勝田直子氏には貴重なご教示をいただきました。末尾ながら感謝致します。

2003年3月31日

表1 大村藩主一覽

代	藩主名(號外) 諡号等	生年月日 生誕地	家督相続年月日 (養子年月日)	隱居年月日	没年月日 没地	父 母	正室一継室
1	大村喜前(喜??) 顯性院	永祿12(1569).?- 大村	天正15(1587).6.-	元和1(1615).春	元和2(1616).8.8 大村	大村純忠(平通院) 西彌純子女(平明院)	有馬義純女(能生院)
2	大村純頼(純?) 涅槃院	文祿1(1592).?- 大村	元和1(1615).5.1	_____	元和5(1619).11.13 大村	大村喜前 有馬義純女	大村頼直女加良(寿徳院)
3	大村純信(純?) 常照院	元和4(1618).10.9 大村	元和6(1620).5.15	_____	慶安3(1650).5.26 江戸	大村純頼 大村頼直女加良	伊丹勝長女松(究竟院)
4	大村純長(純?) 顯了院	寛永13(1636).8.21 江戸	慶安4(1651).2.20 (慶安3(1650).5.-)	_____	宝永3(1706).8.21 江戸	伊丹勝長(玄池院) 井上加賀右衛門女(見塔院)	大村政直女都留(松寿院) →有馬康純女亀(幸運院)
5	大村純尹(純?) 寛長院	寛文4(1664).3.21 江戸	宝永3(1706).10.29	_____	正徳2(1712).10.14 江戸	大村純長 有馬康純女亀	織田信久女蝶(玄叡院)
6	大村純庸(純?) 元通院	寛文10(1670).1.13 大村	正徳2(1712).12.7 (宝永7(1710).5.25)	享保12(1727).閏1.9	元文3(1738).5.13 大村	相沢氏女キウ(門了院) 大村純長	本多正武女惠津(正寿院)
7	大村純富(純?) 慈光院	正徳1(1711).4.5 江戸	享保12(1727).閏1.9	_____	寛延1(1748).11.21 大村	大村純庸 諸星氏女枝(長松院)	_____
8	大村純保(純?) 高麗院	享保16(1731).2.22 大村	寛延1(1748).12.27	_____	宝曆10(1760).12.24 江戸	大村純富 笹井氏女恵和(清容院)	植村家敬女秀(真如院)
9	大村純頼(純?) 清哲院	宝曆9(1759).8.20 江戸	宝曆11(1761).2.16	享和3(1803).1.23	文化11(1814).7.16 大村	大村純保 植村家敬女秀	松平容輝妻女留(離縁)
10	大村純昌(純?) 崇謙院	天明6(1786).1.25 大村	享和3(1803).1.23	天保7(1836).11.23	天保9(1838).10.5 大村	大村純頼 鈿氏女八重(敬任院)	亀井相賢女民(幹・律)(恭容院)
11	大村純頼(純?) 慈徳院	文政5(1822).11.5 大村	天保7(1836).11.23	弘化4(1847).2.21	明治15(1882).4.2 大村坊	大村純昌 福田頼之妹仙(心月院)	溝口直津妹菊(御縁) →秋田肥季栄整(道)(寛亮院)
12	大村純熙(純?) 建國廟參命	天保1(1830).11.21 大村	弘化4(1846).2.21	_____	明治15(1882).1.12 東京	大村純昌 福田頼之妹仙	片桐貞照妻叔母嘉庸(慈照院)

『寛政重修諸家譜』(統譜書類初学研究会)、『見聞集』・『大村家覚書』・『大村家譜』(以上、東大史料編纂所所蔵写真複製)、『九葉実録』(大村史談会)より作成

表2 大村藩江戸屋敷関係相對替一覽

年(西曆)月日 [出典]	旧所持者	相對替先
①寛政9年(1759) 7月1日 [市史稿26-513]	井関玄説拝領屋敷愛宕下佐次間小路 大村彈正少弼屋敷961坪 大村彈正少弼拝領屋敷白金村5,600坪の内500坪 小林惣兵衛拝領屋敷三番町391坪	大村彈正少弼(純保) 書院番福業紀伊守組 小林惣兵衛(正房) 寄合医師 井関玄説
②寛政2年(1790) 11月11日 [市史稿30-811]	土井兵衛頭拝領中屋敷新堀町2,768坪余 酒井徳太郎拝領屋敷湯島天神下1,866坪余 永井彦兵衛拝領屋敷四ッ谷内藤宿千駄谷1,250坪 大村信濃守拝領下屋敷白銀今里村5,100坪の内304坪	酒井徳太郎(忠道) 大村信濃守(純鎮) 土井兵衛頭(利制) 書院番長谷川丹後守組 永井彦兵衛(尚庸)
③寛政10年(1798) 4月25日 [市史稿32-413]	内藤弥左衛門拝領屋敷麹町元山王下500坪 能勢又十郎拝領屋敷奥六番町565坪の内324坪余 淺井肥後守拝領屋敷表武番町541坪 大村信濃守拝領下屋敷白銀今里町4,796坪の内303坪	大村信濃守(純鎮) 寄合 淺井肥後守(忠郷) 西丸小性組南部御前守組 内藤弥左衛門(信輔) 小普請組堀田主膳支配 能勢又十郎(頼房)
④寛政12年(1800) 6月18日 [市史稿32-800]	松平信濃守拝領屋敷市谷薬王寺前460坪の内260坪 溝口相模守拝領屋敷木挽町茶地300坪 大村信濃守拝領下屋敷湯島天神下1,866坪余の内1,500坪	大村信濃守(純鎮) 書院番 松平信濃守(忠明) 小普請組支配 溝口相模守(貞田)
⑤文化7年(1810) 8月27日 [市史稿34-130]	溝口備後守拝領屋敷市谷薬王寺前1,000坪 大村上総介拝領下屋敷湯島天神下366坪余	大村上総介(純昌) 中奥小性 溝口備後守(直道)
⑥文政4年(1821) 4月14日 [寛書卷16]	大村上総介拝領下屋敷市谷薬王寺前1,260坪 能勢主水拝領屋敷白金今里村303坪 尾張殿下屋敷内藤宿12,929坪の内400坪	尾張徳川齊温 大村上総介(純昌) 小普請組内藤十次郎支配 能勢主水
⑦文政10年(1827) 5月29日 [市史稿36-556]	花房勘右衛門拝領屋敷麻布古川町510坪 内藤兎八郎拝領屋敷表武番町541坪 渡辺源太郎拝領屋敷白金今里村500坪 植村駿河守拝領下屋敷麻布古川町4,988坪余の内200坪	植村駿河守(家長) 御小納戸 花房勘右衛門 御小性組溝口筑前守組 内藤兎八郎 小普請組久世伊勢守支配 渡辺源太郎
⑧天保3年(1832) 9月23日 [寛書卷16/ 市史稿37-630]	河内長左衛門拝領屋敷麹町元山王下213坪 大村丹後守拝領下屋敷白金今里村4,795坪の内150坪	大村丹後守(純昌) 小普請組中山信濃守支配 河内長左衛門
⑨天保5年(1834) 8月29日 [寛書卷16/ 市史稿38-148]	石川次郎太郎拝領屋敷麹町元山王下236坪 大村丹後守拝領下屋敷白銀今里村4,646坪の内50坪	大村丹後守(純昌) 大寺小笠原彈正少弼組与頭 石川次郎太郎
⑩天保8年(1837) 9月1日 [市史稿38-651]	村上友之助拝領屋敷麹町元山王下500坪 大村丹後守拝領屋敷白銀今里村4,596坪の内50坪 植村七三郎拝領屋敷浅草新堀端540坪 高木帯刀拝領屋敷牛込神楽坂1,651坪余の内240坪余 長尾小兵衛拝領屋敷渋谷弁橋220坪余の内110坪余 前嶋逸作拝領屋敷四谷内藤宿新屋敷104坪余 菊地大助拝領屋敷本郷御弓町老岐坂上200坪 石原正之助拝領屋敷本所老ツ日松井町100坪 前山右近拝領下屋敷神田佐次間式日725坪の内200坪 勝屋璋太郎拝領屋敷本所南割下水二笠町400坪余 坂井内蔵允拝領屋敷四谷内藤宿裏番桑町200坪	大村丹後守(純鎮) 寄合 高木帯刀 西丸書院番高力丹波守組 村上友之助 小普請組藤懸左女支配 植村七三郎 表高家 前田右近 小普請組長井五右衛門支配 石原正之助 天守番 長尾小兵衛 西国郡代寺西蔵太手附普請役格 前嶋逸作 小普請組久留十左衛門組 菊地大助 小普請組戸塚備前守支配 坂井内蔵允 小普請組戸塚備前守支配 勝屋璋太郎
⑪天保9年(1838) 12月29日 [市史稿38-843]	三浦源太夫拝領屋敷青山藤田原千日坂上250坪 大草弥三郎拝領屋敷麹町元山王下250坪 河内左京拝領屋敷麻布白金今里村150坪	大御番戸田淡路守組 大草弥三郎 戸田半入正組 河内左京 細川長門守与力 三浦源太夫
⑫天保14年(1843) 12月23日 [市史稿40-873]	新村和三四郎拝領屋敷表武番町500坪余 小林勝蔵拝領屋敷小川町水道橋内589坪の内189坪 内藤熊太郎拝領屋敷麻布白金今里村500坪の内300坪	小普請組深谷遠江守支配 内藤熊太郎 大岡兵庫支配 新村和三四郎 諏訪若狭守支配 小林勝蔵

出典凡例：市史稿…『東京市史稿』市街篇、巻数・頁

寛書…『大村家寛書』(大村市立史料館所蔵、東京大学史料編纂所所蔵写真報)

表 3 大村落江戸屋敷変遷

藩主	屋敷名		永田町(上屋敷) (※徳川元山王下)	白金今里村 (下屋敷)	湯島天神下 (下屋敷)	市谷薬王寺前 (下屋敷)	牛込 (不詳)	深川 (地)
	年代(西暦)	外按田儲前町 (上屋敷)						
高前	慶長末	+1,935						
	1615 (元和 1)							
純頼	1640 (寛永 17)	火						
純長	1657 (明暦 3)	火					(坪数不明)	
	1661 (寛文 1)			+5,600				
	1668 (寛文 8)	火						
	1680 (延宝 8)	+783.8						
純升	1689 (延宝 2)							
	1705 (宝永 2)							
純高	1707 (元禄 4)							+3,000
	1731 (享保 16)	火						
純保	1733 (享保 18)			火				
	1740 (元文 5)							
	1757 (徳川 7)	火						
純頼	1759 (徳川 9)	+961		-500				
	1772 (明和 9)			火				
	1790 (寛政 2)			-304	+1,866			
	1791 (寛政 3)							
純昌	1794 (寛政 6)	火-3,680.2	+3,600					
	1796 (寛政 8)							
	1798 (寛政 10)		+500※	-303		+1,000-400		
	1800 (寛政 12)				-1,500	+260		
	1810 (文化 7)				-366	+1,000		
	1821 (文政 4)			+303		-1,260		
純順	1824 (文政 7)	火						
	1832 (天保 3)		+213※	-150				
	1834 (天保 5)		+236※	-50				
	1837 (天保 8)		+500※	50				
純熙	1843 (天保 14)			+50+304				
	1845 (弘化 2)			火				
	1850 (嘉永 3)		火					
	1852 (嘉永 5)			-304				
	1854 (安政 1)			火				
	1856 (安政 3)							
	1858 (安政 5)			-50				
	1859 (安政 6)			+50				
1860 (万延 1)			-50					

凡例：火は火災／「+」は拝領や添地、相對替などによる坪数増。「-」は上地や相對替による坪数減を表す

表4 大村藩白金下屋敷替地所持者変遷

年月日 (出典)	白金下屋敷	I	II	III	IV	V
寛文元(1661)年 12月15日 (市街7-1206~)	5,600坪					
宝暦9(1759)年 7月晦日 (市街26-513~)	5,100坪	小林惣兵衛 500坪				
宝暦9年8月1日~ 明和4(1767)年 10月21日		渡辺源太郎 500坪				
寛政2(1790)年 11月11日 (市街30-811~)	4,796坪		永井藤兵衛 304坪			
寛政10(1798)年 4月25日 (市街32-413~)	4,498坪			能勢又十郎 303坪		
文政4(1821)年 4月 (浴菰町番)	4,796坪					
文政10(1827)年 5月 (浴菰町番)		内藤兔八郎 500坪				
天保3(1833)年 9月23日 (市街37-630~)	4,646坪			河内長左衛門 150坪		
天保5(1834)年 8月29日 (市街38-148)	4,596坪				石川伝次郎 50坪	
天保8(1837)年 9月1日 (市街38-651~)	4,546坪					高木将月 50坪
天保9(1838)年 12月29日 (市街38-843~)				一瀬源大夫 150坪		
天保14(1843)年 6月14日 (市街40-499)	4,850坪					
天保14(1843)年 12月25日 (市街40-849~)	4,850坪+ 預地50坪					
天保14(1843)年 12月27日 (市街40-876)		内藤熊太郎 200坪	小林勝藏 300坪			
嘉永5(1852)年 2月1日 (市街43-413)	4,546坪+ 預地50坪			早川鉄五郎 200坪+ 預地104坪		
安政5(1859)年 4月4日 (市街45-319~)	4,546坪				鈴木藤吉郎 50坪	
安政6(1859)年 12月7日 (市街45-955~)	4,546坪+ 預地50坪					
万延元(1860)年 11月2日 (市街46-204)	4,546坪				平瀬源三郎 50坪	

『東京市史稿』市街篇第1~48・『神府内場末往還其外治草図書』より作成

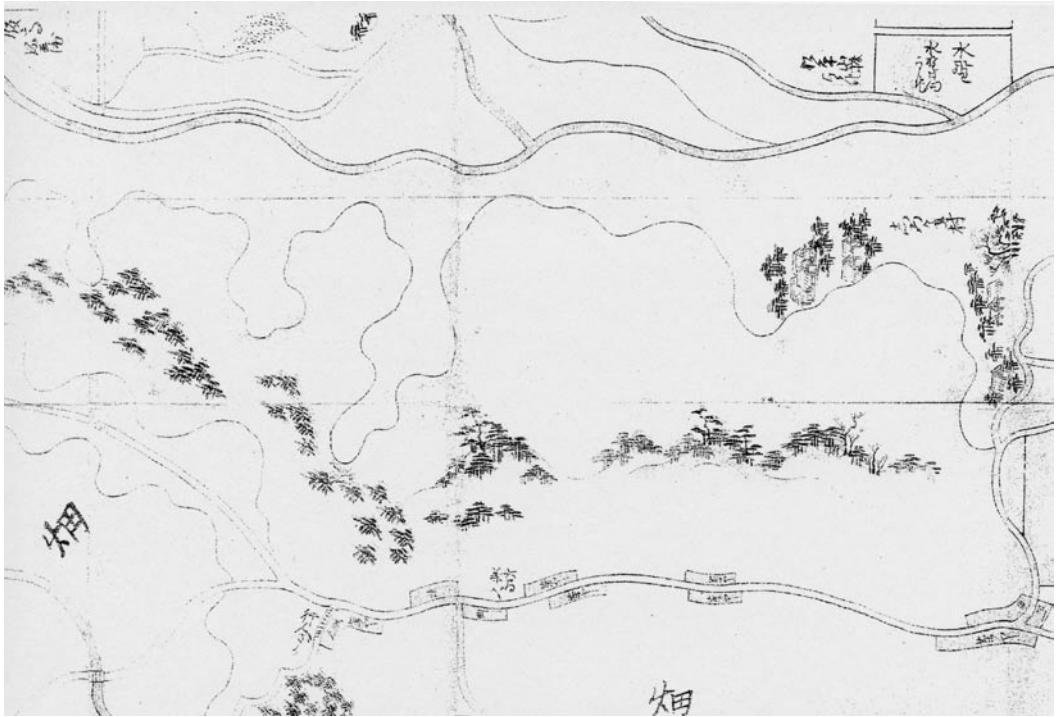


図1 明暦3年(1657)頃の白金村周辺(「江戸大絵図」部分)

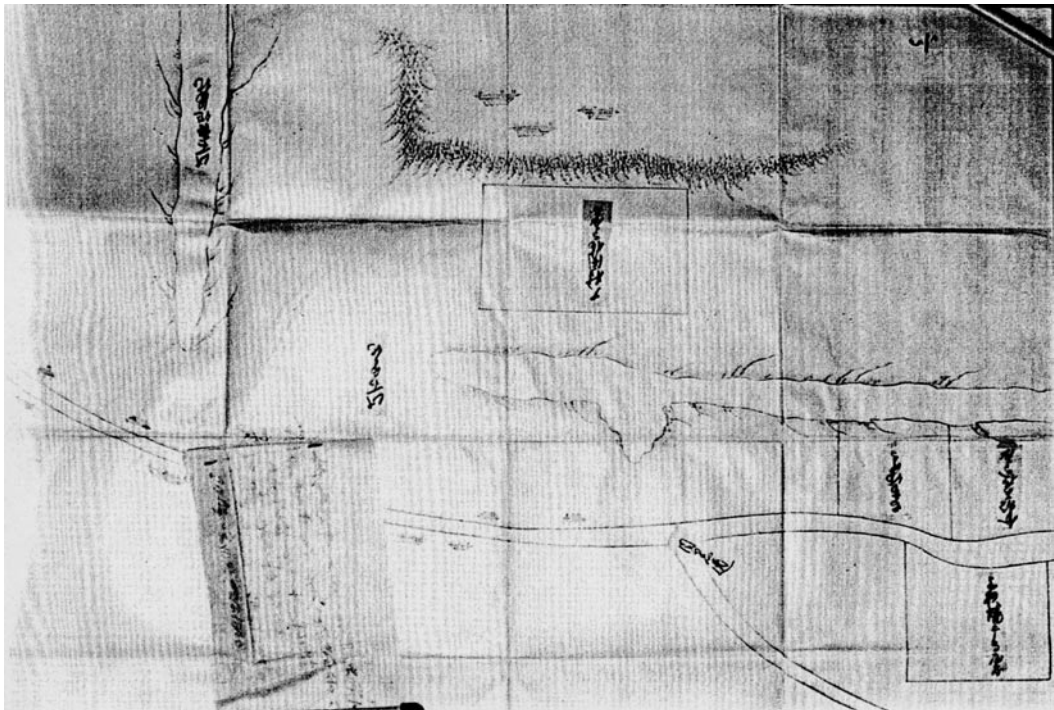


図2 「御望屋舗之絵図」にみる白金下屋敷周辺

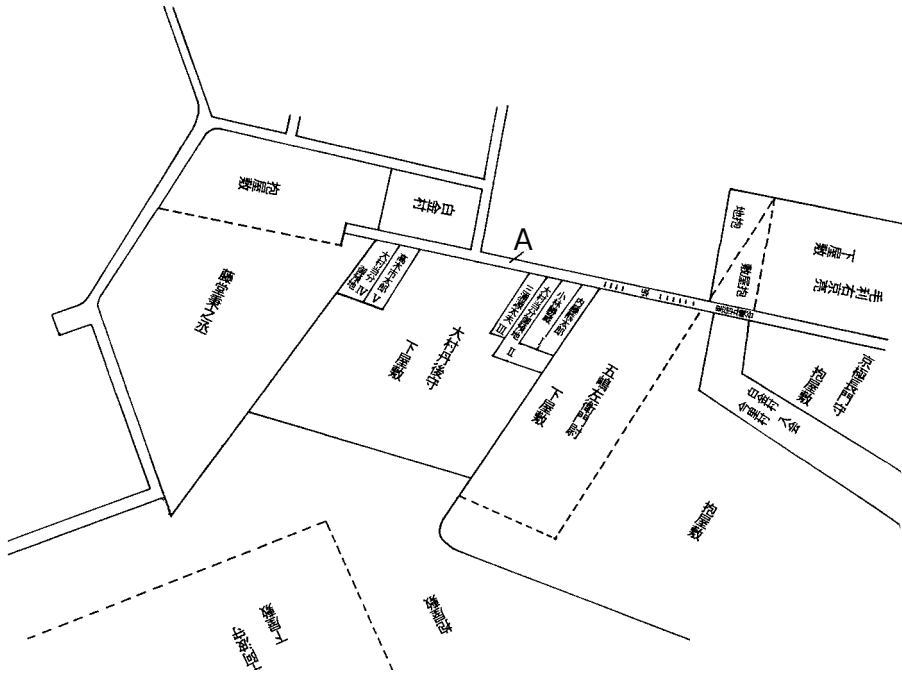


図3 「御府内場末往還其外沿革図書」白金下屋敷周辺（トレース図）

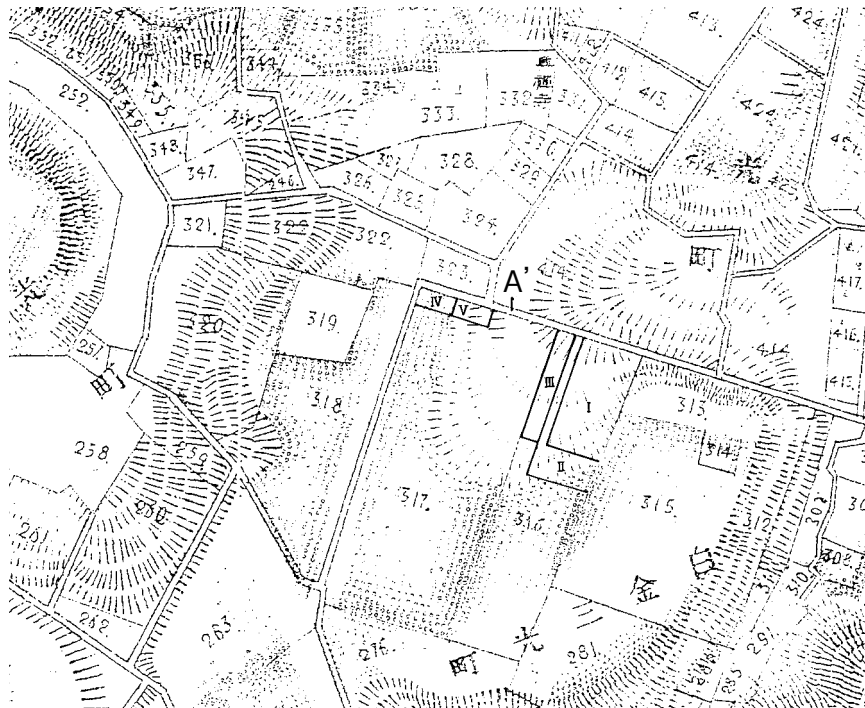


図4 「東京実測全図」(明治28年)にみる旧白金屋敷周辺

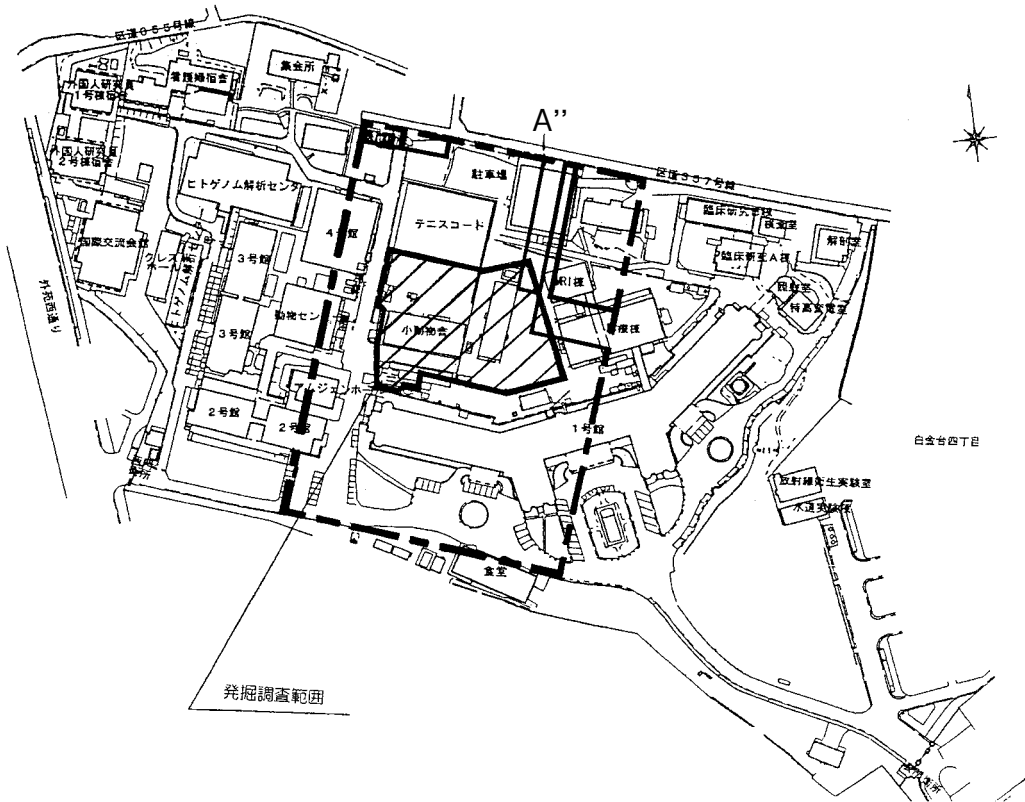


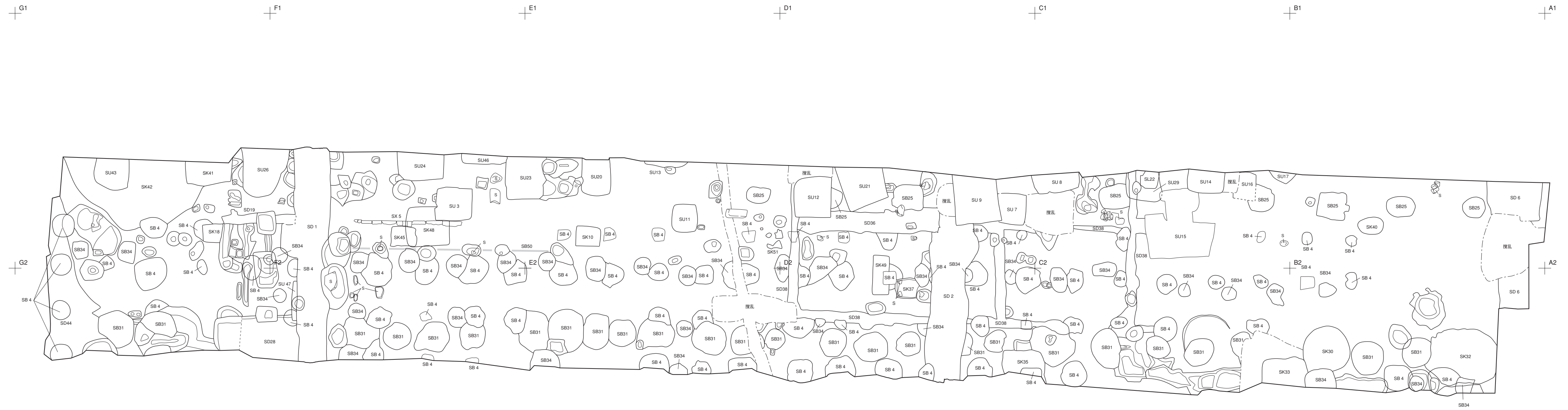
図5 旧白金下屋敷の範囲と調査区域

東京大学構内遺跡調査研究年報4
2000・2001・2002年度

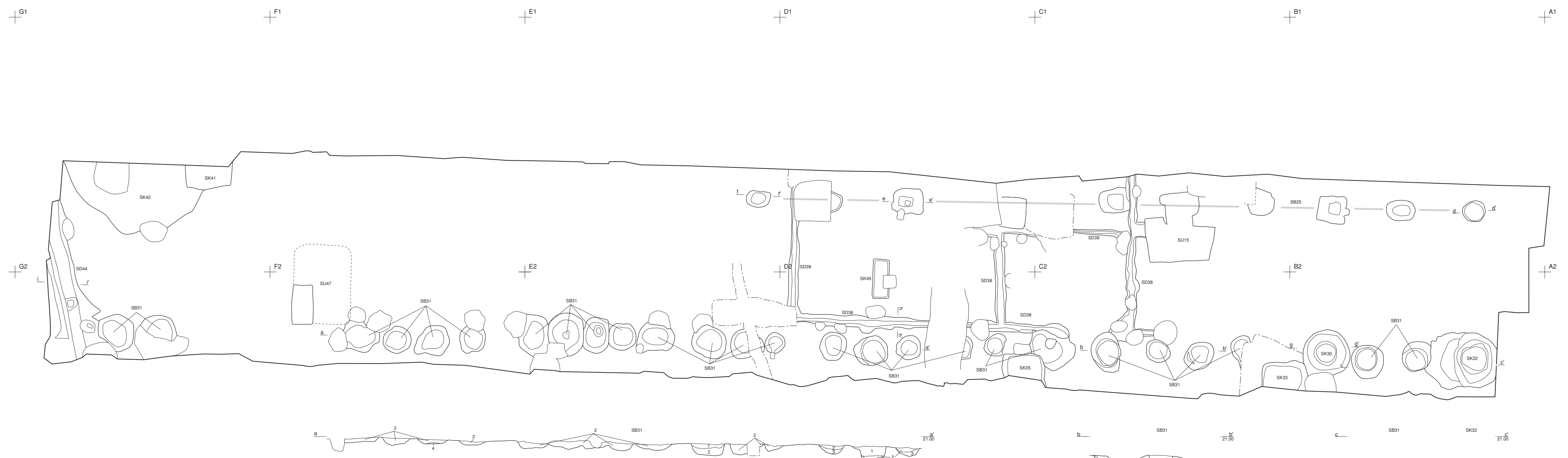
2004年3月31日発行

編集：発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場4-6-1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 よしみ工業株式会社



遺構全体配置図



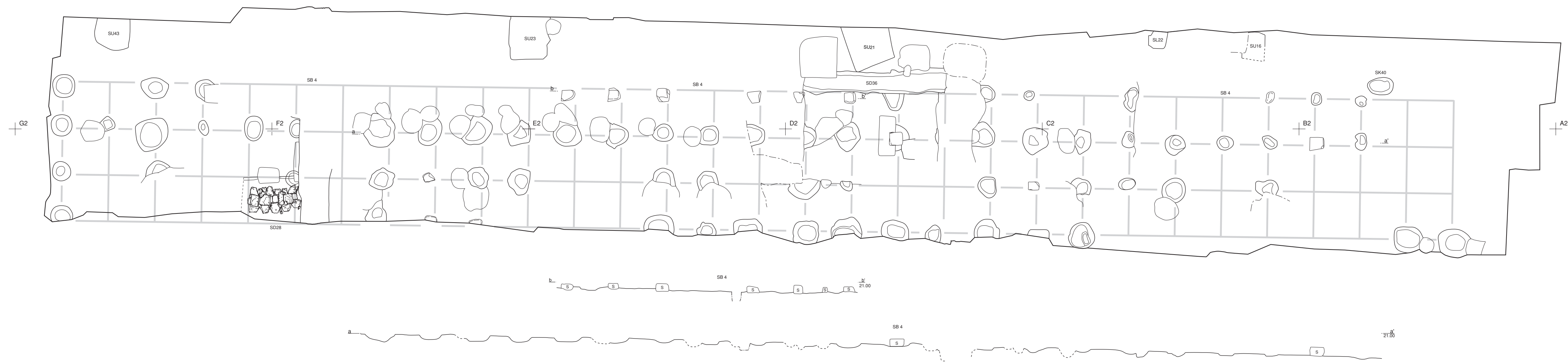
1期遺構配置図



SB31	緑褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土・ブロック・砂)	SK32	緑褐色土 (小円礫)
1	2	4	5
2	緑褐色土 (ローム粒・小円礫)	5	緑褐色土 (砂粒)
3	緑褐色土 (ローム粒・小円礫)	6	緑褐色土 (ロームブロック)

附図1 遺構全体配置図・1期遺構配置図

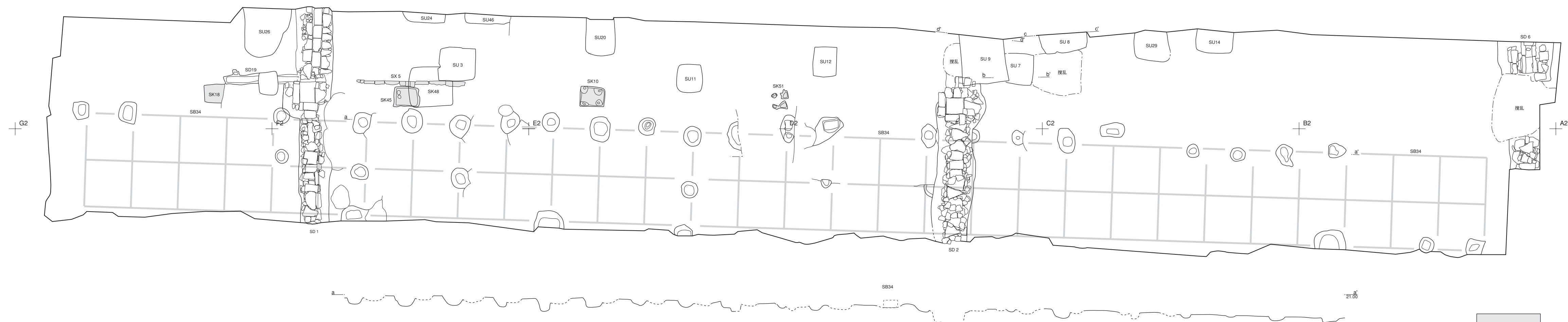
G1 F1 E1 D1 C1 B1 A1



2期遺構配置図

0 5m

G1 F1 E1 D1 C1 B1 A1



3・4期遺構配置図

0 5m